

富山県富山市

# 南中田D遺跡発掘調査報告書



1991年3月

富山県埋蔵文化財センター

富山県富山市  
南中田D遺跡発掘調査報告書

1991年3月

富山県埋蔵文化財センター

## 序

富山県総合運動公園建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、今年で2年目になります。

本書は、総合運動公園内遺跡群のうち、南中田D遺跡の調査成果をまとめたものです。

今回の調査では奈良時代から中世にかけての竪穴住居跡・獨立柱建物跡などが多数発見されました。また、多くの土師器、須恵器、陶磁器、鉄製品などが見つかっています。その中には、墨書土器・鉄製紡通車など、文字の使用例や織物生産を考える上での重要な遺物も出しています。

本書が多くの方々に活用され、文化財保護の一助になれば幸いです。最後に、調査の実施にあたり、御協力いただいた地元の方々をはじめ、関係機関の皆様にも厚くお礼申し上げます。

平成3年3月

富山県埋蔵文化財センター所長 邑本 順亮

## 例 言

- 1 本書は富山県総合運動公園建設に先立ち実施した、富山県富山市南中田D遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、富山県土木部（総合運動公園建設室）の依頼を受けて富山県教育委員会（富山県埋蔵文化財センター）が平成2年5月16日から平成3年1月31日まで実施した。
- 3 調査事務局は、富山県埋蔵文化財センターに置き、主任富沢秀一・同久々忠義が調査事務を担当し、所長邑本順亮が総括した。
- 4 調査参加者は次のとおりである。  
富山県埋蔵文化財センター主任橋本正（平成2年5月～同年7月）・同主任倉藤隆・同文化財保護主事岡本淳一郎（平成2年8月から）・同文化財保護主事河内健二・押川恵子（以上調査担当者）
- 5 発掘調査・資料整理・本書の作成には、下記の各氏から様々の援助をいただいた。記して、深甚なる謝意を表したい。（敬称略・五十音順）  
池野正男・稲垣尚美・宇野隆夫・尾原令子・狩野 睦・柿島昭彦・岸本雅敏・久々忠義・小林高範・駒見和夫・斎藤裕代・酒井重洋・清水征子・杉崎容子・岡 清・高梨清志・田畑紀子・上田節子・土田ユキ子・坪田和子・野末浩之・橋本正春・古川知明・麻柄一志・前川 要・宮田進一・宮野裕光・山口チズ子・山本正敏・渡邊 晶
- 6 本書の編集と執筆は調査担当者の斎藤・岡本・河西・押川が行い、個々の責は文章末に記した。
- 7 本書は本文・巻末図版・付図からなる。巻末図版は図面と写真で、主な遺構・遺物の実測図・拓本及び写真を収める。
- 8 遺構は種別毎に一連の番号を付けその前にSB：獨立柱建物、SI：竪穴住居跡、SD：溝、SK：土坑、SX：その他の穴などの分類記号を付記する。
- 9 遺物は巻末図版に種別毎に一連の番号をつけ、その番号をもとに記述する。
- 10 本書で使用した方位は真北、高さは海拔である。
- 11 本書の上器・陶磁器の色調は〔小山・竹原1967〕・〔尚学図書1986〕を用いた。

## 本文目次

I 位置と環境	1	A 古代土器	27
II 調査に至る経過	3	B 中・近世の出土土器・陶磁器	45
III 調査の概要	4	C 金属製品	48
IV 遺構	6	D 石製品・石造物	50
A 竪穴住居跡	6	VI 考察	51
B 溝	20	A 古代竪穴住居跡	51
C 掘立柱建物	20	B 中世掘立柱建物	57
D 耕作跡	24	C 古代土器について	60
E 土坑など	25	D 中世の土器・陶磁器について	71
V 遺物	27	引用・参考文献	75

## 挿図目次

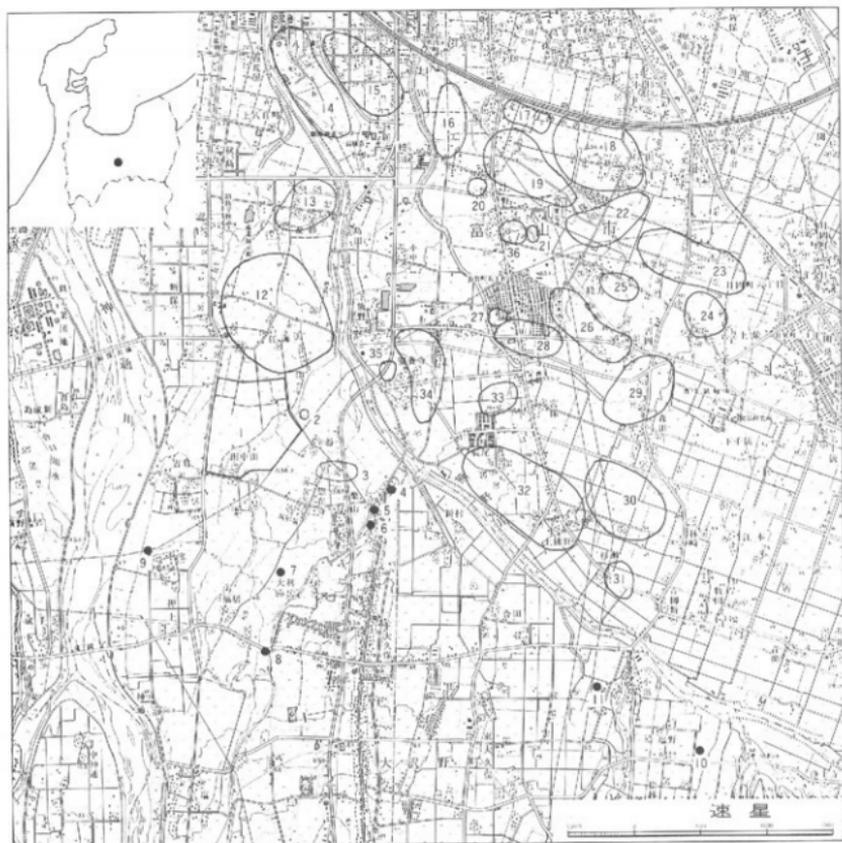
第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	1	第15図 竪穴住居跡の規模	53
第2図 江戸時代絵図による模写図	2	第16図 時期別竪穴住居規模・平面形・貼り床・カマド方位	53
第3図 発掘区分別図	4	第17図 時期別カマド軸部構築法・位置・占有面積率	55
第4図 層序模式図	5	第18図 S1—51構築模式図及び構造ボタン	56
第5図 総合運動公園内遺跡群	5	第19図 中世掘立柱建物の時期別配置	57
第6図 竪穴住居跡の位置	7	第20図 掘立柱建物に伴う土坑類型	59
第7図 土器・土錘の部位名称	27	第21図 竪穴住居跡出土食膳具法量表(1)	61
第8図 器種の分類	28	第22図 竪穴住居跡出土食膳具法量表(2)	62
第9図 高台の形態分類	30	第23図 南中田D遺跡出土食膳具・貯蔵具の変遷	66・67
第10図 土師器煮炊具の口縁部形態の分類	30	第24図 南中田D遺跡出土煮炊具の変遷(1)	68
第11図 体部外傾度の計測方法	31	第25図 南中田D遺跡出土煮炊具の変遷(2)	69
第12図 土師質七器の分類	45	第26図 遺跡分布図	72
第13図 竪穴住居跡の群構成	51	第27図 遺跡ごとの土器構成比	72
第14図 竪穴住居跡の時期別配置	52	第28図 中世上器出土分布図	74

## 表目次

第1表 遺跡地名表	2	第6表 竪穴住居跡各属性相関	53
第2表 既往調査結果一覧	3	第7表 竪穴住居跡の時期別類型	54
第3表 掘立柱建物計測値一覧(1)	23	第8表 遺構毎の變B出土状況	63
第4表 掘立柱建物計測値一覧(2)	24	第9表 用途別土器組成	64
第5表 竪穴住居跡出土土器補遺表	43	第10表 器種別土器組成	65

## I 位置と環境

南中田D遺跡は、富山県総合運動公園内遺跡群の西側に確認され(第5図)、遺跡は、富山市街地から南へ約7km富山市南中田字土居野割地内に所在する。市内を貫流する神通川と、その右岸能野川に挟まれた扇状地上に立地し、遺跡は南北に長く、標高は南側で38m、北側で37mを測り南から北へなだらかな傾斜を示している。扇状地面は、航空写真(写真図版1)によって幾条もの旧河川の跡が観察でき、周辺の遺跡分布は第1図、表1に示したとおりである。神通川・能野川中流域には、縄文時代(中・後～晩期)、奈良・平安時代、中世などの遺跡があり、複合河岸段丘上(大沢野段丘)に立地する一群と扇状地上に立地する一群に大別される。前者の遺跡としては伊豆宮Ⅱ遺跡(縄文)伊豆ノ宮古墳(7世紀代)があり、後者としては縄文時代後～晩期(吉岡遺跡・石田遺跡・大利屋敷遺跡など)から始まり、奈良～平安時代に至っては、神通川および能野川右岸などに大集落(富山県総合運動公園遺跡群・任海宮田遺跡など)多くの遺跡が形成される。又、各遺跡での墨書土器などの出土(第2表)が示すように、一帯の荘園形



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

成が考えられるところでもある。しかし文献史料としては伝わるものはなく、『富山県史』は、寿永三年(1184)後白河法皇の院宣にみられる「賀茂社領新保後厨」を水橋新保地区と富南新保・任海地区の二説を挙げている。又、富山市の調査報告(古川1989・90)、総合運動公園内遺跡報告(関・河西1990)などにも黒書土器などの出土は見られるが、当地域という確定はないが、古代から中世にかけて何らかの形で、荘園形成があったであろうということは推定できよう。

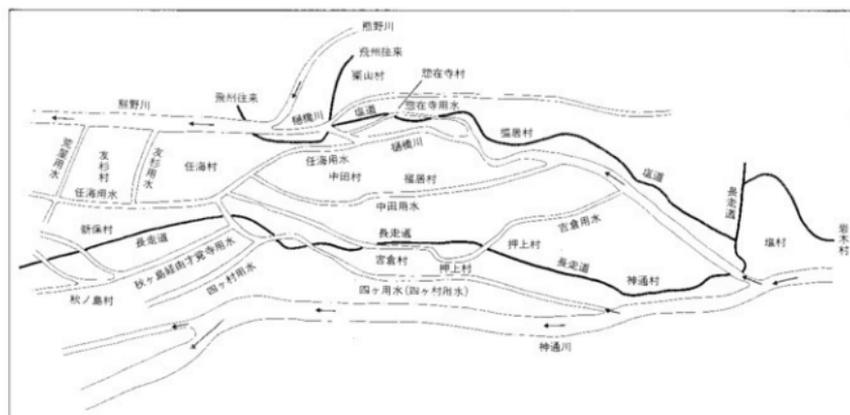
中世以降の遺跡は、神通川と熊野川に挟まれた地域、および熊野川右岸の地域を比較すれば後者の地域には多く存在する。任海地区を中世の宮河(川)荘という意見もあるが、「角川日本地名辞典」によれば現在比定地不明という。

南中田D遺跡を中心に直径1.5cm以内には鎌倉～室町時代に流行した板石塔波(板碇)が数多くみられる。

近世に至って、飛騨高山道をはじめ、八尾道、岩木道などが合流する交通の要地となっている。又、神通川、熊野川よりの導水により数多く用水が存在していたことが古絵図などにより確認されている。(第2図)又、江戸時代には新川郡宮川郷に、明治時代には新保村に属し、純農村地帯を形成している。

No	遺跡名	時代と遺物
1	龍命遺跡公園遺跡群	第2表参照
2	任海砂田遺跡	奈良～平安(土師器・須恵器・製造土器)
3	栗山A遺跡	縄文(晩期)・平安～中世
4	伊賀ノ宮日遺跡	縄文(中期)
5	同教寺遺跡	平安～中世
6	伊賀ノ宮A遺	古墳
7	大利原散遺跡	縄文(晩期)・平安
8	福原古墳	古墳
9	押上塚	中世
10	松林遺跡	縄文
11	小栗遺跡	縄文
12	任海宮河遺跡	平安～近世
13	栗杉遺跡	平安～近世
14	八日町遺跡	平安(須恵器)・中世(珠洲・瀬戸)
15	黒崎神田遺跡	平安(土師器・須恵器)・中世(土師器・珠洲・瓦葺地・古墳)
16	上野川遺跡	○奈良～平安(須恵器・土師器)・中世(土師器・珠洲)
17	二宮北遺跡	○奈良～平安(須恵器・土師器)・中世(須恵器・土師器)
18	石川北遺跡	縄文・古墳～平安(土師器)・奈良～平安(須恵器)
19	二宮遺跡	縄文(後-晩)・平安(土師器・須恵器)・中世(土師器・土師器・瓦葺地・古墳)
20	上野橋田遺跡	○奈良～平安(須恵器・土師器)・中世(須恵器・土師器)
21	上野遺跡	平安
22	石川遺跡	縄文(後-晩)・奈良～平安(須恵器)・中世(土師器・土師器・瓦葺地)
23	柳田遺跡	古墳(土師器)・中世(須恵器・土師器)・近世(陶磁器・土師器・白磁)
24	上栗遺跡	○中世(珠洲地・土師器・土師器)・近世(陶磁器)
25	野方遺跡	○中世(珠洲地・須恵器・土師器)
26	吉岡遺跡	縄文(後-晩)・奈良～平安(須恵器・土師器)・中世(須恵器・土師器・瓦葺地)
27	志水寺遺跡	縄文(後-晩)・奈良～平安(土師器・須恵器)・中世(須恵器)
28	若竹町遺跡	古墳(土師器)・奈良～平安(須恵器)・中世(須恵器)
29	栗山遺跡	○奈良～平安(須恵器・土師器)・中世(珠洲地・近世(陶磁器))
30	神尾遺跡	○奈良～平安(須恵器・土師器)・中世(珠洲地・土師器・土器)
31	杉瀬遺跡	○ 縄文 土
32	上野遺跡	奈良～平安(須恵器・土師器)・中世(珠洲・土師器・土師器)・近世(陶磁器)
33	宮保遺跡	奈良～平安
34	下忍野遺跡	奈良～平安(須恵器・土師器)・中世(須恵器・土師器)・近世(陶磁器)
35	宮保寺遺跡	○中世(珠洲地・須恵器・土師器)・近世(陶磁器)
36	上野島田遺跡	○奈良～平安(須恵器・土師器)・中世(珠洲地・土師器)

第1表 遺跡地名表(○は出土の時期)



第2図 江戸時代絵図による模写図

## II 調査に至る経過

### (1) 調査の契機

昭和61年3月 富山県民総合計画における、健康づくりの一環である「スポーツレクリエーション施設の整備と活用」を受け、西暦2000年(平成12年)の富山県における第2巡日国体のメイン会場として、富山県総合運動公園の基本計画が作成され、同年12月、富山市南部郊外に建設位置を決定、面積は約40haにおよぶものであった。

### (2) 既往の調査

昭和62年度 建設位置の決定に伴い(農振地域除外申請地)同年5～6月にかけて、富山県教育委員会と富山市教育委員会は、総合運動公園建設予定地内において分布調査を実施した。その結果、6地区の遺跡(奈良～平安・中世・近世)が確認された。この面積は165,100㎡におよんでいた。同年7月、事業主体の富山県土木部都市計画課・富山県埋蔵文化財センター、富山市教育委員会の三者が参集、協議を行い、埋蔵文化財の保護措置を決定するのに必要な基礎資料を得るための試掘調査を昭和63年度に実施することで合意をもった。

昭和63年度 試掘調査は富山市教育委員会が主体により実施した。分布調査によって明らかになった6地区を対象とし、同年6月20日から同年10月7日まで調査を行い、試掘トレンチ25箇所を設け、延べ15,198㎡を調査した。

その結果、古代から近世に至る集落跡などが10箇所を確認され、その総面積は79,350㎡であった。(第2表)その後同年12月に総合運動公園に伴う、用排水路代替工事が計画され、南中田B遺跡と任海遺跡の一部が含まれる為、富山市教育委員会では、工事に係る259㎡について同月7日からの2日間で調査を実施し、平安時代のP形ビッド等が確認された。〔富山市教委1989〕

平成元年度 試掘調査による確定面積に基づき富山県教育委員会が、栗山椏原遺跡・南中田A遺跡、任海鎌倉遺跡南中田C遺跡の4遺跡を同年6月3日より同年11月4日まで発掘調査を実施した。これらの遺跡より奈良・平安時代中世の遺物出土があり、掘立柱建物、土壇など遺構は多いが住居跡などは特定されていない〔関・河西 1990〕。

年度	遺跡	所在地	時代	種類	主な遺跡と遺物
平成元 (試掘)	任海遺跡	富山市任海	平安・中世	集落跡	穴・溝 須恵器・土師器・青白磁
	吉倉B遺跡	富山市吉倉	平安・中世	集落跡	穴・溝 須恵器・土師器(赤書土器)・土師質土器・珠洲焼・越中瀬戸・土壇
	任海砂田遺跡	富山市任海	奈良～平安	集落跡	土師器・須恵器
	任海鎌倉遺跡	富山市任海鎌倉	平安・中世	集落跡	穴・溝 土師器・須恵器・珠洲焼・越前焼
	南中田D遺跡	富山市南中田	奈良・平安・中世	集落跡	穴・溝 土師器・須恵器・珠洲焼・吉瀬戸・越前焼・土壇・越中瀬戸鉄製品・曇土器
	栗山椏原遺跡	富山市栗山椏原	平安・中世	集落跡	穴・溝 土師器・須恵器・土壇・珠洲焼・越中瀬戸・羽口・鉄製品・墨井土器
	南中田C遺跡	富山市南中田	平安	集落跡	溝 土師器・須恵器・土壇
	南中田A遺跡	富山市南中田	平安・中世・近世	集落跡	穴・溝 土師器・須恵器・土師質土器・鉄製品
	南中田B遺跡	富山市南中田	平安・中世	集落跡	穴・溝 土師器・須恵器・珠洲焼・青磁
	吉倉A遺跡	富山市吉倉	平安・中世	集落跡	穴 土師器・珠洲焼・土師質土器
平成2 (本調査)	栗山椏原遺跡	富山市椏原	平安(中)・中世	集落跡	掘立柱建物12 土壇 500 溝20 道状遺構 土師器・須恵器 風手焼・製塩土器・土師・赤書土器・鉄器・珠洲焼
	南中田A遺跡	富山市中田	奈良(中)・平安・中世	集落跡	掘立柱建物(中世)7 土壇50 溝7 道跡跡 河川跡 土師器・須恵器・土師質土器・珠洲焼・鉄器鉄片
	任海鎌倉遺跡	富山市任海鎌倉	奈良・平安(中)・中世	集落跡	掘立柱建物(中世)11 土壇50 溝4 枳石状遺構6 土師器・須恵器・洗器鉄片・珠洲焼・八尾焼・白磁
	南中田C遺跡	富山市南中田	平安・中世	集落跡	掘立柱建物(中世)1 土壇38 溝1 土師質土器 土師器・須恵器・珠洲焼・土師質土器・八尾焼

第2表 既往調査結果一覧

### Ⅲ 調査の概要

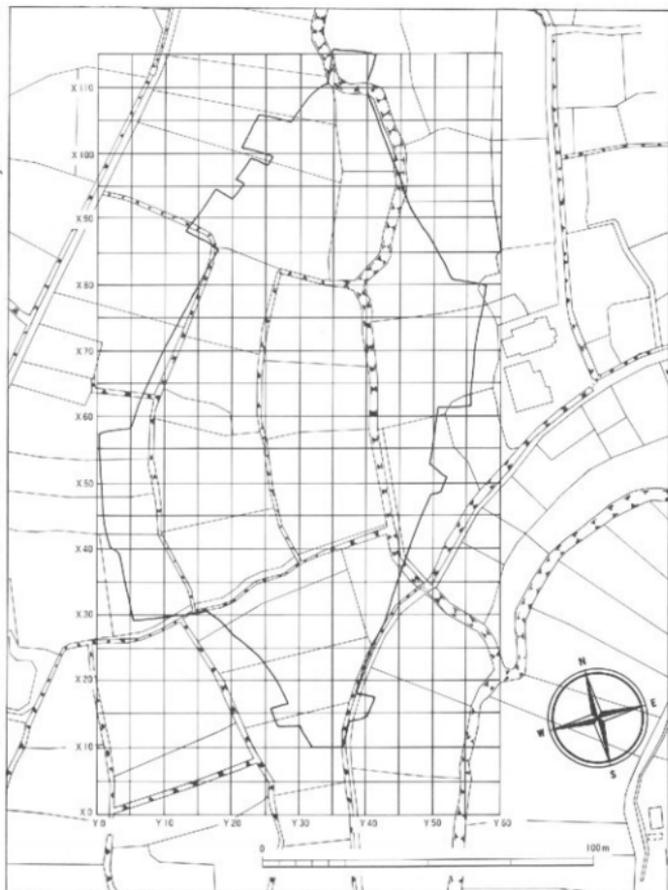
#### 1. 調査に至るまで

当遺跡は、分布調査に於いて土師器・須恵器が少量、採集された地区である。試掘調査では、トレンチ12ヶ所、延べ1065㎡発掘の結果、面積は11,750㎡と確認され、遺跡の時期は奈良時代8世紀後半と平安時代9世紀後半から10世紀中頃の2度にわたり、集落が営まれ、当遺跡は北側に接する吉倉B遺跡の集落と年代が一致し、本来同一遺跡であった可能性を示唆した。〔古川1989〕 前述したとおり、本年度の調査は、総合運動公園内遺跡群としては2年目の本調査である。年度当初、調査開始にあたっての会議が総合運動公園建設室（以下建設室）と埋蔵文化財センター（以下センター）が行い、席上、当センターの調査員は4名、建設室の本年度の発掘希望面積は2万㎡（内訳は南中田D

遺跡11,750㎡・吉倉B遺跡7,250㎡）が提示された。しかし、当センターの実績に於いて4名の調査員では14,000㎡が目安であると説明、遺構などが少なく早く進むようであれば可能ということで会議を進めた。（結果的には、遺構の分布が広がり14,000㎡と二面の文化層を持つ遺跡となる）

#### 2. 立地

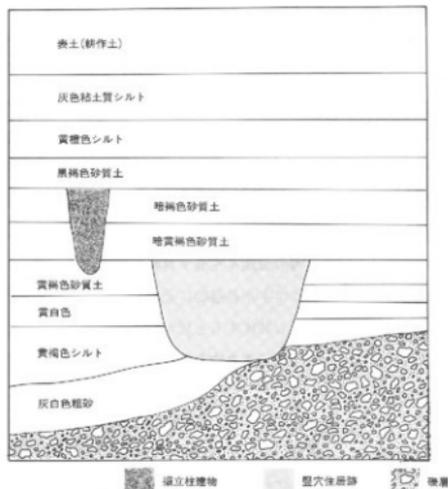
総合運動公園内遺跡群（第5図）内で西南に位置し、北側には吉倉B遺跡、南側には吉倉A遺跡がある。範囲は南北200m、東西90mと南北に長く標高は36～38m。現況は水田荒地であり、遺跡の中央より南側には東西に流れる水路、およびそれと混わり南北に流れる用水がある。



第3図 発掘区画図

### 3. 調査の方法 (第3図)

発掘調査は事前に重機により耕作土の除去を行い、10m間隔に基準杭を設け、X軸を南北方向にとり、Y軸を東西にとり、2m×2mを一区画とし、土層観察用のあぜは東西X60Y6~51、南北X11~110Y35の発掘区のほぼ中央に設置。(便宜上東西X60Y6~51で調査区を北地区と南地区分割して調査を行う。尚東西のあぜにそって巾0.8m分礎層まで深掘を実施し、下部の遺構の存在が確認された。) 先ず南地区よりの遺構検出作業、遺構のマーキング、および位置の図化作業・写真撮影後、各々の遺構の発掘作業を実施。北地区も同様な手順で、下部の遺構の発掘は航測終了後、順次発掘を行う。尚東と西側では、耕作土排土地よりも遺構がのびている為8ヶ所、発掘区を拡張した。



第4図 層序模式図

### 4. 遺構・遺物の分布状況 (付図)

遺構は、ほぼ発掘区全体に確認される。堅穴住居、孤立柱建物、土坑なども、ある程度まとまりを持って存在している。

遺物もほぼ全域にわたって出土する。尚、近年まで使用された用水(SD-35)の下層より、多くの遺物が発掘されている。

### 5. 地質と層序 (第4図)

耕作土を除去した段階で、砂質土、砂・礫によって構成され、砂質土、砂は礫層と礫層の間を埋める形で堆積している。

層序は、先年発掘された栗山楯原遺跡などに示された(関・河西1990)基本層序と、基本的には、ほとんど変わらないが、遺跡の東側と西側では、層厚など、下部面に差がある。

(斎藤)



第5図 総合運動公園内遺跡群

## IV 遺 構

### A 竪穴住居跡 (図版1~18 写真図版4~20)

本年度調査で61棟の竪穴住居跡が確認された。いずれも古代に属するもので、出土遺物より8世紀後半から10世紀前葉に比定される。県内でこれだけまとまって竪穴住居跡が確認されたのは稀で、特に10世紀代に属するものは富山市小竹堤遺跡、大沢野町野沢遺跡B地区など数例しかない。住居跡の立地は軟質の河川堆積砂質土上で、そのため壁面の崩壊や、地山とほぼ同質の埋土であることから遺構の確認は困難を極めた。こうした砂質土壌立地の特殊性に由因してか、従来とは異なった住居跡形態や石組カマドの多用など県内にみられない事例も多く、県内における古代竪穴住居跡の立地および構造等の認識を見直す良好な遺跡といえる。しかし、県外に目を転じると同様な河川床立地の遺跡では大型の住居や石組カマドが普遍的に見られ、当遺跡のあり方は決して特異ではないことがわかる。今後比較検討する上で重要である。なお共存すると思われる掘立柱建物も確認されなかった。

住居跡の埋土は時期毎に漸次的な変化をする。概ね8世紀代のもは地山土と類似する黄褐色砂質土であり、上面に酸化鉄の影響を受けたものが多い。9世紀代になるとややシルト質土の混入が見られ、色調も暗黄褐色になる。9世紀後半のものや10世紀のものは褐色から暗褐色が多い。一部黒褐色のものも見られるが極めて少ない。河川床跡に黒色土形成が行われる直前に営まれたことがわかる。

以下、各竪穴住居跡について項目毎に概要を記載することにする。記載方法について、辺の長さは(カマドを有する辺に直交する軸長)×(平行する軸長)を基本とし、深さは床面までの現状値、規模および平面形はⅣ考察(A竪穴住居跡)の分類名称による。主軸方位は南北を基軸とし南北軸からの偏位で表す。

カマドの各部名称は燃焼空間の燃焼部、上部構造の天井部、両側部構造の袖部、焚き口に堆積する炭化物による灰部(炭溜り)、煙道部の名称を用いることとする。帰属時期は遺物による編年をもとに、ある程度のまとまりを持たせて区分したものである。Ⅳ考察(C遺物)の編年Ⅰ1期を1期、Ⅱ2期を2期、Ⅲ3・Ⅳ4期を3期、Ⅴ1期を4期、Ⅵ2期を5期、Ⅶ期を6期とした。今後若干の変更もあろうが、遺構の切り合い等からも矛盾がないためきりきり発車的に区分した点を断っておく。

#### S I-01 (図版1 写真図版4)

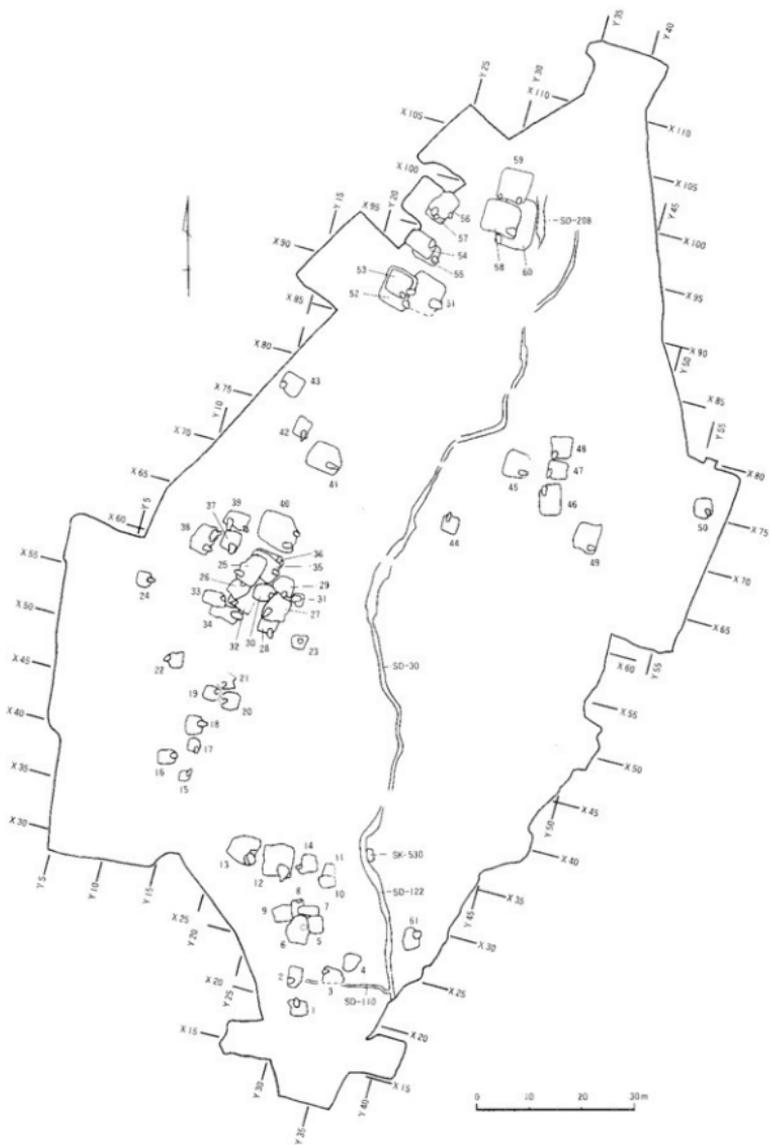
**形状・規模**：南北3.65m×東西3.3m、面積9.73㎡、深さ25cm、主軸方位W-1°-Nの小型方形で東壁と南壁は良好に確認されたが、他の壁についてはやや不明瞭である。**カマド**：北壁の中央やや左寄りに位置し、3・4個の宍形円礫で構成された袖部および長さ70cm幅28cmの燃焼部をもつ。煙道は未確認である。なお、天井部に用いられていたと思われる安山岩の板状割石が燃焼部上面で確認されている。方位W-13°-N。**諸施設**：中央部床面下に一段低い部分が存在し、掘り方の可能性が高い。**出土遺物・年代**：南側床直上より良好な状態で須恵器の杯A(2)、転用碗(5)が出土したほか、「U」字状(8)と輪軸の鉄製品がカマド下および東北部床面で出土している。帰属時期は4期。

#### S I-02 (図版1 写真図版4)

**形状・規模**：南北4.0m×東西2.55m、面積9.4㎡、主軸方位W-80°-Nの小型横長方形2。全体的に残りが悪く、さらに規模が大きくなる可能性もある。**カマド**：南側西壁付近に炭化物、焼け礫が散在する部分がありカマドの痕跡と思われる。**出土遺物・年代**：土師器・須恵器がカマドと思われる部分を中心に出土している。時期は4期。

#### S I-03 (図版1 写真図版4)

**形状・規模**：現状で東西3.6m×南北3.1m、面積9.35㎡を計るが、ほとんど床面での検出のため、南側半分は確認できていない。S D-122との切り合い関係、主軸方位は不明である。**カマド**：西壁右寄りに痕跡のみ確認された。方位は西向き。**出土遺物・年代**：極めて少く土師器数片。帰属時期は6期。



第6図 竪穴住居跡の位置

S1-04 (図版1 写真図版5)

**形状・規模**：現状で南北4.4m×東西3.2m、面積8.5㎡だが、床面のみの遺存のため正確な形状は不明である。カマド：南寄り中央部に炭化物を伴う黒褐色土があり、カマド灰部の痕跡と認定した。**出土遺物・年代**：遺物は少なく、鉄釘2出土。帰属時期は6期。

S1-05 (図版1 写真図版5)

**形状・規模**：東壁を欠くが、南北3.15m×東西(2.85-)m、面積(8.5+)㎡、長軸方位はほぼ真北の小型方形と推定される。**カマド**：確認されず。**諸施設**：貼床ほどではないが、底面はやや堅きを持つ。**出土遺物・年代**：量は多くないが、須恵器の割合が高い。帰属時期は1期。

S1-06 (図版1 写真図版5)

**形状・規模**：東西4.6m×南北5.6m、面積18.5㎡、主軸方位N-90°-Eの中1型方形をなすものと推定されるが、壁は明確でない。S1-08を切る。中央部にやや明るい褐色粘土が円形に堆積している。**カマド**：焼土はないが、炭化物を含む部分が中央東寄りに存在し、カマドであった可能性がある。**諸施設**：中央に砂による貼床がある(4.5㎡)。その外辺に沿って3ヵ所の穴(P1・P2・P3)が確認されたが、深さは15cmほどしかない。**出土遺物・年代**：遺物は多くなく、土師器・須恵器が出土したのみである。帰属時期は2期。

S1-07 (図版2 写真図版5)

**形状・規模**：現状で東西4.25m×南北(1.95+)mの長方形を呈するが、北側を中世土坑に切られ、南側を床面下まで掘り下げたため正確な形状は把握できない。しかし、東西の壁はほぼ垂直に立ち上ることなどから住居跡として認定した。S1-08を切る。**カマド**：東南隅に炭化物を多く含む暗褐色土があり、カマドの痕跡と思われる。**諸施設**：中央床面にP1とした溝状の穴が確認された。**出土遺物・年代**：土師器・須恵器が出土しており、土師器では赤彩の碗Aがある。帰属時期は3期。

S1-08 (図版2 写真図版5)

**形状・規模**：南北3.50m×東西2.25m、面積7.2㎡、主軸方位N-5°-Eの小型長方形。遺存状態は悪い。S1-06・07に切られ、S1-09を切る。**カマド**：北壁に焼土が確認され、周囲に粘土質の土があることから、カマドの痕跡と思われる。**出土遺物・年代**：少量だが須恵器・土師器が出土している。帰属時期は不明。

S1-09 (図版2 写真図版5)

**形状・規模**：東西4.0m×南北3.50m、面積約10.3㎡、長軸方位N-80°-Eの小型方形。床面近くまで後世の耕作を受け遺存は悪い。S1-08に切られる。**カマド**：確認されず。**諸施設**：確認されず。**出土遺物・年代**：須恵器・土師器が出土している。帰属時期は2期。

S1-10 (図版2 写真図版5)

**形状・規模**：東西(3.20+)m×南北2.30m、面積(5.7+)㎡、長軸方位N-90°-E。S1-11を切る。**カマド**：確認されず。**諸施設**：確認されず。**出土遺物・年代**：埋土上面で比較的多くの破片が出土したが、床面では土師器片が数点出土したのみ。時期不明。

S1-11 (図版2 写真図版5)

**形状・規模**：南北(2.40-)m×東西(2.05+)mの竪穴状の遺構で、大きさ、コーナーの形状から住居跡として認定した。埋土は褐色および黄褐色砂質土。**カマド**：確認されず。**諸施設**：確認されず。**出土遺物・年代**：土師器細片が出土しただけで、帰属時期は不明。

S1-12 (図版3 写真図版6)

**形状・規模**：南北6.45m×東西6.05m、面積36.3㎡、貼床面までの深さ約30cm、掘り方までの深さ約50cm、主軸方

位W-7°—Sの大形方形。西辺はやや削平をうけている。各壁面は垂直に立ち上らず、なだらかな面をなす。埋土はやや粘性と質量感のある土で、少量の粘質土の混入が考えられる。特に壁面付近の埋土はしまりが良く盛り土である。また、床面には砂を多く混入した非常に堅い貼床構成土が存在し、掘り方埋土は自然堆積土と極めて類似する。規模などから中核的な住居である。**カマド**：南壁左寄りに位置し、方位W-10°—Sを指す。カマド占有面積は5.1㎡と住居跡の15%を占め大型である。また、天井部構築材と思われる焼けた安山岩の板状割石が奥壁上部に確認されたが、それ以外の袖石は存在しないことから、袖部は粘土構築であったと思われる。ただし人為的な袖石の取り去りの可能性も考慮しておく必要がある。焼部奥壁は約30°の緩やかな傾斜を持ち、住居壁まで80cmほどの距離がある。煙道は一部失われているが、1m以上の煙道を有する。焚き口は幅80cm程のものと想定される。**諸施設**：中央部に方形状、面積10.85㎡、厚さ2cmの貼り床がある。貼り床はカマドによって切られる。また、貼り床を切る形で平均幅70cmの周溝がカマド部分を除く四面に巡る。各コーナーがやや深く、部分によりP6のようにV字形の落込みが見られる。これは埋土の観察より、すぐに埋められたものであることがわかる。また、貼り床末端から壁面に向かって周溝部分を覆うように盛り土が盛られている。柱穴はP1、2、4が盛土上面で確認された。直径40~50cm、深さ70cm程のもので周溝のコーナー外壁に位置する。また、北東隅の壁が一部緩やかなものになっており、入口施設が存在した可能性がある。**出土遺物・年代**：須恵器・土師器がカマド付近に比較的多くまとって出土したほか鉄滓が一点出土した。また、甕A68および杯B66が一点ずつカマド上面（P1脇の盛土上）に置かれた状態で出土したことが特記される。帰属時期は1期。

#### S1-13 (図版4 写真図版6)

**形状・規模**：東西6.30m×南北5.30m、面積26.7㎡、主軸方位S-70°—Eの中1型。北壁、西壁が後世の削平のためはっきりせず平面形は不定形となる。おそらく縦長長方形となると思われる。この住居跡は三基のカマドと二面の貼り床を持ち、数回の立て替えもしくは作り替えを行っている。東壁、南壁の断面の観察から作り替えに際して壁面が共有されることが判り、当住居跡が継続的なものであったといえる。**カマド**：南東隅に三基確認され、それぞれ南東方向を向く。中央に位置するものが最も新しく（上層新カマド）、方位S-20°—Eのコーナーカマドである。住居跡面積の約10%を占め、袖部は粘土で構築されている。奥壁は急角度に立ち上がる。次に新しいものは南西側に位置するカマドで（上層古カマド）、その半分は上層新カマドに切られる。S-7°—Eを指す。最も古いものが北側に位置するもので（下層カマド）、構造の上半が作り替えの際に平らに均されている。S-70°—Eを指す。上層としたカマドは上層の貼り床期に属し、下層カマドは下層の貼り床期に属す。どのカマドも袖石は確認されなかった。

**諸施設**：上層の貼り床は面積6.35㎡の方形状を呈する。下層の貼り床は面積8.55㎡の長方形である。いずれも白色の砂を混入したもののだが、下層に比べ上層はやや薄めである。周溝状の施設は東辺から北辺にかけて壁から60cm程内側に確認された。柱穴は確認されていない。特記すべきはP3とした直径60cm深さ35cmの穴で、側壁や底面を貼り床と同質の土で堅く締めており、内部には焼土が堆積していたものである。当住居跡から鉄滓が出土することから鍛冶関連の施設の可能性がある。また、北東部で焼土の詰まったP1も確認されている。**出土遺物・年代**：比較的多くまとった須恵器・土師器および鉄滓二点が出土している。遺物はカマド内に集中するが、カマド毎の時期差は認められない。特記すべきは非クロロの甕Aが多いこと、鉄滓の出土である。帰属時期は1期。

#### S1-14 (図版2)

**形状・規模**：どの壁面も耕作のため殆ど失われている。現状で東西3.70m×南北3.75m、面積10.75㎡である。主軸方位はW-82°—N。**カマド**：西壁左寄りに焼土の広がりか確認されており、粘質土の集積が見られることからカマドと認定した。**諸施設**：北側に1.5m×1.5mの一段深い部分があるが、性格は不明である。**出土遺物・年代**：土師器が少量出土したのみである。帰属は1期。

#### S1-15 (図版2 写真図版7)

**形状・規模**：南北2.10m×東西2.45m、面積4.2㎡、深さ約25cm、主軸方位N-20°-Eの小型縦長方形1。当遺跡の中では、最も小型の部屋に属する。壁面はやや崩落済みである。**カマド**：北東隅に北方向へ向かって設置されたカマド(N-32°-E)が確認された。カマドの面積は0.8㎡程で、住居跡の約20%を占める。焼けた円礫が一体崩落した形で発見されており、もとは軸石を用いたカマド構造だったと思われる。焚き口の幅は45cm程度、奥壁は45°に立ち上がる。煙道は底部のみだが、50cmほど確認された。**諸施設**：確認されず。**出土遺物・年代**：須恵器・土師器が出土しており、カマドに集中する。時期は3期。

#### S1-16 (図版3 写真図版7)

**形状・規模**：東西3.75m×南北2.70m、面積8.5㎡、深さ50cm、主軸方位N-88°-Eの小型縦長方形2。**カマド**：東壁左側に東向き(N-90°-E)のものが確認された。カマドは住居壁を少し掘り込むタイプで、南側の軸に焼けた円礫があること、周辺土が粘土質であることから、粘土・軸石を用いた構造と思われる。また、南側の軸は平地に軸土を盛り上げ、北側の軸は地山土を利用して三角形に軸土を盛ったものである。燃焼室奥壁は70°の急な立ち上がりを持ち、約30cmの高さを持つ。**諸施設**：住居跡中央部に面積2.95㎡の貼り床がある。貼り床構成土は白色の砂を混入した砂質土である。柱穴は確認されていない。**出土遺物・年代**：須恵器・土師器がカマドに集中して出土したほか、西壁寄りで釘および刀子<sup>2</sup>が発見された。

#### S1-17 (図版3 写真図版7)

**形状・規模**：南北2.50m×東西2.65m、面積5.7㎡、深さ35cm、主軸方位S-0°の小型不定形を呈する。北壁は後世の溝などの影響を受け明確にならなかったが、全体としては方形になるものと思われる。**カマド**：南壁中央やや左寄りに南向き(S-0°)のカマドが確認された。半蔵された焼け円礫が左側袖下床面にあることから、袖部は石組構造であったと思われる。燃焼部の奥壁は80°ほどの立ち上がりを持ち、煙道部以外はほとんど壁を掘り込まない。**諸施設**：貼り床はなく、二カ所のコーナーにP1、P3、北壁際にP2が存在するが、これが柱穴かどうかは不明である。**出土遺物・年代**：須恵器杯(111)、土師器甕(114)などがカマドおよび東壁床面で出土している。時期は1期。

#### S1-18 (図版5 写真図版8)

**形状・規模**：東西3.65m×南北3.75m、面積11.1㎡、床面までの深さ30cm、掘り方の深さ60cm、主軸方位S-83°-Eの小型方形。**カマド**：東壁左隅に東向き(S-83°-E)のカマドが確認された。袖部の上半は崩壊している。軸石と思われる石はないが、周囲に粘土質の土が全く存在しないことから、もとは軸石を用いた構造であった可能性が高い。北側の軸は地山土を利用して、南側の軸はやや地山土を掘り残してその上に軸土を盛り上げている。燃焼部は床面より少し掘り下げられており、奥壁は80°の傾斜を持つ。焚き口の幅は50cm程で、灰部は比較的広範囲に及ぶ。**諸施設**：面積4.5㎡の貼り床が確認された。貼り床は白色系の砂を混入した砂質土で、非常に堅く締められている。貼り床はカマドに切られるが、床下の土坑を覆う。南と西の壁下に浅い溝状の遺構があり、その一部は深さ15cm程の土坑に切られている。柱穴は確認できなかったが、北西隅の部分は床面および掘り方が一段盛り上がり入口施設の可能性が高い。**出土遺物・年代**：須恵器・土師器が出土しており、土師器が量的に多い。その大部分はカマド、灰部より出土しているが、皿B(125)は南側壁直下で発見されている。また砂岩質の焼けた円盤状礫が住居中央部より発見されている。時期は5期。

#### S1-19 (図版4 写真図版8)

**形状・規模**：東西2.9m×南北2.92m、面積推定6.8㎡、深さ25cm、主軸方位S-73°-Eの小型方形。東壁の一部が中世の溝によって破壊されているほかは比較的遺存がよい。埋土と地山土との識別は困難であった。**カマド**：東壁左寄りに東向き(S-80°-E)のカマドが確認された。右側袖部は地山を掘り残し粘土質土を混入した砂質土で、完

形の自然礫を一個設置し構築してある。左袖は壁を利用したもので袖石は存在しない。焼土は少なく、炭化物が多く認められた。**諸施設**：柱穴状の穴（P1、P2、P3）が3ヶ所のコーナーで確認されたが、直径約30cm深さ15cmほどの浅いものである。**出土遺物・年代**：須恵器・土師器が出土した。また、西壁付近より直径20cmほどの中央がやや凹んだ砂岩質の円盤状礫が3個体出土した。時期は5期。

S1-20 (図版5 写真図版8)

**形状・規模**：東西3.6m×南北3.6m、面積推定10.3㎡、深さ30cm、主軸方位W-79°-Nの小型方形。西壁は中世の溝によって切られている。**カマド**：西壁中央に西向き（W-85°-N）のカマドがある。右袖は地山を掘り残したもので、左袖は平坦な面に袖土を盛り上げている。なお崩落したものが半載された焼け円礫が周辺より発見されており、もとは袖石使用のカマドと思われる。**諸施設**：浅い皿状の穴P1と深い柱穴状のP2が確認された。**出土遺物・年代**：須恵器・土師器が出土している。特に土師器製の量が多く、そのほとんどがカマド出土である。ほかに鉄釘、円盤状礫（砂岩）がある。時期は4期。

S1-21 (図版5 写真図版8)

**形状・規模**：北壁及び西壁が後世の遺構によって壊されており、現状で東西2.5m×2.85m、深さ20cm、主軸方位W-87°-Nの小型である。**カマド**：西壁に付くと思われる焼土の広がりが確認された。袖などの構造は確認できず破壊されたものと思われる。**諸施設**：床面上に3ヶ所の穴があったのみである。**出土遺物・年代**：須恵器・土師器がカマド周辺に集中して出土した。時期は4期。

S1-22 (図版5)

**形状・規模**：現状で東西3.70m×南北2.70m、面積約7.8㎡、深さ10cmの小型不定形。遺存が悪く一部床面が検出できなかった。西壁は更に広がるものと思われる。**カマド**：西側に焼土及び直径20cm程の焼け穴が確認され、カマドの痕跡と認定される。**諸施設**：確認されず。**出土遺物・年代**：土師器製Aが出土したのみである。時期は不明。

S1-23 (図版5 写真図版8)

**形状・規模**：現状で南北2.68m×東西3.60m、深さ平均8cm。床面の直上まで上層の攪乱を受けているため、明確な平面形をとらえることができなかった。更に周囲に広がると思われる。**カマド**：中央部に強く焼けた土坑状の遺構と裏Aの入った小穴が確認された。形状や位置的にはカマドと認定できないが、土器が大量に出土する事から類似する遺構としてとらえられる。**諸施設**：床面が貼り床であるほかは確認されなかった。**出土遺物・年代**：須恵器・土師器が比較的まとまって出土し、そのほとんどが焼土中より出土している。また、土鍾が二点出土している(180)(181)層属は1期。

S1-24 (図版6 写真図版8)

**形状・規模**：東西2.90m×南北2.95m、面積7.5㎡、深さ15cm、主軸方位S-81°-Eの小型方形。埋土は暗褐色で地山との識別がし易い。**カマド**：東壁中央に東向き（S-81°-E）のものがある。両袖は崩落しているが、燃焼部に焼けた半載礫や板状割石が六片ほど転がっていることからもとは石組のカマドであったと想像される。また右袖部は地山を掘り残したものである。燃焼部奥壁から煙道へは25°ほどの緩やかな傾斜をもって続く。**諸施設**：確認されず。**出土遺物・年代**：須恵器・土師器が出土した。特に土師器製A、碗A、皿A・Bが多く須恵器を圧倒する。これら土器は全てカマド出土である。層属時期は6期。

S1-25 (図版6 写真図版9)

**形状・規模**：東西4.30m×南北6.05m、面積22.55㎡、深さ70cm、主軸方位W-58°-Nの中1型・横長長方形2型。埋土と地山の識別は容易である。**カマド**：西壁左隅に西向き（W-58°-N）の石組カマドがある。袖石は左右とも3個づつの半載礫、完形礫が並んでおり、いづれの礫も上面もしくは片面が焼けている。最大のもので27×23×31cm

を計り、岩種は珉岩が多い。なお、安山岩の焼けた多角形割石がカマドから北に3mほど離れた地点より発見されており、天井石ないしは支柱の可能性もある。燃焼部は比較的狭く焚き口は30cm程である。奥壁は最大20°程の緩やかな傾斜をもって煙道部につながる。煙道部の先端は遺失しているが、少なくとも50cm以上はあったと思われる。諸施設：貼り床は確認されなかった。南側コーナー及び東西面に柱穴(P1、P5、P6、P7)が確認され、各々の距離が約3m30cmで方形を構成する。穴の深さは15cmほどで、4ヶ所の柱穴の範囲外に整穴が延びている点に特徴がある。貯蔵穴もしくは類似する穴としてはP2、P3、P4、P8が確認されている。P2は内部に焼土、須恵器が入っていた。また、P6の北側において約3mにわたり壁面に段が付き、出入口もしくは棚状の施設の可能性がある。出土遺物・年代：多量の土器が出土しているが、須恵器(208)がP2より、双耳瓶(209)がP3上に横になった状態で、柄A(213)(214)がP4から出土している。土師器(215)の多くはカマドより出土しているが特に(227)は奥壁部分に直立した形で出土した。その他特記すべきものとして、黒書須恵器杯、直径30cmの円盤状の礫、長さ30cm程の棒状礫、P6の西1mの地点より角釘(3)が出土している。帰属時期は5期。

#### S1-26 (図版6 写真図版9)

形状・規模：北側部分をS1-25に切られているが南北4.40m×東西3.80m、面積13.36㎡、深さ45cm、主軸方位N-48°-Eの中2型・縦長長方形1型である。カマド：北壁に北向きのカマドが確認されたが、S1-25によって壊されているため明確な状況は復元できなかった。最も焼けが強い地点より全面激しく焼けた半載2、完形1の礫が出土し、少し離れたところより安山岩の板状割石が出土していることから石組構造であったことが想像できる。諸施設：穴P1、P2、P3が各コーナーに確認されたが柱穴と断定はできない。また、カマド周辺が一段低く落ち込んでいるが焼土などの堆積から掘り方ではないようである。貯蔵穴状の穴はP5があるが土器が少し出土したのみである。出土遺物・年代：S1-25に匹敵する量の須恵器・土師器が出土しているが、それに比して柄の量が少なく赤形の皿Bが一点出土しているのみである。鉄製品は刀子(28)、鉋金具(14)のものがそれぞれ一点出土している。また、やや上層から軽石状の燧石、上層及び周辺から棒状尖底の製土器、P2・P4の中間床面で真ん中がややへこんだ円盤状礫(砂岩)が出土している。遺物はカマドに多いが広範囲に広がっている。帰属は4期。

#### S1-27 (図版6 写真図版10)

形状・規模：南北5.70m×東西4.85m、面積22.3㎡、深さ約40cm、主軸方位W-38°-Sの中1型・縦長長方形1型。北東部は底面に礫層が顔を出している。また、南側は段状になっており上段部は掘り方もしくは他の遺構であろう。S1-28を切りS1-29に切られる。カマド：南壁下段に南向きのカマドがある。カマドの詳細は不明だが、少なくとも半載礫を主体とした単数もしくは複数設置の石組であったことが窺われる。諸施設：カマドの北に皿状の穴(P1)がある。床中央には焼土の広がりが見られる。また、北東部の礫層が隆起した部分ではやや掘り込みが浅くなっている。出土遺物・年代：十個体を越える須恵器(黒書須恵器杯を含む)・土師器(少量の碗を含む)が出土している。その他鉄釘(8)、焼けた石製品(バンドコ?)、砥石と思われる円盤状礫(凝灰質泥岩)(4)が出土している。帰属時期は4期。

#### S1-28 (図版7 写真図版10)

形状・規模：南側床面はほとんど確認できず、また北側をS1-27に切られているためその全容は不明である。現状で南北(4.301)m×東西3.80mである。カマド：南向きのカマドで、焼けた柱石状の礫がやや離れて確認された。諸施設：カマドの西に貯蔵穴状の穴が確認されたのみである。出土遺物・年代：須恵器・土師器がカマドを中心に出土している。黒書土師器碗が一個体ある。帰属は4期。

#### S1-29 (図版7 写真図版10)

形状・規模：南北3.25m×東西4.15m、面積11.35㎡、深さ約40cm、主軸方位W-31°-Sの中2型・横長長方形2

型。SI-27を切る。カマド：南壁左寄りに南向き(W-27-S)が確認された。袖部は平地に袖七を盛り上げて構築し、袖石の多くは崩落しているが複数設置の石組であったと思われる。奥壁の立ち上がりは約60°で、燃焼部はやや掘り下げ、住居跡壁を掘り込むタイプである。諸施設：貼り床(2.95㎡)、焼土(中央部、北西部隅)、小穴(P1)が確認された。出土遺物・年代：比較的古ままとった須恵器・土師器がカマドに集中して出土した。また、円盤状礫が出土している。帰属時期は4期。

#### SI-30 (図版7 写真図版10)

形状・規模：東西4.0m×南北3.30m、面積11.45㎡、深さ55cm、主軸方位S-65°-Eの小型・縦長長方形1型。東辺をSI-27に切られているが、深く掘り込んだ住居跡のため床面近くの壁は遺存している。カマド：東向きものが東壁中央にある。SI-27に壊されているため詳細は不明だが、半載及び完形礫が浮いた状態で確認されていることから石組であったことが想定される。諸施設：穴(P1・P2)が確認されたのみである。出土遺物・年代：カマドを中心に須恵器・土師器が出土している。須恵器には墨書の杯、土師器には赤彩の椀がある。帰属時期は4期。

#### SI-31 (図版7)

形状・規模・カマド：壁面および床面はほとんど確認できず、カマド部分のみの遺存である。床面は周辺の住居跡に比べ高い面にあり、浅い住居跡であったと思われる。カマドは西向きである。出土遺物・年代：カマドより須恵器・土師器が出土している。帰属時期は3期。

#### SI-32 (図版8)

形状・規模：南面西面の壁の一部が確認されたのみでほとんどが床面上での確認である。北側をSI-26に切られる。カマド：南壁付近および東側にカマドと思われる焼土が確認された。出土遺物・年代：焼土を中心に須恵器・土師器が出土している。帰属時期は2期。

#### SI-33 (図版8 写真図版10)

形状・規模：床面の一部を確認できたのみで、正確な規模は不明である。現状で東西4.9m×南北3.0m。カマド：東側に焼土の広がり確認され、焼けた円礫が出土した。諸施設：西北隅にP1がある。出土遺物・年代：カマドを中心に須恵器・土師器が出土した。土師器では赤彩墨書の椀が出土している。また、付近から刀子(35)が出土しており共存する可能性がある。時期は4期。

#### SI-34 (図版8 写真図版10)

形状・規模：床面の一部を確認できたのみで、さらに北側へ広がるものと思われる。現状で東西5.5m×南北2.85m、主軸方位S-52°-E。カマド：東壁に確認されたが遺存状態は悪い。袖部を含んで幅100cm程である。出土遺物・年代：カマドを中心に須恵器・土師器が出土したほか、刀子(30)がある。帰属時期は3期。

#### SI-35 (図版8 写真図版11)

形状・規模：東西6.70m×南北4.35m、面積25.2㎡、深さ40cm、主軸方位S-45°-Eの中1型・縦長長方形2型。SI-25と一部重複し、その下層で確認された。南東コーナーは層位確認トレンチで切られている。カマド：東壁中央に方位N-73°-Eのものがある。袖石は存在せず、左袖部は崩壊して確認できなかった。燃焼部奥壁は45°程の緩やかな傾斜を持ち、燃焼室自体も緩やかな傾斜の底面を持つ。煙道は90cm確認された。諸施設：貼り床は無く、比較的しっかりとした柱穴(P1・P2・P3)がある。東南部の柱穴は未確認だが、各柱間隔は3m60cmで方形になるとと思われる。SI-25と同様、柱穴範囲外に整穴が伸びている点が注目される。また、浅い土坑(P6・P7)がある。出土遺物・年代：比較的古ままとった須恵器・土師器のほか土師、釘9)が出土した。帰属時期は4期。

#### SI-36 (図版8 写真図版11)

形状・規模：ほとんどをSI-35に切られており全容は不明だが、SI-35とほぼ同規模と思われる。貼床面まで

の深さは15cm程で主軸方位はN-35°-E。カマド：北壁右隅に方位N-38°-Eのものが確認された。右袖に焼けた完形礫一個が残存しており石組構造である。袖土は砂質土で、盛り上げ構築してある。燃焼部奥壁はしっかりしており80°で立ち上がる。なお、天井石は確認されていないが、天井上と思われる粘質土が確認されている。諸施設：壁から40cm内側に貼り床が確認された。出土遺物・年代：カマド内より須恵器・土師器が出土した。帰属時期は1期。

#### S1-37 (図版9 写真図版11)

形状・規模：南北3.7m×東西3.25m、面積12.05㎡、貼り床面までの深さ30cm、掘り方までの深さ55cm、主軸方位W-27°-Sの小型・縦長長方形1型。埋土上部は非常に締まった粘土質シルトである。カマド：南壁左隅に方位(W-16°-S)のものが確認された。袖部はやや小さめの半截礫および完形礫数個体づつで石組構成され、盛り土構築されている。袖石は原位置からやや動いたものが多い。左袖部上面には板状の割石があり、天井石と思われる。燃焼部は幅30cm、長さ100cmと細長く緩やかに傾斜し、奥壁は60°程である。諸施設：中央部に面積2.51㎡の貼り床がある。出土遺物・年代：須恵器・土師器がカマドを中心に出土した。帰属時期は2期。

#### S1-38 (図版9 写真図版12)

形状・規模：東西4.1m×南北5.8m、面積20.9㎡、深さ20cm、主軸方位S-55°-Eの中2型・横長長方形2型。カマド：東壁に二基のカマドがある。北側のカマド1(N-72°-E)は単数円礫の石組構造で、燃焼部底面はやや深く掘り込んでいる。左袖は壁を利用し、右袖は袖土を盛り上げている。また、煙道部分には円形のビッドが付随する。南側のカマド2(S-58°-E)は遺存が悪く、上部が破壊されている。しかし、燃焼部西側に焼けた板状礫が数個体あることから石組カマドであったことがわかる。また、焼土が広範囲に広がっており、人為的な破壊の可能性が考えられる。両カマドとも袖石が住居跡内に遺存していることから同時存在であったと思われ、このあり方は特殊であるといえよう。諸施設：貼り床(6.1㎡)がある。出土遺物・年代：須恵器・土師器が両カマドから出土しており、その中には墨書須恵器杯が二点含まれる。また、釘1・生反(22)が出土しており工房的な性格を合わせ持ったものとして考えられる。帰属は2期。

#### S1-39 (図版10 写真図版12)

形状・規模：南北3.25m×東西4.7m、面積13.6㎡、深さ35cm、主軸方位W-22°-Sの中2型・横長長方形2型。カマド：南壁西寄りにカマド1(W-20°-S)と東南コーナーにカマド2(S-38°-E)がある。カマド1の袖部は袖石が存在しないが、燃焼部に転落した完形焼け円礫が一個体確認されている。燃焼部は床面を掘るタイプで緩やかな傾斜(約30°)で住居跡の壁を大きく掘り込む。カマド2は既に取り壊されたものと思われ、焼土痕跡と燃焼部奥壁のみ確認された。奥壁は60°ほどの急な立ち上がりである。両カマドは同時存在ではないようである。諸施設：中央部カマド寄りに貼り床(3.54㎡)があるほか、西側カマド1を境に小段差が認められた。出土遺物・年代：カマド1を中心に須恵器・土師器が出土したが、須恵器の量が多く、墨書須恵器杯一点を含む。鉄器では釘・生反(23)が出土した。隣接するS1-38と形態、出土遺物で一致する点が多い。帰属は1期。

#### S1-40 (図版10 写真図版13)

形状・規模：東西7.45m×南北6.5m、面積43.5㎡、床面までの深さ25cm、最深部の深さ45cm、主軸方位S-70°-Eの大型・縦長長方形1型。北東隅の壁は内側に入り込み、やや菱形を呈する。カマド：東壁に二基のカマドが確認された。北側のカマド1(S-71°-E)は小規模のもので壁を掘り込んで構築されている。袖石はなく、簡素な作りである。南側のカマド2(S-73°-E)は壁からやや内側に設けられ、粘土構築である。燃焼部は浅く掘り込まれ、奥壁は60°で立ち上がる。煙道部分の下には壁周溝が存在することからカマド構築は壁構築の後に為されたことがわかる。諸施設：中央部に張り床(18.8㎡)があり非常に堅固なものである。壁周溝は四面を回り、床面から20cmほどU字・V字に掘り込んだものである。溝内には径10cmほどの穴や幅5cmほどの線状の圧痕がみられ、何らかの構

遺物の存在が考えられる。なお、貼り床末端部から溝上にはシルト質の盛り土が盛られている。柱穴状の土坑としては中央部にP1・P2が南北方向に並んで検出された。両穴とも径70cm以上、深さ50cmで底面には貼り砂が見られる。また、東側コーナーには小穴P13・P14がある。貯蔵穴的土坑ではカマド2横のP3・P4があり、P3ではカマド構築用と思われる白色粘土、P4では数個体の土器片が入っている。焼土坑にはP6・P9があり、特に遺物の出土はないが他住居(SI-13)の例から醸造関連の施設の可能性がある。**出土遺物・年代**：カマド2を中心に須恵器・土師器・土甕が出土した。また、鉄釘がP16より発見された。帰属は1期。

#### SI-41 (図版11 写真図版13)

**形状・規模**：東西6.8m×南北5.15m、面積29.55㎡、深さ22cm、主軸方位S-68°-Eの中1型・縦長長方形2型。北東隅は内側に入り込む。カマド：東壁中央に東向き(S-68°-E)がある。壁からかなり内側に位置し、単体の袖石の遺存が認められるものの燃焼部等は溝によって破壊されているため明瞭でない。比較的規模の大きいものであったと推定される。**諸施設**：中央部に貼り床(9.87㎡)、南・西・北面に壁周溝がある。壁周溝はSI-40同様V字状を呈し、すぐに埋められたものである。また、貼り床末端部から溝上壁際には盛り土がみられ、西部分には直径20cm程度の円礫が多数集まっている。柱穴はなく、貯蔵穴状の土坑P1・P3が認められた。また、焼土坑が西側にありSI-13・SI-40のものと同様である。**出土遺物・年代**：カマドを中心に須恵器・土師器が出土したほか、緑釉陶器(277)が出土している。帰属は2期。

#### SI-42 (図版11 写真図版13)

**形状・規模**：南北3.68m×東西3.05m、面積10.6㎡、床面までの深さ20cm、掘り方の深さ40cm、主軸方位W-32°-Sの小型・縦長長方形1型。カマド：南壁左隅に南向き(W-20°-S)があり、袖部は平地に袖土を盛り上げて構築し、複数の礎を芯として使用する石組カマドである。袖石には半載・完形の円礫や安山岩の板状割石を用いており、円礫は片面が焼け、割石は全面がびどく焼けている。当遺跡出土の板状割石は天井石に用いられていたと思われる例が多く、この割石は他住居の天井石から袖石に転用されたものと思われる。燃焼室床面はほとんど掘り下げず、住居壁を少し掘り込むタイプで、奥壁は緩やかに立ち上がる。焚き口の幅は25cmである。**諸施設**：貼り床ではないが床面と思われる面があり、この面中央には南北方向の溝が掘られている。根太溝もしくは間仕切溝と想定されるが、特殊な構造として注目される。また、図示されていないが北壁付近や上位層で径1.5cmから8cm、長さ1mの炭化材が住居跡内部を向き並んで出土した。少なくとも二種類の材質がみられ、比較的上部で出土したことやいづれも未加工木であることから壁体構成材もしくは屋根材であると思われる。**出土遺物・年代**：カマドから土師器椀Aが7個体(278-284)出土したほか、少量の須恵器片・土師器鍋・飾金具(15)がある。帰属は6期。

#### SI-43 (図版11 写真図版14)

**形状・規模**：南北3.7m×東西4.0m、面積13.8㎡、深さ25cm、主軸方位W-30°-Sの中2型・方形。カマド：南壁右コーナーに南西向き(W-36°-S)がある。袖石はなく、粘土構築である。**諸施設**：一部に貼り床(0.6㎡)が確認されたが、あまり明瞭ではなかった。P1・P2は深さ30cmほどの穴である。**出土遺物・年代**：須恵器・土師器が出土した。帰属は1期。

#### SI-44 (図版12 写真図版14)

**形状・規模**：南北3.4m×東西3.4m、面積10.13㎡、深さ50cm、主軸方位N-20°-Eの小型・方形。当遺跡の中では特に深い住居跡であり、他住居と比べ構造上の差異が感じられる。カマド：北壁左隅に方位N-2°-Eがある。転落したもののだが、完形円礫が多いことから袖部は複数礎使用の石組であったと思われる。焼土はほとんどなく、黒色土および炭化物が多量にある。燃焼部奥壁は80°の角度を持ち、燃焼室自体はかなり高さをもっていたと思われる。**諸施設**：特にないが、壁がかなり垂直に立つ。**出土遺物・年代**：須恵器・土師器が出土している。帰属は3期。

S1-45 (図版12 写真図版14)

**形状・規模**：東西(4.05+)m×南北4.95m、面積(17.25+)㎡、深さ25cm、主軸方位S-72°-Eの中2型・方形。東側を後世の溝に切られる。カマド：東壁右コーナーに東向き(S-72°-E)がある。煙道部は溝に切られるが、燃焼部奥壁まではかろうじて残っている。袖部は粘土構築で袖石はない。燃焼部は底面を掘り下けており、奥壁との変化点は明確である。**諸施設**：中央部に貼り床(9.05㎡)、三面の壁際に壁周溝がある。貼り床は壁周溝に切られる。溝はすくりに埋められたもので、溝内には柱穴状のP1・P4、V字状切り込みのP2・P3がある。**出土遺物・年代**：カマドを中心に須恵器・土師器がまとめて出土した。また、西南コーナー付近から円盤状の礫(S1)がみつかった。層属は2期。

S1-46 (図版12 写真図版15)

**形状・規模**：南北6.10m×東西4.30m、面積(23.15+)㎡、深さ20cm、主軸方位N-0°の中1型・縦長長方形2型。北西隅を溝によって切られる。壁面はやや緩やかである。カマド：北壁左寄りに方位N-0°がある。袖部は単数礫使用の石組構造で、右袖石は抜きされ、左袖石は片面が焼けた完形円礫が遺存する。また、住居中央からは焼けた半載礫や安山岩の板状割石が発見されており、カマドの意識的な破壊も考えられる。燃焼室部分の掘り方は深い。燃焼室自体は差程深く平坦である。奥壁は60°程で手前に小穴がある。**諸施設**：中央に貼り床(8.4㎡)がある。**出土遺物・年代**：カマドを主体に須恵器・土師器が出土した。層属は4期。

S1-47 (図版13 写真図版15)

**形状・規模**：南北3.5m×東西4.15m、面積13.45㎡、深さ15cm、主軸方位W-17°-Sの中2型・横長長方形1型。北辺の壁はほとんど残っていない。カマド：南壁右コーナーに方位W-17°-Sがある。左袖は単数の完形円礫、右袖は複数の半載および円礫の袖石をもち、平地に袖土と共に盛り上げ構築している。袖石は片面の真ん中が焼け、燃焼室側壁に露呈していたことがわかる。燃焼室はやや掘り下げ、奥壁は45°の傾斜をもつ。**諸施設**：中央に貼り床(6.7㎡)がある。**出土遺物・年代**：カマドおよび北東隅を中心に須恵器・土師器が出土した。また、軽石製の浮きがある。層属は1期。

S1-48 (図版13 写真図版15)

**形状・規模**：南北4.25m×東西4.15m、面積15.57㎡、深さ10cm、主軸方位W-8°-Sの中2型・方形。全体に遺存が悪く壁面はほとんど残っていない。カマド：南壁右コーナーに焼上面がある。袖部は残っておらず、燃焼室の底面のみ確認された。**諸施設**：カマド付近で貼り床が確認されている。**出土遺物・年代**：カマドより須恵器・土師器が出土したほか、西壁付近から鉄製紡錘車(20)が出土した。層属は2期。

S1-49 (図版13 写真図版16)

**形状・規模**：東西4.65m×南北6.0m、面積22.3㎡、深さ15cm、主軸方位S-72°-Eの中1型・横長長方形2型。後世の耕作により平面形の確認が困難であったためやや不定形となる。また、底面には自然堆積礫がかなりの量を出しており、生活床面の認定に問題が残る。カマド：西壁右コーナーに方位S-70°-Eがある。左袖のみ完形円礫の袖石が残存しており、右袖は抜き取られたようである。袖上には粘土が多く混入されている。燃焼室はほとんど掘り込まず奥壁は住居壁から80cmほど内側に位置する。**諸施設**：特に確認できなかった。**出土遺物・年代**：カマドを中心に須恵器・土師器が出土したほか、西壁中央部分から刀子(32)が出た。層属は2期。

S1-50 (図版13 写真図版16)

**形状・規模**：南北3.85m×東西3.35m、面積10.5㎡、深さ50cm、主軸方位W-6°-Sの小型・方形。小型で深さのあるタイプでS1-44と類似する。壁は急角度で立ち上がる。カマド：南壁左隅に方位S-4°-Eがあり、15個体を越える円礫が用いられている。袖石と思われる礫は両袖とも4から5個体で構成される。半載礫と完形礫が半々

で、両者とも長軸30cm短軸20cmを平均とする。石材は砂岩・玲岩・花崗岩・安山岩がある。焚き口上部には天井石と思われる半截礫が2個あり、下面が焼けている。その右側にやはり片面が焼けた円礫が3個あり、同じく天井を構成していたと思われる。大きさでは袖石よりも天井石の方が一回り大きく重量もかなりある。袖石の先端に直接渡し架けたものだろう。袖部自身は平地に袖土を盛り上げて構築したものである。燃焼部は緩やかな傾斜をもち、奥壁はあまり明確にならない。焚き口の幅は40cmで高さは17cmほどである。炭灰は両袖の周りにまで広く分布する。諸施設：認められず。出土遺物・年代：カマドから残りの良い状態の土師器甕が出土したほか、須恵器杯・蓋が北側床面から出土した。帰属は3期。

#### S I-51 (図版14 写真図版17)

**形状・規模**：東西6.7m×南北7.1m、面積推定44.2㎡、深さ23cm、主軸方位S-65°-Eの大型・方形。南辺の一部を中世土坑に切られ、西辺の一部をS I-52に切られる。埋土は汚れた明褐色土でややシルト質である。カマド付近には灰オリブ色の粘土質シルト、壁際には黄褐色の盛り土がある。カマド：東壁右寄りに方位S-59°-Eがあり、袖土を盛り上げた石組構造である。左袖には数個の礫が見られるが、大型のものが中心にあることから基本的に単数構成ととらえられる。両袖石とも完形円礫で内側中央が焼けている。燃焼室は幅50cm、高さ40cm以上でかなり大きい。底面は平坦で、奥壁は70°の急角度を持つ。煙道は僅かに残る。諸施設：中央部に貼り床(14.6㎡)、四面の壁に壁周溝、柱穴がある。貼り床はカマドや壁周溝に切られ、初期段階で構築されることがわかる。壁周溝は壁よりやや内側に位置し、溝内には小穴や線状の圧痕がみられる。溝埋土は柔らかい地山類似土ですぐに埋められたものと思われ、その上部を厚さ25cmほどの堅く締まった盛り土が覆う。溝部分に板材などの構造物の存在が想定される。なお、壁際の盛り土は一部貼り床を覆い、カマドを除く全周に巡る。柱穴は各辺三本づつ2間×2間構造となる(P 1-P 7)。西辺の中央のものは未検出である。掘り込みは盛り土の上面から行われ、直径平均55cm、深さは60cm以上になるとと思われる。柱穴の配置や規模から孤立柱建物的な上層構造が想定できる。なお、カマドは柱と柱の間に設けられている。土坑には貯蔵穴状のP 8・P 9があり、カマドの両脇に位置する。焼土坑には焼1・焼2があり、焼1については形状や位置がS I-13・40・41と近似し、作業的な施設と思われる。焼2については遺物が多く出土することや燃焼室状の土坑を含むことから廃棄されたカマドの痕跡と思われる。出土遺物・年代：カマド内から多くの土師器甕が出土し、須恵器はその周辺から出土するものが多い。完形に近いものが多く良好な遺存状態を示す。鉄製品も多く、鎌刃状(12)、刀子(34・36)が床面および焼1付近から出ている。また、円盤状の礫がP 1付近から出土した。帰属は2期。

#### S I-52 (図版15 写真図版18)

**形状・規模**：東西5.85m×南北7.4m、面積37.7㎡、深さ30cm、主軸方位S-60°-Eの大型・横長長方形2型。S I-51・53を切る。カマド：東壁中央と右寄りに方位S-58°-E、S-62°-Eがある。中央のカマド1は単数礫による石組構造の袖部をもち、燃焼室は一段掘り下げられるタイプである。袖石は完形円礫で片側の上半部が焼けている。奥壁は45°で立ち上がり一部煙道が残っている。右側のカマド2は割石状の礫が右袖に残っている他は袖石はない。袖部の手前もかなり破壊されており、カマド1より以前のものであろう。燃焼部は中央に一段深い部分があり、奥壁は45°である。構造・規模ともにカマド1と類似している。諸施設：カマド周辺に2ヶ所(5.3㎡)の貼り床がある。本来はもっとも広がっていたであろうと思われるが、調査の段階で掘りすぎた面がある。貯蔵穴様の土坑にはP 1があり、少量の土器が出土した。その他の土坑ではP 2からP 4があり、深さ20cm程度である。柱穴にしては浅すぎるが、特にP 3・P 4については簡素な柱穴という可能性を考える必要もあろう。焼けた土坑には焼1があり、深さは5cm程度である。南辺には階段状の段が付く。出土遺物・年代：カマドを中心に須恵器・土師器が出土した。黒書須恵器杯蓋がある。鉄器では刀子(33・38)がある。帰属は2期。

S I-53 (図版15 写真図版18)

**形状・規模**：東西4.30m×南北4.60m、面積18.86㎡、深さ55cm、主軸方位S-63°-Eの中2型・方形。S I-52に完全に切られ、床下で確認された。**カマド**：東壁右コーナーに方位S-62°-Eがある。燃焼室中央に焼けた円礫がある他に礫はなく、袖部も崩壊している。炭化物は広く北側へ流れている。**諸施設**：カマド付近に貼り床(5.5㎡)がある。東壁下の一部に溝状の遺構があり、壁周溝の可能性もある。貯蔵穴状の土坑P3からは少量の土器が出土した。その他小穴P1・P2があるが、性格は不明である。**出土遺物・年代**：カマドより、須恵器・土師器が出土している。帰属は1期。

S I-54 (図版16 写真図版18)

**形状・規模**：南北4.25m×東西6.15m、面積23.7㎡、深さ20cm、主軸方位N-35°-Eの中1型・横長長方形2型。S I-55を切る。**カマド**：北壁右寄りに方位N-35°-Eがある。袖部は単数礫による石組カマドで、袖土を平地に盛り上げて構築している。右袖石は縦割りの半載礫、左袖石は横割りの半載礫で燃焼室内に転落している。燃焼室は壁からやや内側に設けられ、底面は全く掘られない。奥壁は粘土で作られ、45°の傾斜である。**諸施設**：中央部に貼り床(8.8㎡)がある。貼り床はかなり堅固だが、やや薄めで所々抜けている。その他柱穴などの土坑はなく、西壁中央付近に粘質土の堆積が見られるのみである。旧カマドの痕跡かも知れない。**出土遺物・年代**：カマドを中心に須恵器・土師器が出土した。帰属は2期。

S I-55 (図版16 写真図版18)

**形状・規模**：東西5.65m×南北4.70m、面積23.2㎡、深さ50cm、主軸方位S-68°-Eの中1型・縦長長方形1型。S I-54に切られ、その下層にある。カマド付近が最も深く、対面に向かって緩やかに傾斜する。**カマド**：東壁右寄りに方位S-68°-Eがある。袖石と思われる完形礫が左袖下に転落していることからもとは単数礫の石組であったと思われる。袖部自体はかなり破壊を受けており、上層のS I-54使用の際に人為的に壊されたものと思われる。燃焼室底面はU字形に深く掘り込まれ、袖部は左右の高まりを利用して、奥壁は若干住居壁を掘り込んで設けられ、約60°の傾斜をもつ。**諸施設**：中央に貼り床(9.14㎡)があり、やや軟質である。その他柱穴などの施設は見られなかった。**出土遺物・年代**：カマドを中心に須恵器・土師器が出土したが、須恵器杯蓋は床面から出土している。帰属は2期。

S I-56 (図版18 写真図版19)

**形状・規模**：南北4.80m×東西4.45m、面積18.3㎡、深さ25cm、主軸方位W-39°-Sの中2型・方形。S I-57を切る。北側の壁については後世の擾乱を受けはっきり残っていないが、おおむね方形を呈するものと思われる。**カマド**：南壁中央にカマド1(W-34°-S)と東壁右寄りにカマド2(S-44°-E)がある。カマド1はかなり破壊を受け左袖の一部と燃焼室のみ遺存している。この上面にはかなりの量の円礫があり、全て取り除いてしまったため石組構造かどうかは不明である。カマド2については袖部・燃焼部共に取り除かれており、焼土の痕跡と煙道の一部のみの遺存である。カマド2が古い段階と思われる。**諸施設**：中央部に貼り床(3.53㎡)があるほか確認されていない。**出土遺物・年代**：カマド1から須恵器・土師器が出土した。特に須恵器が多い。帰属は2期。

S I-57 (図版18 写真図版19)

**形状・規模**：北側半分をS I-56に切られているため全容は把握できない。東西方向の長さは4.1mで、規模としてはS I-56と同程度と推定される。**カマド**：S I-56下層の中央部分にカマドが確認されたが、位置的に不自然であり併うものかどうか正確なことは不明である。袖部の一部が残っており、燃焼室と思われる部分からは遺物が多く出土している。**諸施設**：不明。**出土遺物・年代**：切り合い関係より2期以前である。中央部のカマドからは須恵器・土師器が出土しており、帰属は1期である。

S I-58 (図版17 写真図版19)

**形状・規模**：東西7.6m×南北6.35m、面積44.1㎡、深さ25cm、主軸方位S-69°-Eの大型・縦長長方形1型。S I-60を切り、S I-59と接する。上層部は酸化鉄沈着などの耕作層の影響を受け確認しづらい。**カマド**：東壁右寄りに方位S-73°-Eがあり、複数竈使用の石組カマドである。袖部は平地に袖土を盛り上げ、4から5個の完形・半載礫を芯にしたもので、左袖土は転落したものが多く、両袖土とも主体のものが大きく、他のものは小さめである。燃焼室は段があり、住居跡を少し掘り込む。奥壁の立ち上がりは緩やかである。また、灰部は浅い掘り込みを伴っている。**諸施設**：中央部に貼り床(18.5㎡)があり、その外周に周溝が巡る。溝の深さは10cm程で、北西部コーナーは幅が広く、溝の上部には盛り土が覆っていたと思われるが、はっきりしない。柱穴・貯蔵穴は確認されていない。南西部コーナーに炭化物の集積が認められた。**出土遺物・年代**：カマドを主体に床面・溝内から須恵器・土師器が出土した。その他、上錘2点と東北部溝中より石製紡錘車(1)が出土している。帰属時期は3期。

S I-59 (図版17・18 写真図版20)

**形状・規模**：南北6.1m×東西5.9m、面積33.5㎡、深さ30cm、主軸方位W-16°-Sの中1型・方形。S I-58に隣接し、S I-60を切る。**カマド**：南壁左寄りおよび右寄りに確認された。左側のカマド1は方位W-11°-Sで、袖部上半の残りは悪いが、上半が焼けた半載礫が燃焼部に転落した形で発見されていることから、元は単数石組のカマドであったと思われる。袖部自体は平地に袖土を盛り上げたものである。燃焼室底面は浅く掘り込み、奥壁は80°程の急な角度を持つ。煙道が一部残存している。右側のカマド2は燃焼室の底部のみが遺存しており、燃焼室は床面を掘り込み住居跡を掘り込むタイプである。カマド2が破壊された状態であることからカマド2からカマド1への作り替えと考えられる。**諸施設**：中央部に面積11.1㎡の貼り床がある。北西部が確認されていないが、本来は存在していたものと思われる。壁周溝は確認されていないが、貼り床が壁際まで到達していないことから壁付近に壁体構築物の存在が想像できる。その痕跡として薄いものだが壁際埋土に締まった盛り土が見られる。貯蔵穴状の土坑はないが、焼土の詰まった浅い七坑(焼1)がある。S I-13・25・40・41・51・52に見られるものと類似し、当住居跡では特に鉄器の出土が多いことから小鍛冶関連の遺構の存在を想定できようか。**出土遺物・年代**：比較的古まじった須恵器・土師器が出土しているが、鉄器が6点出土したことが特徴的である。鉄器には鉚(6)・鎌刃状(1)・刀子(25・26・27)がある。帰属は2期。

S I-60 (図版17)

**形状・規模**：S I-58・59に切られ、全容は不明であるが床面の一部を確認する事ができ、住居跡として認定した。推定で南北8m×東西6.8mの大型住居跡である。**カマド**：南西コーナーに焼土の集積が見られカマドと思われる。大部分をS I-58に破壊されているため詳細は不明である。**諸施設**：面積は不明だが北西部付近に貼り床が確認されている。東部分については床面の遺存が悪いためはっきりしない。その他の施設についても確認ができなかった。**出土遺物・年代**：当住居跡に属する遺物は確認されていないが、切り合い関係から少なくとも2期以前であることは間違いない。規模が最大である点や貼り床を持つ構造などから中核的な建物であったことがわかる。

S I-61 (図版18)

**形状・規模**：東西3.5m×南北4.4m、面積11.7㎡、深さ20cm、主軸方位S-88°-Eの中2型・横長長方形1型。遺構の確認が遅れたため詳細なデータが得られていないが、カマドを有し、土器を多く出土することや壁の一部が垂直に立つことから住居跡として認定した。**カマド**：東壁左寄りにカマドがある。調査段階の記録によれば複数竈使用の石組構造であったようである。燃焼室は底面をやや掘り込み、住居跡を掘り込むタイプである。**諸施設**：西面および北面にベッド状の段が付く。S I-01に似る。**出土遺物・年代**：カマドから多くの須恵器・土師器が出土した。帰属時期は3期。

## B 溝

### 1 古代の溝 (写真図版21)

古代の溝はSD-30・122・208に代表される。SD-30とSD-122は同一の溝で調査上便宜的に名称を分けてある。埋土は地山と全く区別のつかない黄褐色砂質土で、乾くとかすかに砂が浮き出ることによって溝とわかる。幅は80cmから150cmで深さは50cmほどである。遺跡の南端から中央を経由し東北端へ、礫層の間を縫うように蛇行する。東西方面への分岐は南端部でSD-122からSD-110が東西へ分かれるほか、X60 Y25付近でSD-246が西へ分岐し15mほど行って北折しSD-30と並走する。SD-30・122の遺物はY30からY75の間に集中し、時期は古代1期から6期にわたるが、特に1期から3期が多い。東西に分岐するSD-110・246については遺物の出土は全くないが、S1-2・41を切ることから時期的にやや遅れて掘られたものであろう。これら溝の性格は埋土の堆積状況より用水路であることは間違いなく、同種の溝が約400m東の栗山楮原遺跡(元年度調査)でも確認されていることから、広範囲な耕作地帯の展開を彷彿とさせる。また、X35 Y97付近に位置するSD-208は、幅100cm程で古代1期の遺物を多量に出土した。この溝は両端が切れることから、水路というよりは住居跡に伴う溝構と思われる。

### 2 中世以降の溝 (写真図版27・28)

中世の溝は切り合い関係および埋土から大枠で二期に分けることができる。古段階に属する溝には、東西方向に走る南側よりSD-109・52・15・29・249・230・248、南北方向に走るSD-102・15・19・230・221がある。これらは自然地形の影響によりやや不規則ではあるが、南北の間隔はおおよそ20mで区切れ、一定の区画をもったものと理解できる。東西の区画については判然としない。また、SD-218はSB-26を囲む溝である。これらはいずれも黒褐色砂質土を埋土とし、遺物は12世紀から15世紀に比定されるものが出土している。

新段階の溝はSD-53を中心とし、遺跡内を南北および東西に流れる幅2m程の溝である。調査直前まで使用されており、断面の観察から数回の補修の痕跡が確認された。遺物は13世紀のものから存在するが、遺物の層位・量から15世紀以降の溝として位置づけられる。数回の改修が想定されるが現代まで溝がほぼ位置を変えずに維持されてきた経緯は、南中田地区周辺の村落形成の基盤がこの時期に成立したことを示していると言えよう。

明らかに近世以降の溝とわかるものにはSD-53の東側に平行するSD-129がある。この溝はL字状に区画し、その内部は近世の墓域として機能している。

## C 掘立柱建物 (図版19～31 写真図版22～27)

当遺跡では44棟の掘立柱建物が確認され、遺跡の南から北まで広範囲に分布している。建物の方位は、遺跡の旧流路跡が北に行くにつれて東偏するため同様に東偏する傾向がある。柱穴の埋土はSB-10を除いていずれも黒褐色砂質土で、この中にシルト系と砂質系および灰褐色土混入系の三種がある。地山土に最も近い砂質系が古く、上層耕作土の混入した灰褐色土混入系が新しく位置づけられる。また、建物の帰属時期については大枠の相対区分として便宜的に中世を二期に分けた。区分の指標として、古段階の溝を中世Ⅱ期、新段階の溝を中世Ⅲ期に相当させ、その前後関係で時期を決定した(第19図参照)。なお、中世Ⅲ期には近世に属するものも包括させている。

各建物の属性および計測値についてはスペースの関係上、表3・(4)に一括して掲載した。以下ここでは埋土・棟方位・構成などを視点とし、同時期存在の可能性が高い建物をグルーピングして、それぞれ特記すべき事項についてのみ記載することとする。

**SB-01グループ** 遺跡中央西部に位置するグループでSB-01・02・12が属し、5×4間一棟、4×3間一棟、3×2間一棟で構成される。いずれも総柱で、大型の建物で構成されるのが特徴である。切り合いなどから中世のI期に属する。なおSB-11もこのグループに属する可能性がある。

**SB-01 (図版19)** 遺跡の中では最大級の規模をもつ総柱建物。柱穴存も他の建物に比べ大きく(60cm)深い。

埋土は砂質系の黒褐色砂質土である。計測表では南北棟としてあるが、南北5間のうち中央3間分は柱間が約3mであるのに、両端の1間は約2.5mと狭いことからむしろ東西棟の可能性もある。しかし、いずれの柱穴も規模に違いは認められない。北側には柱穴径の小さい(25cm)柱列があり、廟もしくは櫓と思われる。当建物で特徴的なのは東側に土坑(SK-145)が付設される点で、土坑の中央部は焼け、破砕礫を多く含んでいる。さらに土坑の東には4本の柱列があり、身舎から延びて土坑の上屋を支えたものと推定される。遺物はP22から土師質土器(345)が出土したのみである。SD-11・12・14・15に切られる。

SB-02(図版20) SB-01と棟方位がほぼ同じで、切り合いでは他の中世遺構に切られている。

SB-12(図版22) SK-18を挟んでSB-01と平行に建てられ、西側に細めの柱穴による廊がある。また、北側の柱列について計測表では最も北のP33-P29ラインを廊としてあるが、柱間という視点では主柱列をP33-P29のラインでとるのが妥当であり、柱穴規模の視点ではP20-P28ラインの柱穴のみが他のものに比して浅いことから、むしろP20-P28列を補助的柱列として考えた方がよいのかも知れない。土坑では東側屋外にSK-18、南側屋内にSK-85が付設されており、長方形の浅型である点に特徴がある。なお、SK-18から榎炭(16)が出土している。

SB-03グループ 遺跡南端部に位置する建物群は棟方位が二方向に明確に分かれ、これはそのうち北から東に10°以内に収まるグループである。SB-03・04・05・16が属し、3×2間一棟、2×2間三棟で構成される。SB-05が棟方位の異なるSB-06を切ることから中世Ⅱ期に相当させておく。埋土はいずれもシルト系である。

SB-03(図版20) 東側に長方形でやや深めの土坑(SK-514)を伴い、東側の桁柱P12はSK-514を避ける形で配置されている。SK-514の東側に櫓列は明確に確認できなかったが、伴う可能性がある。建物から遺物の出土はなく、さく状溝SD-101・104を切る。

SB-06グループ 遺跡南端部の棟方位が東に15°前後のグループ。SB-06・07・08・09が属し、4×3間一棟、3×2間一棟、2×2間一棟、2×1間一棟で構成される。SB-03グループに切られることから中世Ⅰ期に当てることができるが、南のSD-109との関連で中間的な位置づけも考慮しておく必要がある。埋土はシルト系である。

SB-06(図版21) SB-05に切れ、やや不規則な柱間をもつ。遺物の出土はない。

SB-07(図版20) 細長の建物で北側の一間だけ柱間が狭い。南側の廊は柱穴がひとまわり小さい。また、P5と同位置に礫の多く入った土坑がある。

SB-14グループ 遺跡中央部やや南寄りに位置し、SD-53に平行して建つグループ。SB-14・18・19が属し、3×2、2×2、2×1間各1棟で構成される。これら相互の関連性は確かではないが、共通するのは柱列が乱れている点と、SB-18・19が間敷のわりに面積が狭い点である。SB-19が中世Ⅱ期に属するSD-29を切っていることから中世Ⅲ期に相当させておく。埋土はシルト系の黒褐色砂質土である。

SB-18(図版24) 柱間が狭く柱穴も小さい。内部に土坑が数基あるが伴うものかどうかは不明である。なお、付近のSK-103からは小柄(40)が出土した。

SB-20グループ 遺跡北端西側に位置し、棟方位が東に30°前後で柱間が2m以下のSB-20・21・22・23と、棟方位が東に27°前後で柱間が2.3m程のSB-38・39・40に分かれる。SB-23とSB-40、SB-38とSB-39が互いに重複していることから更に数段階に細分できると思われるが、その他の遺構との切り合いおよび出土遺物から併せて中世Ⅲ期としてとらえた。前者のグループはL字状の配置をとり、SB-14グループ同様面積が狭い。時期的には前者が新しくなるものと思われる。埋土はシルト系および灰褐色混入系である。

SB-21(図版24) 特に柱間が狭く、また当遺跡では珍しく側柱建物である。他の遺構を全て切る。

SB-22(図版24) 柱間はやや狭く、柱穴から陶器(346)が出土している。

SB-23(図版25) 柱間が狭く長い長方形となる。北端に土坑SK-3154がある。

**SB-38** (図版29) 柱穴の切り合いでSB-26を切る。P3から土師質土器(416・417・418)が出ている他柱穴から鈔(17)が出土した。

**SB-24グループ** 遺跡中央北寄りに位置し、SB-24・25が属する。溝との方位、遺物より中世Ⅱ期に相当する。

**SB-24** (図版25) 屋内に浅い土坑SK-3175がある。この土坑より土師質土器(425)が出土している。

**SB-25** (図版26) 屋外に土坑SK-3188があり、当建物との関連が不確かである。土師質土器が出土している。

**SB-26グループ** 遺跡北半西側に位置し、棟方位は東に30°前後で一致する。SB-26・31・32が属し、いずれも3×2間でSB-31・32は重複している。SB-20グループの建物に切られること、中世Ⅱ期の溝と方位が一致することなどから中世Ⅱ期に当たった。埋土はやや砂質のシルト系である。

**SB-26** (図版25) 当遺跡唯一の四面廂建物で、身舎の柱穴径(40cm)に比べ廂の柱穴径は30cmと小さく浅い。

89年度調査の南中ⅢA遺跡のSB-01に類似するが、こちらの方が廂部分がやや狭い点異なる。この建物の三方向を囲む形で溝SD-218が巡る。また、東側に竪穴状土坑(SK-3157)があり、一部は後世の擾乱で壊されているが、貼り床が残っており、この建物に付随する可能性がある。

**SB-31・32** (図版27) 両建物は棟方位が90°ずれ、同じ2×3間であることから建て直しとらえられる。SB-31のP3から珠洲焼(350)が出土した。SB-32は隔にSK-3261を含む。

**SB-28グループ** 遺跡中央に位置し、SB-28・29・33・44が属する。いずれも棟方位は東に8°で、周辺の建物とは顕著に異なる。5×3、3×4、2×2間と規模の大きなものがあり、切り合いが全くないことから同時期存在の可能性が高い。当グループの建物が中世Ⅱ期の溝に切られること、棟方位が溝と大きくずれることから中世Ⅰ期に相当する。埋土は砂質系である。SB-33より刀子(35)が出土している。

**SB-28** (図版26) SB-29の北に位置し、梁行の長さがほぼ一致することからSB-29に付随した建物として考えられる。

**SB-29** (図版26) 桁行の両端の柱間が狭い点でSB-01と類似する。中世Ⅱ期の溝SD-230に切られる。遺物はP15より土師質土器(347)が出土している。

**SB-34グループ** 遺跡北半の東側に位置し、棟方位が東に15°前後のグループで、SB-34・35・36・37が属する。各建物の同時期性は根拠にやや欠けるが、SB-34・35が中世Ⅱ期の溝と方位が一致すること、SB-36が中世Ⅲ期の溝に切られることから併せて中世Ⅱ期としてとらえた。埋土はいずれもシルト系である。

**SB-34** (図版28) 身舎5×3間、西面廂、北面櫓(?)の建物で、東側に竪穴状土坑が付随し、それを2間分の柱穴が囲む。桁行の両端柱間はやや狭く、当遺跡の他の大型建物と一致する。柱穴は径50cm程、廂列は径30cmでやや浅く、北の櫓列は径20cm程で更に浅い。土坑が多く見られ、身舎内のSK-3900・3913、廂内のSK-3718・3723・3833・3832・3740、櫓内のSK-3822・3821・3819、屋外のSX-114が付随すると思われる。特に廂内、櫓内の土坑は各一間毎に掘られ、他の建物には確認されないことから特殊な性格であることが窺取される。屋外のSX-114はSB-01・26に属する土坑と類似し、これも大型建物に特有なものとしてとらえられよう。また、遺構図上では明確にされていないが、建物の敷地が全面10cm程掘りくぼめられており、特に南面と西面は直線状のラインがはっきりしていた。柱穴はより上向で確認されたことからこの掘込みは床面形成のための整地と思われる。SX-114から珠洲焼(448・449)、SK-3913から土師質土器、P13付近の床面から土師質土器(348・349)、敷地内床面から刀子(39・41)、ソケット状鉄器(21)が出土している。

**SB-41グループ** 遺跡のほぼ中央に位置し、いずれも特殊な建物である。SB-42は特に大きく深い柱穴で構成され、敷地内部には土坑が集中している。埋土は灰褐色土混入系で時期的に新しいものである。敷地内より鉄器(7・29)が出土した。SB-43は建物と言うよりは土坑SK-3687の覆屋的なものである。SK-3687は片側面が高く、

遺構番号	棟方向	柱間 間隔	柱間寸法		面積 (㎡)	柱直径 (cm)	方位	備考
			桁行(m)	梁行(m)				
SB-01	南北棟	5×4	2.5×2.7+3+3+2.5+(2.5) (13.3)	2.4+2.3+2.3+2.2 (9.3)	123.7 (140.2)	60	W-5° N	北側 東屋外に方形土坑 東に横溝?
SB-02	南北棟	3×2	2.5+2.3=2. (7.0)	2.8+2.7 (5.5)	38.5	35	W-0° -N	
SB-03	南北棟	3×2	2.4+2.5+2.5 (7.4)	2.1+2.2 (4.3)	31.0	40	N 8° -E	東側に土坑
SB-04	東西棟	2×2	2.2+1.9 (4.1)	1.4+1.9 (3.3)	13.5	40	N 8° -E	
SB-05	南北棟	2×2	3.1+2.7 (5.8)	2.2+2.3 (4.5)	26.1	40	N-10° -E	SB-6を切る
SB-06	南北棟	4×3	2.6+2.9+2.7+2.3 (10.5)	2.5+2.4+2.7 (7.6)	79.8	45	N-14° -E	
SB-07	南北棟	3×2	2.4+2.9-2.8+(2.3) (8.1)	2.3+2.2 (4.5)	36.5 (46.8)	30	N-16° -E	屋内に土坑 南に溝
SB-08	東西棟	2×1	2.3+2.4 (4.7)	3.5 (3.5)	16.5	30	N-15° -E	
SB-09	南北棟	2×2	2.3+2.4 (4.7)	2.3+2.3 (4.6)	21.6	35	N 14° -E	屋内に土坑
SB-10	南北棟	2×1	1.9+2.1 (4.0)	2.3 (2.3)	9.2	35	N 15° -E	埋上り褐色砂質土
SB-11	南北棟	2×2	2.6+3.0 (5.6)	2.4+2.3 (4.5)	25.2	30	W-8° N	
SB-12	南北棟	4×3	(1.0)+1.9+2.9+3.0+2.5 (10.3)	(2.3)+2.5+2.2+2.5 (7.2)	71.2 (105.1)	35	W-4° -N	屋内屋外に長方形土坑 北と西に溝
SB-13	南北棟	3×2	2.6+2.3+2.6 (7.5)	2.5+3.5 (6.0)	45.0	35	N-19° -E	
SB-14	南北棟	1×2	4.8 (4.8)	2.5+2.3 (4.8)	23.0	30	N-0° -E	東側に土坑
SB-15	東西棟	2×1	2.4+2.4 (4.8)	2.8+(2.2) (2.8)	13.4 (18.9)	25	W 7° -N	北側に土坑
SB-16	南北棟	2×2	2.2+2.6 (4.8)	2.3+3.1 (5.4)	25.9	35	N 3° -E	
SB-17	南北棟	2×3	3.7+1.9 (5.6)	2.5+2.3+1.4 (6.2)	34.7	45	W 2° -N	北側に石積あり
SB-18	南北棟	3×2	1.4-1.4+1.7 (4.5)	1.8+1.4 (3.2)	14.4	30	N-5° -E	北側に方形土坑
SB-19	南北棟	2×2	1.9+1.7 (3.6)	1.9+1.6 (3.5)	12.6	30	N-3° -E	
SB-20	南北棟	3×2	1.8+1.9+2.3 (6.0)	1.9+1.9 (3.8)	22.8	35	N-33° -E	
SB-21	南北棟	4×2	1.2+1.3+1.5+1.5 (5.5)	1.7+1.6 (3.3)	18.2	25	N-32° -E	北に溝?
SB-22	南北棟	2×2	2.0+2.2 (4.2)	1.8+1.9 (3.7)	15.5	30	N-28° -E	屋内に土坑
SB-23	南北棟	4×2	1.7-1.9+1.7+1.3 (6.6)	1.6+1.6 (3.2)	21.1	25	N-27° -E	屋内に土坑
SB-24	東西棟	3×2	2.2+2.2+2.2 (6.6)	2.2+2.4 (4.6)	30.4	30	N-35° -E	屋内に土坑
SB-25	東西棟	2×2	2.2+2.1 (4.3)	1.4+1.7 (3.1)	13.3	25	N-34° -E	屋外に土坑
SB-26	南北棟	3×2	(1.2)+2.7+3.3+2.8=(1.0) (8.8)	(1.4)+2.4+2.5+(1.2) (4.9)	43.1 (82.5)	40	N 30° -E	四面南 東側屋外に土坑
SB-28	南北棟	2×2	3.0+2.3 (5.3)	2.2+2.2 (4.4)	23.3	35	N 8° -E	
SB-29	南北棟	5×3	2.5+2.8+3.0+2.9+2.4 (13.5)	2.1+2.4+2.4 (6.9)	93.2	35	N-9° E	
SB-30	南北棟	2×2	3.2+2.9 (6.1)	2.3+2.4 (4.7)	28.7	35	N-18° -E	
SB-31	南北棟	3×2	2.7+1.9+2.7 (6.5)	2.8+2.4 (5.2)	35.4	35	N-30° E	
SB-32	南北棟	3×2	(1.2)+2.3+2.1+2.1 (6.5)	2.8+2.7 (5.5)	35.8 (42.4)	35	N-33° -E	西側に溝 屋内に土坑
SB-33	南北棟	3×4	3.1+3.0+3.3 (9.4)	2.2+2.4+2.4+2.1 (9.1)	85.5	30	N 8° -E	
SB-34	南北棟	5×3	(1.8)+2.3+2.6+2.7+2.8+2.4 (12.7)	(2.2)+2.5+2.4+2.3 (7.1)	90.2 (136.8)	50	N-12° -E	西側に溝 北側に溝? 屋内屋外に土坑
SB-35	南北棟	2×2	2.7+2.9 (5.6)	2.3+2.1 (4.4)	24.6	35	N-19° -E	
SB-36	南北棟	2×2	2.9+2.9 (5.8)	2.5+2.5 (5.0)	29	35	N-15° -E	
SB-37	南北棟	2×2	2.4+2.5 (4.9)	2.7+2.4 (5.1)	25.0	25	N-11° -E	

第3表 掘立柱建物計測値一覧(1)

遺構番号	棟方向	柱間 桁行×梁行	柱間寸法		面積 (㎡)	柱穴直径 (cm)	方位	備考
			桁行(m)	梁行(m)				
S B-38	南北棟	3×2	2.4+2.2+2.3 (6.9)	2.3+2.3 (4.6)	31.7	35	N-29°-E	
S B-39	南北棟	2×2	2.7+2.3 (5.0)	2.3+2.4 (4.7)	23.5	25	N-20°-E	
S B-40	南北棟	2×2	2.3+2.2 (4.5)	2.0+2.3 (4.3)	19.4	30	N-28°-E	
S B-41	南北棟	1×2	1.4 (1.4)	1.7+1.7 (3.4)	4.8	25	N 12°-E	
S B-42	東西棟	1×1	5.8 (5.8)	5.0 (5.0)	29.0	50	N-15°-E	
S B-43	南北棟	1×1	3.1 (3.1)	3.0 (3.0)	9.3	25	N-10°-E	土坑の上段
S B-44	南北棟	2×(1)	2.8+2.9 (5.7)	2.3+		45	N-11°-E	東半分切られる
S H-45	南北棟	3×3	(2.1)+2.9+2.8+2.3 (8.0)	2.3+2.6+3.5-(3.5) (7.4)	59.2 (90.0)	40	N 11°-E	北側に南 塚内土坑

第4表 掘立柱建物計測値一覧(2)

●柱間寸法 下段( )内は全長  
●面積下段( )内は吻合面積  
●柱穴直径は平均値  
●方位は全て北を基準とする

貼り床を施してあり、その境を石列で区切っている。遺物は土師質土器が出土している。出土遺物および方位から中世Ⅲ期にあてた。

**S B-45** (図版31) S B-34と近接するがやや方位がずれる。屋内にS X-117、屋外にS X-116が付随する。また、S X-116を取り囲む柱列が存在する。埋土は砂質系である。遺物は土師質土器(450~456)が出土している。帰属時期は、埋土、S B-34・37との棟方位などから中世Ⅰ期に相当させたが、S B-34とほとんど時期差はないものと思われる。

**近世の建物** 近世に属する建物と思われるものにS X-6 (図版33)がある。地山を長方形にやや深め(60cm)に掘り、石を除いて埋め直した土坑で、西側に2列、東側に1列の石列が並べられている。石列は埋め戻された土の上面に位置し、当時の生活面を明らかに意識したものである。内部・外部とも明瞭な柱穴は確認されていないが、土坑内の東西石列間に約2m間隔で偏平礫が2×2間状に置かれており、埋土上面に位置している。また、土坑東側には径5cm程度の礫のみを敷き詰めた1.5m×4mの平坦面(バラス)が設けてある。この建物が建物であるという絶対的な確認はないが、転ばし根太を用いた建物と想定した場合、石列は根太の内外に位置する縁石、偏平礫は床持ち柱の礎石、バラスは入り口施設もしくは上開として考えることが可能である。土坑の埋め戻し行為については面的な整理をするためや、土間などの床面保有施設を構築する作業のためなどが考えられる。残念ながら貼り床や転ばし根太の痕跡等は確認できなかったが、今後傾斜が増えれば建物として認定できよう。同様に石列を持つ土坑にS X-6から5m程西にS X-3、更に西にS K-1085・1086がある。遺物は越中瀬戸焼(447)が出土している。

## D 耕作跡

土層の観察より水田耕作に起因する斑紋作用の顕著な範囲が認められた。古代に属すると思われるものはX75以北およびS D-30以東で確認された。古代3期以前の竪穴住居跡の上面がこの層によって汚されていたことからこの耕作層はそれ以降の所産と判断される。中世に属するものは顕著ではない。近世に属するものは遺跡のほぼ全域に見られ、特にX80Y35以北東に顕著である。近世から現代までの耕作層は多いところで四層みられる。

畑耕作に起因すると思われる遺構は顕著ではないが、幅1mおきに平行する最大長10mのさく状溝がX13Y35、X30Y30、X60Y10、X90Y25付近に4から10m単位で存在し、畑耕作に起因するものではないかと思われる。これらの溝はいずれも古代5期以前の竪穴住居跡を切り、中世Ⅱ期以降の掘立柱建物に切られることから古代6期から中世Ⅰ期の間に形成されたものと判断される。なお、このさく状溝と同時期の水田耕作層の空間的な重複はなく、空間利用という点で注目される。

(河西)

## E 土坑など (図版32-37 写真図版28-32)

当遺跡では、SKの標示で発掘されたものが約3,000ほどあり、その内、SB、SIを除き、土坑(SK)とSXで表わす。これらの大きさ、形態は様々である。形態の名称は円形、方形、長方形を基本呼称とし、各々の形により不整、隅丸などの表現をする。大きさは長軸、短軸、深さで表わす。ここでは、特徴的なものをとりあげて記述する。

**SK-18** SB-12の東側に位置する。長軸3.7m、短軸2.0m、深さ0.25m、不整長方形である。埋土は、北側に薄く、黒褐色砂質土、底面は褐色砂質土で、やや赤色化した堅い面を持つ。須恵器、土師器、陶磁器、底面より雁股鍬(18)などが出土している。

**SK-85** SB-12の内部にとりこまれ、ほぼ中央はSD-33により切られる。長軸5.2m、短軸2.4m、深さ0.2m、不整長方形である。埋土は黒褐色シルト、底面は暗黄褐色シルト(堅い)、須恵器が出土。

**SK-45** SB-01の東側に位置し、中央はSD-19により切られ、4.3m×4.3m、深さ0.5mの方形を呈す。内部にはP<sub>1</sub>-P<sub>3</sub>がある。埋土は暗褐色砂質土、褐色砂質土(炭化物含)、底面は暗黄褐色シルト(堅くしめる)。内部のP<sub>1</sub>の埋土は黒褐色砂質土(炭化物、破砕焼礫含)P<sub>2</sub>の埋土は上層はP<sub>1</sub>と同じく下層に赤褐色シルト(焼土)、褐色砂質土となる。

**SK-247・247-b** SB-14の東側に位置する。長軸3.5m、短軸3.0m、深さ0.5m、方形のもの二つあり、埋土は暗、黒褐色砂質土、ブロック状に黄褐色砂質土、下層は黒褐色粘上質シルトとなる。須恵器・土師器出土。

**SK-281** 長軸3.8m、短軸1.0m、深さ0.4m、北に細く南側はやや膨らむ。北側に大小の礫がある。埋土は黒褐色砂質土、褐色砂質土、黒褐色シルト層になる。土師器(糸切)、須恵器、珠洲が出土。

**SK-465** 長軸4.5m、短軸2.2m、深さ0.4m、不整長方形、遺構内には大小の礫が混じる。埋土は黒褐色砂質土、暗褐色砂質土となる。須恵器が出土。

**SK-466** 長軸3.2m、短軸2.7m、深さ0.4m、不整方形。遺構内には大小の礫が多く混じる。埋土は黒褐色砂質土、褐色砂質土もなる。土師器、須恵器、墨書(須恵器)が出土。

**SK-514** SB-03の東側に位置する。長軸4.2m、短軸2.9m、内側で二段になり長軸3.5m、短軸2.2m、深さは0.5mの不整長方形。上部の層は黄泥暗褐色砂質土、黄泥混砂質土となり下部の層は黄泥黒褐色砂質土、黄灰褐色砂質土、土師器、須恵器が出土。尚土師器は小破片が多い。

**SK-54** 長軸2.4m、短軸2.2m、深さ0.25mの不整方形。埋土は黄泥灰黒褐色砂質土、黄泥黒褐色砂質土。

**SK-777** 長軸0.8m、短軸0.6m、深さ0.15mの円形。埋土には礫が混じり灰黄褐色砂質土、遺物はない。

**SK-778** 長軸1.8m、短軸1.1m、深さ0.2mの不整長方形。埋土には多くの礫が混じり灰赤褐色砂質土、遺物はない。

**SK-12** 長軸2.7m、短軸1.6m、深さ0.3mの不整長方形。埋土は黒褐色砂質土、暗褐色砂質土。

**SK-386** 北側がSD-29に切られ、直径3.9mで不整円形、埋土には大きな礫が含まれ、灰褐色シルト、黄褐色シルト、黒褐色砂質土、暗褐色砂質土、明褐色砂質土、スズが出土。

**SK-1085** 中央部がSD-53により東側はSD-29により切られている。長軸5.3m、短軸5.3m、深さ0.8m、不整方形、埋土には大きな礫を含み、黄褐色シルト、黒褐色砂質土、黒褐色粘上質シルトとなる。土師質小皿出大。

**SK-1086** ほぼ中央をSD-15、SD-53が「」字状に切っている。長軸4.4m、短軸4.0m、深さ0.3m、遺構内の南西部には、礫がみられる。土師器出土。

**SK-2142** 長軸2.1m、短軸1.2m、深さ0.25m、不整長方形。埋土は灰黄褐色砂質土で、越中瀬戸の皿(407)、および唐津の皿(408)が出土。

**SK-2143** 長軸1.7m、短軸0.8m、深さ0.25m、不整長方形。埋土は灰黄褐色砂質土。

**SK-2144** 長軸1.2m、短軸0.8m、深さ0.2m、不整長方形。埋土は黄赤褐色砂質土、灰黄褐色砂質土。

- SK-2150 長軸1.9m、短軸1.3m、深さ0.25m、楕円形。埋土は灰黄褐色砂質土。越中瀬戸の皿が出土。(409)
- SK-2181 長軸2.4m、短軸1.5m、深さ0.25m、楕円形。埋土は赤褐色砂質土。
- SK-3095 長軸2.5m、短軸1.3m、深さ0.5m、楕円形。埋土は黄黒混暗茶褐色砂質土、土師器、須恵器出土。
- SK-3096 長軸1.6m、短軸0.9m、深さ0.5m、不整長方形。埋土は黄混暗茶褐色砂質土(炭化合物)、黄混茶褐色砂質土となる。土師器、須恵器出土。
- SK-3115 長軸4.3m、短軸1.8m、深さ0.3m、埋土は灰色混暗褐色砂質土、茶混黄褐色砂質土となる。土師器出土。
- SK-3157 SB-26の東側に位置、長軸6m、短軸5.4m、深さ0.6m、一部後世の擾乱が見られ、貼り床が残る。埋土師器、須恵器、土師質土器が出土。
- SK-3154-a SB-23の内にある。長軸2.4m、短軸2m、深さ0.5m、不整方形。埋土は暗褐色砂質土。暗黄褐色土。
- SK-3175 SB-24の内にある。2.4m×2.4mの深さ0.2mの不整方形。埋土は褐色砂質土、暗褐色砂質土。土師小皿出土。
- SK-3188 SB-25の西側に位置。2.7m×2.4m、深さ0.3m不整方形。埋土は褐色砂質土、黒色砂質土。土師質土器出土。
- SK-3189 SK-3188の南側に位置。1.8m×1.8m深さ0.3m、不整方形。埋土は褐色砂質土。須恵器出土。
- SK-3255 長軸2.2m、短軸2.0m、深さ0.15m、不整方形。埋土は褐色砂質土、須恵器出土。
- SK-3660-b 長軸5.5m、短軸2.4m、深さ0.8m、埋土には大きな礫が底面であり、黒褐色砂質土。土師器、須恵器。
- SK-3687 SB-43の下部にあたる。長軸4.8m、短軸4.8m、深さ m、不整の長方形。隅の所に柱穴P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>があり、埋土には大小の礫が混じり、暗茶褐色砂質土、黄混暗茶褐色砂質土。須恵器、土師器、土師質土器出土。
- SK-3809 南側はSD-246に切られており、長軸6.5m、短軸2.6m、深さ0.2m、不整長方形。埋土は褐色砂質土、暗黄褐色砂質土、土師質土器出土。
- SK-3832 1.6m×1.4m、深さ0.15cm、方形。埋土は暗褐色砂質土、土師質土器出土。
- SK-3833 1.8m×1.6m、深さ0.2m、方形。埋土は暗褐色砂質土、須恵器、土師器出土。
- SK-3990 長軸2.4m、短軸1.7m、深さ0.15m、不整方形。埋土は褐色砂質土。
- SK-3927 長軸2.2m、短軸2.0m、深さ0.3m、不整方形。埋土は黒褐色砂質土とし、暗褐色砂質土、黄褐色砂質土。
- SK-3013 長軸2.0m、短軸1.5m、深さ0.3m、不整円形。埋土は暗褐色砂質土、赤褐色砂質土。
- SK-3253 1.7m×1.7m、深さ0.2m、方形。埋土は暗赤褐色シルト、褐色砂質土。
- SX-104 長軸3.3m、短軸2.3m、深さ0.3m、埋土は灰褐色砂質土。石臼出土(7)。
- SX-105 長軸2.1m、短軸1.6m、深さ0.2m、埋土は灰褐色砂質土。小礫が遺構全体に積まる。
- SX-106 長軸1.6m、短軸1.3m、深さ0.4m、埋土は灰褐色砂質土。小礫が遺構全体に積まる。石臼出土(6)。
- SX-110 長軸2.4m、短軸2.0m、深さ1.0m、埋土には上層より礫が混ざる。土質は暗褐色砂質土、粘土質シルト。
- SX-114 SB-34の東側に位置。長軸4.8m、短軸3.3m、深さ0.2m、長方形。埋土は灰褐色砂質土。
- SX-116・117 SB-45の東側に位置し、埋土は暗褐色砂質土が主体をなす。土師質土器出土。

#### 土坑についての私見

検出された土坑の性格は、以下に分類できる。1) 掘立柱建物に伴うもの(SXも含む) 2) 井戸 3) 墓坑的なもの 4) その他、又、これらを出土遺物より見れば、①株洲焼 ②土師質土器 ③陶磁器類 ④銭貨 ⑤骨片類 などがあ  
る。①はSK-96・205・256・281・381・SX-2・3・4・6・10・105・114・204 ②はSK-250・258・1029・10  
85・1172・3098・3157・3224・3260・3706・3790・3809・3825・SX-116・117 ③はSK-2142・2150 ④はSK  
-3098・3952(纏って6枚出土) SX-107 ⑤はSK-259・3263・3802、SX-01があげられる。古代の土器を主  
体にする土坑は少なく、大半が中世・近世に属する。

(斎藤)

## V 遺物

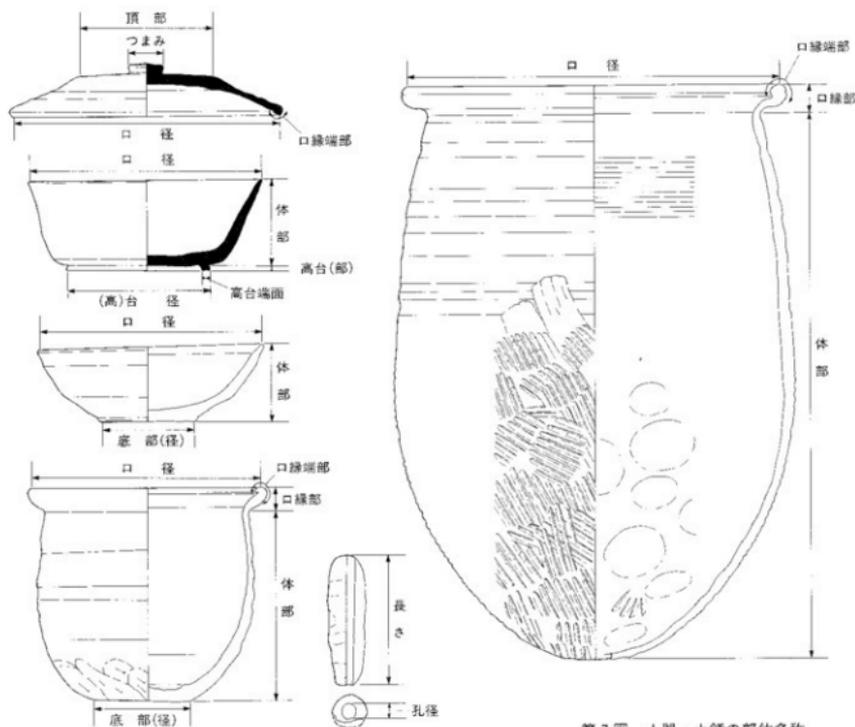
### A 古代土器

古代の土器は発掘区のほぼ全域にわたって多量に出土している。整理の期間が限られたため、実測は純粋な一括遺物ではないが、ある程度纏りのある竪穴住居跡について約半数の出土土器を実測した。以下の古代土器の報告はこの実測をした成果を中心に行なっていく。土器の所属時期についてはここでは記述せず、「Ⅳ 考察」で記述した。

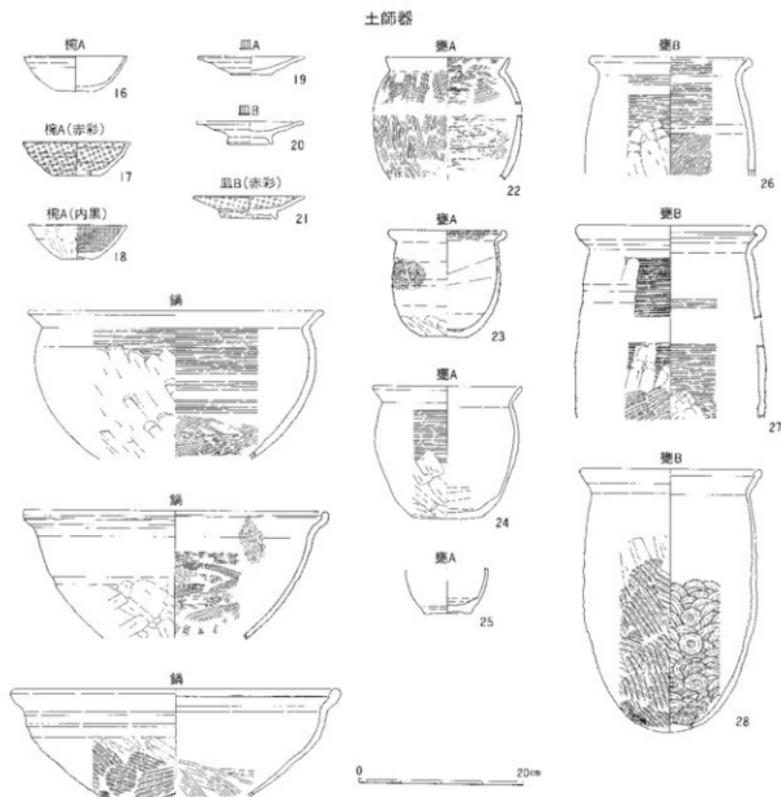
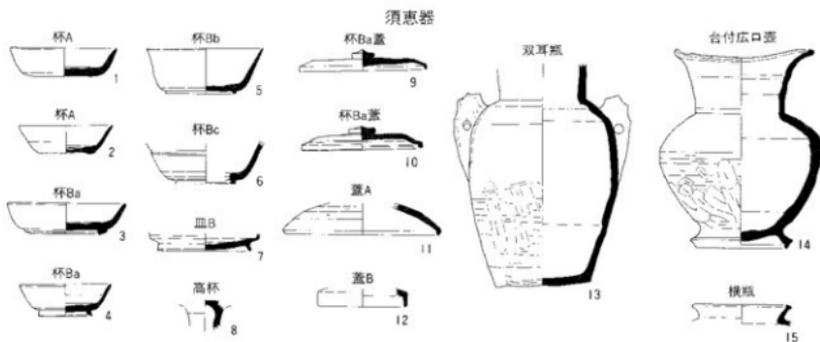
#### 1 土器の部分名称について（第7図）

土器の部分名称及び計測点名称については、従来様々に使用されてきたが、ここでは本報告の古代土器の文章中で使用した名称を説明しておく。

内容物を入れる主要な部分を体部とする。口縁部は体部の上（蓋等では下）の部分である。体部と口縁部はくびれた部分（頸部）を境として分けた。杯・碗類など体部と口縁部の区別が困難な器種は体部としている。底部は器の接地する部分である。高台（台部）は一部の器種に底部の下に付き器を持ち上げている部分を指す。頂部は蓋の上の部分でその中央にはつまみがつく。口縁端部は口縁部をおさめる部分で様々な形態がある。高台端面は高台が接地する



第7図 土器・土鐘の部位名称



第8図 器種の分類

部分の面を指す。

器高は器全体の高さを表すが、高低差がある場合は平均的な場所で測定した。口径は口縁の直径を表している。ここでは口縁部の内、上または下に最も突出した歪みの少ない点で測定した。底径は底部の平均的な直径を表す。台径は高台の接地する地点の平均的な直径を示す。

## 2 器種の分類 (第8図)

竪穴住居跡からは須恵器・土師器・緑釉陶器が出土している。また用途による分類では食膳具・貯蔵具・煮炊具が出土している。部分形態及び底部と頂部の技法については後の3・4を参照して頂きたい。

### (1) 須恵器(1～15)

**杯A(1・2)** 広く平坦な底部に外に開く体部がつく。底部外面の成形・調整手法にはb・c手法が見られる。

**杯Ba(3・4)** 杯Aに低短な高台が付く器形である。蓋とセットになるとみられる。高台端向は形態により内傾・平行・外傾に分けられる。底部の成形・調整手法にはb・c手法がある。

**杯Bb(5)** 杯Baと同器形だが法量が大きく身の深いものを指す。底部の成形・調整手法にはb手法がある。

**杯Bc(6)** 杯Bbと同じ器形で体部に沈線を引く。仏器との関係が考えられる。

**皿B(7)** 扁平な底部に低短な高台がつく。底部からは短い体部が立ち上がり、身は杯類よりもかなり浅い。

**高杯(8)** 筒状の脚部がある。

**杯Ba蓋(9・10)** 従来の発掘例で杯Baの蓋とされている。平坦な頂部からなだらかに口縁端部にいたる。頂部には、つまみが付く。口縁端部には様々な形態がある。頂部の成形・調整手法にはa・b手法がある。

**蓋A(11)** 山笠形の頂部に内傾する口縁端部が付く。大型杯類の蓋であろう。

**蓋B(12)** 平坦な頂部から直角に折れ曲がり体部がつく。壺瓶類の蓋とみられる。

**双耳瓶(13)** 平坦な底部と卵形の体部と口縁部から成る。体部の上部には耳状の把手が2箇所につく。

**広口壺(14)** やや肩の張る体部に大きく開く口縁部がつく。やや丸い底部には高台が付く。

**横瓶(15)** 外傾する口縁部で端部は肥厚する。

### (2) 土師器(16～31)

**椀A(16～18)** 小さい底部から外傾する体部が伸びる。底部の成形・調整手法はすべてc手法である。器面を内・外面赤彩するもの、内面のみ黒色処理するものがある。

**皿A(19)** 小さい底部から大きく開く体部をもつ。身の浅い器形である。底部の成形・調整手法はc手法である。

**皿B(20・21)** 皿Aの底部に低短な台をつけた形態。内・外面を赤彩したもの(21)もある。

**甕A(22～25)** 球形の体部に外傾する口縁部がつく。底部外面にはイトキリ痕・ヘラケズリ痕・木の葉圧痕のものがある。体部下半の成形・調整にはd・h・i手法がある。

**甕B(26～28)** 甕Aよりも大きい法量である。底部と体部の区別が難しく、卵形をした体部に外傾する口縁部がつく。体部下半の成形・調整はe・g手法がある。

**鍋(29～31)** 半球形の体部に外傾する口縁部が付く。体部下半の成形・調整はe・j手法がある。

### (3) 緑釉陶器 杯Aの形態が1点ある。

## 3 部分形態の分類

### (1) 須恵器杯Bの高台端部の形態分類(第9図)

高台端部の在り方で高台端部の形態分類をする。奈良国立文化財研究所で用いられた方法〔小笠原他1976〕をそのまま踏襲する。

1 高台端部の外側が上がり内側で接地する、即ち高台端面が内側に下がって傾斜するものを**内傾**とする。

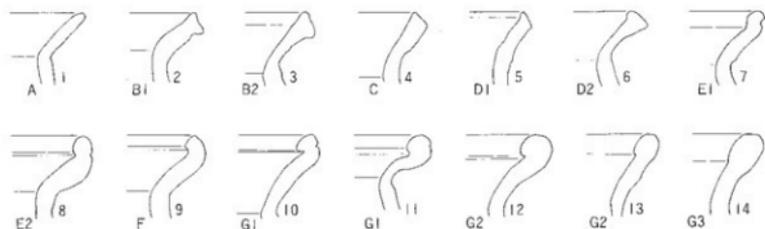
- 2 高台側面の両側が接地するもの、即ち高台端面の傾斜が無いものを**平行**とする。  
 3 高台端面の内側が上がり外側で接地するもの、即ち高台端面が外側に下がるものを**外傾**とする。



第9図  
高台の形態分類

(2) 土師器煮炊具の口縁部の形態について(第10図)

- A形態 外傾し端部を丸くおさめる。  
 B1形態 外傾し端部を強いナデにより面取りする。端部は肥厚する。  
 B2形態 外傾し端部を面取りするが上方に引き上げられ伸びる。端部は肥厚する。  
 C形態 外傾し端部を面取りする。端部は角を持つ。  
 D1形態 外傾し上方に引き上げられ内面に段がつく。端面を面取りし、端部は角を持つ。  
 D2形態 外傾し上方に引き上げられ段がつく。端部を丸くおさめる。  
 E1形態 外傾し途中で折れ直立する。直立した外面には沈線を引く。  
 E2形態 外傾し途中で折れ直立する。直立した外面には沈線を引く。端部は丸い。  
 F形態 外傾し途中で内に折れ曲げる。  
 G1形態 外傾し途中で端部を巻き込む。外面に沈線を引く。  
 G2形態 外傾し途中で端部を巻き込む。内面には巻き込みの段がつく。  
 G3形態 外傾し途中で端部を巻き込む。内面の巻き込み段は無く断面は細長くなる。



第10図 土師器煮炊具の口縁部形態の分類



4 成形・調整手法の分類 (写真図版66・67・68)

(1) 須恵器食膳具の頂部及び底部の調整・成形手法の分類

- a手法(写真図版67-1・7) ロクロケズリをするもの。部分的に帯状に施すものもある。  
 b手法(写真図版66-17・18, 67-3・4) 回転ヘラキリで切り離す手法。ヘラキリの痕跡をナデ消すもの、そのままのものがある。  
 c手法(写真図版66-19・20) イトキリにより粘土塊から切り離すもの。  
 (2) 土師器煮炊具体部下半の成形・調整手法(写真図版68)  
 d手法(写真図版68-3・4) 内・外面にハケメを施す。  
 e手法(写真図版68-11・12) 内面にハケメ、外面にケズリを施す。  
 f手法 内面にタタキ当て具痕、外面にケズリを施す。  
 g手法(写真図版68-17~26) タタキを施す。

h手法 内面はロクロナデ、外面はケズリを施す。

i手法 内・外面にロクロを施す。

j手法 内面にハケメ、外面にタタキを施す。

## 5 食膳具の外傾度 (第11図)

食膳具の外傾度は体部の傾きを示すものであるが、底部からではその立ち上がりの採り方で様々な値が出てくる。そこで本報告では器高を三等分し、底部からの立ち上がりの影響の少ない、器高の三分の二の地点からの外傾度を採ることとした。この地点からでも湾曲などをしているが体部の線に一番近い直線を用いて測定した。



第11図 体部外傾度の計測方法  
a:体部外傾度 b:器高

## 6 個体数の計測方法について

個体数の計測は様々な方法〔宇野1982〕があるが、今回は個体識別法により計測を行なった。実際には識別不能及び混入品を除き、同一個体を出来る限り抽出し、個体数とした。

## 7 胎土について

須恵器は胎土や色調、肉眼観察により3つの群に分けられる。ここでは仮に1～3群に分けておく。

1群の色調は外面が青灰色～暗青灰色・断面が暗赤灰になり、砂粒は少ない。2群は灰～青灰色の色調で砂粒を多く含み、黒色斑点を含む。3群は1・2群以外で灰白～青灰で長石かと思われる白色粒を含む。3群は更に幾つかに分類可能と思われる。

土師器についても分類は可能であると思われるが今回は分類が困難であった。例えば、碗Aでは砂粒の多く含まれたもの、砂粒を殆ど含まない精製されたもの等に分けられる。本文中では特に気が付いた点を記述する。

## 8 竪穴住居跡(S1)出土土器

### (1) S1-1 出土土器(図版38、写真図版34・57・60)

須恵器9個体、土師器9個体以上が出土した。その外、転用碗1点が出土している。遺物は完形品が多く、遺存状況は良好である。

須恵器(1～9) 杯A・杯B b・杯B a 蓋・皿B・横瓶がある。胎土は2種類ある。

杯A(1～9) 口径は、1～3が $\varnothing$ 0.6～11.4cm、4が口径12.6cmである。器高は、1～3が3.4～3.5cmで、4が3.1cmである。径高指数(器高 $\div$ 口径 $\times$ 100)は、1～3が29.4～32.1で、4が24.6である。体部の外傾度は1～3が58～65°、4が56°である。以上より法量・形態では口径の割に器高の高く体部の立つ1～3と口径が大きく体部のやや開き気味の4に分かれる。底部外面の成形・調整手法は1・2・4がb手法、3がc手法である。内面はすべて中心部までロクロナデをする。胎土は1・2・4が3群、3が1群の胎土であり、底部の成形・調整手法と胎土の分類が一致することは注目すべきことである。1・4には口縁に炭化物が付着する。2は口縁部に煤が付着する。

杯B a(6) 法量は口径15.0cm・器高6.3cm(径高指数42)である。体部の外傾度は65°である。底部外面の成形・調整手法はb手法である。高台は内傾する。胎土は3群である。

皿B(5) 元来は皿Bとして造られたものであるが、碗として転用している。底部外面は磨耗して光沢を放ち、内面も少し摩滅している。口縁部は全周を人工的に打ち欠かれており碗に転用したことと関係があると思われる。法量は口径 $\varnothing$ 11.2cmである。底部の成形・調整はa手法で、内面は中心部までロクロナデをする。胎土は1群である。内面に同種の重ね焼きの痕跡がある。

杯B a 蓋(7) 図化できたものはこの1点であるが、もう1個体ある。口径は14.0cmである。頂部外面の成形・調整手法はb手法である。胎土は3群である。

横瓶(8) 体部は残っていないが口縁部の法量と形態から横瓶と考えられる。口径は12.0cmである。

体部破片(9) 内面円形当具痕、外面平行線文である。平行線文の3cm当たりの条数は9条である。

**土師器(10~22) 甗A・甗A・甗B・鍋がある。**

甗A(11) 底径は7.0cmである。

甗A(12~19) 口径は13.0~17.0cmの間に分布する。12・15~17はG形態、13はE形態、14はF形態の口縁部形態である。15・18・19は体部下半をh手法で調整し、底部をイトキリで切り離す。13は体部上半の内面に炭化物・外面に煤が付着する。15は口縁部内面に炭化物、体部外面に煤が付着する。

甗B(20・21) 口径は20が20.4cm、21が22.0cmである。口縁部形態は20がF2形態、21がG3形態である。体部上半は20が内・外面ともロクロナデ・21が内面ロクロナデ・外面カキメ調整である。体部下半は口縁部との接合資料は無いが、10ほかの体部破片からg手法と考えられる。20は内・外面に炭化物が付着する。

鍋(22) 口径は36.4cmである。口縁部形態はE2形態である。体部上半は内・外面共にロクロナデを施す。体部下半はe手法である。口縁から体部上部にかけて炭化物が付着する。

体部破片(10) 内面放射状紋、外面平行線紋である。放射状当具は半径2.6cmで、平行線紋3cm当たりの条数は6条である。

## (2) S1-2 出土土器(図版38・39、写真図版34・57)

須恵器3個体以上、土師器7個体が出土した。混入品も若干ある。

**須恵器(23~26) 杯A・杯Ba・杯Ba蓋・体部破片がある。胎土はすべて3群である。**

杯A(23・24) 法量は、口径12.0~12.5cm・器高2.9~3.2cm(径高指数24.2~25.6)で、大きく一つに纏められる。体部の外傾度は23が55.3°、24が51.5°である。底部の成形・調整手法は23・24ともb手法で部分的にナデをする。内面は中心部までロクロナデをする。24は口縁部を打ち欠きその周辺に煤が付着していることから、灯明具として用いられたと思われる。

杯Ba蓋(25) 混入品と考えられる。頂部外面の成形・調整手法はb手法である。胎土は3群である。

体部破片(26) 内面同心円紋、外面は平行線紋である。平行線紋の3cm当たりの条数は8条である。

**土師器(27~39) 甗A・甗B・鍋がある。**

甗A(27~37) 口径は11.1~14.0cmの間に19.5cmに分布する。27はA形態、28~30・32はE形態、31はF形態の口縁部形態である。33・35~37は体部下半をh手法で調整する。34は底径3.6cmの小型で体部下半をi手法で調整し、イトキリにより切り離す。27は体部上半を内・外面ともハケメ調整する。

甗B(38) 口径は23.3cmである。口縁部形態はG1形態である。体部上半は内面ロクロナデ・外面カキメを施す。体部下半は口縁部との接合資料は無いが、j手法の破片がある。

鍋(39) 混入品である。口径は41.0cmである。口縁部形態はC形態である。体部上半は内面ロクロナデ・外面カキメを施す。

## (3) S1-3 出土土器(図版39)

遺物は殆どなく、土師器1個体以上が出土しただけである。

**土師器(40) 甗Bの他、体部破片がある。**

甗B(40) 口径は23.0cmである。口縁部形態はG2形態である。

## (4) S1-5 出土土器(図版39)

須恵器8個体、土師器3個体が出土した。遺物の遺存状況は悪い。

**須恵器(41~44) 杯A・杯Ba・杯Ba蓋がある。胎土は1種類である。**

杯A(41) 底径は、10.0cmである。底部外面の成形・調整手法はb手法である。胎土は3群である。

杯Ba(42) 法量は口径13.0cm・器高3.0cm(径高指数23.1)である。底部外面の成形・調整手法はb手法である。高台は内傾する。胎土は3群である。

杯Ba蓋(43) 口径は18.0cmである。この他にも図示していないが頂部外面をロクロクズりする破片もある。胎土はすべて3群である。

体部破片(44) 内面同心円紋・外面平行線紋の破片がある。平行線紋3cm当たりの条数は8条である。

**土師器(45) 甕A・鍋がある。**

甕A 図示できないが、体部破片が認められる。

鍋(45) 口径は38.0cmである。口縁部形態はc類である。口縁部内面にカキメを施す。

#### (5) S1-6 出土土器(図版39)

遺物は細片ばかりであるが、須恵器6個体、土師器2個体が出土した。

**須恵器(46~51) 杯・杯Ba蓋・他がある。胎土は1種類である。**

杯(46) 口径14.0cmである。胎土は3群である。

杯Ba蓋(47~49) 口径は15.0~15.8cmと17.8cmの2群に分けられる。口縁端部はすべて折れ曲がっている。47の頂部外面の成形・調整手法はb手法である。胎土はすべて3群である。

体部破片(50・51) 50・51とも内面同心円紋・外面平行線紋の破片がある。平行線紋の3cm当たりの条数は2点とも8条である。

**土師器(52~54) 甕B・鍋がある。**

甕B(52・53) 口縁部形態はB1形態である。体部上半は外面にカキメをする。

鍋(54) 口縁部形態はC形態である。口縁部内面にカキメを施す。52は鍋の体部破片と考えられる。体部下半の成形・調整はj手法である。

#### (6) S1-7 出土土器(図版39)

須恵器5個体、土師器1個体が出土した。その内、図化できたものは2個体である。

**須恵器(55) 杯A・杯Ba蓋がある。胎土は1種類である。**

杯A 底部外面の成形・調整手法はb手法のものが2個体ある。

杯Ba蓋(55) 口径は13.5cmである。口縁端部は折れ曲がる。頂部外面の成形・調整手法はb手法で、内面にはナデをする。胎土は3群である。

**土師器(56) 鍋がある。**

鍋(56) 口径は42.0cmである。口縁部形態はD1形態である。口縁部内面にカキメを施す。

#### (7) S1-8 出土土器

須恵器、土師器破片が出土した。いずれも細片で図示出来るものはない。

#### (8) S1-9 出土土器(図版40、写真図版57)

須恵器3個体、土師器1個体が出土した。図示したものは須恵器2個体のみである。

**須恵器(57・58) 杯A・杯Ba蓋がある。胎土は1種類である。**

杯A(57) 底径は8.0cmである。底部外面の成形・調整手法はb手法である。胎土は3群である。

杯Ba蓋(58) 口径は15.0cmである。口縁端部は折れ曲がる。胎土は3群である。

**土師器 甕Aの破片がある。**

甕A 体部が内向横ハケ・外面縦ハケ調整の破片がある。

(9) S1-12出土土器(図版40、写真図版35)

遺物量は多く須恵器6個体、土師器10個体が出土した。

須恵器(59~67) 杯A・杯Ba・杯Ba蓋・甕がある。胎土は1種類である。

杯A(59) 法量は、口径11.8cm・器高3.1cm(径高指数26.3)である。底部外面の成形・調整手法はb手法である。胎土は3群である。

杯Ba(60・61) 口径は、60が6.5cm、61が7.9cmである。底部外面の成形・調整手法は60・61ともb手法である。高台端面は接地面から60が内傾し、61が外傾する。胎土はすべて3群である。

杯Ba蓋(62~64) 口径は62が12.5cm、63が13.7cm、64が15.6cmである。口縁端部はすべて折れ曲がる。頂部の外面の成形・調整手法は3点ともb手法で、内面をナデる。胎土はすべて3群である。

甕(65) 口径10.5cmで、口縁端部は素縁である。胎土は3群である。

甕(66・67) 2点とも体部破片である。67は体部最大径42.0cmである。2点とも内面同心円紋・外面平行線紋である平行線紋3cm当たりの条数は、66が6条、67が8条である。胎土は2点とも3群である。

土師器(68~78) 甕A・甕B・鍋がある。

甕A(68~71) 口径は68が8.8cm、69が12.6cmである。底径は70が6.5cm、71が7.0cmである。口縁部形態は2点ともA形態である。68は体部下半をd手法で調整する。70・71は体部下半をh手法で調整する。71は底部に葉脈状の圧痕が認められる。

甕B(72~77) 口径は20.8cm~27.6cmの間に分布する。口縁部形態は72がA形態、73・74・77がB類、75・76がD形態である。体部上半は72が内・外面ともカキメ調整、74が内面ハケメ調整・外面カキメ調整である。体部下半は口縁部との接合資料は無いが、e手法の破片がある。

鍋(78) 口径は40.0cmである。口縁部形態はB1類である。

(10) S1-13出土土器(図版41、写真図版35・57)

須恵器9個体、土師器8個体が出土した。遺物は良好に残っている。

須恵器(79~87) 杯A・杯Ba・杯Ba蓋がある。胎土は1種類である。

杯A(79・80) 79は口径13.2cm・器高3.3cm(径高指数25)である。80は口径14.3cm・器高3.5cm(径高指数24.5)である。体部の外傾度は79が65.5°、80が61°である。底部外面の成形・調整手法は2点ともb手法である。底部内面は79が中心部までロクロナデ、80が中心部をナデる。胎土は3群である。

杯Ba(81・84) 84は口径12.5cm・器高3.3cm(径高指数26.4)である。高台端面は4点とも内傾する。底部外面の成形・調整手法はすべてb手法である。底部内面はすべてナデをする。胎土はすべて3群である。

杯Ba蓋(85~87) 口径は85が13.6cm、86が14.7cm、87が15.3cmである。口縁端部は85・86が折り曲げ、87が三角形に垂下する。口縁部から天井部へは、なだらかに移行する。つまみは86・87とも算盤珠状で直径が2.6~2.7cmである。頂部外面の成形・調整手法は85・86がb手法、87がa手法である。87の頂部内面は1方向のナデがされる。胎土はすべて3群である。

土師器(88~96) 甕A・甕B・鍋がある。

甕A(88~93) 口径は88・90・91・93が11.3~15.0cmの間に分布する。口縁部形態はすべてA形態である。体部は内面ヨコハケ・外面タテハケで調整するものも多く、ロクロナデするものは93だけである。88の体部上部内面に炭化物が付着する。

甕B(94・95) 口径は94が19.4cm、95が20.2cmである。口縁部形態は94がB1類、95がD1類である。94は体部上半内面にカキメ調整をする。

鍋(96) 口径は40.0cmである。口縁部形態はB1形態である。

01) S1-14出土土器(図版41)

遺物量は少なく細片で、土師器2個体が出土した。

土師器(97・98) 甕A・鍋がある。

甕A(97) 口径は9.4cmである。口縁部形態はA類である。

鍋(98) 口縁部形態はB1類である。口縁部内面にカキメを施す。

02) S1-15出土土器(図版41、写真図版35)

須恵器2個体以上、土師器4個体が出土した。

須恵器(99-101) 杯Ba甕・甕がある。99は混入品と考えられる。胎土は1種類である。

杯Ba甕(100) 口径は12.8cmである。胎土は3群である。

体部破片(101) 内面同心円紋・外面平行線紋の甕の体部破片と考えられる。平行線紋の3cm当たりの条数は7条である。胎土は3群である。

土師器(102・103) 甕A・甕B・鍋がある。

甕A ロクロ成形の破片がある。

甕B(102・103) 口径は、102が18.6cm、103が19.6cmである。口縁部形態は102がD1類、103がB1類である。体部上半は102が内面に、103が内・外面に、カキメ調整をする。体部下半は口縁部との接合資料は無いが、e手法と考えられる。

03) S1-16出土土器(図版41・42、写真図版36・57)

遺物は少なく、須恵器2個体、土師器4個体が出土した。

須恵器(104・105) 杯Aがある。胎土は1種類である。

杯A(104・105) 法量は、104が口径11.7cm・器高2.9cm(径高指数24.8)、105が口径12.8cm・3.8cm(径高指数29.7)に分けられる。体部の外傾度は104が62°、105が53°である。底部の成形・調整手法は104・105ともb手法である。104は底部内面をナゲる。胎土は3群である。

土師器(108-110) 甕A・甕B・鍋がある。

甕A(106・107) 106は口径13.7cmである。口縁部形態はD1形態である。107は体部下半をh手法で調整する。

甕B(108・109) 11径は108が22.0cm、109が21.6cmである。口縁部形態は108がB1類、109がD1類である。体部上半は108が内・外面ともカキメ調整、109が内面ハケメ・外面カキメ調整である。体部下半は口縁部との接合資料は無いが、e手法の破片がある。

鍋(110) 口径は33.7cmである。口縁部形態はB1類である。体部上半は内面に粗いカキメを施す。

04) S1-17出土土器(図版42、写真図版36)

遺物は少なく、須恵器2個体、土師器3個体が出土した。

須恵器(111・112) 杯Baがある。胎土は1種類である。

杯Ba(111・112) 112は11径13.8cm・器高3.8cm(径高指数27.5)である。底部外面の成形・調整手法は2点ともb手法である。高台端面は内傾する。胎土は3群である。

土師器(113・114) 甕A・甕Bがある。

甕A・甕Bとみられる破片が1個体ある。

甕B(113・114) 11径は113が21.5cm、114が20.0cmである。口縁部形態は113・114ともC類である。体部上半は114が内・外面ともカキメである。113が口縁部内面にカキメ調整をする。体部下半は口縁部との接合資料は無いが、

e 手法の破片がある。

⑮ S1-18出土土器(図版42、写真図版36・57・60)

遺物の残りは良好で、須恵器6個体、土師器12個体が出土した。この内、4個体は混入品と思われる。

須恵器(115~120) 杯A・甕部破片がある。他は混入品と思われる。胎土は1種類である。

杯A(115・116) 115は混入品と思われる。116は底径6.2cmで椀状の体部を持つと思われる。116の底部の成形・調整手法はe手法である。胎土は3群である。

杯Ba蓋(117・118) 2点とも混入品と思われる。

壺(119) 台径8.2cmの壺の底部である。胎土は3群である。

体部破片(120) 内面同心円紋・外面平行線紋である。平行線紋3cm当たりの条数は7条である。

土師器(121~132) 椀A・皿B・甕A・甕Bがある。

椀A(121・124) 法量は口径11.7~12.8cm・器高4.1~4.4cm(径高指数33.1~35.0)で差はほとんどない。底径は5.0~5.8cmである。体部の外傾度は55~62°である。底部外面の成形・調整手法はe手法である。

皿B(125) 台径は9.8cmである。内面全体と外面体部と高台を赤彩する。高台端向は外傾する。

甕A(126) 口径は12.8cmである。口縁部形態はE1形態である。

甕B(127~132) 口径は23.1~25.0cmである。口縁部形態はE形態・G形態がみられる。体部上半は内・外面カキメ(130・131)がある。131はカキメの前にハケメを施す。体部下半は口縁部との接合資料は無いが、内面にハケメの後タタキをするg手法の破片がある。

体部破片(132) 内面放射状紋・外面平行線紋の底部付近の破片である。平行線紋3cm当たりの条数は8条。

⑯ S1-19出土土器(図版43、写真図版37・57・60)

混入品はあるものの遺物の残りは良く、須恵器4個体、土師器10個体が出土した。

須恵器(133~137) 杯A・杯Ba・壺・体部破片がある。胎土は2種類ある。

杯A(133・134) 133は混入品と考えられる。134は口径12.4cm・器高3.4cm(径高指数27.4)である。体部の外傾度は54°である。底部外面の成形・調整手法はb手法である。胎土は3群である。

杯Ba(135) 法量は口径13.8cm・器高5.2cm(径高指数37.3)である。体部の外傾度は64°である。底部外面の成形・調整手法はb手法である。高台端面は内傾する。胎土は2群である。

体部破片(137) 甕の体部破片である。内・外面とも平行線紋である。平行線紋の3cm当たりの条数は、内面が7条、外面が9条である。内面と外面の叩きの原性は異なっている。

土師器(138~147) 椀A・皿B・甕A・甕Bがある。

椀A(138~140) 139は口径12.9cm・器高4.9cm・底径5.0cm(径高指数38.0)である。138は、底径が6.0cmである。139の体部の外傾度は36°である。底部外面の成形・調整手法は2点ともc手法である。

140は内面を黒色処理をしている。口径11.8cm・器高4.1cm・底径3.9cmである。体部の外傾度は53°である。底部の成形・調整手法はc手法である。体部外面には間隙を置いてナデをする。

皿B(141) 内・外面赤彩をしている。口径13.4cm・器高2.7cm・台径6.6cmである。底部外面の成形・調整手法はc手法である。全体に丁寧なミガキをしている。

甕A(142) 底径は8.0cmである。底部をイトキリで切り離す。

甕B(143~146) 口径は18.6cm~22.8cmである。口縁部形態はE・F・G形態がある。体部上半は内・外面とも、ハケメ調整の個体(145・146)がみられる。体部下半は口縁部との接合資料は無いが、g手法と考えられる。

体部破片(147) 内面放射状紋・外面平行線紋である。平行線紋3cm当たりの条数は9条である。

107) S1-20出土土器(図版43、写真図版37・57)

須恵器4個体、土師器7個体が出土した。

須恵器(148-150) 杯Ba・杯Ba蓋がある。胎土は1種類である。

杯Ba(148・149) 148は台径8.5cmである。149は口径11.2cm・器高4.1cm(径高指数36.6)である。底部外面の成形・調整手法は2点ともb手法である。高台端面は148が外傾し、149が平行になる。胎土は3群である。

杯Ba蓋(150) 口径は12.0cmである。口縁端部は折れ曲がる。頂部外面の成形・調整手法はb手法である。胎土は3群である。

土師器(151-161) 甕A・甕Bがある。

甕A(151-154) 口径は11.9-15.0cmの間に分布する。口縁部形態はD1・E1・G1形態がある。152・154は口縁部内面に炭化物が付着する。

甕B(155-159) 口径は18.3cm-23.2cmである。口縁部形態は、E1・E2・G2形態がありE形態が主体である。157の体部上半は内・外面ともカキメ調整である。体部下半は接合資料は無いが、g手法と考えられる。

体部破片(160-161) 160は内面同心円紋、外面平行線紋である。161は内面放射状紋、外面平行線紋である。外面の平行線紋の3cm当たりの条数は、160が10条、161が6条である。

108) S1-21出土土器(図版43・44、写真図版37・57)

須恵器3個体、土師器3個体が出土した。混入品が1点ある。遺物出土点数は少ないが、遺存状況は良好である。

須恵器(162-164) 杯A・杯Ba蓋がある。胎土は1種類である。163は混入品と考えられる。

杯A(162) 法量は、口径12.0cm・器高2.8cm(径高指数23.3)である。体部の外傾度は52°である。底部外面の成形・調整手法はb手法である。内面は中心部までロクロナデをする。胎土は3群である。

杯Ba蓋(164) 口径は11.4cmである。口縁端部の形態は折れ曲がる。つまみはボタン状で粗略である。頂部外面の成形・調整手法はb手法である。胎土は3群である。頂部内面は朱墨のためか光沢があり赤くなっている。また外面には同種の蓋の重ね焼きの痕跡がある。

土師器(165-168) 甕A・甕Bがある。

甕A(165) 口径は13.8cmである。口縁部形態はE1形態である。

甕B(166-168) 口径は166が19.2cm、167が20.6cmである。口縁部形態はE2形態だけである。167の体部上半は内・外面ともカキメ調整である。168などの体部下半は口縁部との接合資料は無いが、g手法のものがある。外面の平行線紋3cm当たりの条数は9条である。

109) S1-22出土土器(図版44)

土師器1個体が出土した。

土師器甕A(169) 口径は15.5cmである。口縁部形態はD1形態。体部内面には炭化物が付着する。

120) S1-23出土土器(図版44、写真図版38・60)

須恵器3個体、土師器3個体、土師が出土した。

須恵器(170・171) 杯A・杯Ba蓋がある。胎土は1種類である。

杯A(170・171) 口径は170が11.4cm、171が12.7cmである。胎土は3群である。

杯Ba蓋 細片がみられる。

土師器(172-179) 甕A・甕B・鍋がある。

甕A(172-175) 口径は11.2-17.7cmで、大きく3法量に分かれる。底径は172が5.2cm、175が8.2cmである。口縁部形態はA形態・D1形態がある。174の体部上半内・外面と175の体部上半外面はカキメを施す。

甕B(176~178) 口径は18.0cm~22.6cmである。口縁部形態はB類・C類がある。177の体部上半は内・外面とも、カキメ調整がみられる。

鍋(179) 口径は37.7cmである。口縁部形態はB1類である。体部上半の成形・調整手法は内・外面共にカキメである。体部下半の成形・調整手法はe手法である。

土鐘(180~181) 口径は180が0.8cm、181が1.0cmである。181は長さ7.9cmである。

## 20 S1-24出土土器(図版44・45、写真図版38・61)

須恵器1個体、土師器14個体が出土した。

須恵器 壺と思われる胴部破片がある。

土師器(182~197) 椀A・皿A・皿B・甕A・甕B・鍋がある。

椀A(182~185) 182~184は、口径11.7~15.7cm・器高3.5~4.7cm(径高指数29.4~37.0)である。185は口径15.7cmでやや大きい。底径は3.4~5.0cmである。体部の外傾度は53~56°である。底部外面の成形・調整手法はc手法である。

皿A(186) 法量は口径12.7cm・器高2.2cm・底径4.6cmである。底部外面の成形・調整手法はc手法である。

皿B(187) 法量は口径12.7cm・器高2.8cm・台径5.2cmである。底部外面の成形・調整手法はc手法である。

甕A(188~193) 口径は10.7~13.6cmと18.3cmに大きく分けられる。193は底径10.2cmである。口縁部形態はA形態とG形態がみられる。体部上半は188を除きすべて内・外面口クロ成形である。体部下半の成形・調整手法はd手法・h手法がみられる。

甕B(194・196・197) 口径は22.0cmである。口縁部形態はG3形態である。体部下半は口縁部との接合資料は無いが、g手法の破片がある。

体部破片(196・197) 2点とも外面は平行線紋である。平行線紋3cm当たりの条数は2点とも6条である。内面は、はっきりしないが2点とも放射状紋とみられる。

鍋(195) 口径は36.4cmである。口縁部形態はG2形態である。体部上半の成形・調整手法は口クロナデである。体部下半の成形・調整はg手法である。

## 22 S1-25出土土器(図版45~47、写真図版39・57・61)

須恵器12個体、土師器27個体が出土し、遺物の出土量は多い。混入品が若干ある。

須恵器(198~212) 杯A・杯Ba・高杯・広口壺・双耳瓶・体部破片がある。胎土は2種類ある。206・207は混入品と考えられる。

杯A(198~202) 法量は口径12.5~12.7cm、器高3.1~3.5cmで一つに纏められる。径高指数は、26.0~28.4となる。体部の外傾度は47~53°である。底部外面の成形・調整はb手法で、ヘラキリ痕をよく遺す。内面は中心まで口クロナデである。胎土は201が1群で、それ以外は3群である。

杯Ba(203~205) 口径は、10.8~11.1cmで差は殆どない。器高は、3.9cmと4.5~4.6cmに分かれる。径高指数も35.1と40.9~42.6に分かれる。体部の外傾度は203・204が68~70°、205が63°でやや開いている。高台端面はすべて外傾する。底部外面の成形・調整は、203と204がb手法、205がc手法である。胎土は203・204が3群、205が1群である。底部の成形・調整手法と胎土が一致することは注目すべきである。

杯Ba 蓋(206・207) 2点とも混入品と思われる。

高杯(210) 脚径は、4.2cmである。胎土は1群である。

台付広口壺(208) 法量は口径16.3cm、器高24.2cm、頸部径10.8cm、体部最大径19.6cm、台径10.7cmである。体部下半をヘラケズリする。口縁部は丸く巻き込む。高台端面は内傾する。胎土は3群である。

双耳瓶(209) 口縁部は人工的に丁寧に全周打ち欠かれている。法量は体部最大径18.0cm、頸部径10.5cm、底径11.4cmである。体部下半はヘラケズリする。耳には孔が1つつけられる。胎土は3群である。

体部破片(211・212) 内面は同心円紋・外面は平行線紋である。平行線紋の3cm当たりの条数は、211が9条、212が8条である。

土師器(213~236) 椀A・甕A・甕B・鍋がある。

椀A(21~218) 法量は、口径11.7~13.0cm・器高4.3~4.6cmで、一つに纏められる。径高指数は34.1~37.1である。底径は4.3~6.0cmである。体部の外傾度は58~60°である。底部外面の成形・調整はc手法である。体部外面は滑らかで丁寧なつくりである。218は底部外面を除いた内・外面に赤彩をする。

甕A(219~221) 口径は219が12.6cm、220が11.8cmである。口縁部形態はE・G形態がある。体部上半はロクロナデをする。体部下半の成形・調整手法はh手法である。221の底部外面はイトキリである。219の口縁部外面と体部上半内面には雫が付着する。

甕B(222~235) 口径は19.2~22.4cmである。口縁部形態はE・F・G形態がある。体部上半の調整は内・外面カキメのもの(229・233・235)、内面カキメ・外面ロクロナデをするもの(226・232)、内・外面ロクロナデをするもの(227・228・234)がある。体部下半の成形・調整手法はg手法の個体(226~228・255)がある。g手法の前に1度カキメを施し、ケズリをするものがある。外面の平行線紋の3cm当たりの条数は226~228が6条である。

鍋(236) 口径は33.8cmである。口縁部形態はG3形態である。体部上半の内・外面はロクロナデをする。体部下半の成形・調整はj手法の可能性はある。

## 23 Si-40出土土器(図版47・48、写真図版45・58・62)

須恵器13個体、土師器7個体、土師が出土した。遺物の遺存状況は良好である。

須恵器(237~251) 杯A・杯Ba・杯Ba蓋・体部破片がある。胎土は1種類である。

杯A(237~248) 口径は、11.2cmと12.4~13.0cmの2法量に分かれる。器高は3.2~3.7cmで、径高指数は26.6~28.6となる。底部から体部への立ち上がりは丸みを持つ。体部の外傾度は60~65°である。底部外面の成形・調整はb手法である。底部内面はナデをする。胎土はすべて3群である。

杯Ba(241~243) 口径は6.4~9.2cmである。高台端面は241が平行、242・243が内傾する。底部外面の成形・調整はb手法である。胎土は3群である。242は焼き痕みがある。

杯Ba蓋(244~248) 口径は14.2cmと15.2~15.5cmの2法量に分けられる。口縁部は、244・245が断面三角形、246~248が折れ曲がる。245・248のつまみは擬宝珠形で、直径は245が2.8cm、248が3.6cmである。頂部外面の成形・調整は244がa手法、245~248がb手法である。頂部内面は、方向のナデをする。胎土は3群である。

体部破片(249~251) 3点とも内面同心円紋、外面平行線紋である。平行線紋3cm当たりの条数は249・250が8条、251が10条である。胎土はすべて3群である。

土師器(252~260) 甕A・甕B・鍋がある。

甕A(252~255) 口径は11.6~13.0cmである。口縁部形態はすべてA形態である。体部上半の調整は、252が内面ヨコハケ・外面タテハケを、254が内・外面カキメをする。体部下半の成形・調整は255がh手法である。

甕B(256・257) 口径は256が19.4cm、257が18.6cmである。口縁部形態はA・C形態がある。体部上半の調整は256・257の外面にカキメ、257の内面にハケメをする。

鍋(258~260) 口径は31.0~31.2cmと43.0cmに分かれる。口縁部形態はB1・C形態がある。体部上半の調整は内・外面カキメをする。体部下半の成形・調整はc手法である。

土師(262) 長さ6.0cm・口径1.2cmである。指による成形痕がある。

24 S1-41出土土器(図版48・49、写真図版46・58・62)

須恵器9個体、土師器7個体、緑釉陶器1個体が出土した。

須恵器(262-269・272) 杯A・杯Ba・杯B a 蓋・甕・体部破片がある。胎土は1種類である。

杯A(262・264) 口径はすべて13.0cmである。器高は262が3.2cm、264が3.6cmである。径高指数は、262が24.6、264が27.7である。体部の外傾度は59-63°である。底部外面の成形・調整はb手法である。胎土はすべて3群である。

杯Ba(265-267) 口径は266が13.2cm、267が14.0cmである。器高は266が3.1cm、267が3.7cmである。径高指数は266が23.5、267が26.4である。台径は7.0-8.2cmである。高台端面は265が平行、266・267が内傾する。体部の外傾度は65-67°である。底部外面の成形・調整はすべてb手法である。底部内面はナデをする。胎土はすべて3群。

杯Ba(268) 口径は14.0cmである。口縁端部の断面は三角形になる。頂部外面の成形・調整は、b手法である。胎土は3群である。

壺(269) 体部最大径は14.0cmである。体部中央には沈線が回る。胎土は3群である。

体部破片(272) 内面同心川紋、外面平行線紋である。平行線紋3cm当たりの条数は8条である。

土師器(270・271・273-276) 甕A・甕B・鍋がある。

甕A(270・271) 270の口径は12.8cmである。底径は270・271共に7.0cmである。270の口縁部形態はA形態である。体部上半の調整はロクロナデをする。体部下半の成形・調整はh手法である。

甕B(273・274) 口径は273が20.6cm、274が22.0cmである。口縁部形態は2点ともB1形態である。体部上半の調整は外面にカキメをする。体部下半の成形・調整手法はe手法である。

鍋(275・276) 口径は275が35.6cm、276が35.0cmである。口縁部形態は275がD類・276がB形態である。体部上半の調整は275が内面ハケメ・外面カキメ、276が内・外面カキメをする。体部下半の成形・調整手法は2点ともe手法である。

緑釉陶器(277) 口縁部はないが、杯若しくは碗のような器形になると考えられる。底径は約7.0cmである。底部からの立ち上がりは丸みを持っている。底部外面には丁寧な回転ヘラケズリ痕がある。釉調は7GY7.5/4.5若緑色で、底部外面には7.5YR7/4にぶい橙色の釉の部分がある。これらの特徴から多彩陶器の可能性もある。胎土は砂粒を含まず2.5Y8/3浅黄色を呈し、軟陶である。

25 S1-42出土土器(図版49、写真図版466・162)

遺物の残りは良く、土師器9個体が出土した。

土師器(278-286) 碗A・甕A・鍋がある。

碗A(278-286) 口径は、12.4-13.4cmである。器高は3.7-4.5cmで、径高指数が28.5-34.6となる。底径は、5.2-6.4cmである。体部の外傾度は51-59°である。底部外面の成形・調整はc手法である。体部外面はロクロナデの痕跡が明瞭である。また口縁部はロクロナデによりやや屈曲する。284は底部外面を除く全面に赤彩する。胎土は砂粒を7%前後含む。

甕A(285) 底径は6.0cmである。体部下半の成形・調整はh手法である。

鍋(286) 口径は39.6cmである。口縁部形態はG2形態である。体部上半の調整は内・外面ロクロナデをする。体部下半の成形・調整手法はj手法である。外面のタタキの前にはケズリをしている。平行線紋3cm当たりの条数は6条である。

26 S1-50出土土器(図版49・50、写真図版58・63)

須恵器7個体、土師器2個体が出土した。

須惠器(287~293) 杯A・杯Ba・杯Ba蓋がある。胎土は2種類ある。

杯A(287・289) 口径は288が11.0cm、289が12.2cmで2法量に分けられる。器高は288が3.4cm、289が3.5cmで、径高指数は288が30.9、289が28.7となる。体部の外傾度は288が67°、289が66°である。底部外面の成形・調整はb手法である。胎土はすべて3群。288の内面はスガが付着する。同形の杯の重ね焼きの痕跡が288に見られる。

杯Ba(290・291) 291は口径が13.1cm・器高5.4cm(径高指数38.8)である。高台端面は、2点とも平行である。291の体部の外傾度は71°である。底部外面の成形・調整は2点ともb手法である。胎土は290が3群、291が2群である。291は内面に8cm前後の高台の貼りついた痕跡があり、同形種の重ね焼きをしたと考えられる。

杯Ba蓋(292・293) 口径は292が12.0cm、293が16.0cmで2法量に分けられる。口縁端部は2点とも巻き込む。つまみは292が擬宝珠状に、293がボタン状になる。つまみの直径は292が2.4cm、293が2.1cmである。頂部外面の成形・調整はb手法である。胎土は2点とも2群である。また同形の蓋の重ね焼きによる焼成痕跡がある。

土師器(294・295) 甕Bがある。

甕B(294・295) 口径は2点とも19.0cmである。口縁部形態はD2形態である。体部上半の調整は294が内面カキメの後ヘラミガキ・外面カキメ、295は内・外面カキメをする。体部下半の成形・調整手法は295がe手法である。

#### ㉒ S1-58出土土器(図版50、写真図版50・59)

須惠器15個体、土師器3個体・土鍾2が出土した。

須惠器(296~308) 杯A・杯Ba・杯Ba蓋・杯Bb・杯Bc・蓋がある。胎土は1種類である。

杯A(296~298) 口径は12.4~12.6cmで纏っている。器高は3.4~3.7cmで、径高指数は27.4~29.4となる。体部の外傾度は65~68°である。底部外面の成形・調整はすべてb手法である。胎土は3群である。296の外面には、同形の杯の重ね焼きによる焼成痕がある。また、297の外面全体に煤が付着する。

杯Ba(299) 台径は6.9cmで高台端面は内傾する。底部外面の成形・調整はb手法である。胎土は3群である。

杯Bb(301) 口縁部しか残存しないが、口径16.0cmであることからここに分類した。胎土は3群である。

杯Bc(300) 台径は7.6cmで高台端面は外傾する。底部外面の成形・調整はb手法である。胎土は3群であるが緻密である。

杯Ba蓋(302~305) 口径は12.3cmと13.8・14.4cmと15.6cmの3群に分けられる。口縁端部は断面三角形または折れ曲げである。302~304のつまみは擬宝珠状である。頂部外面の成形・調整はb手法である。胎土は全て3群。

蓋A(306) 口径は18.3cmと他の杯蓋より大きい。頂部から口縁部へはスムーズに移行する。口縁端部は内面に折れ曲がる。頂部外面の成形・調整はヘラケズリを行なう。胎土は3群に近いがやや異なっている。

蓋(307) 高台が残存している。高台径は10.0cmで、端面は内傾する。胎土は3群である。

体部破片(308) 内面同心門紋・外面平行線紋の成形痕がある。外面はタタキの後にカキメを施す。外面の平行線紋3cm当たりの条数は10条である。

土師器(309~310) 甕Aがある。

甕A(309~310) 309は口径13.4cm、底径4.6cmである。310は底径5.4cmである。口縁部形態はE形態である。体部上半の調整は内・外面口ロナデをする。体部下半の成形・調整手法はh手法である。

土鍾(311~312) 2点とも土師質である。径は311が3.0cm、312が2.6cmである。孔径は2点とも0.8cmである。312は長さ6.0cmである。

#### ㉓ S1-59出土土器(図版50・51、写真図版51・59)

須惠器10個体、土師器9個体が出土した。

須惠器(313~320) 杯A・杯Ba・杯Ba蓋・甕・甕・体部破片がある。胎土は1種類である。

杯A (313・314) 口径は2点とも13.0cmである。器高は313が3.2cm、314が3.7cmである。径高指数は313が24.2、314が28.1である。体部の外傾度は313が67°、314が59°である。底部外面の成形・調整はb手法である。胎土はすべて3群である。

杯B a (315) 台径8.9cmである。高台端面はやや外傾する。底部外面の成形・調整はb手法である。胎土は3群。

杯B a 蓋(316~318) 口径は13.9~15.0cmである。口縁端部は316がやや外反し、317・318が外傾して折れ曲がる。317のつまみは擬宝珠状である。頂部外面の成形・調整はすべてb手法である。胎土は3群である。

壺(319) 体部しか残っていない。体部は算盤珠状になるとみられる。体部外面には2条の沈線が回る。また外面に平行線紋がある。胎土は3群である。

甕(320) 体部最大径は35.0cmである。内面は同心円紋、外面は平行線紋である。平行線紋の3cm当たりの条数は10条である。胎土は3群である。

体部破片(321・322) 2点とも内面は同心円紋、外面は平行線紋である。平行線紋の3cm当たりの条数は2点とも7条である。胎土は3群である。

土師器(326~332) 甕A・甕B・鍋・把手がある。

甕A(323~325) 口径は323が13.0cm、324が12.0cmである。口縁部形態は323がE形態、324がA形態である。体部上半の調整はロクロナデをする。325の体部下半の成形・調整はd手法である。

甕B(326) 体部下半のみ出七している。体部下半の成形・調整はe手法である。

鍋(327~331) 口径は34.0~41.0cmである。口縁部形態はすべてB1形態である。体部上半の調整は内・外面カキメをする。

把手(332) 径1.8cm前後の半環状である。

## 29 S1-61出土土器(図版51、写真図版51・59・63)

須恵器4個体、土師器7個体が出土した。

須恵器(333~337) 杯A・杯B a・杯B a 蓋・体部破片がある。胎土は2種類ある。

杯A(333・334) 法量は口径11.8cm・器高2.9cm(径高指数24.6)である。体部の外傾度は53°である。底部外面の成形・調整はb手法である。胎土は3群である。

杯B a(335) 法量は口径10.0cm・器高5.0cmである。高台端面は内傾する。底部外面の成形・調整はb手法である。胎土は3群である。

杯B a 蓋(336) 口径は15.0cmである。口縁端部断面は三角形形状になる。頂部外面の成形・調整はb手法である。胎土は1群である。

体部破片(337) 内・外面平行線紋である。平行線紋の3cm当たりの条数は内・外面とも8条である。

土師器(338~344) 甕A・甕B・鍋がある。

甕A(338~340) 口径は338が13.0cm、339が12.8cmである。口縁部形態は338がE形態、339がB形態である。体部上半の調整は内・外面ロクロナデをする。340の体部下半の成形・調整はh手法である。

甕B(341・342) 口径は341が20.6cm、342が24.0cmである。口縁部形態はB・E形態がある。

鍋(343・344) 口径は343が30.0cm、344が33.4cmである。口縁部形態はC・D形態がある。

## 30 その他の竪穴住居跡出土土器

29までが実測を行なった土器・土鍾である。実測を行なえなかったものは以下の表(第5表)と写真図版を参照して頂きたい。表は現時点のものであり、今後の実測作業等により若干の変動が出てくると思われる。また備考には古銭・樹吉土器の有無を示しておいた。

遺構名	写真図版番号	出土土器	備考
SI-26	40・57	須恵器(杯A・杯Ba・杯Ba蓋)・土師器(椀A・皿B・甕A・甕B・鉢)	
SI-27	40・57	須恵器(杯A・杯Ba・杯Ba蓋・壺・横瓶)・土師器(椀A・甕A・甕B)	黒書土器
SI-28	41・58	須恵器(杯A・杯Ba・杯Ba蓋・壺)・土師器(椀A・甕B・鉢)	
SI-29	41・57・61	須恵器(杯A・杯Ba・杯Ba蓋・壺・甕)・土師器(皿B・甕A・甕B)	
SI-30	42・57	須恵器(杯A・杯Ba・杯Ba蓋・横瓶)・土師器(椀A・甕A・甕B・鉢)	黒書土器
SI-31	42	須恵器(杯Ba蓋)・土師器(甕A・甕B・鉢)	
SI-32	42	須恵器(杯A・杯Ba)・土師器(椀A・甕A・甕B)	
SI-33	43	須恵器(杯A)・土師器(椀A・甕A・甕B)	黒書土器
SI-34	43	須恵器(杯A・杯Ba・杯Ba蓋・壺)・土師器(椀A・甕B)	
SI-35	43・44	須恵器(杯A・杯Ba・杯Ba蓋)・土師器(椀A・皿B・甕A・甕B)	
SI-36		須恵器(杯A・杯Ba蓋)・土師器(杯A・甕A・甕B・鉢)	
SI-37	44・57・61	須恵器(杯A・杯Ba・杯Ba蓋)・土師器(椀A・甕A・甕B)	富勢神室
SI-38	44・58・61	須恵器(杯A・杯Ba・杯Ba蓋・甕)・土師器(甕A・甕B)	黒書土器
SI-39	45・58	須恵器(杯A・杯Ba・杯Ba蓋・壺)・土師器(甕A)	黒書土器
SI-43	46	須恵器(杯A・杯Ba蓋・甕)・土師器(甕A・甕B)	
SI-44	58・62	須恵器(杯A・壺・甕)・土師器(甕A・甕B)	
SI-45	47・58・62	須恵器(杯A・杯Ba・杯Ba蓋)・土師器(甕A・甕B・鉢)	
SI-46	47・58・62	須恵器(杯A・杯Ba・杯Ba蓋)・土師器(甕A・甕B・鉢)	
SI-47	47・62	須恵器(杯A・杯Ba蓋)・土師器(甕A・甕B)	
SI-48		須恵器(杯A)・土師器(甕A・甕B)	
SI-49	58	須恵器(杯A・甕)・土師器(甕A・甕B)	
SI-51	48・49・58	須恵器(杯A・杯Ba・杯Bc・杯Ba蓋・壺・横瓶・甕) 土師器(甕A・甕B・鉢)	
SI-52	49・58・63	須恵器(杯A・杯Ba・杯Ba蓋・甕)・土師器(甕A・甕B・鉢)	黒書土器
SI-53	63	須恵器(杯A)・土師器(甕A)	
SI-54	49・59・63	須恵器(杯A・杯Ba・杯Bb・杯Ba蓋・壺・甕) 土師器(甕A・甕B)	
SI-55	50・59	須恵器(杯Ba蓋)・土師器(甕A・甕B・鉢)	
SI-56	50・59	須恵器(杯A・杯Ba・杯Ba蓋・横瓶・甕)・土師器(甕A・甕B・鉢)	

第5表 竪穴住居跡出土土器補遺表

## 9 土坑(SK)出土土器

古代の土器を出土した土坑は少ない。その内幾つかを写真図版をもとに紹介したい。この項の文中の上器を示す番号はすべて写真図版の番号である。

### (1) SK-350出土土器(写真図版59・63)

SK-350からは須恵器・土師器が多く出土している。纏って完形品が多く出土している。

須恵器(20~29)には杯A・杯Ba・杯Ba蓋・杯蓋・壺・甕がある。杯A(20~23)は底部外面をb手法により切り離すものが多い。杯Ba(25)・杯Bbとも底部外面の成形・調整手法はb手法である。杯蓋は頂部外面をb手法で成形・調整する。壺(29)は短頸蓋が出土している。土師器(写真図版63)では椀A・甕A・甕B・鉢・有台椀が出土している。椀A(10)は底部のイトキリによる切り離しである。8世紀~10世紀にわたる土師群と考えられる。

8世紀が中心と考えられる。

### (2) SK-45出土土器(写真図版63)

SK-45からは土師器が出土している。土師器では椀A・甕Bが出土している。椀A(5)は底部の成形手法はc手法である。9~10世紀に属する遺物が多いと思われる。

### (2) SK-176出土土器(写真図版59)

須恵器杯A(30)が出土している。底部はb手法によって切り離される。8~9世紀のものと考えられる。

### (3) SK-177出土土器(写真図版59)

須恵器杯A(31)が出土している。底部はb手法によって切り離される。8～9世紀のものと考えられる。

## 10 溝(SD)出土土器

川跡・溝跡からは多くの土器が出土している。溝跡の遺物も実測は行なっていないので写真図版をもとに紹介しておく。

### (1) SD-30・122出土土器(写真図版59・60・63)

SD-30・122は同一の遺構であるので併せてここで紹介しておく。須恵器・土師器が大量に出土している。

須恵器(写真図版59-32-35・写真図版60-1-18)には杯A・杯Ba・杯Bb・杯蓋・壺・双耳瓶・横瓶・甕がある。杯A・杯Bは底部の切り離しはすべてb手法である。杯蓋は口縁端部を巻き込むものがある。

土師器(写真図版63-6-9)には碗A・甕A・甕Bがある。碗Aは底部をc手法により切り離す。

これらの遺物はその特徴から8～10世紀という幅広い時期のものである。

### (2) SD-208出土土器(写真図版60)

須恵器・土師器が出土している。

須恵器には杯A・杯B・杯蓋・甕がある。杯A・杯Bは底部をb手法で切り離すものが多い。杯蓋には頂部をa手法で成形・調整するものがみられる。

土師器には甕A・甕B・碗Aがみられるが個体数は少ない。甕Bの体部破片にはe手法・g手法がある。

若干新しい時期の遺物があるが、これらの特徴から8～9世紀に所属すると考えられる。

## 11 包含層出土の土器

包含層出土の土器には上記の遺構と同時期の土器を多く出土している。またこの他小量ではあるが竅穴住居跡出土土器に後続すると見られる土器がある。底部をイトキリにより切り離す須恵器碗Aや土師器碗Bがある他、柱状高台の土師器供膳具が存在する。これらは点数は少ないものの古代末から中世の遺物の間を埋めるものであろう。

## 12 墨書土器(写真図版66)

- 1 判読不明であるが2～3文字の墨痕が認められる。SI-25出土須恵器杯Baの底部である。
- 2 これも墨が不鮮明で判読不明。SD-122出土の須恵器杯Baの底部外面である。
- 3 文字の一部分であるが、文字の推定は無理である。SI-38出土須恵器杯Ba底部外面である。
- 4 文字の一部分であるが、文字の推定は無理である。SI-38出土須恵器杯Ba底部外面である。
- 5 「真□」。SI-25出土の須恵器杯Ba底部外面。墨跡は薄い。
- 6 「真□」。SI-52出土の須恵器杯Ba蓋口縁部内面。墨跡は薄い。
- 7 「吉」。遺構外X59・Y48区の出土。土師器碗A底部外面。
- 8 「川」。遺構外X58・Y16区の出土。土師器皿A底部外面。
- 9 判読出来ないが墨痕がある。X41・Y37区包含層出土須恵器杯A底部外面。
- 10 「川」。SK-191b出土の土師器碗A体部外面。
- 11 「□林」。1文字は大部分欠損しているが「子」と思われる。SD-122出土の土師器赤彩碗A体部外面。  
平成元年度調査の栗山橋原遺跡の出土の墨書〔関・河西1990〕に筆跡が似ている。両遺跡の関係が注目される。
- 12 判読出来ないが墨痕がある。X52・Y32区出土土師器碗体部外面。
- 13 「□」。SI-28出土の土師器碗A底部外面。「なべふた」若しくは「うかんむり」の文字の上部分か。
- 14 「□」。SI-33出土の土師器赤彩碗A底部内面。「甲」又は「男」の一部分か。
- 15 墨痕は濃い文字の一部分である。SI-30出土の須恵器杯A底部外面。
- 16 判読不明。SI-39出土の須恵器杯B底部外面。

(関本)

## B 中・近世の出土土器・陶磁器

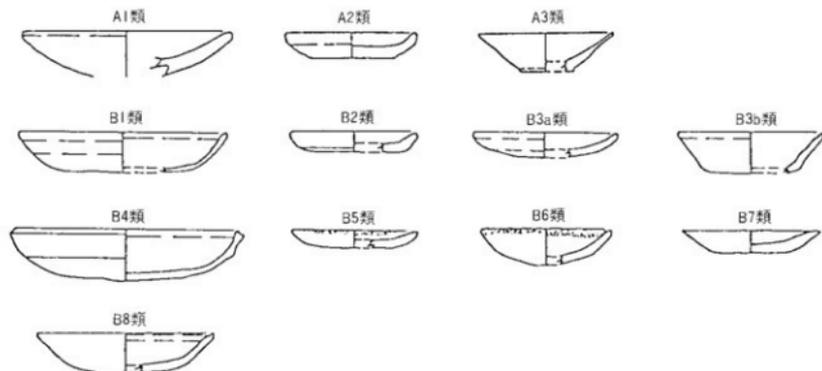
今回の調査で出土した中世の土器・陶磁器には、土師質土器・珠洲・中国製陶磁器・古瀬戸・八尾焼などがある。また、近世の陶磁器には、越中瀬戸・伊万里・唐津などがある。これらは、遺構に伴う物もあるが、その多くは包含層からの出土である。ここでは、遺構出土のものではできるかぎり図化し、載せることに努めた。

なお、土師質土器は、口クロ成形（A類）と非口クロ成形（B類）に分け、さらに口縁部の形態から以下のように分類した（第12図）。しかし、口縁部または底部がないものについては、分類できなかった。

- A 1類：体部がやや内湾して立ち上がるもの。
- A 2類：短い体部が付くもの。
- A 3類：器壁が薄く、口縁部がやや外反するもの。
- B 1類：口縁部端部を面取りしないもの。
- B 2類：口縁部に横ナデを施し、短く屈曲するもの。
- B 3類：口縁部に横ナデを施し、端部をつまみあげる。このうち、口縁部と底部の境が明瞭でないもの（a）、口縁部が直線ぎみに伸びるもの（b）とする。
- B 4類：口縁部端部を強くナデ、面をとるもの。
- B 5類：浅い丸底を呈するもの。
- B 6類：椀状を呈するもの。
- B 7類：口縁部が外に伸びて尖るもの。
- B 8類：口縁部がやや外反し、端部内面に段を持つもの。

SB01・22・29・31・34(図版52) 345・347～349は土師質土器である。345はA 2類、347はA 1類、348・349はB 3a類。346は陶器と思われる。350は柱穴から出土した。

SD11・15・19・29・109・113・129・154・205・238(図版52・53) 351は珠洲の摺鉢・352は青磁の碗で、火を受けている。353は古瀬戸の皿で、口縁部に灰釉を施積する。釉調は淡く緑がかる灰白色を呈する。底部は糸切りをしている。15世紀中葉に位置づけられる。373・383はB 5類、376は柱状高台で11～12世紀。377・378は珠洲の摺鉢で、378



第12図 土師質土器の分類

は口縁部端部が外側に面を取り、内側に段を持つ。珠洲第Ⅱ期に属する。380は越中瀬戸の皿である。381は越中瀬戸の壺である。379は伊万里染付碗である。

**SD53** (現況の河) (図版52) 355はB 2類。358は珠洲の甗で、360は珠洲の甗で、ともに第Ⅳ期に属する。361-363は珠洲の摺鉢。361は口縁部端部が外側に面を取り、第Ⅲ期に属する。363は口縁部端部の内側をややつまみ出す。また、曲線的な卸し目を持つ。第Ⅱ期に属する。357・359は青磁で、359は水注か何かの裝飾部分であろう。370は越中瀬戸の碗で、黒色の鉄軸を施している。底部外面は施釉しない。371は越中瀬戸の摺鉢の底部である。362は唐津の刷毛目鉢、364-366は伊万里染付碗。364・365の時期は17世紀後半。367は伊万里染付皿である。見込五弁花のみコンニャク判である。底部外面の鉢は、佐賀県の樋口窯物原中層から出土しているものと似ている [佐賀県立九州陶磁文化館1984]。18世紀後半に位置づけられる。368は丸山焼、369は中国染付である。372は頸部と胴部からの復元だが、古瀬戸の瓶子と思われる。頸部は直立ぎみかやや内傾する。肩部と胴部の外面に襷描きの沈線を施す。内・外面に灰釉を施し、釉調は灰白色で淡く緑が掛る。14世紀代。

**SK18-96-142-145-163-205-250-256-257-258-281-386** (図版53) 384は白磁。386は青磁の劃花文碗。387は青白磁の合子で、ともに12世紀終わり～13世紀前半に位置づけられる。388-389-390-391-392-393は土師質土器で、391はA 3類、392はB 5類、393はB 6類、388はB 4類である。390は中世のものとしては、口径が大きく、器高が高いが、389とともに388と共件しているの、これと同時に位置づけられるだろう。389はザラザラとした感じで、他の土師質土器とは雰囲気が違う。394-399は珠洲で394は第Ⅰ期の甗、395は第Ⅲ期の摺鉢、396は第Ⅰ期の甗である。

**SK1085** (図版54) 400・401・402は土師質土器で、400はB 7類、401はB 6類、402は京都系の土師質土器で11世紀後半に位置づけられる。404は口縁部の内面が肥厚する。第Ⅴ期。

**SK2142** (図版54) 407は越中瀬戸の皿で、底部内外面を除いて、灰褐色の鉄軸を施す。408は唐津の皿で、にぶい赤褐色の鉄軸を施し、見込蛇ノ目種ハギを行う。17世紀後半～18世紀前半に位置づけられる。

**SK2150-2151-2180-3139-3175** (図版54) 409・411は越中瀬戸の皿である。410は伊万里。426は口ハゲの白磁の碗で13世紀後半 (13世紀半ば以降みられるもの) である。424は珠洲の摺鉢、425は土師質土器でB3b類。しかし、B 3類の特徴であるつまみあげは弱い。

**SK1029-1172-3098-3157-3224-3260-3706-3790-3809-3825** (図版54) 全て土師質土器で、405はB 5類、406はB 6類、412はB 3a類、413・414はB 5類、415はB 3b類、416はB 6類、417はB 2類、418はB 5類、419・420はB 5類、421はB 3a類、422はB 3b類、423はB 4類、427はB 5類、428・429はB 6類、430はB 5類に類別する。

**SX2-3-4-10-11** (図版54) 431・433・434・438-440・442・443は珠洲で、431-443の摺鉢は口縁部内面を肥厚させ、広く面を取り、そこに櫛目波状文を巡らす。また、卸し目をくまなく施しており、第Ⅴ期に属する。432・435・436・437・441は土師質土器で、435はB 5類、436はB 5類、437はB 7類に類別する。

**SX6-105-114-204** (図版55) 444・445・446・448・449は珠洲で、444は431・443と同様に第Ⅴ期に属する。448は口縁部端部を外側に面を取り、内側を少しつまみあげる特徴を持ち、第Ⅱ期に属する。449は壺の肩部で、外面に刻線文を施す。447・457・458は越中瀬戸。447は摺鉢で、内・外面に鉄軸を施す。新しいものだろう。457は甗の底部であろう。458は皿で、底部を糸切りし、口縁部の内・外面に鉄軸を施す。

**SX116-117** (図版55) 450-456は土師質土器。450・452・454-456はB 3b類、451はB 5類、453はB 2類に類別する。

**包含層出土** (図版55-56-57) 459-482は土師質土器。459は柱状高台で、11世紀中～12世紀。460はA 3類、461はA 2類、462-463はB 2類、464はB 4類、465-466はB 3a類、467はB 1類、468はB 7類、470-471-473-475-476はB 6類、472-477-478はB 7類、474はB 5類、469-479はB 8類に類別する。480-482の京都系の土師質土器で11世紀後

半に位置づけられる。<sup>註1</sup>468-477は端部を外反させ、外につまみ出す。481は体部内面に縦方向と横方向のナデを施す。483-490は珠洲。483は壺で、第Ⅱ期あるいは第Ⅲ期に属する。485-488は摺鉢で、485は、内面に卸し目を持たない。第Ⅰ期に属する。486は内面に曲線的な卸し目を施すと思われる、第Ⅰ期古〜第Ⅱ期新に属する。487は口縁部端部を内側に肥厚させ、櫛目波状文を施す。卸し目は太目で、くまなく施す。第Ⅴ期に属する。489は口縁部端部を内側に肥厚させる。全体に焼成が甘く、卸し目の施溝は浅い。488は口縁部内面の段がほとんど消失している。口縁部内面に櫛目波状文を施す。第Ⅵ期に属するだろう。490は摺鉢の底部。

491・492は八尾焼。491は未発達な「N」字状の口縁を持ち、492は口縁部がやや垂れ下がる発達した「N」字状の口縁を持つ。酒井重洋氏の分類〔酒井1990〕によると、491は第1群土器の變B・c2類に、492は第2群土器の變B類・a類に類別される。八尾焼はこの他に、破片で5点出土している。

493-508は輸入陶磁器。503・507・508が青白磁で、他は青磁である。494・495は体部が内湾ぎみに伸び、口縁部端部で外反する。496はオリーブ色をした鎮西弁文碗で、14世紀。498は龍泉窯系の鎮西弁文で、13世紀後半〜14世紀に位置づけられる。498は割花文碗で、12世紀後半〜13世紀前半に位置づけられる。釉調はオリーブ灰色を呈する。502は底部で、高台の内側部分と底部外面を除いてオリーブ黄色の釉を施す。503は碗あるいは盤の体部であろう。釉調は明緑灰色を呈する。504は盤の口縁部であろう。14世紀〜15世紀に位置づけられる。505は口縁部端部を直上に引き出すもので、大宰府分類〔横田他1978〕によれば、龍泉窯系の杯Ⅲ類-3にあたる。釉調はオリーブ灰色。14世紀に位置づけられる。506は盤の底部。疊付を除いて、緑灰色の釉を施す。507は梅瓶の口縁部、508は尚文の梅瓶の胴部破片である。同一個体であろう。県内では、蓮花寺遺跡で同様のものが出土している〔岸本1984〕。釉調は明緑灰色で、13世紀代に位置づけられる。

509は古瀬戸で、甕の胴部破片である（富山県教育委員会による試掘調査で出土）。肩部から胴部にかけて、2〜3条の櫛掻きによる沈線が施される。灰釉を施し、釉調は灰白色で淡く緑がかる。

510-513は瀬戸美濃の天目である。511・513は底部外面と体部下部に施釉しない。鉄釉を施し、釉調は510〜512が暗赤褐色、513が黒褐色である。16世紀初頭。

514-523は越中瀬戸である。514は底部内面に16弁菊の印花文を施す皿。515・517は口縁部が内湾する皿。516は口縁部が外反し、端部が強く立ち上がる折縁皿であろう。518・519は口縁部が直立する皿。施釉は514〜518が灰釉、519・520が鉄釉。全面施釉のものはない。521は摺鉢で、口縁部端部がやや外反する。暗赤灰色の鉄釉を施す。522は摺鉢の底部である。523は壺である。

524・525は伊万里である。526は唐津である。527は唐津系青緑釉皿である。見込蛇ノ目軸ハギを行なう。底部には施釉しない。時期は17世紀後半〜18世紀前半。528・531は中国染付で16世紀。529は伊万里染付皿である。見込五弁花のみコンニャク判。また、見込蛇ノ目軸ハギを行なう（意識的に釉を剥いでいる）。髹付のみ施釉していない。時期は18世紀前半に位置づけられる。530は伊万里碗である。見込蛇ノ目軸ハギを行なう。532は伊万里染付皿。見込五弁花のみコンニャク判を施す。また、見込蛇ノ目軸ハギを行なう。髹付のみ施釉していない。533は伊万里碗である。髹付のみ施釉しない。砂目高台である。釉調は明緑灰色を呈する。534は伊万里碗である。535は丸山焼である。底部外面を除いて、暗赤灰色の鉄釉を施す。

なお、今回実測しなかったが、越前焼の破片が1点、包含層から出土している。また、土師質土器の時期については、まとめの項で行なう。

註1：釉調は新版標準土色帖による。

註2：珠洲は〔古岡1989〕の編年による。

註3：宇野隆夫氏の御教示による。

## C 金属製品 (図版58・59・、写真図版65)

南中田D遺跡では、金属製品が、約55点出土した。種類は、銭貨・工具類(生反)・釘・刀子・鏝・鉄鎌・紡錘車筋金具などがある。

1 銭貨(写真図版1~8) 1はX110Y35区出土、外径2.3cm、洪武通宝で初鑄年は1368年(明)である。2はX76Y53区出土、外径2.4cm、熙寧元宝で初鑄年は1068年(北宋)である。3はX110Y35区出土、外径2.2cm、元豊通宝で初鑄年は1078年(北宋)である。4はX76Y53区出土、外径2.2cm「□□通□」判読できず。5はSK3098出土、外径2.2cm、判読不能。6は外径2.2cm、嘉祐通宝、初鑄年は1056年(北宋)である。7、8はSK3952より6枚纏って出土、判読不能。その他図示はしていないがSI-37より「□□神□」が出土。富壽神宝?初鑄年は818年である。

2 生反(22・23) 22・23については竹中大門道具館主任研究員渡邊晶氏と宮野裕光氏に実見していただき、ご教示を得た。2点とも「鉋」に似た形状であるが、小型物を削削る両刃の工具である「生反」と考えられる。「鉋」は考古学ではその用途によって名称の区別はされていないが、建築学上では広面積を削平する道具を指す。そのため「鉋」と小型物を削削る道具とを区別する必要があるとされている(成田1986)。本報告ではその形状から用途を推定し、「生反」とした。「生反」は「和漢三才図会」等に記される道具(吉川1984)で、弥生時代以降に存在が推定されている(成田1990)。2点とも竪穴住居跡からの出土で、その性格を考える上でも興味深い遺物である。

22はSI-38床面から出土した。刃先から茎尻までを直線で測った残存全長は12.4cmである。刃部は大きく「L」字形に反り先端が欠損している。刃部は残存で長さ4.3cm、最大幅2.3cm、反り高2.6cmである。刃は表中央がやや膨らみ、裏は浅く窪み、断面が山形になる。茎は長さ8.3cm、厚さ0.5cmで、断面長方形である。刃部と茎部の境には関がある。関は両開式で直角に切れ込む。刃部の形態から直角に曲がる部分を削る用途と考えられる。

23はSI-39床面から出土した。刃先から茎尻までを直線で測った全長は15.7cmである。刃部は大きく弧状に反り長さ5.8cm、最大幅1.95cm、反り高4.3cmである。刃は表中央に筋があり、裏は浅く窪み、断面が逆「V」字形になる。茎は長さ10.9cm、厚さ0.7cmで、断面長方形である。刃部と茎部の境は鈍内関が両側にある。刃先の形状から湾曲した内面を削る用途と考えられる。

3 釘(1~10) 釘と見られるもの10点について記述する。1はSI-38出土、長さ6.5cm、幅0.5cm、厚さ0.3cm断面形は方形、皿部はない。2はSI-4出土、長さ5.0cm、幅1.0cm、厚さ0.4cm、断面形は長方形、皿部はない。3はSI-25出土、長さ9.0cm、幅0.7cm、厚さ0.4cm、断面形は長方形、皿部はない。4はSI-61出土、長さ10.2cm、幅0.6cm、厚さ0.6cm、断面形は方形、頭部は欠損。5は表採、長さ11.5cm、幅1.0cm、厚さ0.8cm、断面形は長方形、頭部と先端部欠損。6はSI-59出土、長さ11.0cm、幅1.0cm、厚さ1.0cm、断面形は方形、皿部は不明。7はSB-42出土、長さ4.2cm、幅0.2cm、厚さ0.2cm、断面形は方形、頭部は欠損。8はSI-27出土、長さ5.0cm、幅0.5cm、厚さ0.4cm、断面形は方形、皿部あり。9はSI-35出土、長さ6.0cm、幅1.0cm、厚さ0.5cm、断面形は長方形、皿部は不明。10はSK-3157出土、長さ2.0cm、幅0.3cm、厚さ0.3cm、断面形は方形、皿部は不明。

4 鎌刃状(11、12) 11はSI-59出土、欠損品で刃部が残っている。長さ9.0cm、幅3.0cm、厚さ0.3cm、12はSI-51出土、欠損品で刃部が残る、その先端部は欠けている。長さ5.0cm、幅2.5cm、厚さ0.2cm。

5 鉄鎌(16) 雁股鎌である。SK-18出土(SB-12) 茎部は欠損、寛被部が関から刃にかけて逆三角形状に広がり、幅広い基部となる。刃部は長く、関から刃先にかけて側縁は流れるような曲線となる。刃部の片側および、先端部が欠損、寛被部の断面形は、方形。

6 鏝(17) SK-4149出土(SB-38) 透し鏝で5.5cm×3.8cmのほぼ長方形。厚さ0.6cm、鉄製の鑄造?、中央に天地2.5cmの切羽台がある。

7 紡錘車(19・20) 19はX45Y30区出土、鉄造りの紡錘で長さ15.5cm、直径4.8cm、厚さ0.3~0.5cmの正円形の紡

鐘車に鉄の軸がついている。長さ15.5cmで上端から8.7cmの部分に紡錘車の上面が固定されており、固定方法は鋳の為、判明しない。紡錘車の中心から上端まで9.2cm、下端まで6.3cm、軸の断面は、ほぼ円形、欠損品。20はS I-48出土。鉄造りの紡錘であり、軸と紡錘車が外れて出土。軸の長さ11cm、直径5.2cm、厚さ0.2~0.3cmの正円形の紡錘車、軸の上端はやや曲り、欠損し、下端も欠損している。

8 飾金具 (14・15) 14はS I-26出土、一辺1.5cmの二枚の菱形鉄板の中央に、直径0.4cmの断面、方形の軸を通した金具で、菱形鉄板の間隔は0.2cmである。板の厚さは0.2cm、菱板金具。15はS I-42出土、3.0×26cmの方板の中央に直径0.7cmの断面方形の軸を通し、板の厚さは0.3cm、方板金具。

9 刀子類 (24~42) ここで刀子としたものは、下記分類による。刀剣の分類は、刀種により名称が異なり、㊶大刀：刀身(刀長)が60.6cm以上(二尺)。㊷刀(脇指)：刀身30.3cm以上で60.6cm以下。㊸刀子(短刀)：刀身が30.3cm以下。㊹の刀子については、これを工具と考えるか、武器と考えるかは統一されてないようである。確かに攘刀のようなものから切り出しナイフのようなものまで各種あり、断定は難しい。

当遺跡では18点出土、その内訳は、古代の遺構から11点、中世の遺構から4点、他は包含層より出土、40を除き、他は、すべて鉄製品である。24はS I-16出土、平造りで関の部分は不明瞭、刀身の部分は一部欠損、現存長8.5cm、幅1.0cm、厚さ0.2cm、25はS I-59出土、茎の部分のみで刀身は欠損、現存長5.0cm、幅1.2cm、厚さ0.2cm、26はS I-59出土、平造り片関、刀身の部分は欠損、現存長4.4cm、幅1.2cm、厚さ0.3cm、27はS I-59出土、平造り、関の部分は鈍角で不明瞭、刀身の部分は、欠損、現存長11.0cm、幅1.5cm、厚さ0.2cm、28はS I-26出土、平造り、関の部分は鈍角で不明瞭、刀身の部分は欠損、現存長6.4cm、幅0.9cm、厚さ0.2cm、29はS B-42出土、鋒の部分のみ、現存長5.0cm、幅0.9cm、厚さ0.2cm、30はS I-34出土の平造り片関の部分は欠損、現存長13.5cm、幅1.2cm、厚さ0.3cm、31はX31 Y25区出土、平造り片関、茎部の一部欠損、現存長7.5cm、幅1.0cm、厚さ0.3cm、32はS I-49出土、平造り片関、完品、刀身8.9cm、茎部4.6cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、33はS I-52出土、平造り、茎部は欠損、現存長13cm、幅2.5cm、厚さ0.2cm、34はS I-51出土、平造り、関の部分は鈍角、茎部が欠損、現存長11.5cm、幅2.0cm、厚さ0.3cm、35はS I-33出土、平造り、関の部分は鈍角で不明瞭、鋒は欠損、現在長13.5cm、幅1.2cm、厚さ0.2cm、36はS I-51出土、平造り、関の部分は不明瞭、鋒は欠損、現存長13cm、幅1.0cm、厚さ0.3cm、37はX35 Y15区出土、平造り、関の部分は鈍角で不明瞭、鋒は欠損、現存長8.5cm、幅1.0cm、厚さ0.2cm、38はS I-52出土、平造り、関の部分は不明瞭、茎部の一部欠損、現存長19cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、39はS B-34出土、平造り、西関、茎部欠損、鋒欠損、現存長22cm、厚さ0.5cm、40はS K-103出土、平造り、刀身の部分は鉄製、板の部分は銅板を巻いている。完品、刀身15.8cm、茎部8.7cm、幅1.8cm、厚さ0.2cm、厚さ0.2cm小柄。41はS B-34出土、平造り、両関、完品、刀身21.5cm、茎部9.5cm、幅3.0cm、厚さ0.4cm、42はS D出土、鋒が三角形になっている、関の部分が不明瞭、現長29.5cm、幅3.5cm、厚さ0.5cm、切刀造りに似る。刀子というよう包丁に似る。

10 器種不明品 (13・18・21) 13はS D-247出土、長さ8.5cm、直径0.4cmの棒状の製品。18はS I-1出土、「U」字状の形をしており、断面形は方形。所謂「麻皮削器」に形態は似ているが、刃部は持っていない。使用方法は、両端の突出部を、棒ないし、原板に打ち込んでの使い方が考えられる。21はS B-34出土、長さ4.5cm、直径0.9cmの円筒に、同様な円筒が差し込まれている。ソケット状製品

11 鉄 滓 S I-12、S I-13、S I-30、S I-59、S D-18、S K-3059より出土

当遺跡出土の金属製品を遺構ごとに表す。(S Iは古代、S K、S Bは中世)

S I-1：「U」字状製品、S I-4：釘、S I-12：鉄滓、S I-16：刀子、S I-25：釘、S I-26：飾金具、刀子、S I-27：釘、S I-30：鉄滓、S I-33：刀子、S I-34：刀子、S I-35：釘、S I-38：釘・生反、S I-39：生反、S I-42：飾金具、S I-48：紡錘車、S I-49：刀子、S I-51：鎌・刀子(2)、S I-52：刀子(2)、

SI-59: 釘・鎌・刀子(3)、鉄滓、SI-61: 釘、SK-3157: 釘、SK-103: 刀子、SK-3059: 鉄滓、SB-42: 釘・刀子、SB-12: 雁股鎌、SB-38: 鋤、SB-34: ソケット状製品・刀子(2)、SD-18: 鉄滓

以上、出土遺物を、便宜上、大別すれば、①農具(鎌)②紡織具(紡錘車)③武具(雁股鎌・鋤)④工具(釘・刀子類・生反)⑤その他(飾金具、銭貨・器種不明品)に分けられる。住居跡では刀子類、釘の出土が多い。

以上、各々の遺物をとりあげて記述する。

①農具(鎌) 鉄製農具の研究は土井毅夫(土井1971)、高橋一夫(高橋1976)両氏による詳細な研究がある。県内の鉄鎌の出土例は、大門町流間No.6、7、18遺跡[上野他1982]、同No.16遺跡[上野他1984]富山市奥羽小竹堤遺跡[古川1989]などあり、大半が生産遺跡から出土している。

②紡織具(紡錘車) 県内の鉄製紡錘車は、小杉町十三塚遺跡出土が本県初である。[小島・橋本1971]又富山市長岡杉林遺跡[久々・古川・岡本1987]、同南中田A遺跡[関・河西1990]に報告がある。いずれも住居跡に伴う出土はない(十三塚遺跡はピット、長岡杉林遺跡は井戸)。南中田A遺跡の例は中世となり、類例は見られない、東国(関東地方)では奈良時代に出現し、平安時代には増加、11世紀代には減少(遺跡が少ない)の傾向があると言う[滝澤、1985・中沢他1988]

③武具(雁股鎌・鋤) 雁股鎌は、古墳時代にわずかに確認でき、奈良時代以降盛行し、以後長く用いられている。県内では初出、尚、中世としては上市町弓庄城跡[高藤他1985]に丸根式の鉄鎌が出土。鋤の出土も県内では初出。中世に於いて盛んに用いられた「木瓜鋤」に似ている。[後藤1937]

④工具(釘・刀子・生反) 釘は住居跡出土が多い。刀子も同様、住居跡出土は多い、刀身が15cm以下のものが比較的多く、もっとも多様な用途を持つ切削工具としての小刃であり、又武具としての利用も考えられる。

生反は県内では初出、刀部断面が湾曲することにより鉈とは区別、木工具。

⑤その他(飾金具) 菱板金具が出土、類例は石川県寺家遺跡[小嶋他1988]に見られる。

南中田D遺跡では、多量の鉄製品が出土。隣接の任海鎌倉遺跡では中世の刀子、釘、鉄滓など、南中田C遺跡では金属製品出土せず、南中田A遺跡では中世の舟釘・釘・鉄滓など、栗山橋原遺跡では平安時代の釘類、鉄滓が出土、4遺跡を合せても量は少ない。これらは住居跡などからの出土はなく、近くに存在しながら異質の感がある。遺跡の規模性格の違いか?このことは隣接する大集落古倉B遺跡の発掘などにより解明されるであろうと思われる。

(金属製品の文責「2生反」は岡本、他は斎藤、尚紙幅の関係で引用文献は省略)

## D 石製品・石造物(図版60・写真図版64)

1 紡錘車(1) SI-58出土。直径8cm、中心孔1.2cm、厚さ1.8cm

2 砥石(2~5) 手持砥石(2・3)と置き砥石(4・5-素材をそのまま使用)があり、2はSX204、3はSD-208 4はSI-27 5はSI-25出土。

3 粉挽き臼(6~8) 6はSX-106、7はSX-104、8はX80Y40区(SD-53)出土。上臼と下臼の接触面に刻まれる「目」は8分画と6分画があり、分画のとり方は地方の特色があり、九州と長野近辺に6分画が多く、他は一般的に8分画が多い。新潟県は両方あり、石川県は8分画、岐阜県は両方ある。

4 五輪塔(9) 火輪の部分のみ、排土中より表採。又、試掘調査時[古川1989]にも198トレンチ(遺跡の北端)にも多く確認された。尚、分布調査時には、石五輪塔も確認されている。

5 板石塔婆(10) 遺跡の北端にて表採、長さ45cm、最大幅19cm、最大厚16cmを測る。長楕円形の川原石を素材としており、両側面を切断し、正・裏面は簡単に敲打で整形、頭部は段を有して、体部と区別されており、正面が三角形、側面が台形に見えるように成形し、正面には、梵字が一字刻まれており、パンと読める。

(斎藤)

## VI 考察

### A 古代竪穴住居跡

#### 1 竪穴住居跡の時期区分および分布

前章までの遺構、遺物の検討をふまえて調査で確認された61棟の竪穴住居跡について考察する。出土遺物の検討から遺跡の存続年代は8C後半から10C前半とされ、すでに(IV遺構)において住居跡の時期区分を1期～6期の6段階に分けている。この区分はあくまで便宜的なもので、均等な時間単位を表すものではない。

住居跡分布のまとまりを群としてグルーピングしたのが第13図である。遺跡の中央を南北に走るSD-30・122を境に東西に分かれ、西側南よりA群・B群・C群・E群・F群、東側を広範囲だがD群としてまとめた。なお、SD-30・122の形成は神通川水系に起因する旧河川の礫層隆起に影響されている。当時の河川はすでに遺跡外西へ移動しており、住居跡は河川移動後の細粒砂質土堆積を好んで立地する。遺跡の東側については総合運動公園予定地内における遺跡の空白地帯であり、耕作跡の分布範囲がSD-30の東側に展開することからも耕作域として機能していたと思われる。なお、SD-30と同類と思われる溝が当遺跡から400m東に位置する栗山橋原遺跡(89年度調査)でも確認されており、また栗山橋原遺跡でまとめて発見された黒書土器「子林」が当遺跡のSD-122からも出土したことは当遺跡群の中で耕作範囲の規模を考える上で興味深い。

時期別の分布(第14図)をみるとA群からC群については全期を通して存続するようだが、D群・E群は3期までで消失する。4期以降北半部が居住域として利用されていないことがわかる。また、C群は4期に集中し、E群は2期に集中する。このことは5期・6期の住居跡の減少傾向も加えて、集落拠点の移動を示していると思われる。

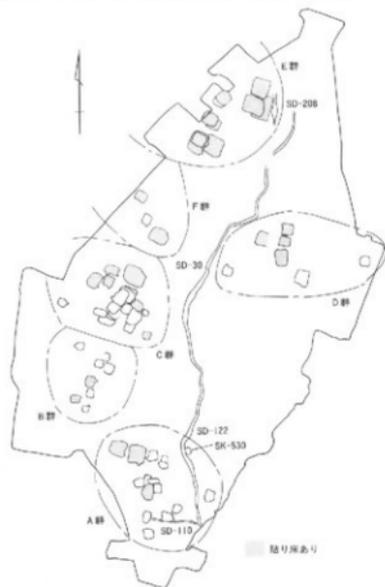
住居跡の切り合い関係は2期で二回、4期で三回みられる。また、群の半数は偶数を単位としたもので、特に1期は規模の大・小が対になるのが看取できる。

#### 2 竪穴住居跡の属性および施設

①規模 住居跡の床面積を主としてグラフ上で四段階に分類した(第15図)。概数値で大型(35㎡以上)中1型(21～35㎡)中2型(12～21㎡)小型(12㎡以下)となる。平均面積は大型43.0㎡、中1型24.6㎡、中2型15.3㎡、小型9.1㎡である。量的には小型のものが約半数を占め、続いて中1型・中2型が二割ほどで大型は一割程度である。

時期別にみると(第16図①)大型は1期から3期に限られ、かつ少数である。小型は3期を境に急増し、主体を占めるようになる。数値で明記していないが、1から5期の規模は中1型と中2型を境に明確に二分されることが確認された。1・2・3期についてはさらに大型を分離できようが、少なくとも各期を通じて大小のセット関係があったものと思われる。また、規模は顕著に縮小化することがわかり、県外における同様な傾向と一致する。

②平面形 カマドを有する辺が長いものを横長方形、短いものを縦長方形とし、カマドを有する辺と直行する



第13図 竪穴住居跡の群構成

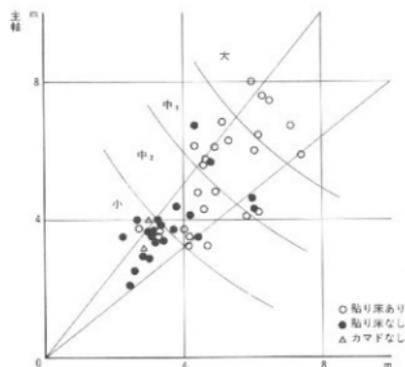


第14図 竪穴住居跡の時期別配置

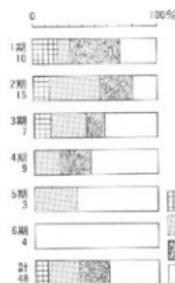
辺の差が10%未満を方形、10%以上20%未満を長方形1、20%以上を長方形2とし、五形態に分けた（第16図(2)）。全体では方形が多く、縦長長方形1・横長長方形2が続く。時期別にみると方形は1期で半数を占めるが徐々に減少し4期で最も少なくなる。5・6期は方形が半数を超える絶対数が少ないため解釈しづらい。長方形のものについては特に顕著な傾向は覆ぬないが、2・4期に長方形2が多い点を指摘できる。全体の傾向として時期が新しくなるにつれて平面形が多様化するといえようか。なお、どの形態のものにもカマドが設置されており住居跡という概念を適用し得るが、長方形2のいくつかについては個々の状態・遺物などから特殊な性格を考慮する必要がある。

ここで規模と平面形の相関をみると（表6(1)）強い相関ではないが、方形は小型が多く長方形2は中1型が多いことがわかる。先に指摘した長方形2の特殊な性格を考える上で注意される。

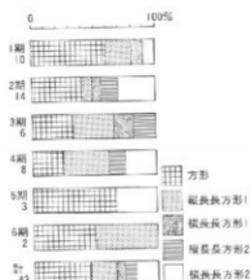
③貼り床 当遺跡で貼り床は1期から5期まで確認されているが、いずれも白色系の砂に少量の粘土を混ぜたもので非常に硬く締まっており、一目瞭然である。所によりブロック状に固まり、塩などの混入物の存在が想定される。



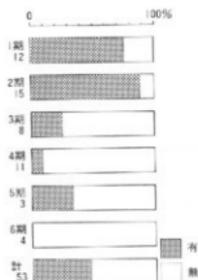
第15図 竪穴住居跡の規模



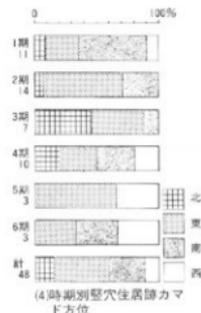
第16図 (1)時期別竪穴住居跡規模



第16図 (2)時期別竪穴住居跡平面形



(3)時期別竪穴住居跡貼床



(4)時期別竪穴住居跡カマド方位

	小	中 <sub>1</sub>	中 <sub>2</sub>	大	計
方形	11	5	1	2	19
長方形1	4	3	3	3	13
長方形2	3	3	6	1	13
計	18	11	10	6	45

(1) 形態・規模

	小	中 <sub>2</sub>	中 <sub>1</sub>	大	計
貼床有	3	9	7	6	25
貼床無	21	2	5	0	28
計	24	11	12	6	53
溝有	1	3	2	4	10

(2) 貼り床・規模・周溝

	方形	長方形1	長方形2	計
溝有	6	3	1	10
溝無	13	9	12	34
計	19	12	13	44

(3) 平面形・周溝

第6表 竪穴住居跡各属性相関

厚さは1cm程度で、全面にみられるものと一部のものがある。状態の良好なものは移植ゴテが刺さらないほどである。

1・2期のほとんどは貼り床を有し、大型・中1型は例外なく貼り床を持ち、特に堅固な造りである。3期以降になると急減し、3期では規模の大きいものに、4・5期では小型のものの極一部に貼り床がある。6期では全く存在しなくなる。2・3期が転換期ととらえられ、竪穴利用方法および構造上の変化による現象と考えられる。

貼り床と規模は強い相関を持つ(第6表(2))。貼り床は中2型以上に多く、小型のものはほとんどが貼り床を持たない。

④カマド方位 カマドの方位を時期別にまとめた(第16図(4))。なお、これは北半部の住居跡が礫層に影響され、東偏することを考慮した上で東西南北に分けたものである。全体では東および南向きが3/4を占める。各時期をみると1・

2期は東向きおよび南向きがほとんどで強い規則性が窺える。しかし、3期では北向きが急増し、それ以降はばらつきがある。3期以降にカマド方位に対する規則性が弛緩する現象としてとらえられよう。

⑤同壁溝 三面および四面の壁下に溝を持つものがある。いずれも従来の周壁溝とは若干様相を異とし、幅50cm程のU字もしくはV字である。必ずしも壁際ではなく、内側に離れるものもある。溝内には径10cm程の穴やV状の圧痕がみられるものもあり、板材や杭などの存在が想定される。比較的浅いものが多いが、四隅が深く掘り込まれたものもある。いずれも住居機能時には埋められており、方形・大型のものに強い相関関係を持つ(第6表(2)③)。時期別では1期三棟、2期二棟、3期一棟存在し、当遺跡古段階の規格性が強い住居跡に限定されることから、前時代の残存的性格の強い施設と考えられる。

⑥柱穴 明確に柱穴を伴うものは6棟あり、8本柱、4本柱、その他のものがみられる。8本柱はS I-51一棟のみで柱が壁際に巡る。いわゆる2間×2間建物状になり、柱間は3mである。4本柱のものは3パターンに分類され、周壁溝を持ち四隅壁際に位置するS I-12、溝を持たず四隅壁際に位置するS I-19、溝を持たず一部の住居跡プランが柱穴外に突出するS I-25・S I-35がある。その他のものではS I-40があり、床面中央部に2本の柱状土坑を持つ。時期別に見ると溝を持つS I-12・40・51は1・2期、溝を持たないS I-19・25・35は4・5期に属する。S I-19を除けばいずれも各期の最大級住居跡であることが注意される。

⑦土坑 カマドの左右脇に土坑を持つものが五例見られる。S I-25・40・51・52・53の土坑のいずれも内部から土器を出土している。S I-40の土坑には白色粘土が入っており、貯蔵穴と考えられる。これらは最大級の住居跡にのみ伴い、住居跡における差別的な遺構とはいえない。また、焼土を伴う土坑を持つ住居跡は七例あり、いずれも床面中央からカマドと対辺寄りに位置する。直径は50cm前後が多く、壁面を堅くしている例(S I-13)もある。これらもまた大型の住居に限られる。織治炉などの存在を考慮しておく必要がある。

⑧その他 S I-42の床面中央に溝が確認されており、間仕切もしくは根太の痕跡と思われる。またこの住居の壁際からは炭化材が出土しており、壁体の一部と思われる。

	a <sub>1</sub>	a <sub>2</sub>	b	c <sub>1</sub>	c <sub>2</sub>	d	e	f <sub>1</sub>	f <sub>2</sub>	g	不明
1期	S I-12 S I-13 S I-40	{S I-36}				S I-43 S I-47 S I-53	S I-14 S I-17	S I-39		S I-5	S I-23 S I-57
2期	S I-51	S I-55 S I-59		S I-41 S I-52 S I-54	S I-49	S I-6 S I-37 S I-45 S I-48 S I-56		S I-16 S I-38		S I-9	S I-32
3期	S I-58			S I-46			S I-15 S I-44 S I-50 S I-61				S I-7 S I-31 S I-34
4期			S I-27		S I-35		S I-1 S I-20 S I-26 S I-30	S I-29	S I-2		S I-21 S I-28 S I-33
5期					S I-25	S I-18	S I-19				
6期							S I-24 S I-42				S I-3 S I-4
不明	{S I-60}									S I-10 S I-11	S I-8 S I-22

第7表 竪穴住居跡の時期別類型

### 3 竪穴住居跡の類型

これまでの検討をふまえて当遺跡の住居跡を類型別に分類した（第7表）

a類：規模が中1型以上で平面形が方形・長方形1を呈し、貼り床を持つもの。さらに周壁溝のあるものをa1類、ないものをa2類とする。

b類：規模が中1型以上で平面形が方形・長方形1を呈し、貼り床を持たないもの。

c類：規模が中1型以上で平面形が長方形2を呈すもの。さらに貼り床を持つものをc1類、持たないものをc2類とする。

d類：規模が中2型以下で平面形が方形・長方形1を呈し、貼り床を持つもの。

e類：規模が中2型以下で平面形が方形・長方形1を呈し、貼り床を持たないもの。

f類：規模が中2型以下で平面形が長方形2を呈すもの。さらに貼り床を持つものをf1類、持たないものをf2類とする。

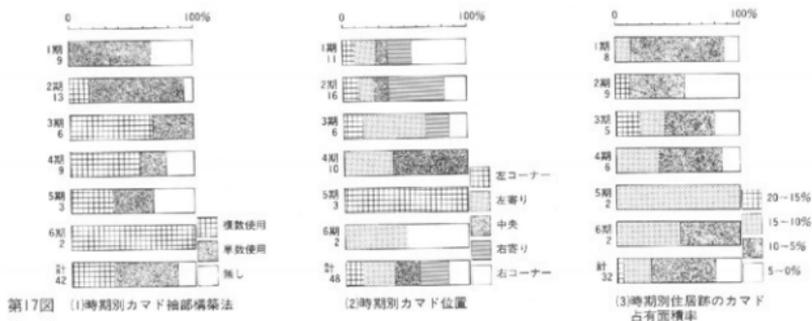
g類：カマドを持たないもの。

各類型を時期別に比較すると1期から3期ではa1類に最大級のものが集中し、4・5期ではc2類に最大のものが属する。中核的な住居のタイプがa1類からc2類に変わったことを示す。また、主体を占める規模の小さいタイプでは2期まではd類、それ以降ではe類に移行することが良くわかる。a2類・c1類は2期に多くみられるが、規模・施設内容とも中核タイプと小規模タイプの中間的な存在である。f類はやや特殊なタイプでS1-38・39からは工具状の鉄器が出土していることから、この二住居については工房とも考えられる。

### 4 カマド

竪穴住居跡でカマドが確認されたものは54棟で、そのうち一住居で複数のカマドをもつものは7棟ある。これらのうち各属性で復元可能な実数については第17図のとおりである。

①袖部構築法 袖部の構築に際して芯材として袖石を使用するものと、使用せずに粘土を用いるものとに大別される。袖石を使用するものには袖石が一つの袖に一個のものと複数個のものがある。袖石は人頭大の河原円礫を用いるものがほとんどで、円礫のまま、もしくは半截したものである。時期に関わらず単数のものはやや大型、複数のはやや小さめの礫を用い、基本的には礫の縦長方向を上下として置き、焚き口からみると「ハ」の字を形成するものが多いようである。石材は河原転礫の珪岩、花崗岩、片麻岩、凝灰岩、砂岩、流紋岩、閃緑岩がある。その他にはやや離れた露頭より搬入されたと思われる板状剝離した安山岩がみられ、袖石自体にも用いられるが多くは天井石として用いられたようである。時期別にみると（第17図1）1期から既に石使用カマドが主体を占めていることがわかる。



第17図 (1)時期別カマド袖部構築法

(2)時期別カマド位置

(3)時期別住居跡のカマド占有面積率

また、単数より複数使用の方が後出的な様相を呈する。

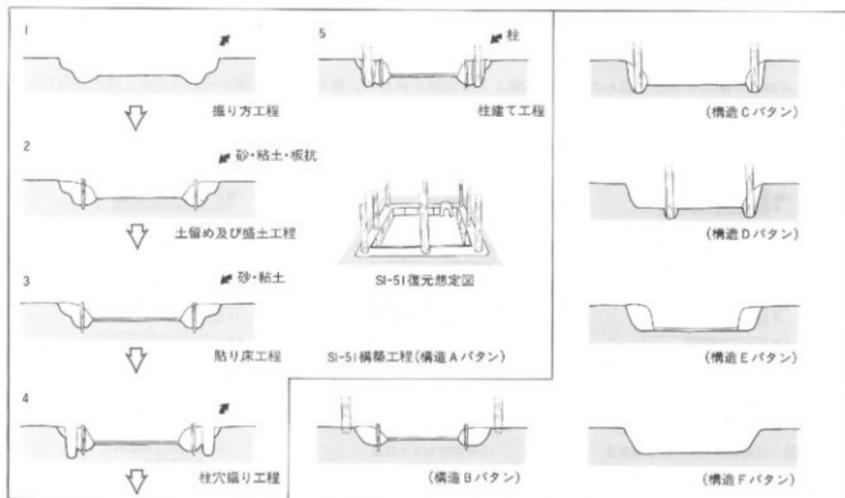
②位置 辺におけるカマドの設置位置を第17図2に示した。笑き口側から見て左右中央に分け、特に袖部が角に接近するものをコーナーとした。総体的にみて中央に設置されたものが少ないことに気付く。4期については中央が半数を越えるが全体としての傾向は変わらないものと思われる。コーナーに設置されるうち、袖部が角に完全に接する近するものをコーナーとした。総体的にみて中央に設置されたものが少ないことに気付く。コーナーに設置されるうち、袖部が角に完全に接するものもあり、そのほとんどは小型住居跡のものである。規模の大きい住居跡はやや間隔を持つ傾向があり、S I-51でカマドが柱穴を避けて配置される事例を無視できない。カマドが中央を避けて構築される現象は、居住空間の拡大という視点のみならず、他施設との位置関係という側面からのアプローチも必要であろう。

③カマドの占有面積比率 床面積に対するカマド面積(袖部・燃焼部・灰部)の占有比率を第17図3に表した。データとしてはやや不連続であるが、検討の目安として掲載した。約8%が通常といえそうであるが、小型住居跡の中には15%を超えるものもあり住居構造で疑問が残る。時期が新しくなるにつれて占有率が大きくなる傾向は住居規模の縮小化に関わらずカマド構造の規模が変わらなかった結果といえる。

④その他 燃焼部底面はほとんどのカマドが深く掘りくぼめている。壁への掘り込みは約半数にみられるが、特に時期差による相違はない。しかし、奥壁の立ち上がりは時期が新しくなるにつれて緩やかになるようである。袖部は平地面に袖土を盛り上げたもの、故意に掘り残したもの、壁などの隆起部分をそのまま利用したものがある。特にコーナーカマドのものには最後の例が多い、しかし、時期による差は認められなかった。

## 5 S I-51の構造および構造パターン

当遺跡の竪穴住居の中で特徴的な構造を呈しているS I-51について考察を加えたい。S I-51は貼り床・周壁溝・柱穴を持ち、一部を他の遺構に切られているものの良好な遺存状態である。構築行程を復元すると、1：住居跡プラン通りに掘り方を掘り、外周に沿って溝状の掘り込みを同時に行う。2：続いて四面の壁にやや粘性のある土を盛り土し、溝状部分に炕及び板材を打ち込む。3：貼り床を施すが、床面中央は掘り方の直上に厚さ1cm程度で貼られる。その際盛り土された上面部分にも一部貼られるようである。4：柱穴掘り方が盛り土された部分に掘られる。柱



第18図 SI-51構築模式図及び構造パターン

穴は一部壁面を掘り込むものもある。この段階でカマドが柱穴との配置を測りながら位置決定される。5：柱が建てられ、上層等が構築される。以上がS I-51の構築工程としてとらえられ、これを構造Aパタンとする。盛り土の厚さについては検出面までにしたが、より高く盛られていた可能性もあり、いわゆる周環的な機能も考慮する必要がある。上層構造については特に言及しないが、柱配置が2間×2間を呈することや柱間規模から掘立柱建物構造との融合形を考えたい。当遺跡ではS I-12がやや似るが、県内に例はなく、他県で類似する例として新潟県三賀Ⅱ遺跡のS I1000がある。この住跡でもまた板材の存在が推測されており、同種のものとして考えられよう。

他の住居跡の構造を見ると5種類のパタンに分けることができる。構造Bパタン：S I-40・41・45・58に代表されるものでAパタンに類似するが柱穴が明確でないものである。柱穴が検出されないほど浅いか、壁外部に配置されるものと推定されるが、Aパタンと構造上さほど違いはないものと思われる。構造Cパタン：S I-19に代表され、各コーナーに柱穴が配置される。盛り土はなく比較的簡素な上層が想定される。構造Dパタン：S I-25・35・にみられ、1間×1間の柱が並ぶが、住居跡プランの一部が柱穴ラインの外に延びるものである。上層構造はいくつかの考え方があがるが、一つには外部に飛び出る部分に向かって斜めの覆い屋が架けられる構造、もう一つには柱が1間×1間にとどまらず地上部分にも伸びていると想定するものである。後者のものには掘立柱建物の一部としての竪穴住居という意味合いが想定されている。構造Eパタン：S I-59に見られ、周壁溝を持たずに盛り土のみ存在するものである。基本的にはA・Bパタンと相通ない構造であったと思われる。構造Fパタン：その他大多数のものがこれに属し、柱穴や盛り土などはなく、住居跡規模の小さいものに特徴的で、貼り床の有無で二分できる。貼り床のある住居跡を見ると貼り床が壁際までであるものではなく、壁際に居住空間ではない部分が存在することがわかる。以上が当遺跡の住居跡構造パタンであるが、A・B・Eパタンは地下構造と言う面では一まとまりとして考えることができ、Fパタンと比較して堅固であり、より上位的なものであると言えよう。また、Dパタンについてはなお不明点が多いが、特殊なパタンであり注意が必要である。

## B 中世掘立柱建物

### 1 時期区分と構成

中世掘立柱建物は44棟確認されたが、それを三期区分したのが第19図である。時期区分の根拠についてはさきの遺



第19図 中世掘立柱建物の時期別配置

構章に記載した通りである。各グループ単位での区分であるから各期は絶対的なものではなく、相対的なものである点、各グループ相互の共存関係は検証されていない点を断っておく。以下構成について各期毎に簡単にまとめる。中世Ⅰ期では四グループが属し、桁梁では5間×4間から2間×1間まで7種とバラエティに富む。面積(扉舎)ではSB-01の140.2㎡が群を抜き、続いて3間×3間以上(平均90㎡)のものが5棟ある。3間×2間は2棟で平均42.6㎡、2間×2間以下は4棟で20㎡程度である。全体の平均は67.3㎡で、構成としては70㎡を超えるものと50㎡に達しないものが一対一となる。この場合3間×2間規模の建物の位置づけが難しいが、これを倉とした場合主屋と倉が一対一の比となる。中世Ⅱ期では四グループ12棟が属し、5間×3間1棟、3間×2間5棟、2間×2間6棟とややまとまりを持つ。面積では5間×3間のSB-34が136.8㎡で群を抜き、四面に扉を持つ3間×2間のSB-26が82.5㎡で続く。他の3間×2間は平均35.0㎡、2間×2間は22.1㎡で大型のものと格差を持つ。全体の平均は40.98㎡でⅠ期に比べ縮小していることが明確である。構成では3間×2間を倉とすれば主屋と倉の比は一対五になり、主屋とすれば一対一になる。中世Ⅲ期では三グループ14棟が属し、4間×2間2棟、3間×2間4棟、2間×2間4棟、1間×2間2棟、1間×1間2棟である。面積は桁梁間数に関わらずいずれも35㎡を超えるものはなく平均は20㎡と極端に縮小する。大型の主屋タイプの建物が消失することや柱間が不規則になることが特徴と言えよう。Ⅲ期はやや時期幅を持たせてあるため細分が可能だが、この中でSB-42は特に柱穴規模が大きく柱間も長いことから後出的なものと思われる。また、SX-06は近世に属する遺構だが長方形に整地し、根太付近に位置すると思われる石列や床持ち柱を乗せるためと思われる礎石があり、土台立建物としてとらえられることから連続的な変遷という意味であって扱っている。今後の類例が望まれる。

以上時期的に概観した中で建物の縮小化という現象をとらえることができたが、Ⅲ期の極端な縮小についてはいささか疑問が残る。土台立建物など異なった形態での主屋タイプの存在を考える必要性があろう。柱穴規模では大規模建物が当然のことながら大きく、全体としてはⅢ期のものがやや小さい印象がある。しかし、先のSB-42のように再び大きくなるものもあり、この期に構造上の転換期があるものと思われる。また、次の転換期として掘立柱建物から整地された土台立建物(SX-06)に移行する現象が想定されるが、敷地を整地するという点ではⅡ期のSB-34が浅いながらも整地しており、先駆的なものとして注意される。

## 2 掘立柱建物に伴う土坑(第20図)

中世遺構の中で特に注意を引いたのが掘立柱建物の内外に付随する土坑である。様々な形態を持つが、総括して17棟(38.6%)に見られ、25基以上を数える。時期別にはⅠ期・Ⅱ期が多く、Ⅲ期は全体の半数に及ぶ。規模では3×2間以上のものが圧倒的に多い。Ⅰ期では70㎡を超えるものに多く、Ⅱ期には50㎡以下のものにも見られる。以下これらの土坑を配置・規模形・深さの項目について分類し、簡単な検討を行うことにする。

A TYPE: 建物室内に位置し、方形で規模が1×1間ほど(6㎡以下)のもの。浅型(30cm以下)をa類、深型(30cm以上)をb類とする。建物コーナーや張り出し部に位置する。

B TYPE: 建物室内に位置し、規模が1×2間以上(約12㎡)のもの。浅型a類と深型b類がある。いずれも建物際に位置するが、桁方向に長いものと梁方向に長いものがある。

C TYPE: 建物室内に位置し、規模が1×1間に収まり(6㎡以下)円形および不定形のもの。SB-34のものを除くとA TYPEと区別がつきにくい、大部分が深くピット状である。建物コーナーや隅部分に位置する。

D TYPE: 建物屋外に位置し、方形のものを一括した。規模が2×2間(15㎡以上)で柱列を伴うものをD1 TYPE、規模が1×1間のもの(約6㎡)をD2 TYPE、二つの土坑が組合わさったものをD3 TYPEとする。SK145・247は深型b類でその他は浅型a類である。

E TYPE: 建物屋外に位置し、長方形のもの(7~12㎡)。浅型a類と深型b類がある。いずれも建物の脇に付随し、



## C 古代土器について

南中田D遺跡は遺構毎に様々な様相の土器群がみられる。これらは時間的幅があると考えられ、変遷の方向性と遺跡の性格をここで考察する。しかし、今回調査した出土遺物では実年代や遺跡の性格を端的に示すものはない。そのため木簡等の資料により実年代の推定がなされている土器群またはそれにより年代の比定がされた現在までの研究成果と比較して進めていく。ここでは出土状況の良好なS I 1・12・13・18・19・24・25・40・41・42・50・58出土器を中心に検討する。

### 1 食器について (第21・22図)

#### (1) 須恵器

須恵器食器具では杯A・杯B・杯B蓋について検討する。

**杯A** 杯AはS I 1・13・19・21・25・40・41・50・58で依存状況良好な個体を出上している。

口径13・14cm代の個体はS I 13・40・41にある。この内S I 40では11cm・12cm代のものがある。口径12cm代はS I 1・19・21・25・50・58にある。この内、S I 1・50では10・11cm代の個体も出土した。径高指数は、殆どが24~28で30を超える個体はS I 1・50で認められる。他遺跡では法量の縮小化が各地でみられる。例えば、県内では射水丘陵須恵器窯跡群〔池野1987〕・立山町上末窯〔田中・宇野1989〕、北陸地方〔北野1989〕、県外では平城宮跡〔西・小笠原1976〕・京都府篠原窯跡群〔石井1983・1984、岡崎1989〕等に共通して認められる。

体部の外傾度は60°代主体のものはS I 13・23・40・50・58で、50°代主体のものはS I 1・19・21・25で確認できる。北陸においても〔北野1989〕新しくなるにつれ体部が開いてくるという方向がみとめられる。

当遺跡出土資料の底部外面の成形・調整はb手法・c手法が有る。S I 1・25でc手法が一部分ある以外は、すべてb手法である。県内では射水丘陵須恵器窯跡群〔池野1988b〕、県外では大阪府陶器窯〔中村1981〕、京都府篠原窯跡群〔石井1983・1984、岡崎1989〕等ではヘラキリからイトキリへと主体が移っていく傾向がみられる。

以上の他遺跡の傾向から8世紀後半代以降の杯Aは口径が縮小し、体部が開き、底部の成形・調整手法はヘラキリからイトキリへとという方向性がみられる。この方向性に本遺跡出土須恵器杯Aを並べると、S I 13・23・40・41→50・58→1・19・25の順に変遷する。

**杯B** 良好な資料は少なく、S I 25・41出土資料についてみる。

口径13・14cm代はS I 41で、口径10・11cm代はS I 25で認められる。器高はS I 41では3.1cm・3.7cm、S I 25では3.9cm・4.5~4.6cmである。径高指数はS I 41で23.5・26.4、S I 25で35.1・40.9~42.6である。杯Aと同じように県内では射水丘陵須恵器窯跡群〔池野1987〕・立山町上末窯〔田中・宇野1989〕、北陸地方〔北野1989〕、平城宮跡〔西・小笠原1976〕等で杯Aと同様に縮小化傾向がみられる。

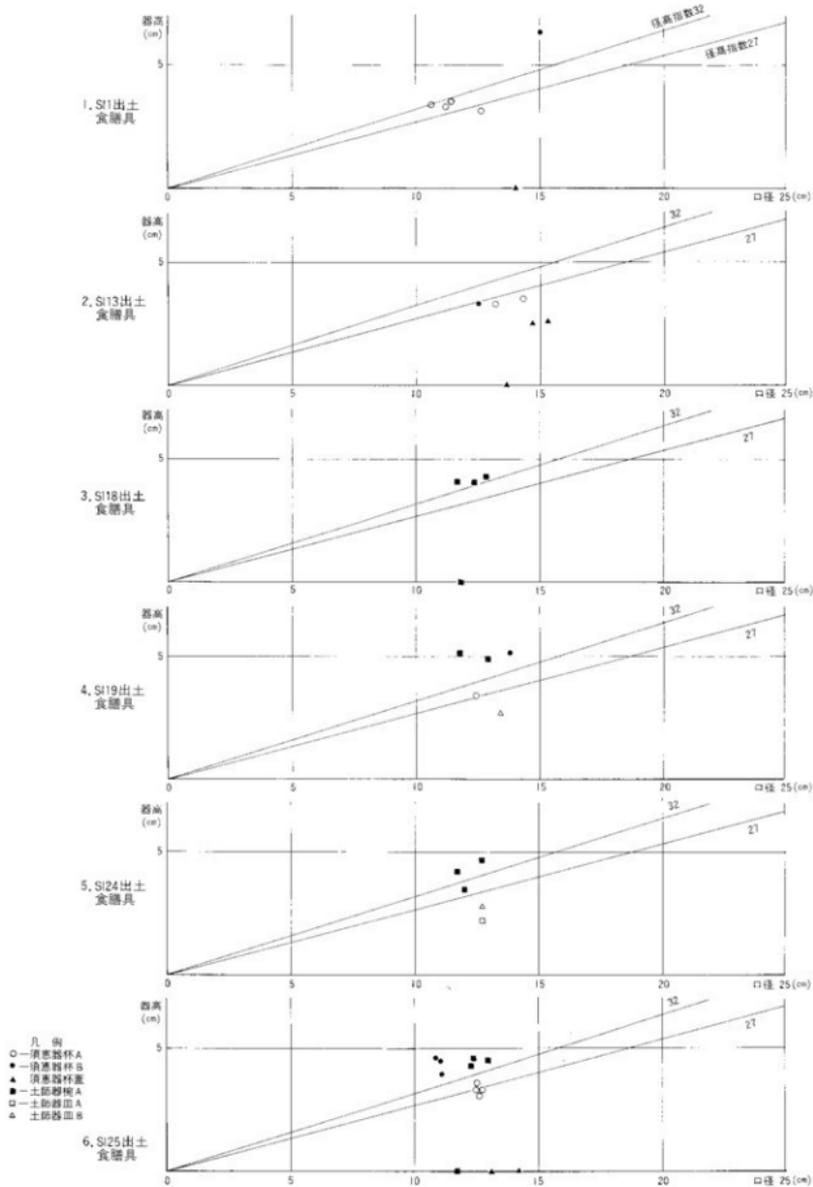
高台端面の形態はS I 25のみ外傾主体で、他は内傾・平行が主体である。

底部外面の成形・調整はS I 25で1点c手法があり、ほかはb手法である。b手法でもS I 41ではb手法の後きれいにナデ消すが、S I 21では中心部のみナデ消す、S I 25ではb手法の後未調整である。内面についてもS I 41では底部内面全体にナデをし、S I 25では底部内面中心までクロコナデである。県内の射水丘陵須恵器窯跡群〔池野1987・1988〕や大阪府陶器窯〔中村1981〕等ではヘラキリからイトキリへの移行が認められる。

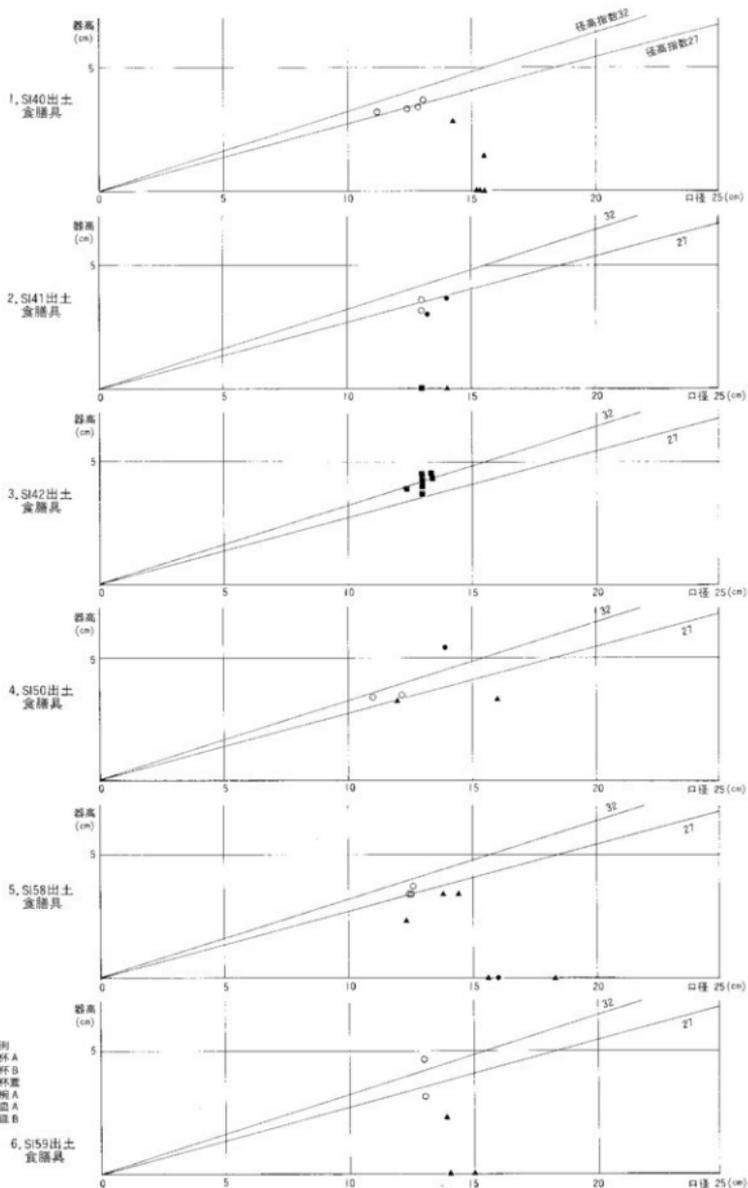
以上他地域との比較から南中田D遺跡においても杯Bは法量が縮小し、底部の成形手法がヘラキリからイトキリへとという方向性がみられる。これに従って南中田D遺跡の資料を並べるとS I 41→25の順に変遷する。

**杯B蓋** S I 12、S I 13、S I 21、S I 40、S I 50、S I 58に良好な個体がある。

口径は11.4~16.0cmで法量差がある。髻穴住居跡毎にみると、S I 12・13・40・58は12cm代後半のものがあるが13cm代後半~15cm代後半が主体である。S I 50では12.0cm、S I 21では11.4cmのものがあり様相差がある。射水



第21图 竖穴住居跡出土食器具量表(1)



第22图 竖穴住居跡出土食膳具法量表(2)

丘陵須恵器窯跡群〔池野1987〕・立山町上末窯〔田中・宇野1989〕他県外でも口径の小型化がみられる。

口縁端部形態をみると断面が三角形・折り曲げ・巻き込みがみられる。S I-12・S I-13・S I-21・S I-40・S I-58では三角・折り曲げが主体であるのに対し、2個体ではあるがS I-50では巻き込みである。県内の射水丘陵〔池野1987・1988〕では時代が下るにつれ巻き込み形態が多くなるようである。

頂部の成形・調整技法はa手法・b手法がある。a手法はS I-13・S I-40で認められ、他はb手法であった。県内の射水丘陵須恵器窯跡群〔池野1987〕・立山町上末窯〔田中・宇野1989〕、県外では京都市府平安京〔宇野1984〕等では寛削りから寛切り後撫でになっていく傾向があるようである。

杯B蓋の変遷の方向は法量が縮小、頂部調整はヘラズリからヘラキリへという方向性が認められる。以上の変遷の方向に本遺跡を当てはめるとS I-13・40→58・59→50→21の順に変遷する。

## (2) 土師器

土師器食器では壺Aについて検討する。

壺A S I-18・S I-19・S I-24・S I-25・S I-42出土資料を対象に検討する。

口径は11.7~15.7cmの間に分布し竪穴住居跡毎に差は認められない。器高は、3.5~4.9cmで竪穴住居跡間で差が認められる。3cm代の器高の個体を含む土器群〔S I-24・42〕が認められる。径高指数では20代がS I-24・42で認められ、18・19・25>24>42となっている。外傾度においても18・19・25>24>42と開いている。

北陸では〔北野1989〕口径が縮小して、体部の開きが大きい浅身の器形への方向性がみられるとしている。この変化の方向で並べるとS I-18・19・25→24→42の順に変化する。

## (3) 緑釉陶器

杯形が1点出土している。この緑釉の底部の立ち上がりは丸く、外面の成形・調整手法は「率な回転ヘラズリ」である。この緑釉の底部の形態は京都府栗栖野13号窯または正倉院陶器等にみられる特徴に類似している。京都府栗栖野13号窯は9世紀前半から中葉〔百瀬1986〕に推定され、正倉院陶器は8世紀第3四半期〔橋崎1979〕に使用されたと考えられていることから、S I-41出土緑釉陶器は8世紀後半代中心とした年代を与えておきたい。

## 2 貯蔵具について

壺には須恵器広口壺・双耳瓶がある。S I-25出土の双耳壺の耳の形態は県内では小針須屋住池II窯跡〔池野1988〕と立山町上末釜谷4号窯第2次採集〔田中・宇野1989〕にみられる。両窯は9世紀中頃の年代が与えられている。

## 3 煮炊具について（第8表）

煮炊具では壺Bについて検討する。

壺B 壺BについてはS I-1・12・13・18・19・21・23・24・25・40・41・42出土資料を中心に検討する。

口縁部形態は先に見た様にA・B・C・D・E・F・Gの形態に分類した（第10図）。これらは単純に形式的な変遷を考えれば、素縁から、口縁端部が立ち上がり、折れて、巻き込み形態になっていくと想定でき、AからGへと変遷したと考える。この内、A形態はS I-12・23にある。B形態はS I-12・13・23・40・41で見られる。C形態はS I-40のみ見られる。D形態はS I-61・50のみ見られる。E形態はS I-1・18・19・21・25のみ見られる。F形態はS I-18・19のみ見られる。G形態はS I-1・18・19・24・25・42のみ見られる。しかし実際は単純に変化したのではない。例えば、A形態はB形態と、C形態はB形態と同遺構に出土しており、同時期に存在していた可

タイプ 遺跡	1	2	3	4	5	6
S I-12	○	○				
S I-23	○	○				
S I-13		○				
S I-40		○				
S I-41		○				
S I-50			○			
S I-21				○		
S I-1					○	○
S I-20				○	○	○
S I-25				○		○
S I-19				○	○	○
S I-18					○	○
S I-24						○
S I-42						○

第8表 遺構毎の壺B出土状況

能性がある。また、E・F・G形態についても同遺構から出土している。ただこの内、G形態については単独に出土した遺構もあり、後まで残っていたものと考えられる。同様な傾向は県内のこれまでの調査・研究成果〔池野1988・宮田1988〕でも認められる。

体部下半の調整については、e手法・f手法・g手法がある。県内では内面ハケメ・外面ケズリから叩きへと変遷が〔関1988・宮田1988〕想定できる。

体部下半の調整手法と口縁部形態と組合せて見れば1～6の姿のタイプができる（第8表）。1タイプは口縁部がA形態で内面ハケメ・外面ケズリである。2タイプは口縁部がB形態で内面ハケメ・外面ケズリである。3タイプは口縁部がD形態で内面ハケメ・外面ケズリである。6タイプは口縁部がE形態で体部下半が叩きである。5タイプは口縁部がF形態で体部下半タキである。4タイプは口縁部がG形態で体部下半タキである。この内1・2タイプと4・5・6タイプは同遺構内から出土し共存している。同様な結果は最近の県内の研究成果〔池野1988・関1988・宮田1988〕とも合致する。したがってSI-1・2→3→4・5・6と変遷していくとみられる。以上からSI-12・13・23・40・41→50→21・1・19・18・25→24・42の順に並べておく。

#### 4 竪穴住居跡出土の土器組成について（第9・10表）

竪穴住居跡の土器組成の計測については、用途別（第9表）・器種別（第10表）の2種類を提示した。

食器全体の用途別の占める割合は食膳具が27.3～77.8%、貯蔵具が5.9～21.1%、煮炊具が15.8～63.6%である。SI-42・50・58等一部を除き、煮炊具の割合が多く、貯蔵具が20%以下と少ない。この食膳具・貯蔵具・煮炊具の組成比率は遺跡の性格を表すとして注目されている〔稲田他1978・宇野1988〕。県内の9世紀代の遺跡については宇野氏がその出土品の構成をもとに食器の重層性を明らかにしている〔宇野1988〕。これと今回報告した南中田D遺跡の土器群と比較してみると村落の例として上げられた立山町蒲田遺跡の土器群に近い様相である。しかし、少数ではあるが緑釉陶器も組成の中に認められ、その存在意味についてはなお考慮する必要がある。

次に、食膳具について観察すると次の3種類の組成に大別出来る。それは、須恵器杯が主流を占める組成、土師器碗・皿と須恵器杯が共存する組成、土師器碗・皿が主流を占める組成の3種である。須恵器杯が主流を占める組成はSI-12・13・40・41・50・58・59・61である。須恵器杯と土師器碗・皿が共存する組成はSI-1・18・19・25で認められ、また最も器種が多い組成である。土師器碗が主体をなす土器組成はSI-24・42で認められる。

この食膳具における杯主体から碗・皿主体への組成の転換は古代を前期と後期に二分する要因となっている。即ちそれは地域差・時期差は有るもの

「仏教的な金属器を頂点とする体制から、世界的な交易品である中国製陶磁器を頂点とする体制の転換」〔宇野1985〕として大きな意味がある。南中田D遺跡でも組成の転換が認められ、これを基に大兩期を設定する。

#### 5 編年試案の概要（第23～25図）

まず前項での土器組成から面期をつくる。I期は、食膳具は須恵器を中心としている時期でSI-12・13・40・41・50・58がある。

用途別	SI (南中田遺跡)											
	12	13	40	41	58	50	1	19	18	25	24	42
須恵器	6 (35.3)	9 (52.9)	13 (65)	7 (41.1)	13 (72.2)	7 (77.8)	8 (40)	2 (15.4)	1 (7.7)	9 (25.1)		
土師器							1 (5)	2 (15.4)	2 (38.4)	8 (20.5)	6 (39.9)	6 (66.7)
小形土師器								1 (7.7)	1 (7.7)			1 (11.1)
内面土師器								1 (7.7)				
須恵器杯				1 (5.9)								
土師器碗												
小計	6 (35.3)	9 (52.9)	13 (65)	8 (41.1)	13 (72.2)	7 (77.8)	9 (45)	6 (46.2)	7 (53.8)	18 (46.2)	6 (39.9)	7 (77.8)
須恵器	1 (5.9)			2 (11.8)	2 (11.2)	2 (20)	2 (15.4)		3 (7.8)	1 (6.7)		
小計	1 (5.9)			2 (11.8)	2 (11.2)	2 (20)	2 (15.4)		3 (7.8)	1 (6.7)		
土師器	10 (58.8)	8 (47.1)	7 (35)	7 (41.2)	3 (16.6)	2 (22.2)	9 (45)	5 (38.4)	6 (46.2)	18 (46)	8 (53.4)	2 (22.2)
小計	10 (58.8)	8 (47.1)	7 (35)	7 (41.2)	3 (16.6)	2 (22.2)	9 (45)	5 (38.4)	6 (46.2)	18 (46)	8 (53.4)	2 (22.2)
総計	17 (100)	17 (100)	20 (100)	17 (100)	18 (100)	9 (100)	20 (100)	13 (100)	13 (100)	20 (100)	15 (100)	9 (100)

第9表 用途別土器組成 数字は個体数、( )内はその%

II期は食膳具が須恵器と土師器が共存している時期でS I - 1・18・19・25を代表例とする。III期は食膳具が土師器を主体とする時期でS I 24・42を代表とする。

ここでは前項までの検討から得られた結果を基にした編年試案の概要を簡単に述べる。

**I期** 食膳具は須恵器を中心として構成している。今回報告の資料中の各期の中で杯類の法量が最も大きい。杯A・Bの底部外面の成形・調整手法はヘラキリ（b手法）が多い。杯Aの体部は最も立ち上がる。杯B蓋の口縁端部形態

は断面が三角形と、折り曲げる形態がある。内面には一方のナデが見られる個体がある。煮炊具裏Bの口縁部は外傾し端部を丸くおさめるもの（A形態）、外傾し面取りするもの（B形態）がある。

裏Bの成形・調整手法は体部上半外面カキメ・体部下半は内面ハケメ、外面ケズリ（e手法）をするものが多い。裏Aには内・外面ハケメ調整（d手法）をするもの（1・2）がある。鍋については裏Bと同様な口縁端部形態・調整手法がみられる。S I - 12・13・40を代表とする。

**I期** I期から大きな変化はなく本来は分けて考えるべきではないかもしれない。主な変化としては、食膳具では口径の若干の縮小、杯B蓋頂部手法におけるロクロケズリ（a手法）の減少、緑釉陶器の存在がある。貯蔵具では肩の張った長頸蓋（15・16）がある。煮炊具では裏Bの口縁部形態に外傾し端部を丸くおさめるもの（A形態）が少なくなる。S I - 41を代表例とする。

**I期** 食膳具では法量が更に縮小化する。杯B c（20）・大型の蓋（23）がみられる。煮炊具では口縁形態が外傾し面取りをし上方に引き上げる形態（D1形態）が主流である。S I - 58を代表例とする。

**I期** 資料は少ないが、食膳具は一層の法量の縮小化、杯B蓋口縁端部は巻き込む形態になる。煮炊具の口縁端部形態は外傾し上方に引き上げ端面が丸い（D2形態）になる。S I - 50を代表例とする。

**II期** 食膳具には土師器碗が出現するが、須恵器との量比ではまだ少数である。須恵器杯類では調整手法の省略、イトクリ（c手法）の出現、蓋の点数が少ない等の変化が上げられる。須恵器は胎1の1群が入ってくる。煮炊具では口縁形態が外傾し途中で折れる形態（B形態）が主流となり、一部外傾し端部を巻き込む形態（G形態）が入る。

器種		S : (器穴休層跡)															
		12	13	40	41	58	50	1	19	18	25	24	42				
杯	杯 A	1 (5.9)	2 (11.8)	4 (20)	3 (17.6)	5 (27.7)	3 (33.3)	4 (20)	7 (7.7)	1 (7.7)	5 (12.8)						
	杯 B 蓋	3 (17.6)	3 (17.6)	6 (30)	1 (5.9)	5 (27.7)	2 (22.2)	2 (10)									
	杯 B a	2 (11.8)	4 (23.5)	3 (15)	3 (17.6)	1 (5.9)	1 (11.1)										3 (7.7)
	杯 B b					1 (5.9)	1 (11.1)	1 (5)	1 (7.7)								
	杯 B c					1 (5.9)											
	蓋 B								1 (5)								
	蓋 杯																1 (2.6)
	煮 釜	1 (5.9)															
	白 付 物			1 (5.9)		1 (5.9)				1 (7.7)		1 (2.6)		1 (6.7)			
	双 耳 取																1 (2.6)
横 取									1 (5)								
甕			1 (5.9)		1 (5.9)		1 (5)	1 (7.7)		1 (2.6)							
土 師	碗 A							1 (5)	15 (4)	3 (38.5)	2 (26.3)	6 (166.7)					
	赤彩碗A										1 (2.6)					1 (11.1)	
	内黒碗A									3 (7.7)							
	皿 A															1 (6.7)	
	皿 B															1 (6.7)	
	赤彩皿B								1 (7.7)	1 (7.7)							
鍋	裏 A	2 (11.8)	3 (29.4)	3 (15)	2 (11.8)	2 (11.0)		6 (30)	1 (7.7)	1 (7.7)	3 (37.7)	6 (40)	1 (11.1)				
	裏 B	7 (41.1)	2 (11.8)	1 (5)	2 (11.8)	5 (5.6)	2 (22.2)	2 (10)	4 (30.7)	5 (38.5)	14 (35.7)	1 (6.7)					
	鍋	1 (5.9)	1 (5.9)	3 (15)	3 (17.6)			1 (5)			1 (2.6)	1 (6.7)	1 (11.1)				
鉢																	
杯																	
計	17 (100)	17 (100)	20 (100)	17 (100)	16 (100)	9 (100)	20 (100)	13 (100)	13 (100)	29 (100)	29 (100)	15 (100)	9 (100)				

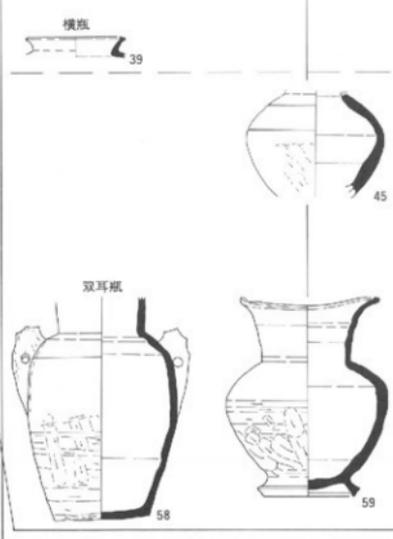
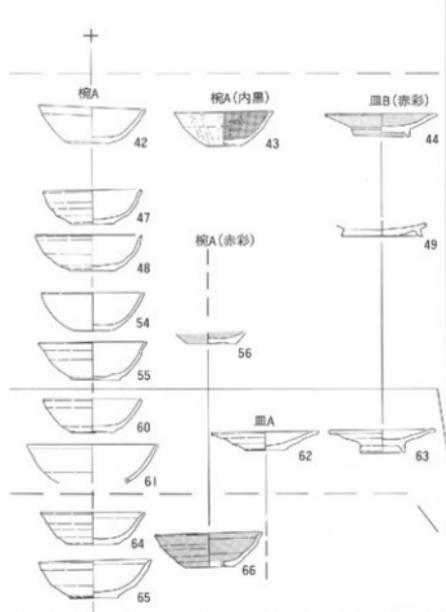
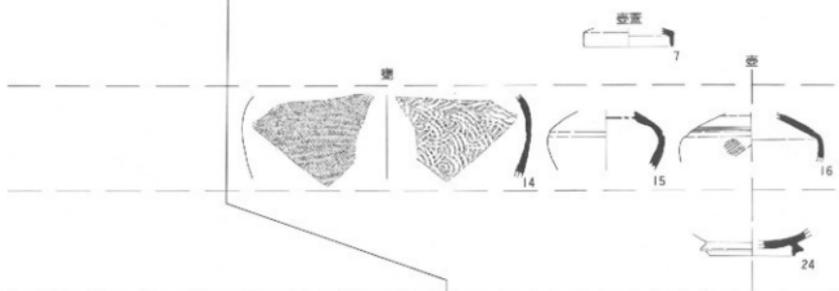
第10表 器種別土器組成 数字は個体数、( )内はその%

期	杯A (b手法)	杯Ba (b手法)	食膳具	杯B蓋 (b手法)	杯B蓋 (a手法)
I <sub>1</sub>	1 2	3		4 5	6
I <sub>2</sub>	8 9	10 11	緑釉杯A 12 13		
I <sub>3</sub>	17 18	19	杯Bc 20	21 22	蓋 23
I <sub>4</sub>	25 26	27	杯Bb (b手法) 28	29 30	
	31			32	
II <sub>1</sub>	33 34	杯A (c手法) 35	36	皿B 37	38
	40		41		
II <sub>2</sub>		46			
	50 51	52	杯Ba (c手法) 53		
III <sub>1</sub>					
III <sub>2</sub>					

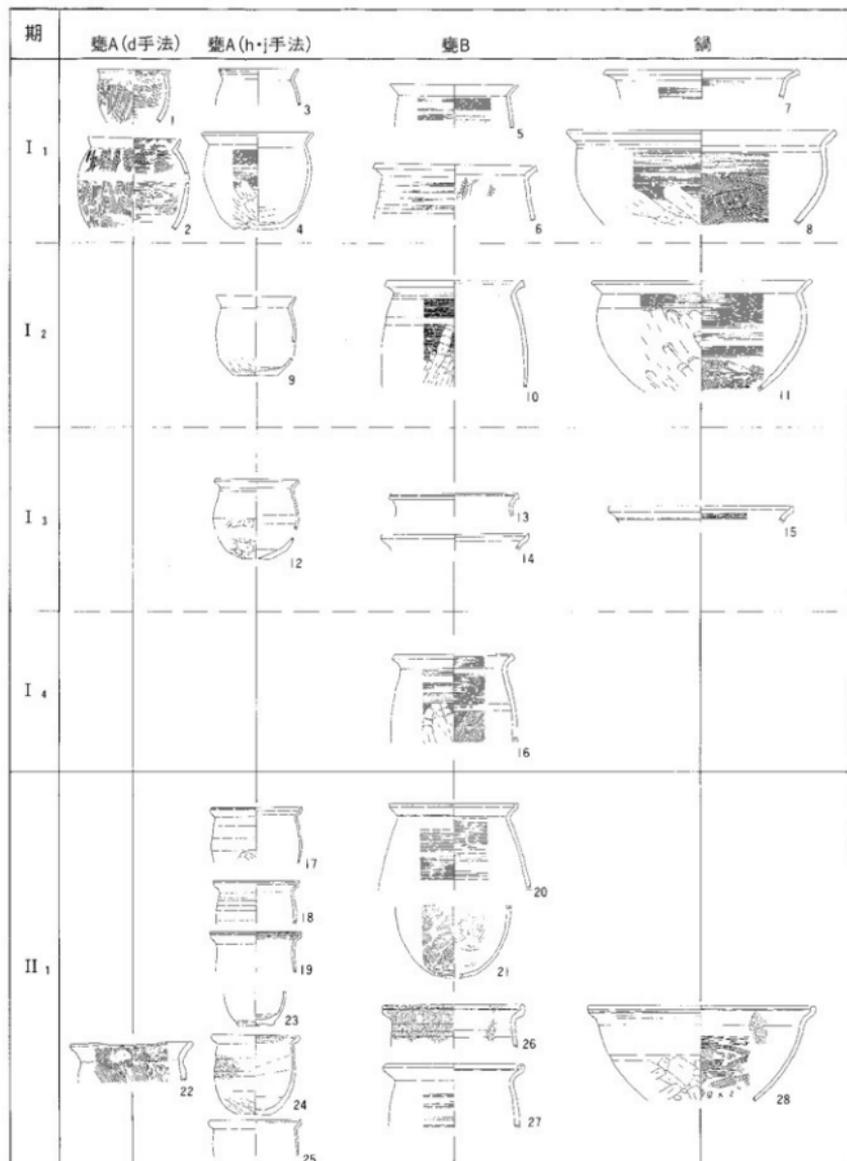
第23図 南中田D遺跡竪穴住居跡出土の食膳具・貯蔵具の変遷 (縮尺 1 : 6)

1・2・4・5 (SI-40), 3・6 (SI-13), 7 (SI-12), 8~13・15 (SI-41), 14・16 (SI-59), 17・18・20~24 (SI-58), 19 (SI-61)

貯藏具

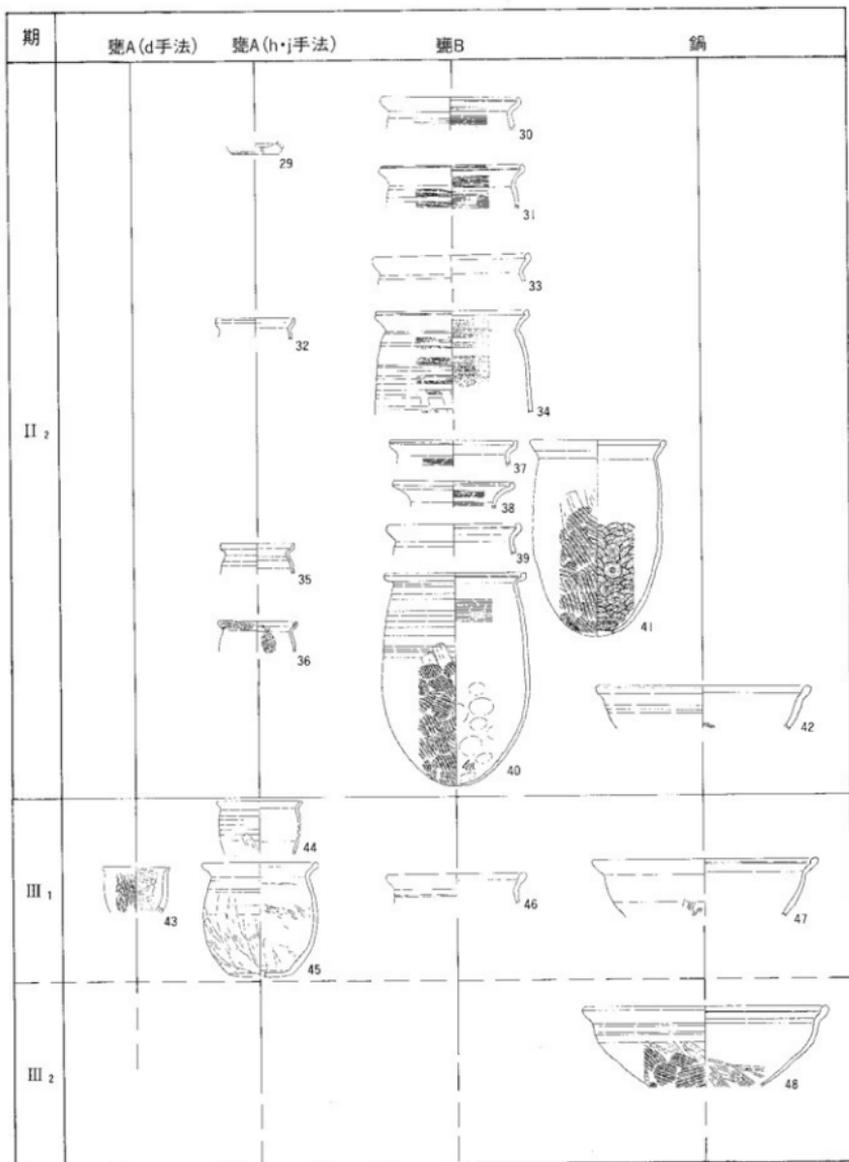


25~30(SI-50), 31·32(SI-21), 33~39(SI-1), 40~45(SI-19), 46~49(SI-18), 50~59(SI-25), 60~63(SI-24), 64~66(SI-42)



第24図 南中田D遺跡竪穴住居跡出土の煮炊具の変遷(1) (縮尺1:8)

1・2(SI-13), 3・7・8(SI-40), 4(SI-23), 5・6(SI-12), 9~11(SI-41), 12(SI-58), 13~15(SI-61), 16(SI-50)  
17(SI-20), 18~21(SI-21), 22・23(SI-2), 24~28(SI-1)



第25図 南中田D遺跡竪穴住居跡出土の煮炊具の変遷(2) (縮尺1:8)  
 29~31(SI-19), 32~34(SI-18), 35~42(SI-25), 43~47(SI-24), 48(SI-42)

体部上半は内・外面カキメ、体部下半はタタキ（g手法）をするものがみられる。しかし鍋には内面ハケメ・外面ケズリ（c手法）があるなど、前段階の手法も一部残存している。S I - 1を代表例とする。

II<sub>2</sub>期 食膳具では内黒土師器・赤彩土師器・皿類等が組成に加わり最も種類が多くなる時期である。須恵器杯類では一層の調整の省略がみられる。体部の開きがおおきくなってくる。土師器食膳具は量を多くしており、底径が大きく身の深く立つものが多い。須恵器杯B蓋は殆どみられなくなる。杯B高台端面は外傾するものが多い。貯蔵具では肩の丸くなった甕と双耳瓶がある。煮炊具では口縁形態が外傾し端部を巻き込む形態（G形態）主体になり、体部上半にカキメを残すものが多くみられる。S I - 18・19・25を代表例とする。

III<sub>1</sub>期 食膳具では須恵器が見られなくなり、土師器を中心としている。椀Aは器高がやや低く体部が開くようになる。皿Aがみられる。煮炊具は体部上半にクロコ成形態を残すものが多い。甕Aに内・外面ハケメ（d手法）の個体（43）がある。S I - 24を代表例とする。

III<sub>2</sub>期 食膳具では土師器碗Aの径高指数がさらに小さく、体部が開く様になる。S I - 42を代表例とする。

## 6 各期の実年代について

今回の調査では土器の年代推定の根拠となる遺物は出ていない。北陸においては、実年代の比定は困難であり、紀年木簡等を年代推定の根拠とする平城宮や平安京等其他地域の編年に対比しながら行っているのが現状である。そのため南中田D遺跡の土器の年代推定は他地域の資料を参考にして考える。

須恵器杯類の法量の縮小化は生産コストの低減に基づき各地で8世紀後半から9世紀初めに進行する変化（宇野1985）である。奈良県平城宮では〔西・小笠原1976〕8世紀後半の平城宮III以降にみられる。南中田D遺跡では7世紀末に遡る遺物は検出されないこと、8世紀後半の法量等の比較からI<sub>1</sub>～I<sub>2</sub>期以降がこれに相当するとみられる。

先に述べた金属器指向型から磁器指向型への転換は9世紀以降の土器様式の発展の方向である（西1982）。さらにこの点について、9世紀中頃～末を境に様相を変えていくとする説（宇野1985）もある。南中田D遺跡ではII期がこの転換にあたると考えている。

III期の土器群は富山市長岡杉林遺跡出土土器群と類似している。長岡杉林遺跡S E 15は京都府妙満寺境内甕B-a期〔百瀬1986〕とみられる緑釉陶器、黒並90号窯期〔吉田1986、前川1989 a・b〕とみられる灰釉陶器が共存しており、9世紀末から10世紀前半の年代が与えられている。本遺跡のIII期も同様の年代を付与しておきたい。

従って、本報告ではI<sub>1</sub>期～I<sub>2</sub>期は8世紀第3四半期、II<sub>1</sub>期は9世紀中頃～後半、III<sub>1</sub>期は9世紀末～10世紀初頭、III<sub>2</sub>期は10世紀前半の年代を与えておく。

## 7 今後の課題

本項では一応の時期幅は出たと思われるが、全資料を対象としていないため器種組成などについては不十分で残念な結果となった。またこの編年試案は南中田D遺跡での現在までの資料整理途中の傾向であり、他遺跡への適用は考えていない。他遺跡への応応は、遺跡性格差による器種分化の差の問題、北陸型甕の系譜の問題（池野1988 a）、消費遺跡系譜の異なる複数の地域の窯の製品の搬入等の問題があり困難と思われる。

当遺跡の性格は土器組成の点から村落の例に近いことが解った。しかし、一方で緑釉陶器・占銭・墨書土器等、一般村落と思わせない遺物も出土している。当遺跡に隣接した栗山橋原遺跡では、墨書土器15点中10点に「了林」があったが、当遺跡では同じ文字は少ない。この地域の墨書土器について安達氏が考察〔安達1989〕をしている。同じ文字の墨書土器が多量に出土する遺跡は、在地の有力者がその墨書土器を村落の統制のために使用させた可能性があるとし、当遺跡を含む県総合運動公園内の遺跡群に郡司層より下位の富豪層達の力の介入を想定している。今回は、この説を積極的に肯定するには決め手を欠くが緑釉陶器・銭貨の出土からもその可能性があると程度に留めておきたい。これらの問題点については紙幅の点からも中途半端になったが別の機会に論じたいと思う。（図本）

## D 中世の土器・陶磁器について

### 1 土師質土器の時期について

今回の南中田D遺跡の発掘調査において出土した土器・陶磁器は、その多くが包含層から出土したものである。ここでは土師質土器を中心にその時期を検討したい。しかし、土師質土器が編年のなされている珠洲と共伴して遺構から出土したものはSK1085・3260・3790、SX3・4、SD19と少なく、その中でも時期がわかるものはSK1085に限られてくるので、先の分類をもとに北陸中世土器研究会の資料(宮田他1988)などを参考に検討した。なおここでは実測した72点を資料として扱った。このうち完形で出土したのは2点で、ほとんどが破片であり、口縁部残存率が低い。

A1類は347のみで、口径13cm、器高3.2cmである。器壁が厚く、しっかりとした作りである。初期手ずくねに伴うものである。12世紀～13世紀前半に位置づけられる。

A2類はSB01から出土した345と包含層出土の461がある。口径はともに8cm、器高は1.2cmと1.6cmである。底部は糸切り後、未調整である。七市町神田遺跡出土品に類似が認められ、12世紀後半～13世紀前半に位置づけられる。

A3類はSK250から出土した391、包含層上七の460がある。391は口径8cm、器高2cmである。A3類は器壁が薄く、焼成はしまりがあって良好である。井口村井口城跡出土のA2類、蓮花寺遺跡出土品に類似している。15世紀前後に位置づけられる。

B1類は包含層出土の467のみで、薄手で、白っぽい胎土のものである。県内の出土品にあまりみられない。12世紀後半に位置づけられる。

B2類はSD53、SX117、包含層から出土している。口径は8cmと9cm、器高は1～1.5cmである。入善町じょうべのま遺跡C・K地区、神田遺跡包含層出土品に類似を求めることができる。12世紀後半に位置づけられる。

B3類は口縁部端部をつまみあげる特徴をもつものであるが、体部の形態差からa・bに細別した。B3a類はSK3039・3260、SB34、包含層から出土している。口径は9cmと11cmのものに分かれ、12cmのものが1点ある。器高は1.5～2.5cmである。B3b類はSK3157・3175・3188・3706、SX116・117から出土している。SK3175からは13世紀後半の口ハゲの内磁の雫も出土している。口径は9cmと11cmと14cmである。器高は1.5cm～2.5cmである。B3類は神田遺跡、上市町弓庄城跡SD511出土品のなかに類似品があり、12世紀後半～13世紀前半に位置づけたい。

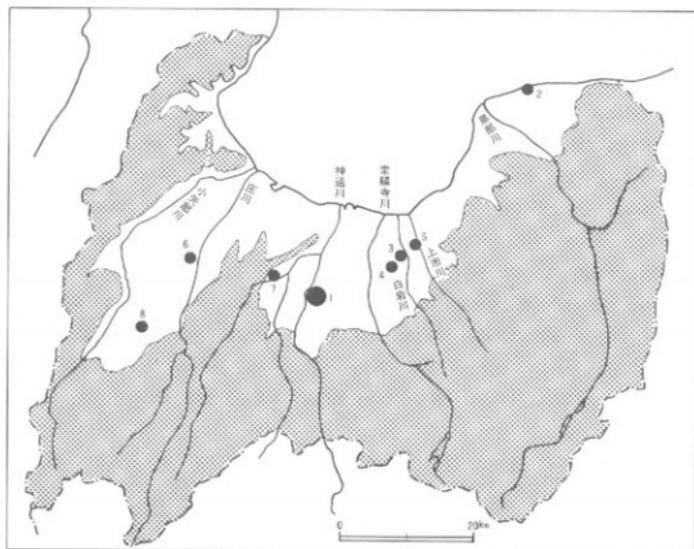
B4類はSK163・3706、包含層から出土している。口径は9cmと14cmがある。器高は2.2cmと3cmである。石川県辰口町辰口西部遺跡群徳久・荒屋G地区中世溝4で出土し、藤田氏が(藤田1989)で、Cタイプにしたものに該当しよう。13世紀前半に位置づけられる。

B5類はSK257・1029・3157・3224・3790・3825、SD19・53・238、包含層から出土している。口径が8cmのものが多く、ほかに9・10・11cmのものがある。器高は1～1.5cmである。B6類はSK258・1085・1172・3224・3260・3790、SX10、包含層から出土している。SK1085は珠洲第V期の摺鉢と共伴して出土している。口径は8cmのものが多く、7.9・11cmのものがある。器高は1.5cm～2cmである。当遺跡では、B5・6類が多く出土している。ともに、15世紀代にあてたい。ただし、一部14世紀を含む可能性があり、この点を含めてもう少し細かく時期を分けることが可能であろう。

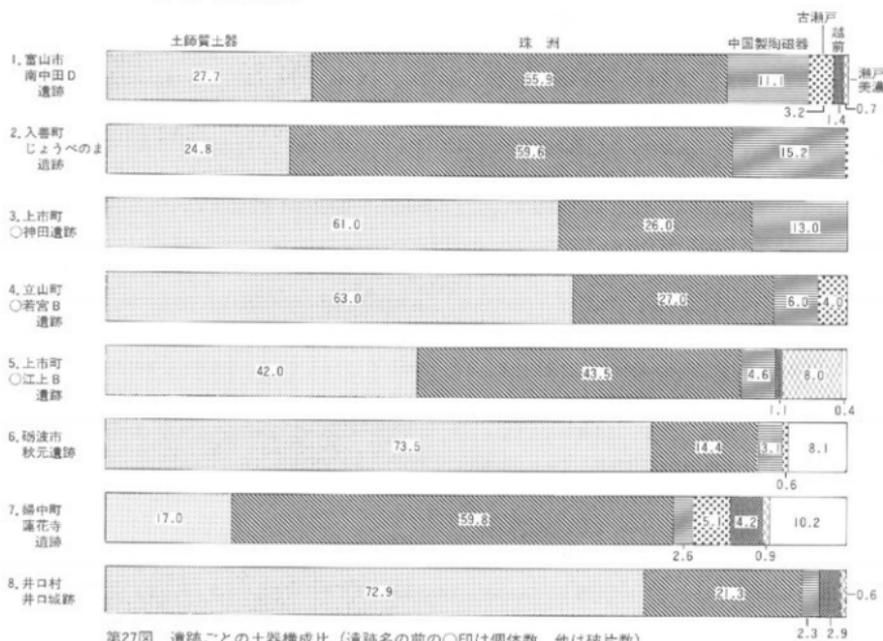
B7類はSK1085、SX4、包含層から出土している。口径は8cmと9cmと12cmのものがある。器高は2cm前後である。富山市白鳥城跡出土品に類似している。16世紀に位置づけることができる。

B8類は包含層から出土している。口径は11cm、器高は2.4cmである。弓庄城跡C地点SD1002・1001出土品に類似している。16世紀に位置づけることができる。

以上より、南中田D遺跡出土の土師質土器は12世紀後半～13世紀前半に属するものと、15世紀に属するものに大別できる。又、珠洲は第I～VI期のものが出土しているが、なかでも第II期と第V期のものが多く見られ、ここに中世における当遺跡の主体をおくことができるであろう。



第26図 遺跡分布図



第27図 遺跡ごとの土器構成比 (遺跡名の前の○印は個体数、他は破片数)

## 2 土器・陶磁器の組成について

### (1) 南中田D遺跡の土器・陶磁器の組成について

ここでは、南中田D遺跡で出土した中世土器の組成について、県内の他の遺跡のそれと比較しつつ考えてみたい。土器組成の比較を試みる上で、遺跡の性格が共通するもの、また存続年代が共通するものといった基準を設けることが必要と思われるが、ここでは、土器組成の面から当遺跡の性格づけを行うことを考えたため、集落・寺・城を取り上げ、また、時期は遺跡ごとに幅はあるものの、珠洲編年の第I期～VI期にわたり取り上げて比較を試みた。なお、ここで取り上げた遺跡の性格、存続年代や破片数または個体数、比率はいずれも報告書で示されているものであり、それを引用した。また、いずれも当遺跡と同じように掘立柱建物を検出している。

第26図にあげた遺跡の性格と存続年代について見てみると、入善町じょうへのま遺跡(C・K地区)は、東大寺領入善庄の一面であった可能性があり、その場合、C地区は庄園の管理者層も居住地と推定される。遺跡の存続年代は、12世紀中頃～13世紀中頃である〔山本1985〕。上市町神田遺跡・立山町若宮B遺跡は、いずれも屋敷内に鍛冶を租入れた村落領主層の居住地と推定され、前者は12世紀後半～13世紀前半、後者は13世紀代である。上市町江上B遺跡は、名主あるいは小百姓の居住地と推定され、13世紀～15世紀(13世紀後半～14世紀が中心)である〔宮田1984〕。砺波市秋元遺跡は、一定程度以上の格式をもつ屋敷跡とされ、15世紀である〔田中1990〕。婦中町蓮花寺遺跡は、天正9年の「長澤蓮華寺」に先行して、14世紀後半に形成され、15世紀代を通じて存続したと考えうる「蓮華寺」の跡と推定される〔岸本1984〕。井口村井口城跡は12世紀後半～16世紀初め(13世紀～15世紀中心)の城跡である〔上野1990〕。

南中田D遺跡は、出土土器の破片数による内訳は、土師質土器163点(27.7%)、珠洲329点(55.9%)、中国製陶磁器66点(11.1%)、古瀬戸19点(3.2%)、瀬戸美濃4点(0.7%)、八尾7点・越前1点(1.4%)である。検出した掘立柱建物については、2×2と2×3の掘立柱建物が多く、面積も10～50㎡のものが多く規模が小さい。掘立柱建物群の規模から見て、江上B遺跡に近いと考える。当遺跡の土器組成を先にあげた遺跡のそれと比較すると次のことが言える。

①珠洲の比率が土師質土器のそれよりも高い。②中国製陶磁器の比率が10%をこえる。③古瀬戸は若宮B遺跡や蓮花寺遺跡とともに他の遺跡よりもその比率が高い。

### (2) 遺跡の性格・存続年代と土器組成

今回示した第27図は、先に述べたように遺跡の性格や存続年代を意識して作成を試みた。これより、①中国製陶磁器の比率が10%以上の遺跡と5%以下の遺跡がある。②じょうへのま・神田・若宮B・江上B遺跡など、存続年代の中心を14世紀までにもつ遺跡では、土師質土器と珠洲の比率が近くなると考えられるが、15世紀の秋元遺跡では土師質土器が約74%、珠洲が約14%と土師質土器の比率が高い。③蓮花寺遺跡では、土師質土器の比率が20%未満、珠洲のそれは約60%と、年代が近い秋元遺跡と比べて、土師質土器と珠洲の比率が逆転する。④南中田D・若宮B・蓮花寺遺跡で、古瀬戸の比率が高い。ということが言える。この結果、中国製陶磁器は時期が下るとともに減少する傾向にあること、15世紀頃に土師質土器よりも珠洲の比率が低くなることが考えられる。また、寺という性格の遺跡での珠洲・古瀬戸の用いられ方に注目したい。資料不足ではあるが、指摘しておき、今後の検討課題としたい。

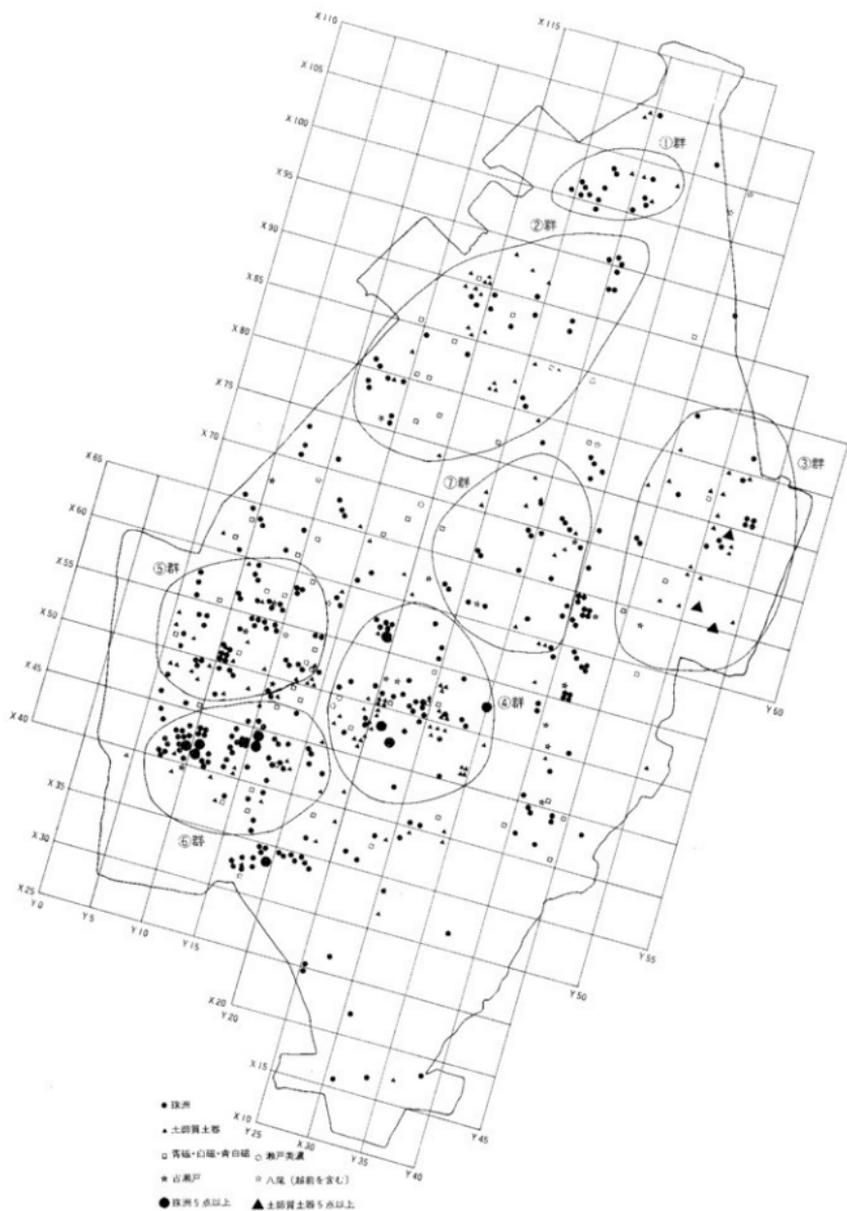
註1 じょうへのま遺跡は土師質土器がもう少し増える可能性がある。また、神田・若宮B・江上B遺跡は土師質

土器と珠洲の比率の差がもう少し縮まる可能性がある〔山本1985〕。

註2 蓮花寺遺跡の土師質土器の比率のみ個体数である。

註3 〔山本1985〕のなかで山本正敏氏が指摘している。

註4 南中田D遺跡の付瓦から五輪瓦や板石塔婆が多数確認されている。



第28図 中世土器出土分布図

### 3 中世土器の出土分布について

土師質土器・珠洲・中国製陶磁器・古瀬戸・八尾・越前・瀬戸美濃の出土地点を遺跡のグリッド図に落として、出土分布状況を見た。土器が比較的多く出土している部分をグルーピングし、それぞれを①～⑦群とした。(第28図) まず、各土器・陶磁器の分布状況を述べると、土師質土器はS D53(このうちの東西方向に延びる部分)以南には数点しか出土していないが、ほかは全体にわたり出土している。特に、③・④群で多く出土している。珠洲は土師質土器と同様に、S D53以南で数点しか出土していないほかは、全体に広がって出土している。特に、④・⑤・⑥群でまとめて出土している。中国製陶磁器は①群付近とS D53以南を除いて、全体に広がって出土している。②・④・⑤・⑥群に多い。S K18・142・145・3175以外は包含層からの出土である。古瀬戸は遺跡の中央部あたり(X45~60)に点在している。S K747のみ遺構に伴って出土した。八尾は遺跡の北東部と⑤群付近で出土している。瀬戸美濃は①群と②・⑦群付近で出土している。越前はS D53から1点出土している。次に、各群ごとにその構成を見てみると、①群は土師質土器と珠洲である。珠洲が主体となる。付近で八尾が2点出土している。②群は土師質土器と珠洲と中国製陶磁器である。土師質土器と珠洲が主体となる。③群は土師質土器と珠洲と中国製陶磁器である。土師質土器が主体となる。④群は土師質土器、珠洲、中国製陶磁器、古瀬戸、瀬戸美濃である。土師質土器と珠洲が主体となる。⑤群は土師質土器、珠洲、中国製陶磁器、八尾である。土師質土器と珠洲が主体となる。⑥群は土師質土器、珠洲、中国製陶磁器、古瀬戸である。珠洲が主体となる。⑦群は土師質土器と珠洲と古瀬戸である。土師質土器と珠洲が主体となる。また、各群で出土している土師質土器と珠洲の時期から、それぞれのおおよその時期は、①群は14世紀～15世紀、②群は12世紀～13世紀、③群は12世紀～13世紀、④群は14世紀～16世紀、⑤群は14世紀～15世紀、⑥群は12世紀～15世紀、⑦群は12世紀～15世紀である。分布図を全体的にみて、特に、④・⑤・⑥群で土師質土器・珠洲・中国製陶磁器などが多く出土している。逆に③群の南側(X45~60、Y45以東)、③群の北側(X85~100、Y40以東)で中世土器の出土が見られない。また、S D53以南で出土がまばらである。また、ひとつ時期のものが一定の場所に集中することなく、ある程度まとまりをもちながら広がる可以说える。

この分布図を遺構図と重ねてみると、おおよそ、①群～⑦群の土器のまとまった出土が見られるところに、掘立柱建物や穴などの遺構が検出されている。中世の遺構は、中世の包含層である黒褐色砂質土より掘り下げられている。このことから掘立柱建物の時期や居住場所の変化(土地の利用)などを検討できると考える。

なお、これについては河西が本書で考察している。

(押川)

注 ⑤・⑥群の珠洲は同一個体の可能性がある。

### 引用・参考文献 (遺構関係の文献は本文中では紙幅都合上特記してないがここに上げておいた。)

- ア 森藤幹也 1961 「古瀬戸」『陶器全集』19 平凡社  
秋田県教育委員会 1969 「山形県埋没建物遺跡第2次発掘調査概報」 秋田県教育委員会  
安達達津 1989 「富山市内での遺跡土器発見から」『富山県市古資料情報』No.19 富山県市古資料館  
イ 池野正男 1987 「射水丘陵における8世紀後半の須恵器産地」『大塚』第11号 富山考古学会  
池野正男 1988a 「標上遺跡A地区の土師器・須恵器について」『標上遺跡・塚越貝塚遺跡・発掘調査概報』小形町教育委員会  
池野正男 1988b 「射水丘陵における9・10世紀の須恵器産地」『大塚』第12号 富山考古学会  
石井清司 1984 「藤原朝出土の須恵器について」『京都府埋没文化財情報』第7号 財団法人京都府埋没文化財調査研究センター  
石井清司 1984 「藤原朝出土の須恵器について」『京都府埋没文化財情報』第2号 財団法人京都府埋没文化財調査研究センター  
石井 進 1987 「若園村赤湯遺跡調査が目的とする『大分県宇佐郡上記の歴史民俗資料館研究紀要』第1号  
市川慶之他 1989 「中央自動車道長野埋没文化財発掘調査報告書3—塩尻市内の2—」古田川西遺跡 財団法人 長野県埋没文化財センター  
伊藤博幸 1981 「若手帯における掘立柱建物の構造とその展開—古代・中世を中心に—」『西光田遺跡』水沢市教育委員会  
稲田孝司・沢田正昭 1978 「考査・遺物・土器」『平城宮跡発掘調査報告』Ⅱ(奈良国立文化財研究所30周年記念志(学報第40号)) 奈良国立文化財研究所  
ウ 上田典男・大竹憲昭・野村一寿 1989 「上水木遺跡」『中央自動車道長野埋没文化財発掘調査報告書』10 財団法人 長野県埋没文化財センター  
上野 章・押川憲子 1990 「井口城発掘調査概報」井口村教育委員会  
宇野隆夫 1982 「各種の土器計算方法について」『丹波岡山集』京都大学文学部考古学研究会  
宇野隆夫 1984 「後半期の須恵器」『史林』第67巻第6号 史学研究会  
宇野隆夫 1985 「古代の食器の変化と特質」『日本史研究』第280号 日本史研究会  
宇野隆夫 1988 「越中の国府・荘家・村落」『聖史学と考古学』(高井編三郎先生追悼記念論集) 興隆社

才 岡崎純一 1989 『鎌倉群出土土器等の編年』『京都府遺跡調査報告書』第11号(『藤京誌』) 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター  
 小笠原好彦 1979 『畿内および周辺地域における風立建物集落の展開』『考古学研究』第25巻第4号 考古学研究会  
 小笠原好彦・西 弘海・吉田恵二 1976 『遺物』土器『平城宮発掘調査報告書』Ⅳ(『奈良国立文化財研究所字報』第20号) 奈良国立文化財研究所  
 カ 柿田彰夫 1979 『佐治館について』『上新統綜理埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ(『下田・諏訪』) 埼玉県教育委員会  
 金田昌樹 1971 『奈良・平安朝の村落形態について』『史林』第54巻第3号 史学研究会  
 亀井明徳 1986 『日本貿易史研究』 岡崎書局  
 野村 勝 1981 『奈良道跡』『北陸自動車道道跡調査報告書』Ⅰ(『山形道跡編Ⅰ』) 富山県教育委員会  
 キ 岸本隆敏 1982 『奈良道跡の調査』 富山県教育委員会  
 岸本隆敏 1984 『奈良道跡の調査』 富山県教育委員会  
 岸本隆敏・田上浩幸 1986 『奈良道跡の調査』 富山県教育委員会  
 北野博司 1989 『編年の概要』『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産研究会  
 京田貞志 1976 『富山の石造美術』 巧芸出版  
 ク 久々義孝・岡本淳一郎・吉川知明 1987 『新開杉林道跡』 富山県教育委員会  
 國平三忠他 1979 『上浜田道跡』 神奈川県教育委員会  
 國平三忠・市川正史 1988 『穴久保道跡』Ⅱ 神奈川県埋蔵文化財センター  
 コ 高慶 李他 1981 『富山県上市町町域緊急発掘調査概要』 上市町教育委員会  
 高慶 李他 1982 『富山県上市町町域第2次緊急発掘調査概要』 上市町教育委員会  
 高慶 李他 1983 『富山県上市町町域第3次緊急発掘調査概要』 上市町教育委員会  
 高慶 李他 1984 『富山県上市町町域第4次緊急発掘調査概要』 上市町教育委員会  
 小正史・竹葉勇編、著 1967 『新設標準土色誌』日本造形産業株式会社  
 約見和夫 1984 『穴内における伊とカマドー北武蔵での焼付を中心として』『信濃』第36巻第4号 信濃史学会  
 サ 藤本隆敏 1989 『方形形穴建築の構造』『匠の建物—方形形穴建築の性格』『よみがえりの中』3 平凡社  
 清水孝洋 1985 『穴—縄古遺跡』『富山県八尾町古山道跡』『奈良国立文化財研究所字報』第18号 財団法人大分文化財センター  
 西澤洋平 1990 『結核における地産物の流通—古代北陸—』『北陸の古代手工業生産と流通の諸問題—』北陸中世土器研究会  
 坂井英一郎編 1979 『河川日本地名大辞典』16—富山県、河川部  
 坂井英他 1989 『新開バイパス関係発掘調査報告書』Ⅱ『新開埋蔵文化財調査報告書』第53集』 新潟県教育委員会、建設省新潟県工務事務所  
 佐賀県立九州陶磁文化館 1984 『北陸道から沖繩まで 国内出土の肥前陶磁』  
 シ 古田学編 1986 『色の手紙』小学館  
 セ 岡 清 1988 『越中における古代前期の土器群』『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編。石川県考古学研究会・北陸古代土器研究会  
 岡 清・河野直二 1990 『粟山横谷道跡・南中田A道跡・任海鎌倉道跡・南中田C道跡』(『富山県総合運動公園遺跡群発掘調査報告書』) 富山県埋蔵文化財センター  
 タ 高見宣雄・若内淳之 1984 『中ノ畑道跡』 三浦県教育委員会  
 田中道子・宇野隆夫 1989 『春野・秋光道跡発掘調査報告書』 福徳市教育委員会  
 ト 富山県史編纂委員会 1987 『越中史—過去—』『越中—過去—』富山大学考古学研究会編、第3集。富山大学人文学部考古学研究室  
 ナ 柳川 靖 1989 『三上—縄古遺跡の独立建物群について』『汲古考古学論叢』第4集 汲古学考古学論叢刊行会  
 中村 清 1981 『和歌山陶器の研究』 新泉社  
 嶋崎新一 1979 『正倉院陶器』『世界陶磁全集』2—日本古代。小学館  
 成田寿一郎 1986 『かみまろ』『手藝大工学部研究報告』第38巻第1号  
 成田寿一郎 1990 『日本土木技術史の研究』法政大学出版局  
 ニ 西 弘海 1982 『土器様式研究のその背景』『考古学論叢』(『小林行雄博士古稀記念論文集』) 平凡社  
 西 弘海・小笠原好彦 1976 『考察』土器『平城宮発掘調査報告書』Ⅳ(『奈良国立文化財研究所字報』第26号) 奈良国立文化財研究所  
 ホ 橋本久和 1974 『山形村の考古学的研究—高尾における二、三の遺跡調査から—』『大分文化誌』第1巻第2号 財団法人大分文化財センター  
 橋本正幸 1984 『越中—中世遺物のあり方について』『北陸自動車道道跡調査報告書』Ⅰ(『大分文化誌』) 上市町教育委員会  
 藤田正三 1976 『古代・中世の集落』『考古学研究』第23巻第4号 考古学研究会  
 藤田正三 1984 『古瀬戸概説』『美濃陶磁史論叢』Ⅱ 土岐市  
 藤田雅雄 1989 『中世土器系論—加賀地方の土器群を中心として—』『北陸の考古学』Ⅱ(『石川県考古学研究会誌』第32号) 石川県考古学研究会  
 藤田雅雄 1985 『任海道跡試掘調査報告書』富山県教育委員会  
 藤田雅雄 1986 『大分県道跡試掘調査報告書』富山県教育委員会  
 吉川知明 1989 『山形道跡試掘調査報告書』富山県教育委員会  
 吉川知明 1990 『平成元年富山県内道跡試掘調査概要』富山県教育委員会  
 吉川知明他 1990 『富山県任海道跡試掘調査概要』富山県教育委員会  
 マ 前川 要 1989a 『平安時代における緑釉磁器の編年的研究』『古代文化』第41巻第5号 財団法人古代学協会  
 前川 要 1989b 『平安時代における緑釉磁器の緑式の研究(上)』(下)『古代文化』第41巻第8号、第41巻第10号 財団法人古代学協会  
 藤村一志 1981 『日露・南洋の古墳発掘の古墳学概論』『印田近世集』 魚沼市教育委員会  
 馬和利雄 1991 『越中の国境、または国境の都市—いわゆる方形穴建築地における中世都市論の試み—』『青山考古』第9号  
 ミ 宮田達一 1984 『越中—中世遺物の発掘』『北陸自動車道道跡調査報告書』上市町編纂、総括編—Ⅰ。上市町教育委員会  
 宮田達一 1988 『越中の古代埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ『北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編。石川県考古学研究会・北陸古代土器研究会  
 宮田達一・宇野隆夫・酒井重洋 1988 『越中—北陸の中世土器—陶磁器—漆器』北陸中世土器研究会  
 宮田達一・高慶 李 1985 『調査の成果』富山県上市町町域第5次緊急発掘調査概要。上市町教育委員会  
 宮本幸雄他 1982 『安田道跡』富山県津川市安田。奇町道跡発掘調査報告書。津川市教育委員会  
 三浦隆雄 1976 『「古」の土器の文化史2』法政大学出版局  
 三浦隆雄 1989 『平安時代の越中—越中—』『越中—過去—』富山大学考古学研究会編、第3集。富山大学人文学部考古学研究室  
 ヨ 百瀬正信 1986 『平安時代の越中陶器』『越中—過去—』富山大学考古学研究会編、第3集。富山大学人文学部考古学研究室  
 ヤ 西岡眞実 1988 『越中—中世の集落—』『越中—過去—』富山大学考古学研究会編、第3集。富山大学人文学部考古学研究室  
 山本正教 1985a 『遺物・中世』『じょうへのま連絡—C—K地区の調査—』入野町教育委員会  
 山本正教 1985b 『調査の成果—中世の遺物について—』『じょうへのま連絡—C—K地区の調査—』入野町教育委員会  
 山本正教 1985c 『調査の成果—独立建物について—』『じょうへのま連絡—C—K地区の調査—』入野町教育委員会  
 料 横沢賢次郎・森田勉 1978 『太宰府出土の輸入中国陶器について—型式分類と編年を中心として—』『九州歴史資料研究論集』4 九州歴史資料研究会  
 吉岡謙雄 1989a 総論 珠洲の名産。珠洲市立珠洲歴史資料館  
 吉岡謙雄 1989b 『日本道城の上器—陶磁—中世編』六興出版  
 吉川金次 1986 『糸・響・鏡』(『もとの人間』文化史 51) 法政大学出版局  
 吉田金二 1984 『奈良生業の展開』土器『日本考古学』(下) 若葉閣  
 西條義春 1987 『内川島』六水町教育委員会

版 圖

# 図版凡例

- 1 ここには遺物・遺構の実測図と写真を取めた。
- 2 実測図には「図版」、写真には「写真図版」と明記しそれぞれに通し番号を付した。
- 3 遺構実測図の縮尺は竪穴住居跡 (1/80)、掘立柱建物 (1/100)、土坑 (1/80) を基本とし、異なるものは図中に示してある。
- 4 遺物実測図は土器・陶磁器 (1/4)、金属製品 (1/2)、石製品・石造物は (1/4・1/6) を基本とし異なるものは図中に縮尺を示してある。
- 5 遺物写真には写真毎に右下隅に図版内の通し番号を、左下隅には遺物実測図の番号を示してある。
- 6 古代土器の拓本は断面の左に外面、右に内面を示してある。
- 7 遺構・遺物実測図には下のスクリーントーンを使用した。

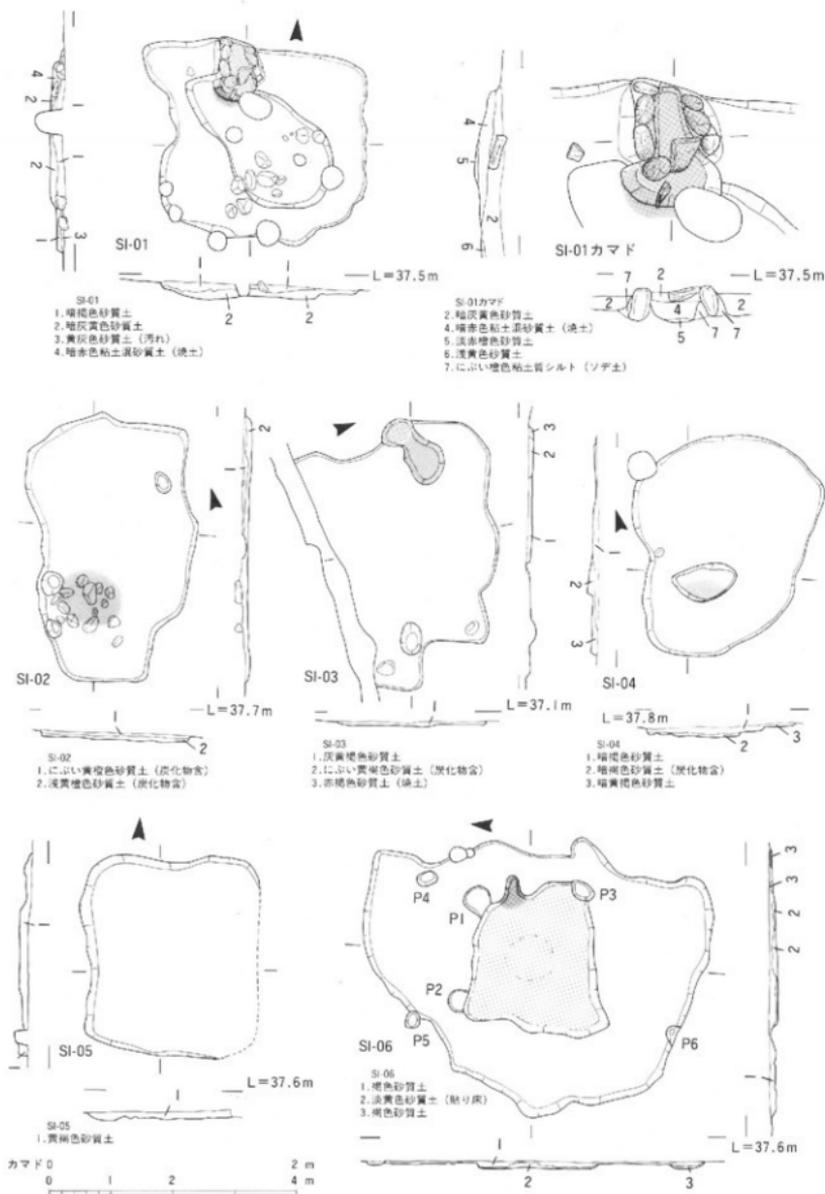


# 図版目次

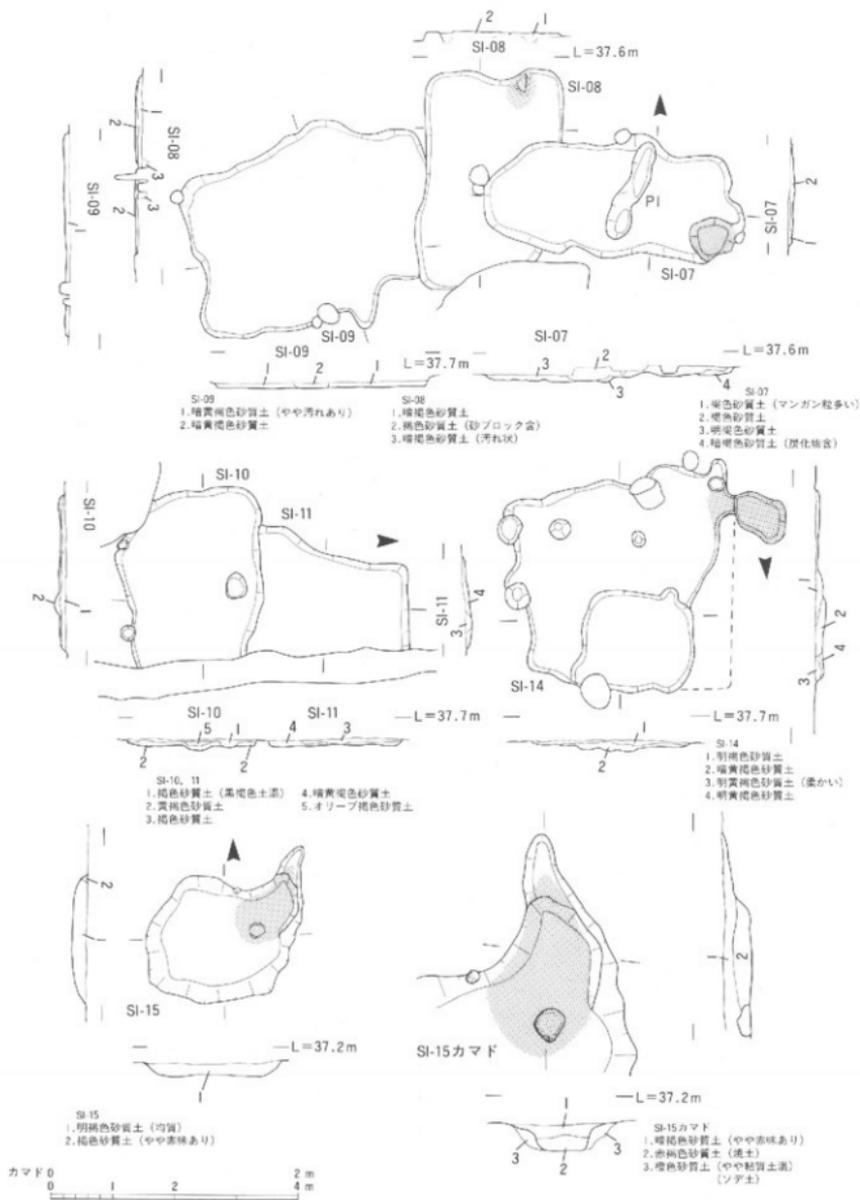
図版1 竪穴住居跡	図版16 竪穴住居跡	図版31 掘立柱建物	図版46 古代の土器(9)
図版2 竪穴住居跡	図版17 竪穴住居跡	図版32 土坑(1)	図版47 古代の土器(10)
図版3 竪穴住居跡	図版18 竪穴住居跡	図版33 土坑(2)	図版48 古代の土器(11)
図版4 竪穴住居跡	図版19 掘立柱建物	図版34 土坑(3)	図版49 古代の土器(12)
図版5 竪穴住居跡	図版20 掘立柱建物	図版35 土坑(4)	図版50 古代の土器(13)
図版6 竪穴住居跡	図版21 掘立柱建物	図版36 土坑(5)	図版51 古代の土器(14)
図版7 竪穴住居跡	図版22 掘立柱建物	図版37 土坑(6)	図版52 中・近世の出土土器・陶磁器(1)
図版8 竪穴住居跡	図版23 掘立柱建物	図版38 古代の土器(1)	図版53 中・近世の出土土器・陶磁器(2)
図版9 竪穴住居跡	図版24 掘立柱建物	図版39 古代の土器(2)	図版54 中・近世の出土土器・陶磁器(3)
図版10 竪穴住居跡	図版25 掘立柱建物	図版40 古代の土器(3)	図版55 中・近世の出土土器・陶磁器(4)
図版11 竪穴住居跡	図版26 掘立柱建物	図版41 古代の土器(4)	図版56 中・近世の出土土器・陶磁器(5)
図版12 竪穴住居跡	図版27 掘立柱建物	図版42 古代の土器(5)	図版57 中・近世の出土土器・陶磁器(6)
図版13 竪穴住居跡	図版28 掘立柱建物	図版43 古代の土器(6)	図版58 金属製品(1)
図版14 竪穴住居跡	図版29 掘立柱建物	図版44 古代の土器(7)	図版59 金属製品(2)
図版15 竪穴住居跡	図版30 掘立柱建物	図版45 古代の土器(8)	図版60 石製品と石造物

# 写真図版目次

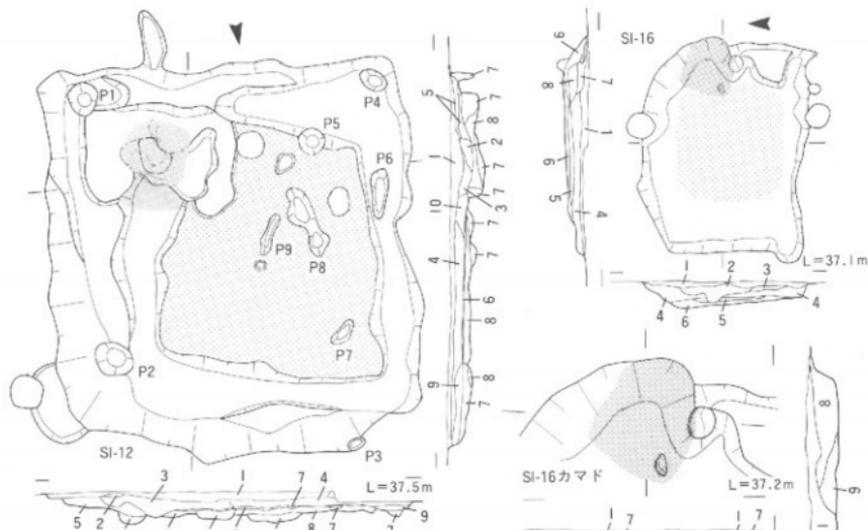
写真図版1 周辺の遺跡	写真図版20 竪穴住居跡	写真図版39 古代土器	写真図版58 古代土器
写真図版2 遺跡全体	写真図版21 溝	写真図版40 古代土器	写真図版59 古代土器
写真図版3 遺跡全景	写真図版22 掘立柱建物	写真図版41 古代土器	写真図版60 古代土器
写真図版4 竪穴住居跡	写真図版23 掘立柱建物	写真図版42 古代土器	写真図版61 古代土器
写真図版5 竪穴住居跡	写真図版24 掘立柱建物	写真図版43 古代土器	写真図版62 古代土器
写真図版6 竪穴住居跡	写真図版25 掘立柱建物	写真図版44 古代土器	写真図版63 古代土器
写真図版7 竪穴住居跡	写真図版26 掘立柱建物	写真図版45 古代土器	中・近世土器
写真図版8 竪穴住居跡	写真図版27 掘立柱建物・溝	写真図版46 古代土器	写真図版64
写真図版9 竪穴住居跡	写真図版28 溝・土坑	写真図版47 古代土器	中・近世土器など
写真図版10 竪穴住居跡	写真図版29 土坑	写真図版48 古代土器	写真図版65 金属製品
写真図版11 竪穴住居跡	写真図版30 土坑	写真図版49 古代土器	写真図版66 墨書土器
写真図版12 竪穴住居跡	写真図版31 土坑・穴	写真図版50 古代土器	古代土器の成形・調整技法
写真図版13 竪穴住居跡	写真図版32 穴	写真図版51 古代・中世土器	写真図版67 古代土器
写真図版14 竪穴住居跡	写真図版33 鉄器出土状況等	写真図版52 中世土器	の成形・調整技法
写真図版15 竪穴住居跡	写真図版34 古代土器	写真図版53 中世土器	写真図版68 古代土器
写真図版16 竪穴住居跡	写真図版35 古代土器	写真図版54 中世土器	の成形・調整技法
写真図版17 竪穴住居跡	写真図版36 古代土器	写真図版55 中・近世土器	
写真図版18 竪穴住居跡	写真図版37 古代土器	写真図版56 中・近世土器	
写真図版19 竪穴住居跡	写真図版38 古代土器	写真図版57 古代土器	



図版I 竪穴住居跡 (SI-01, 02, 03, 04, 05, 06) (1:80, カマド1:40)



図版2 竪穴住居跡 (SI-07, 08, 09, 10, 11, 14, 15) (1:80, カマド1:40)

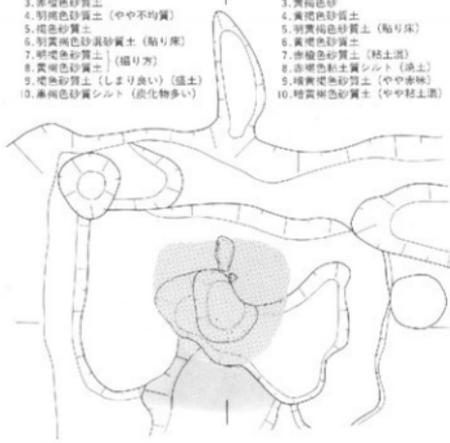


SI-12

1. 褐色砂質土 (マンガン多く、汚れている)
2. 赤褐色粘土質シルト (焼土)
3. 赤褐色砂質土
4. 明褐色砂質土 (やや不均質)
5. 褐色砂質土
6. 別黄褐色砂混砂質土 (陥り層)
7. 明褐色砂質土 (陥り方)
8. 赤褐色砂質土 (しまり良い)
9. 褐色砂質土 (しまり良い) (底土)
10. 赤褐色砂質シルト (炭化物多い)

SI-16, 16カマド

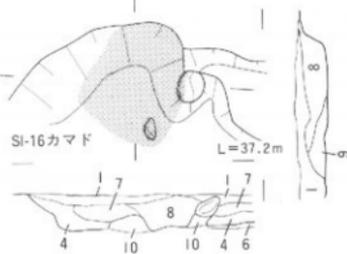
1. 別黄褐色砂質土 (均質)
2. 褐色砂質土
3. 黄褐色砂
4. 黄褐色砂質土
5. 別黄褐色砂質土 (陥り床)
6. 黄褐色砂質土
7. 赤褐色砂質土 (粘土混)
8. 赤褐色粘土質シルト (底土)
9. 暗褐色砂質土 (やや赤味)
10. 別黄褐色砂質土 (やや粘土混)



SI-12カマド

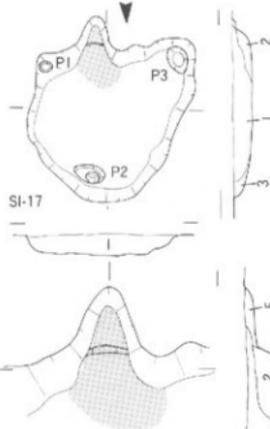
L=37.5m

SI-12カマド  
(SI-12と同じ)  
5'の再堆積土



SI-16カマド

L=37.2m



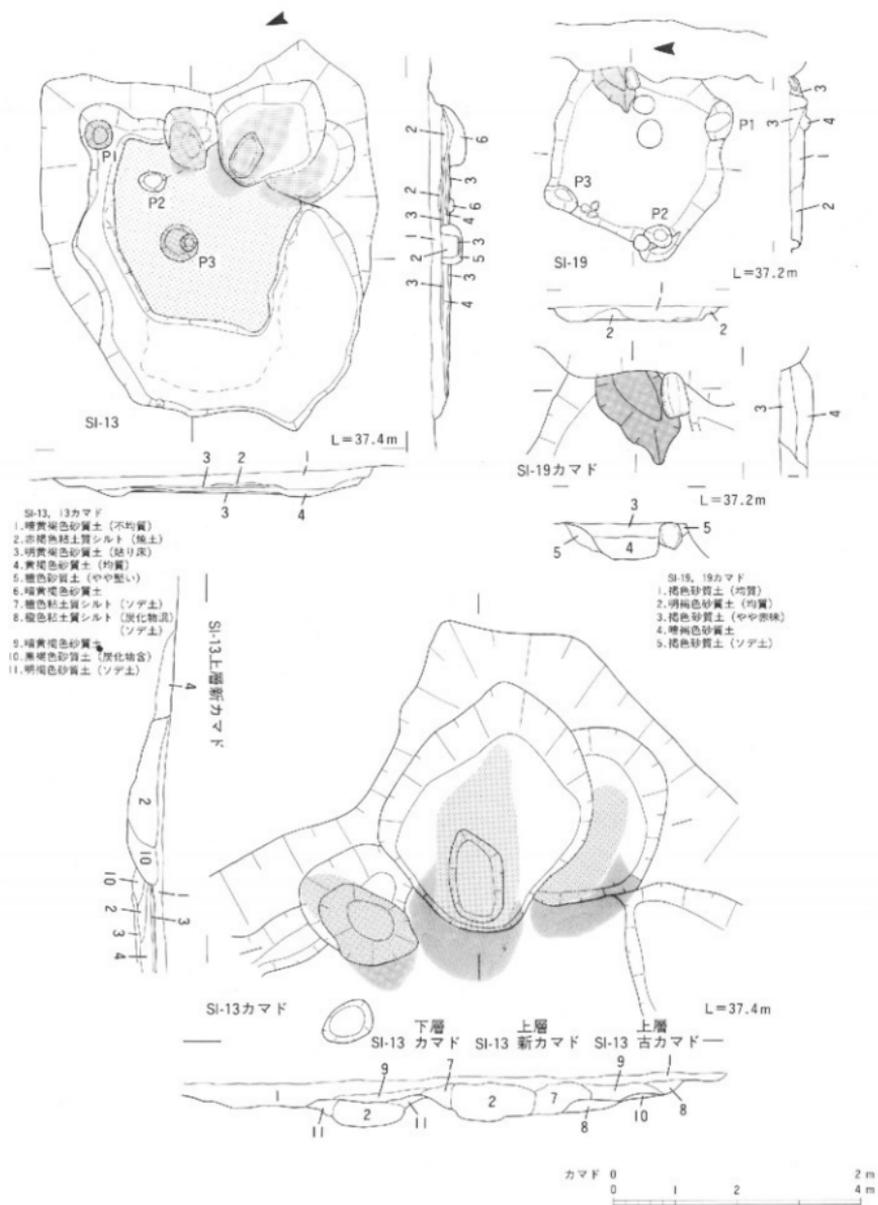
SI-17

SI-17カマド

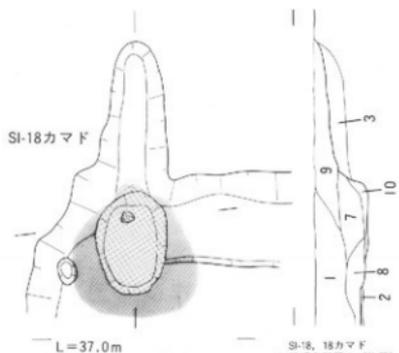
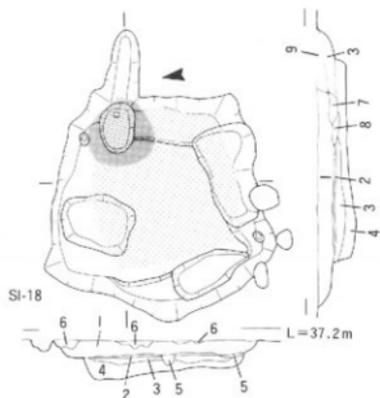
L=37.2m

- SI-17, 17カマド
1. 別黄褐色砂質土 (均質)
  2. 赤褐色砂質土 (焼土)
  3. 黄褐色砂質土
  4. 褐色砂質土
  5. 暗褐色砂質土 (微塵)

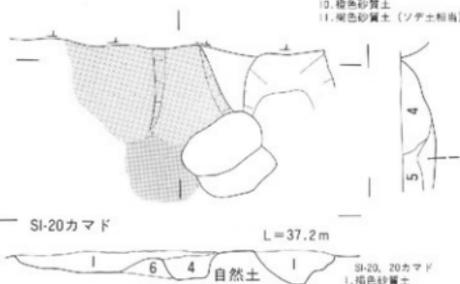
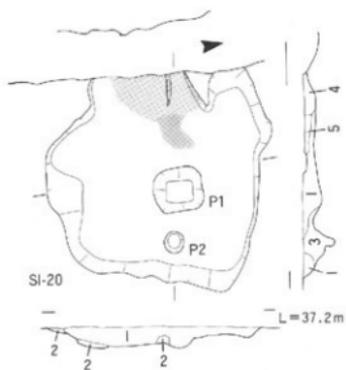
図版3 竈穴住居跡 (SI-12, 16, 17) (1:80, カマド1:40)



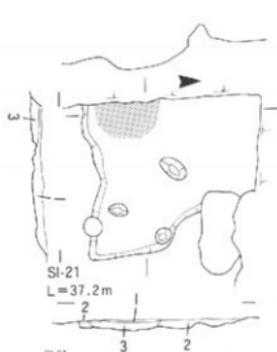
図版4 竪穴住居跡 (SI-13, 19) (1:80, カマド1:40)



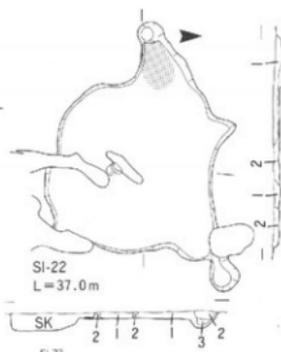
- SI-18, 18カマド  
 1. 暗褐色砂質土 (地層)  
 2. 明褐色砂質土 (船り床)  
 3. 褐色砂質土 (掘り方)  
 4. 黄褐色砂質土  
 5. 暗黄褐色砂質土  
 6. 黄褐色砂質土 (堀込)  
 7. 灰赤色砂質土 (礎土)  
 8. 黒褐色砂質土  
 9. 暗褐色砂質土 (礎土)  
 10. 褐色砂質土  
 11. 褐色砂質土 (ソデ土相高)



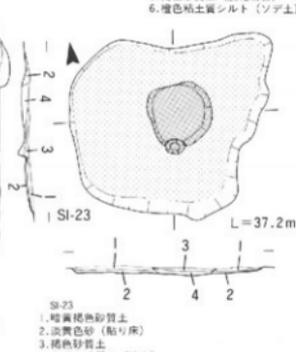
- SI-20, 20カマド  
 1. 褐色砂質土  
 2. 明褐色砂質土  
 3. 明褐色砂質土  
 4. 赤褐色砂質土 (礎土)  
 5. 暗褐色砂質土 (灰化層)  
 6. 褐色粘土質シルト (ソデ土)



- SI-21  
 1. 暗黄褐色砂質土 (河床状)  
 2. 暗黄褐色砂質土 (やや明るい)  
 3. 赤褐色砂質土 (礎土、灰化層)



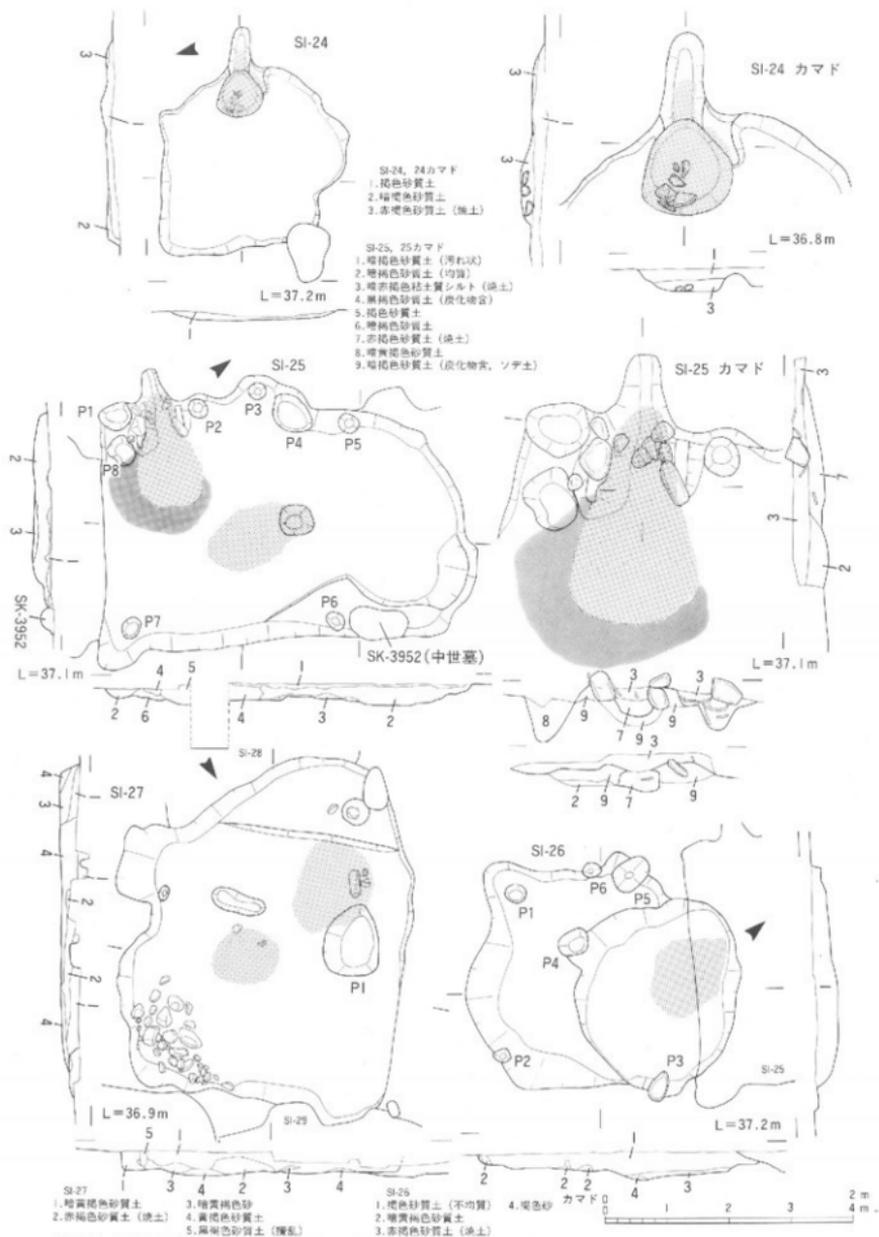
- SI-22  
 1. 暗黄褐色砂質土  
 2. 褐色砂質土  
 3. 黄褐色砂



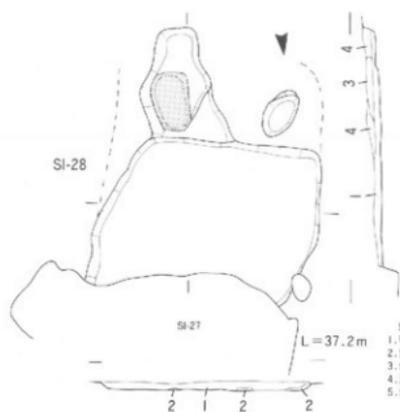
- SI-23  
 1. 暗黄褐色砂質土  
 2. 淡黄色砂 (船り床)  
 3. 褐色砂質土  
 4. 赤褐色砂質土 (礎土)

カマド 0 1 2 3 4 m

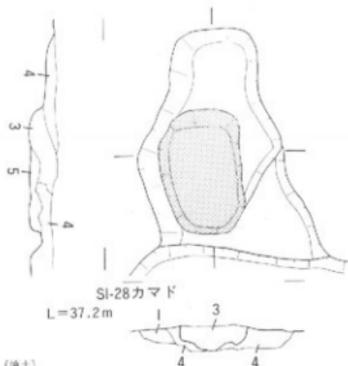
図版 5 竪穴住居跡 (SI-18, 20, 21, 22, 23) (1:80, カマド 1:40)



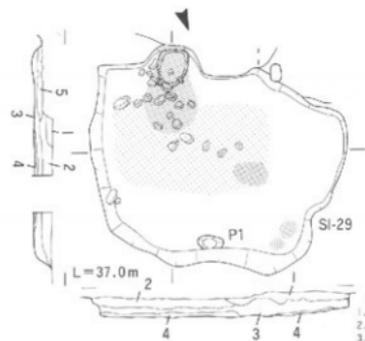
図版6 竪穴住居跡 (SI-24, 25, 26, 27) (1:80, カマド1:40)



SI-28, 28カマド  
 1. 暗褐色砂質土  
 2. 炭化砂  
 3. 赤褐色粘土質シルト (焼土)  
 4. 淡赤褐色砂質土  
 5. 赤褐色砂質土



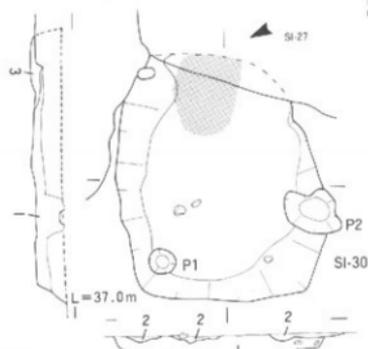
SI-28カマド  
 L=37.2m



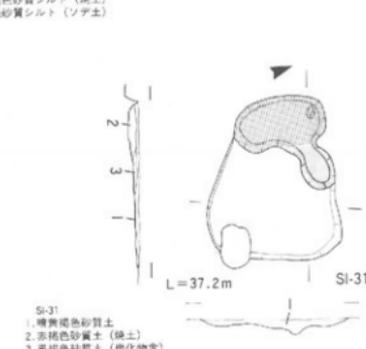
SI-29, 29カマド  
 1. 暗褐色砂質土 (汚れひどい)  
 2. 濃い赤褐色砂質土  
 3. 黒褐色砂質土  
 4. 黄褐色砂主体 (胎り床)  
 5. 赤褐色砂質シルト (焼土)  
 6. 褐色砂質シルト (ソデ土)



SI-29カマド  
 L=37.0m

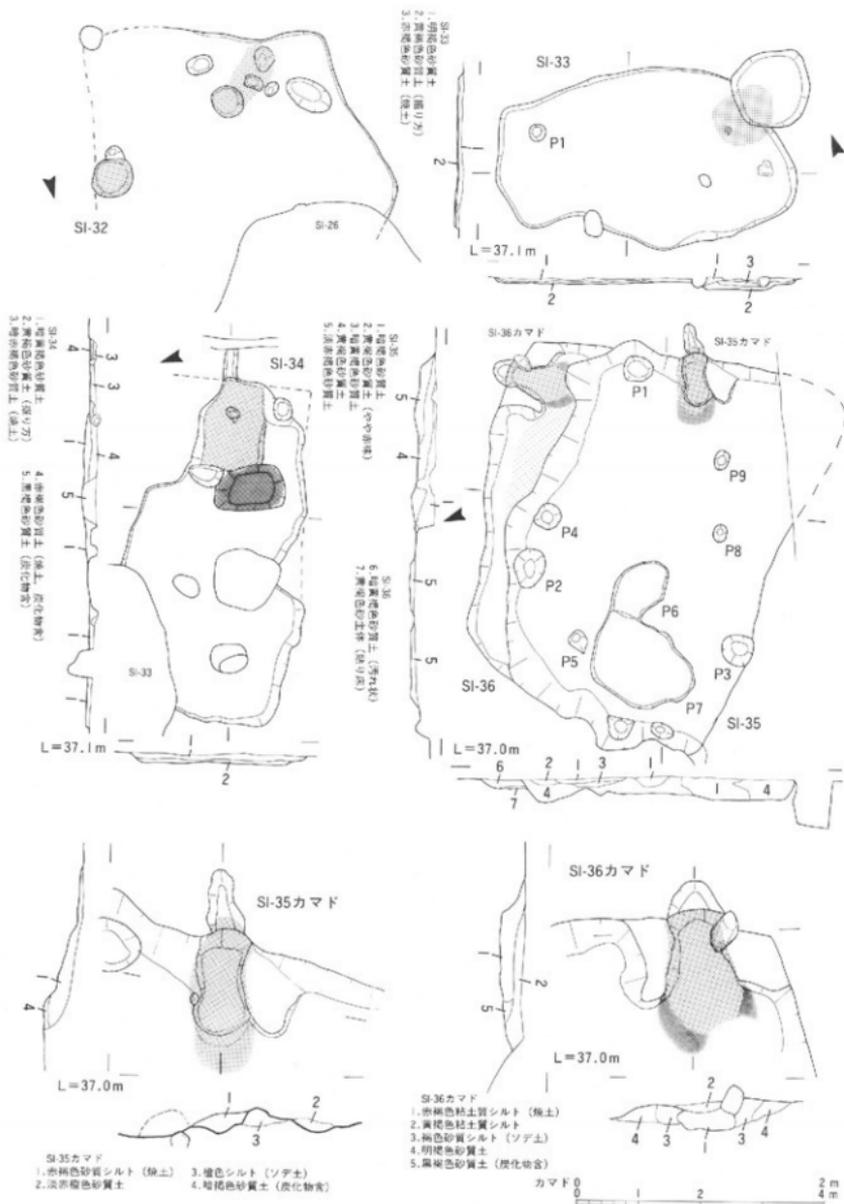


SI-30  
 1. 暗褐色砂質土 (やや汚れ)  
 2. 炭化砂  
 3. 赤褐色砂質土 (焼土)

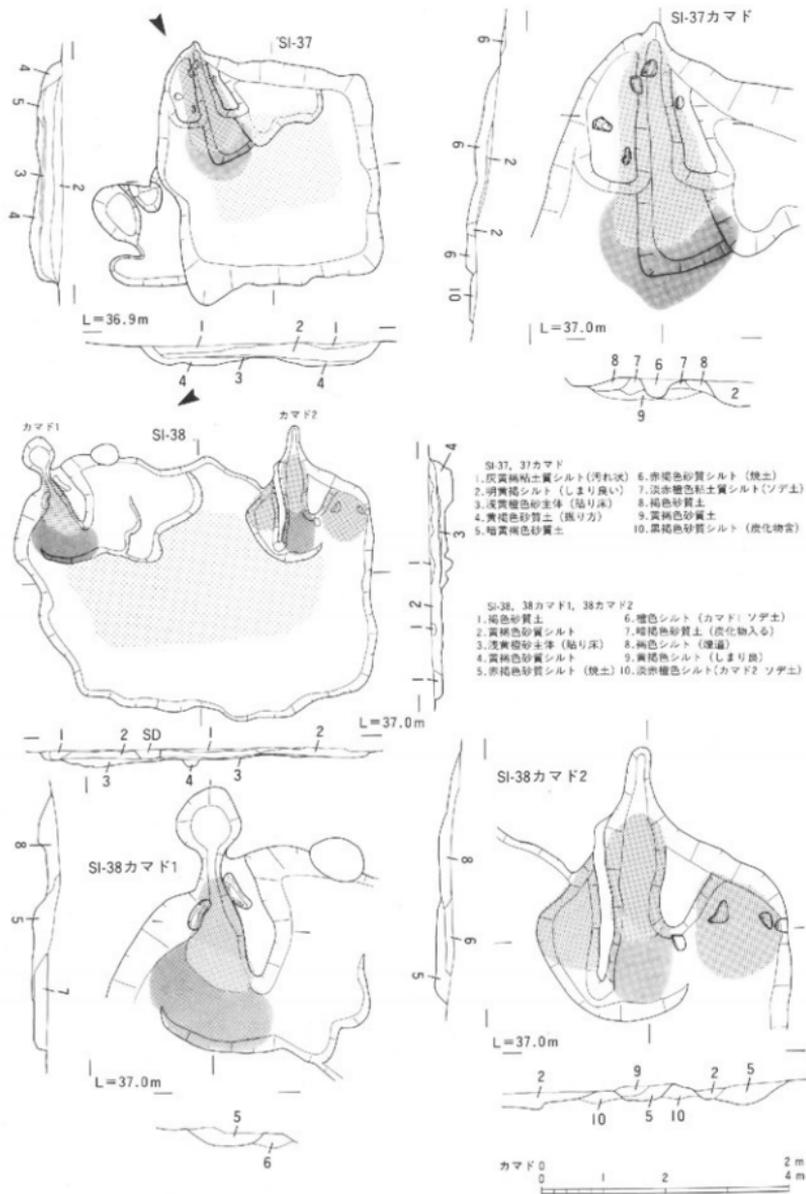


SI-31  
 1. 暗褐色砂質土  
 2. 赤褐色砂質土 (焼土)  
 3. 黒褐色砂質土 (炭化物質)

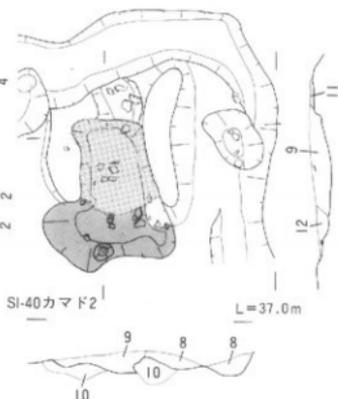
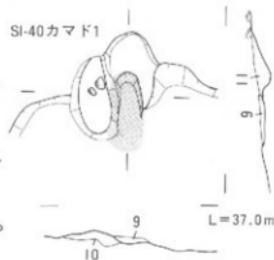
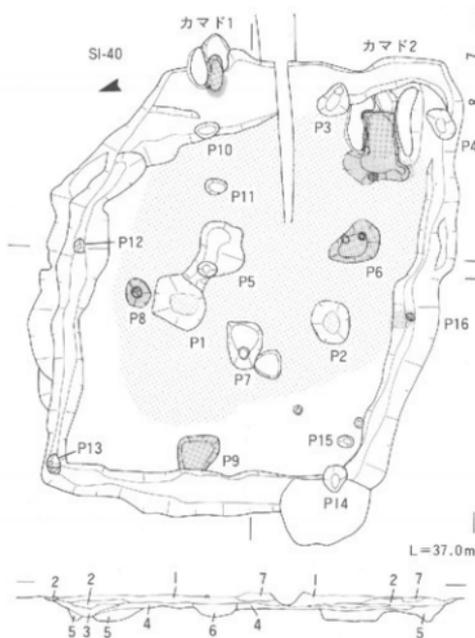
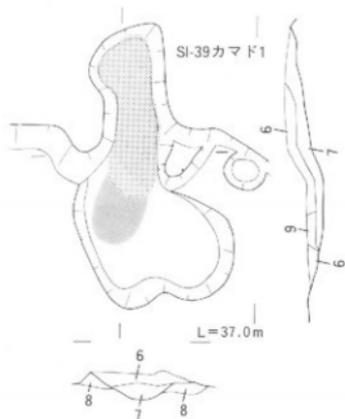
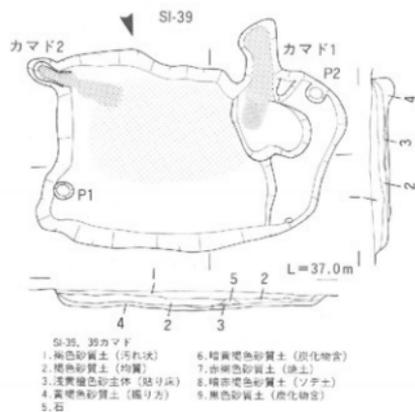




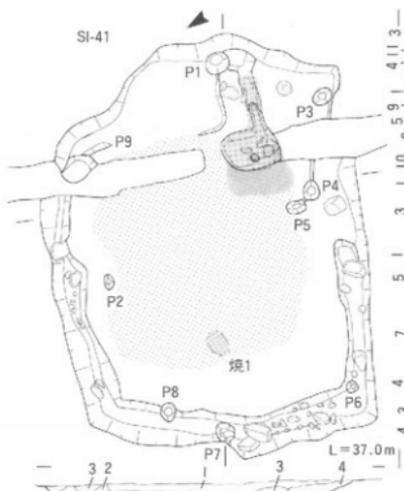
図版 8 竪穴住居跡 (SI-32, 33, 34, 35, 36) (1 : 80, カマド 1 : 40)



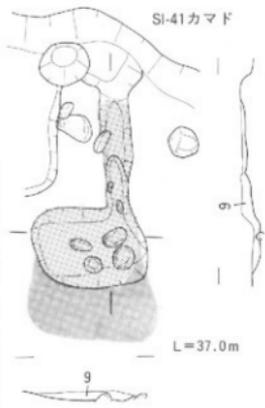
図版9 竪穴住居跡(SI-37, 38)(1:80, カマド1:40)



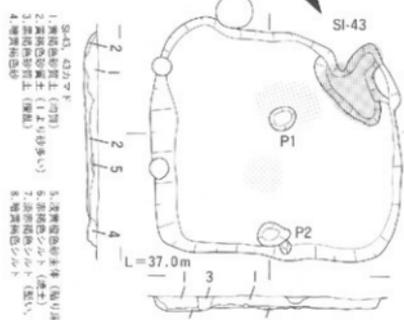
図版10 竪穴住居跡 (SI-39, 40) (1:80, カマド1:40)



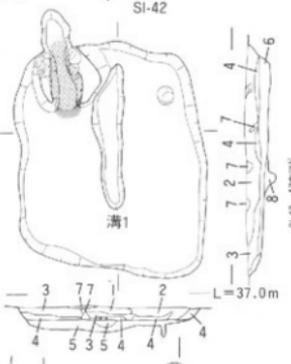
- SI-41, 43カマド
1. 赤褐色シルト (埋入)
  2. 赤褐色シルト (埋入)
  3. 赤褐色シルト (埋入)
  4. 赤褐色シルト (埋入)
  5. 赤褐色シルト (埋入)
  6. 赤褐色シルト (埋入)
  7. 赤褐色シルト (埋入)
  8. 赤褐色シルト (埋入)
  9. 赤褐色シルト (埋入)



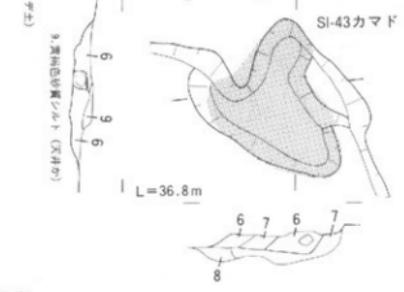
- SI-41カマド
1. 赤褐色シルト (埋入)
  2. 赤褐色シルト (埋入)
  3. 赤褐色シルト (埋入)
  4. 赤褐色シルト (埋入)
  5. 赤褐色シルト (埋入)
  6. 赤褐色シルト (埋入)
  7. 赤褐色シルト (埋入)
  8. 赤褐色シルト (埋入)
  9. 赤褐色シルト (埋入)



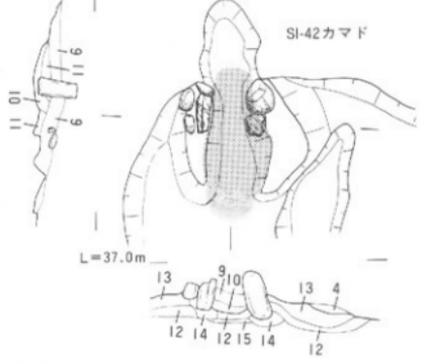
- SI-43, 43カマド
1. 赤褐色シルト (埋入)
  2. 赤褐色シルト (埋入)
  3. 赤褐色シルト (埋入)
  4. 赤褐色シルト (埋入)
  5. 赤褐色シルト (埋入)
  6. 赤褐色シルト (埋入)
  7. 赤褐色シルト (埋入)
  8. 赤褐色シルト (埋入)
  9. 赤褐色シルト (埋入)



- SI-42, 42カマド
1. 赤褐色シルト (埋入)
  2. 赤褐色シルト (埋入)
  3. 赤褐色シルト (埋入)
  4. 赤褐色シルト (埋入)
  5. 赤褐色シルト (埋入)
  6. 赤褐色シルト (埋入)
  7. 赤褐色シルト (埋入)
  8. 赤褐色シルト (埋入)
  9. 赤褐色シルト (埋入)



- SI-43カマド
1. 赤褐色シルト (埋入)
  2. 赤褐色シルト (埋入)
  3. 赤褐色シルト (埋入)
  4. 赤褐色シルト (埋入)
  5. 赤褐色シルト (埋入)
  6. 赤褐色シルト (埋入)
  7. 赤褐色シルト (埋入)
  8. 赤褐色シルト (埋入)
  9. 赤褐色シルト (埋入)

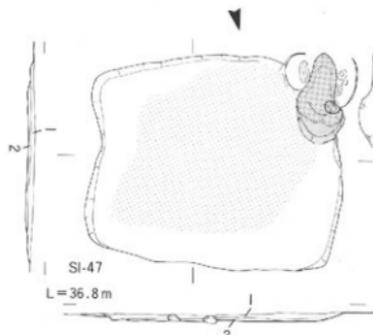


- SI-42カマド
1. 赤褐色シルト (埋入)
  2. 赤褐色シルト (埋入)
  3. 赤褐色シルト (埋入)
  4. 赤褐色シルト (埋入)
  5. 赤褐色シルト (埋入)
  6. 赤褐色シルト (埋入)
  7. 赤褐色シルト (埋入)
  8. 赤褐色シルト (埋入)
  9. 赤褐色シルト (埋入)

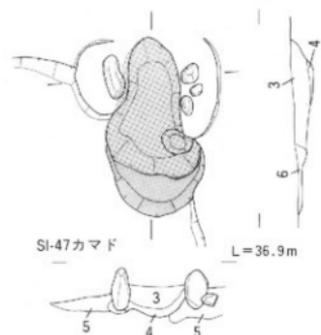


図版11 竪穴住居跡 (SI-41, 42, 43) (1:80, カマド1:40)



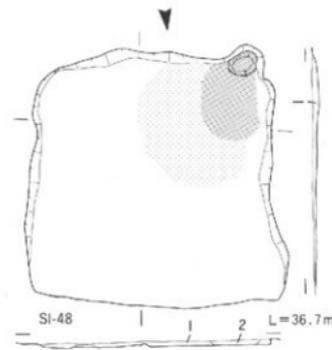


SI-47  
L=36.8m



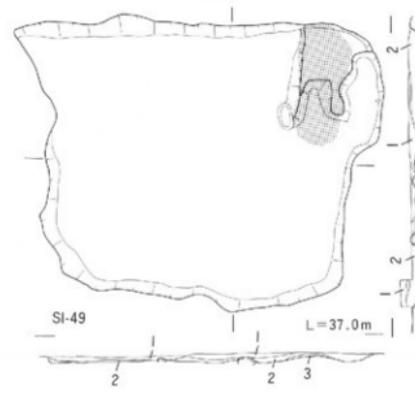
SI-47カマド  
L=36.9m

- SI-47, 47カマド  
 1. 黄褐色砂質土 (しまり層)  
 2. 淡黄色砂質土 (灰り層)  
 3. 赤褐色土質シルト (灰土)  
 4. 赤褐色シルト  
 5. 黄褐色シルト (ソチ土)  
 6. 黄褐色砂質シルト (灰土砂土)



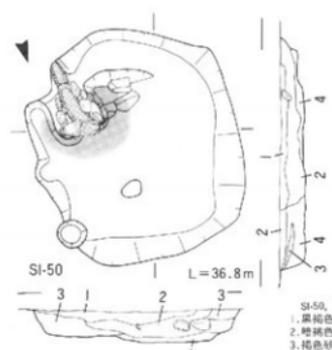
SI-48  
L=36.7m

- SI-48  
 1. 暗黄褐色砂質土 (汚れ状)  
 2. 赤褐色砂質土 (灰土)



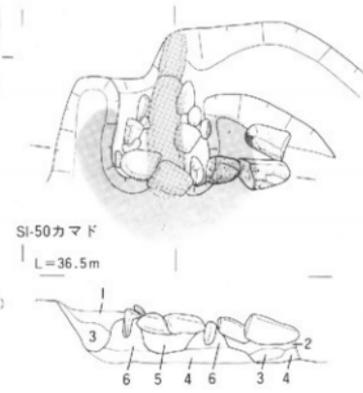
SI-49  
L=37.0m

- SI-49  
 1. 黄褐色砂質土 (暗色部)  
 2. 黄褐色砂質土  
 3. 赤褐色砂質土



SI-50  
L=36.8m

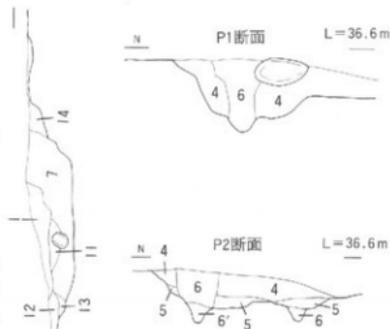
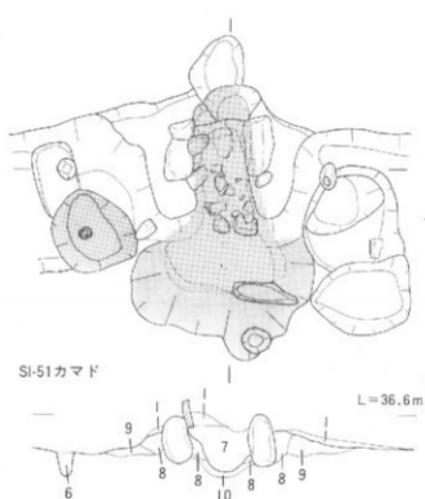
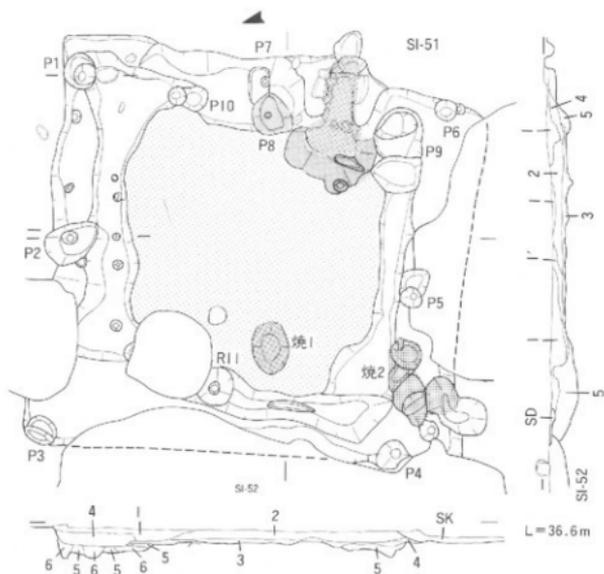
- SI-50, 50カマド  
 1. 黄褐色砂質土 (黄緑ブロック層)  
 2. 暗褐色砂質土  
 3. 褐色砂質土  
 4. 暗黄褐色砂質土  
 5. 暗黄褐色砂質土  
 6. 暗褐色シルト (ソチ土)



SI-50カマド  
L=36.5m



図版13 竪穴住居跡 (SI-47, 48, 49, 50) (1:80, カマド1:40)

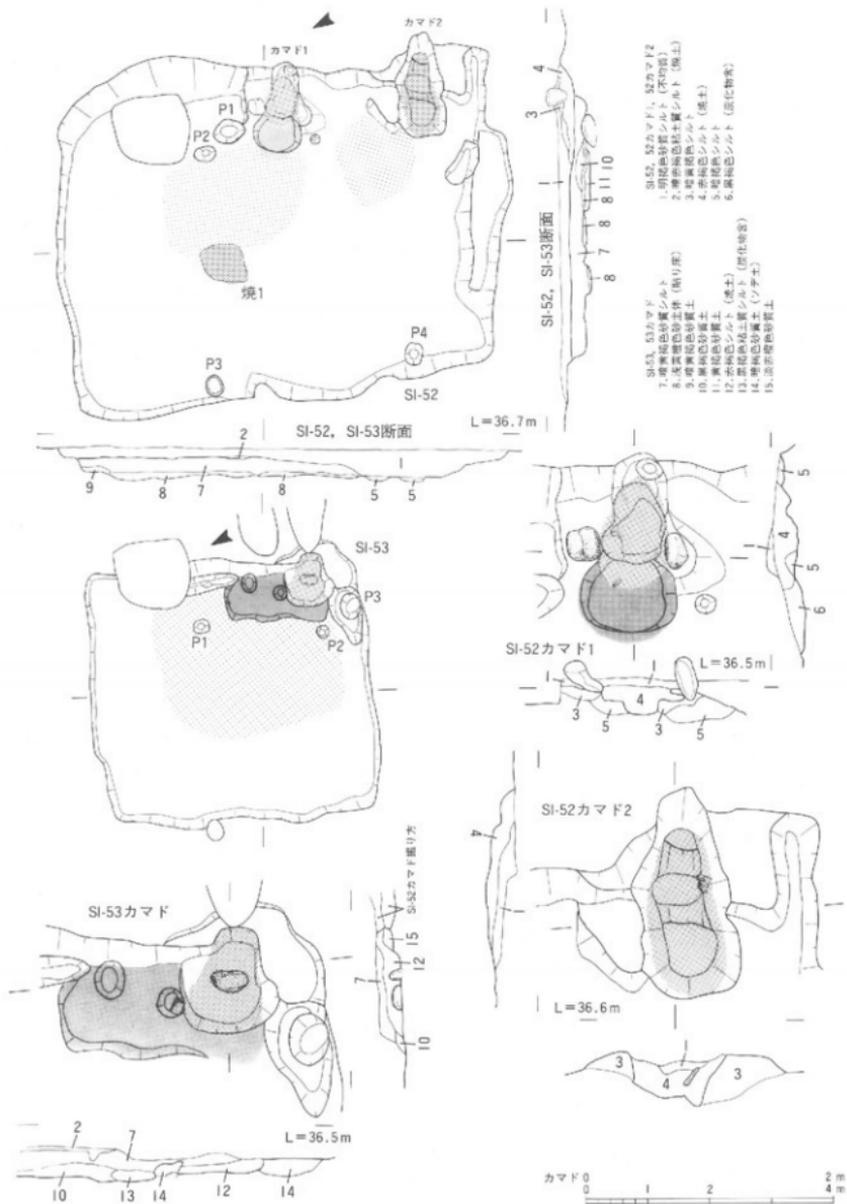


SI-51, 51カマド

1. 明褐色砂質土 (やや赤味)
2. 灰オリーブ色和土質シルト
3. 灰黄褐色砂主体 (足り床)
4. 黄褐色砂質シルト (土まり具、盛土)
5. 黄褐色砂質土 (土まり基)
6. 褐色砂質土 (柱穴埋土)
7. 赤褐色シルト (敷土)
8. 淡茶褐色シルト (ソデ土)
9. 明褐色砂質土
10. 淡褐色砂質土
11. 赤褐色砂
12. 黄褐色シルト (炭化物層)
13. 黒褐色シルト (黄砂層)
14. 暗黄褐色砂質シルト (煙燻)
- 6'. 褐色砂質土 (黒褐色土混)

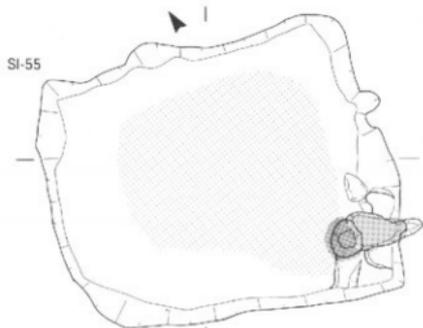
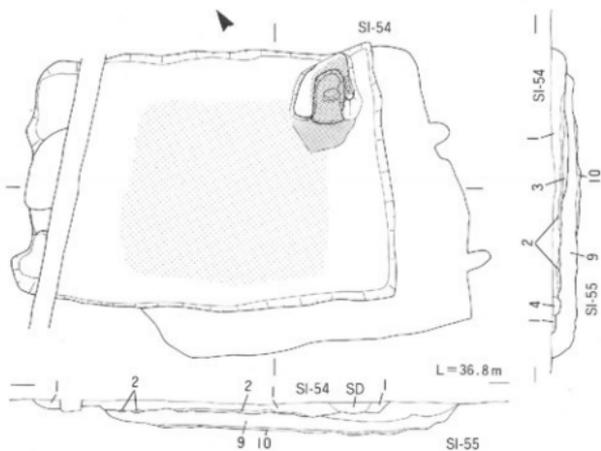


図版14 竪穴住居跡 (SI-51) (1:80, カマド1:40)

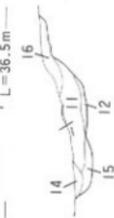
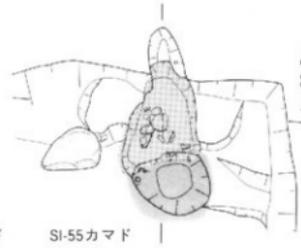
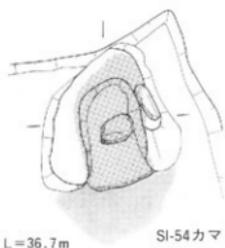
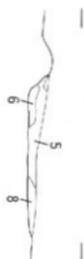


図版15 竪穴住居跡 (SI-52, 53) (1 : 80, カマド1 : 40)

(左側) 4本の柱脚跡 (柱石)  
 (中央) 1本の柱脚跡 (柱石)  
 (右側) 4本の柱脚跡 (柱石)  
 (土間) 4カ所の柱礎  
 土間厚約1.5m  
 土間厚約1.5m  
 土間厚約1.5m  
 土間厚約1.5m  
 土間厚約1.5m  
 土間厚約1.5m  
 土間厚約1.5m

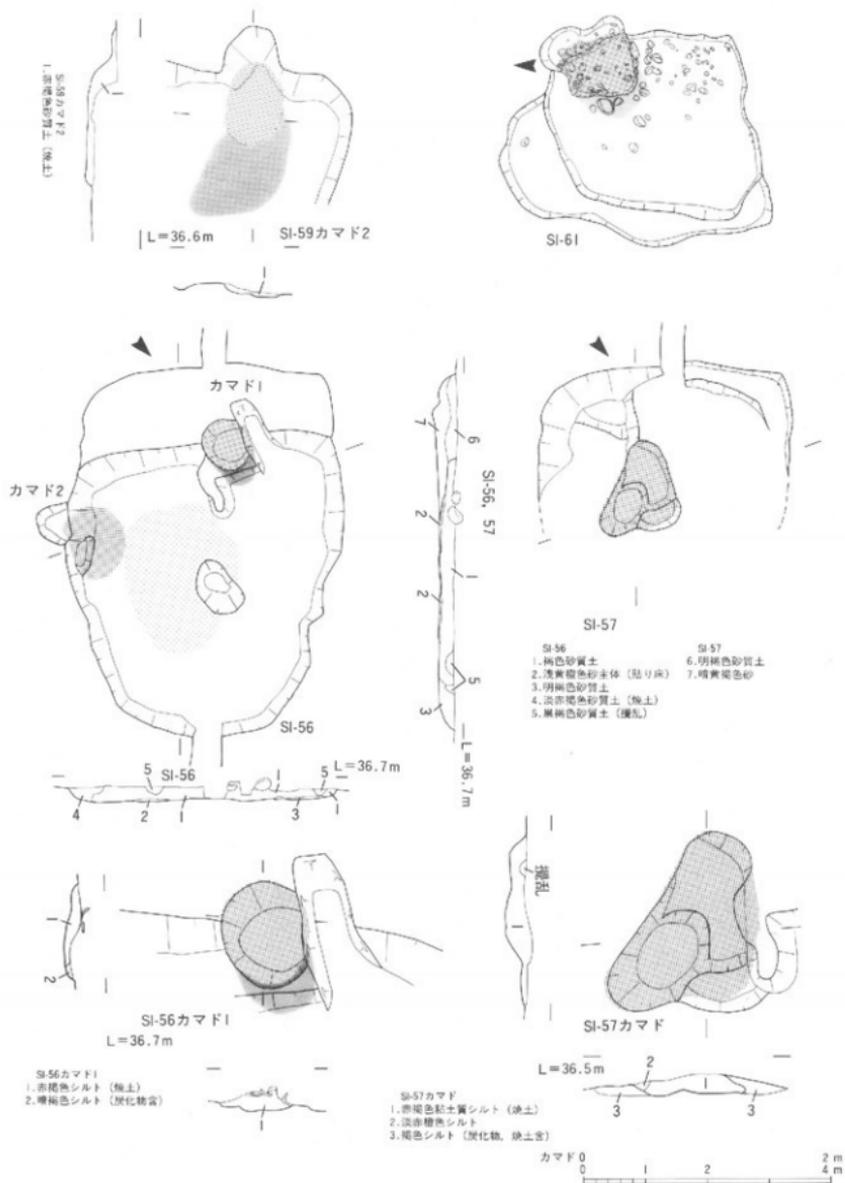


SI-55, 15カマド  
 9. 灰層厚約10cm (灰層)  
 10. 灰層厚約10cm (灰層)  
 11. 灰層厚約10cm (灰層)  
 12. 灰層厚約10cm (灰層)  
 13. 灰層厚約10cm (灰層)  
 14. 灰層厚約10cm (灰層)  
 15. 灰層厚約10cm (灰層)  
 16. 灰層厚約10cm (灰層)

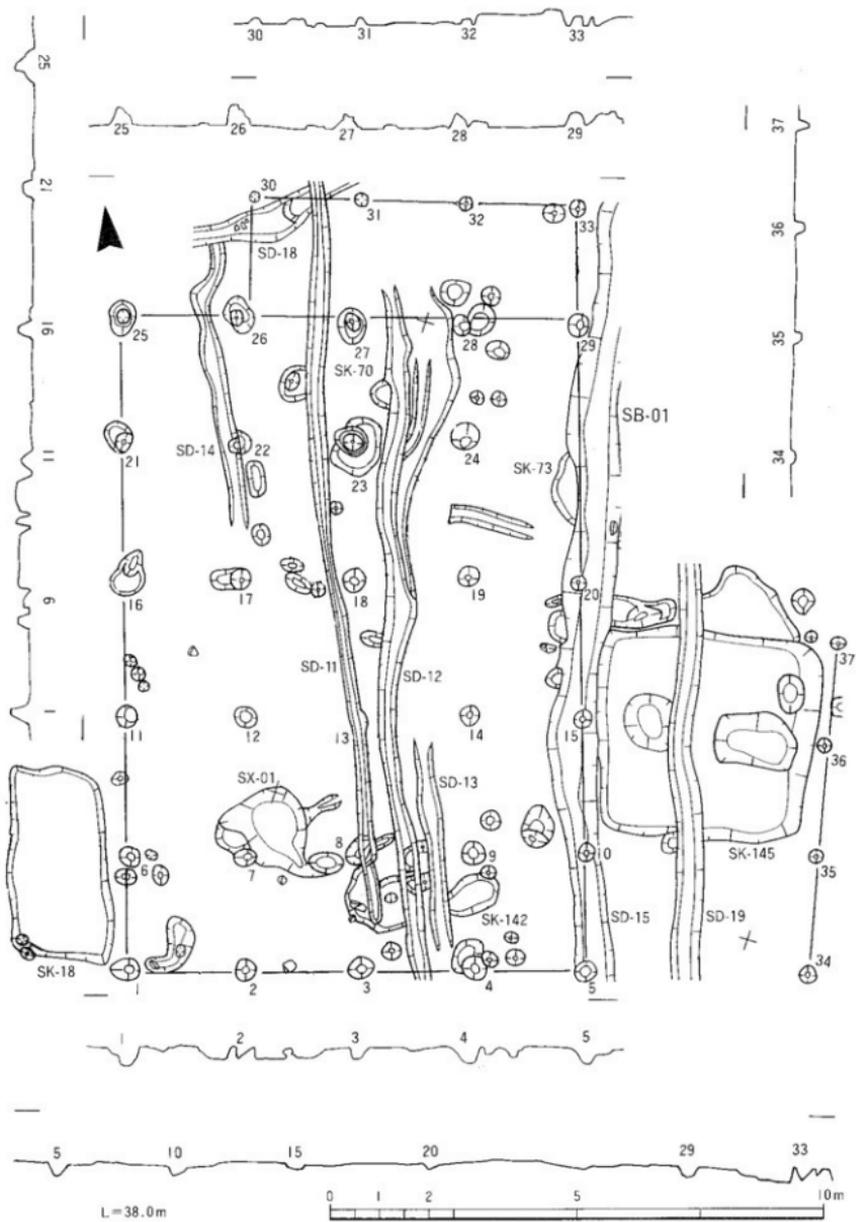


図版16 竪穴住居跡 (SI-54, 55) (1:80, カマド1:40)

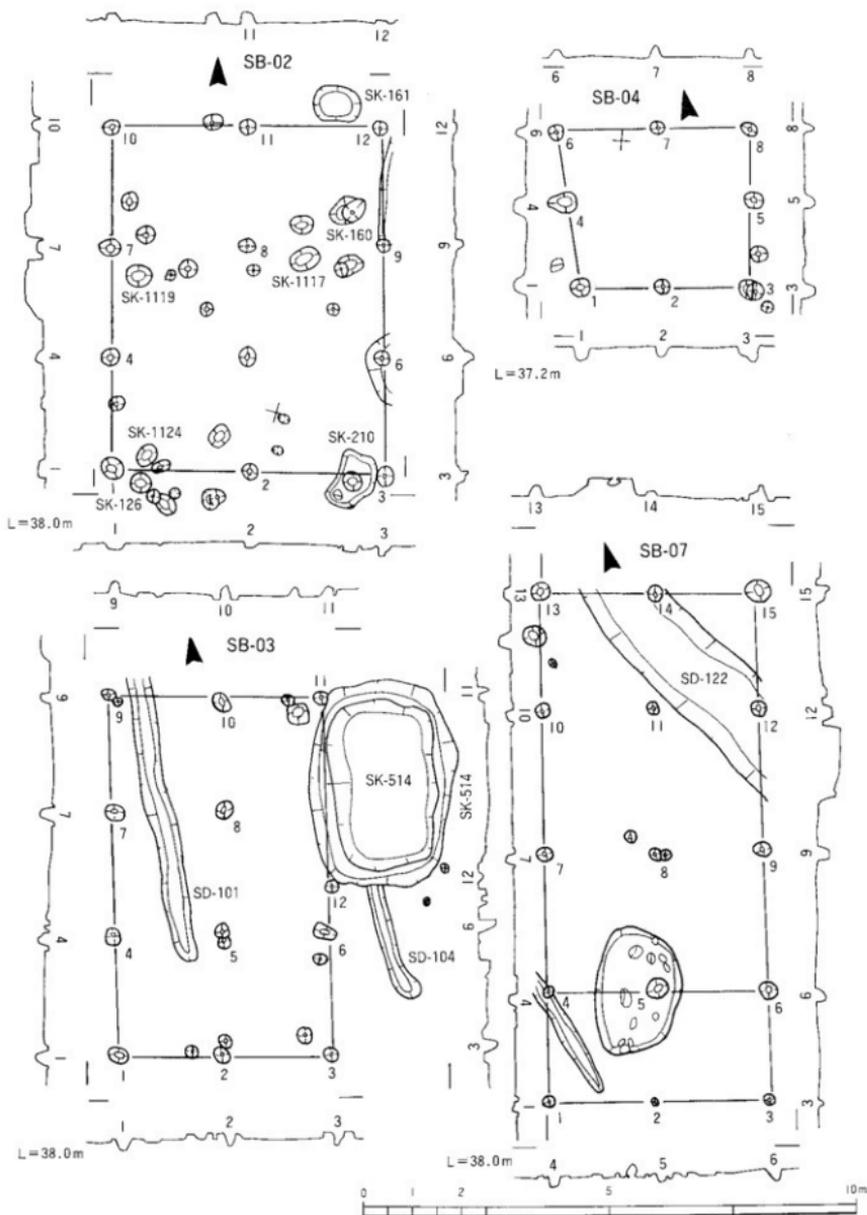




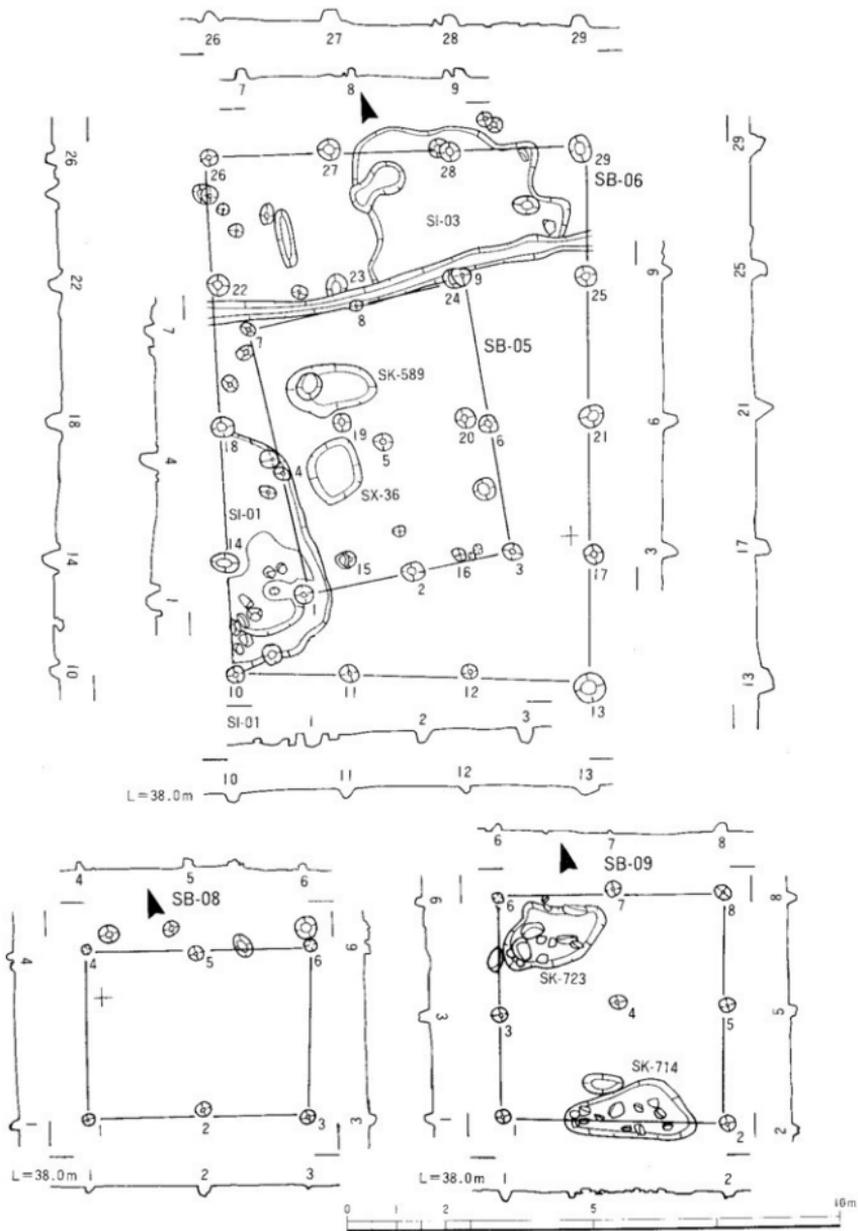
図版18 竪穴住居跡 (SI-59カマド2, 56, 57, 61) (1:80, カマド1:40)



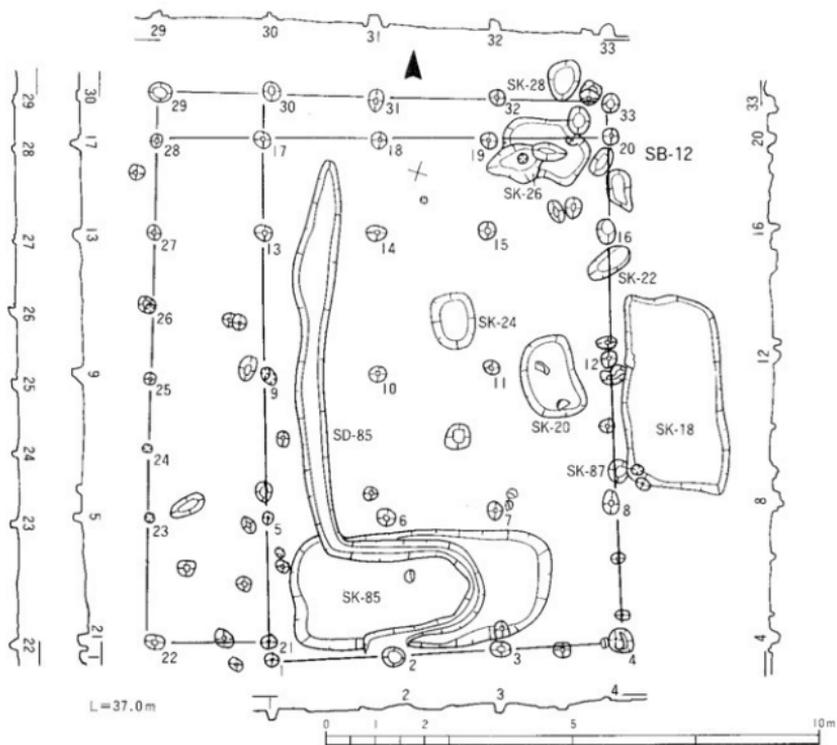
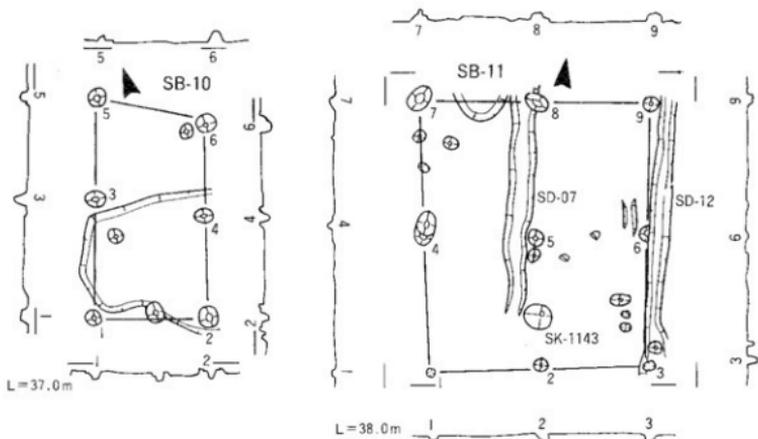
図版19 掘立柱建物 (SB-01) (1 : 100)



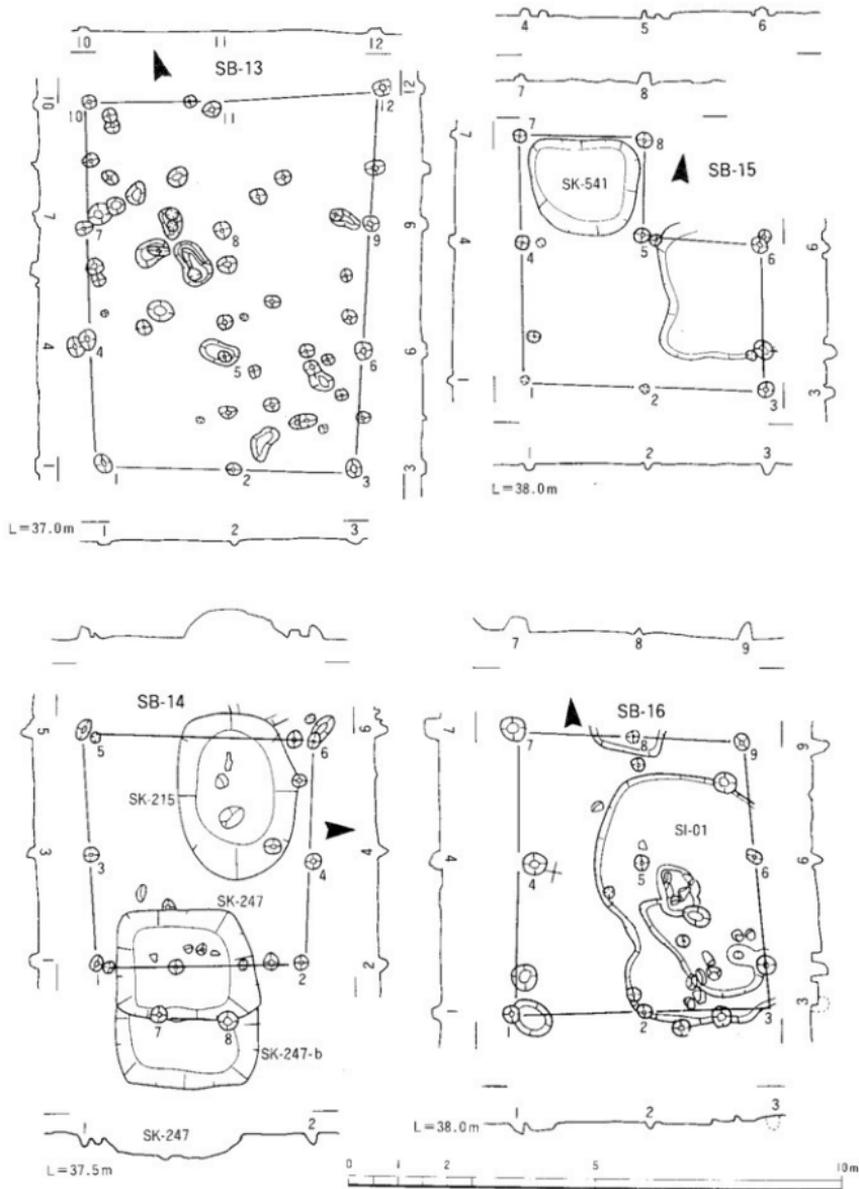
図版20 掘立柱建物 (SB-02, 03, 04, 07) (1 : 100)



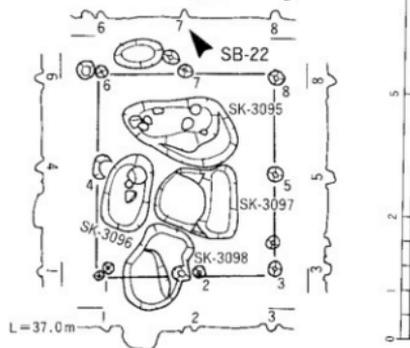
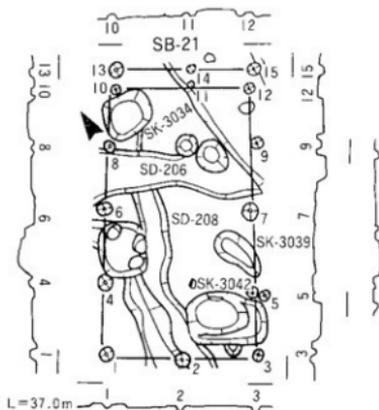
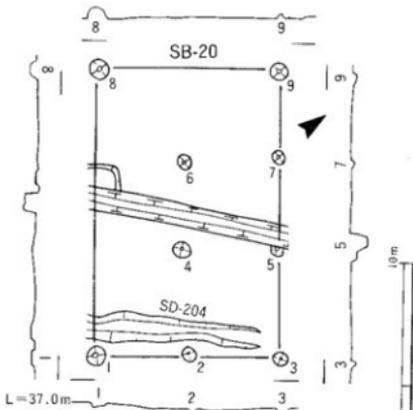
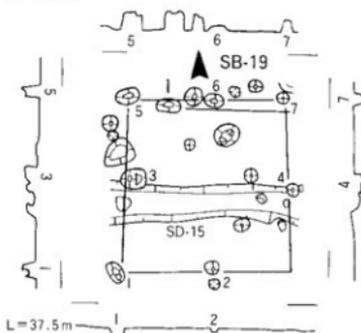
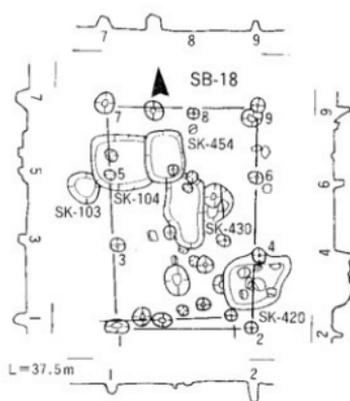
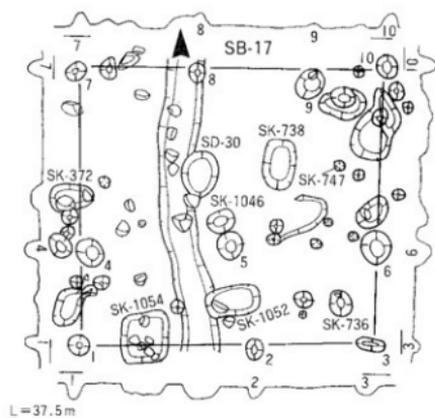
図版21 掘立柱建物 (SB-05, 06, 08, 09) (1:100)



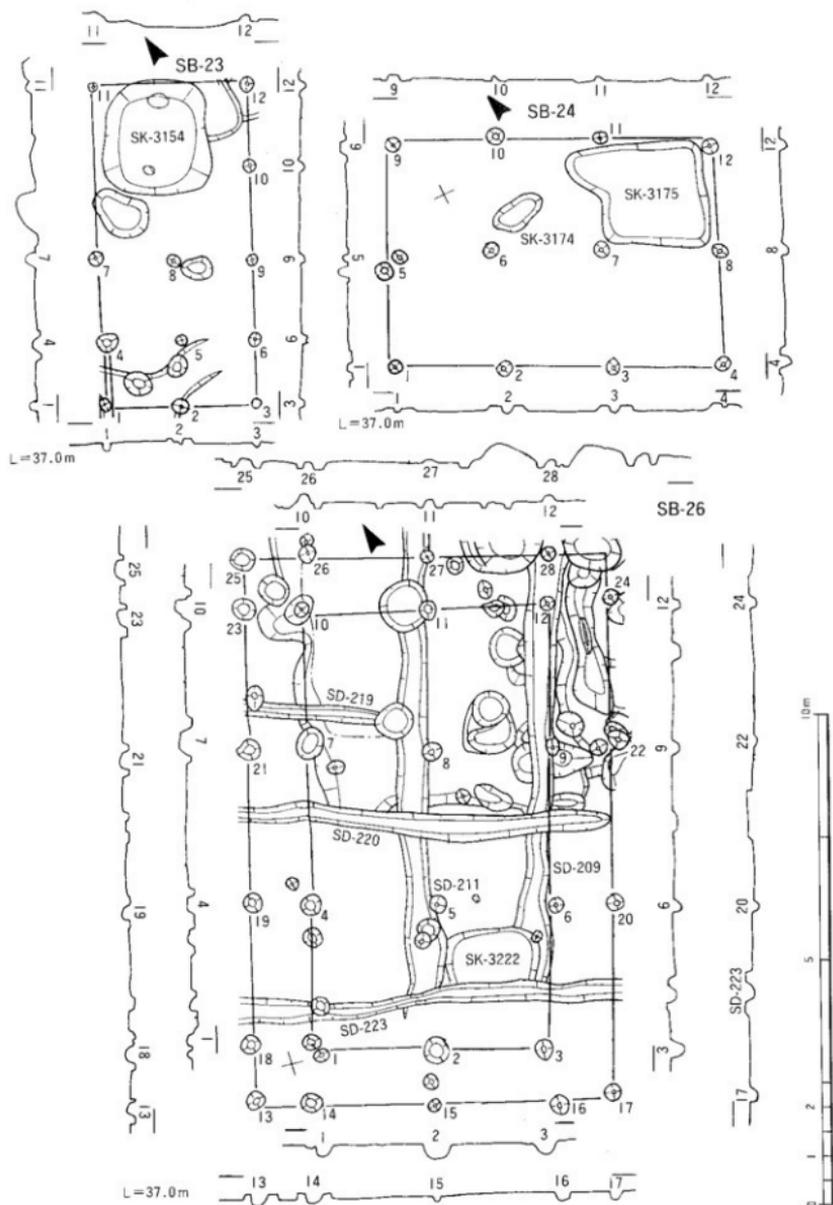
図版22 掘立柱建物 (SB-10, 11, 12) (1:100)



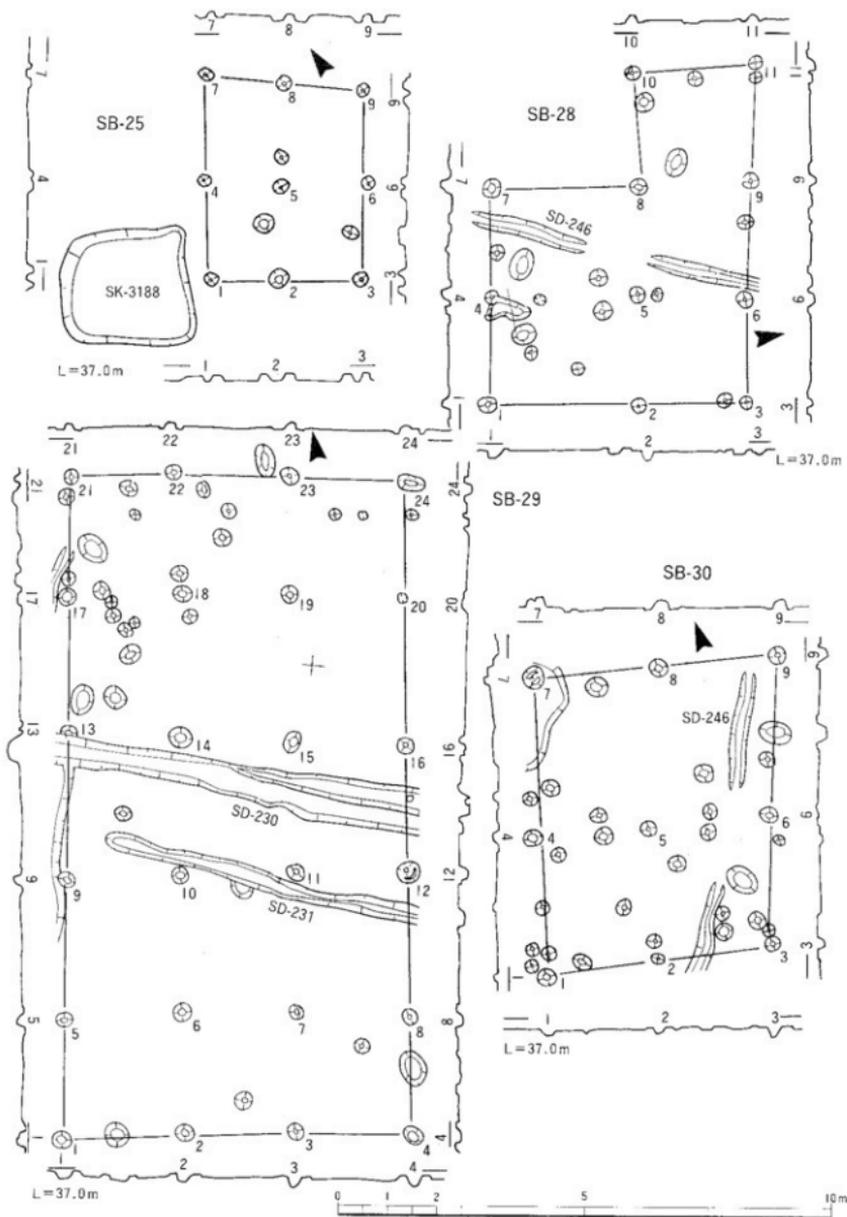
図版23 掘立柱建物 (SB 13, 14, 15, 16) (1 : 100)



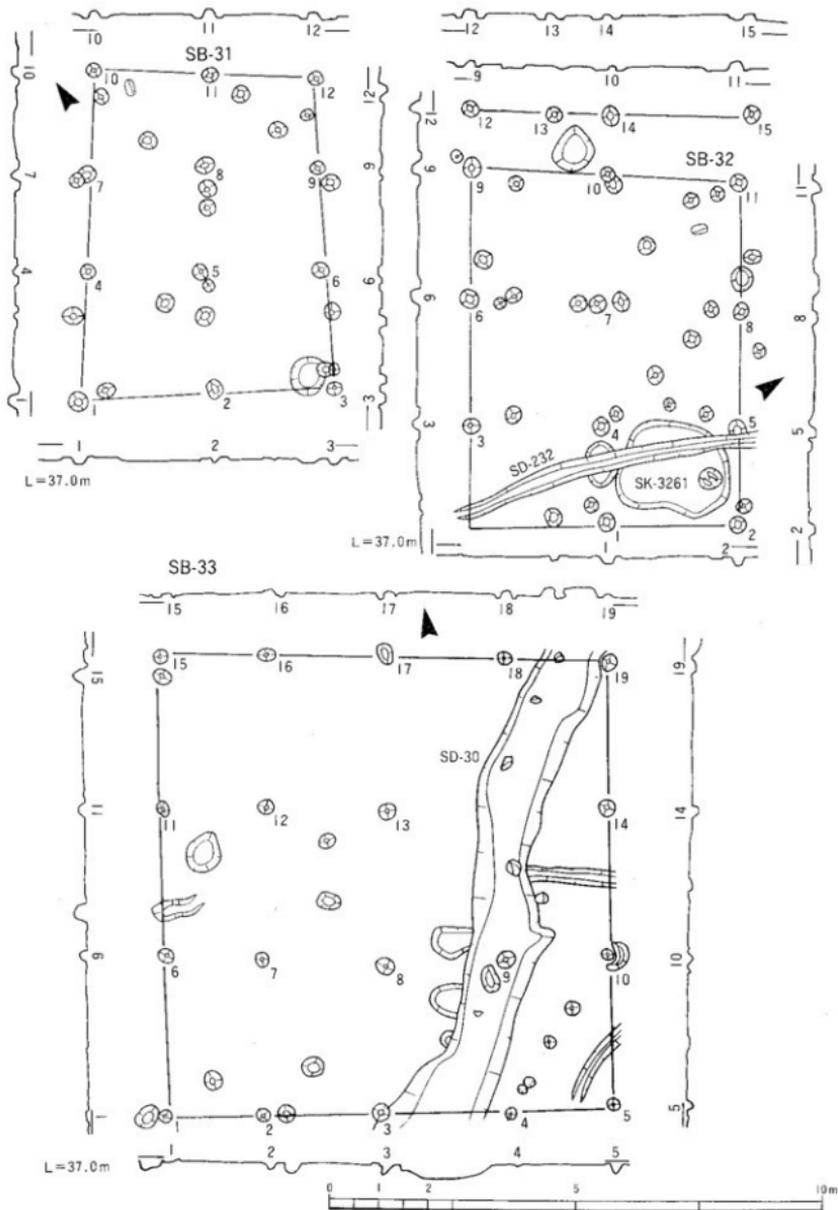
図版24 掘立柱建物 (SB-17, 18, 19, 20, 21, 22) (1:100)



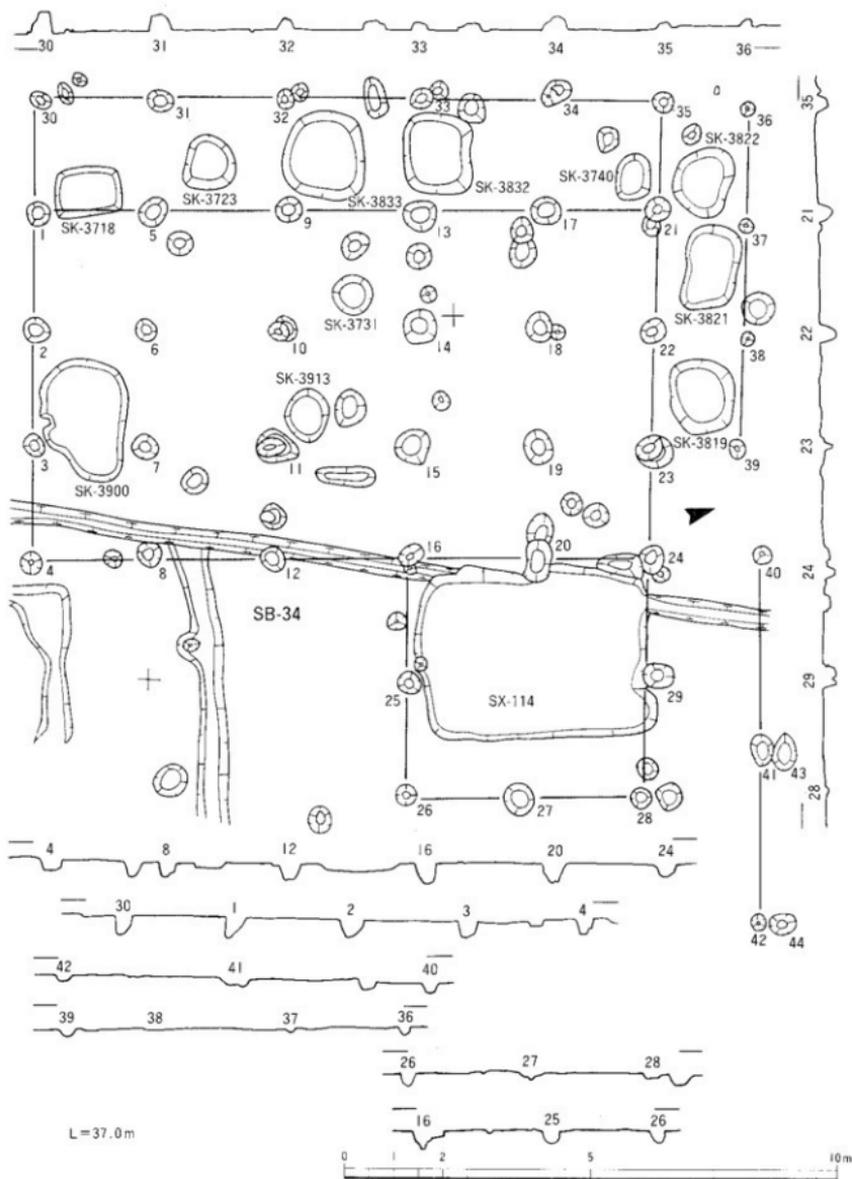
図版25 掘立柱建物 (SB-23, 24, 26) (1 : 100)



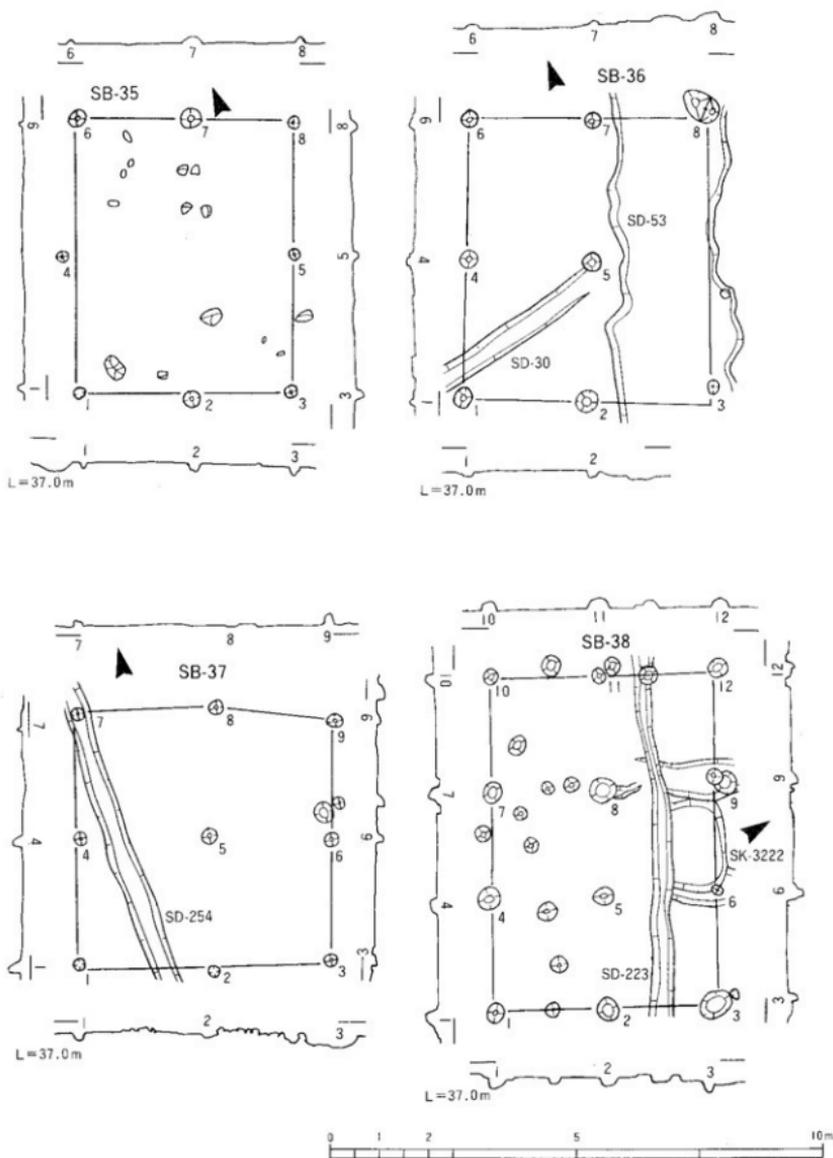
図版26 掘立柱建物 (SB 25, 28, 29, 30) (1 : 100)



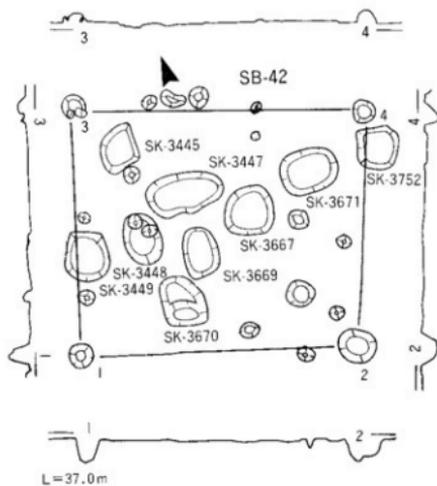
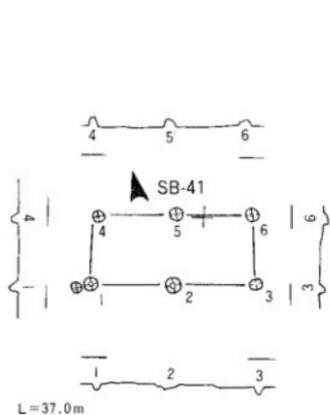
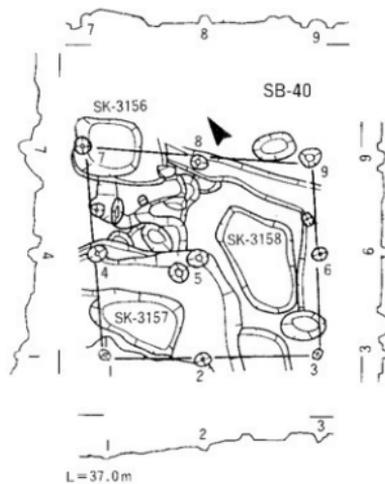
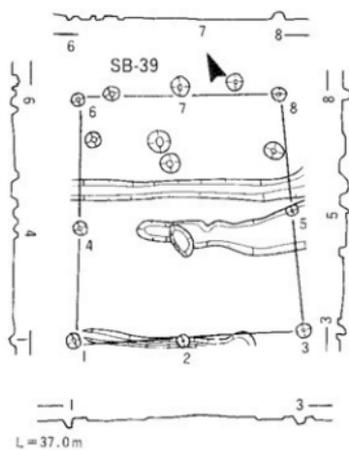
图版27 掘立柱建物 (SB-31, 32, 33) (1:100)



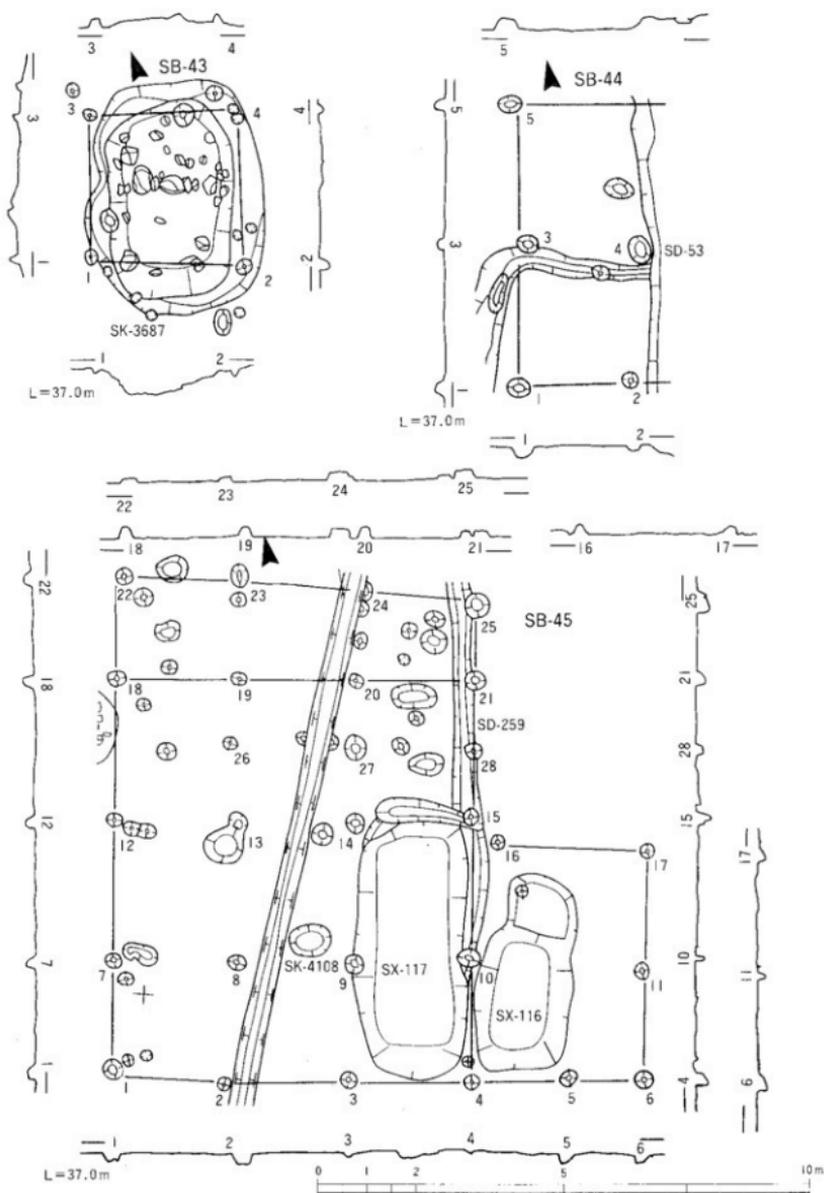
図版28 掘立柱建物 (SB-34) (1:100)



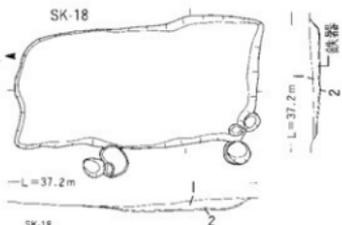
図版29 掘立柱建物 (SB-35, 36, 37, 38) (1 : 100)



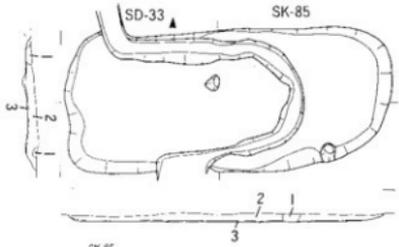
図版30 掘立柱建物 (SB 39, 40, 41, 42) (1:100)



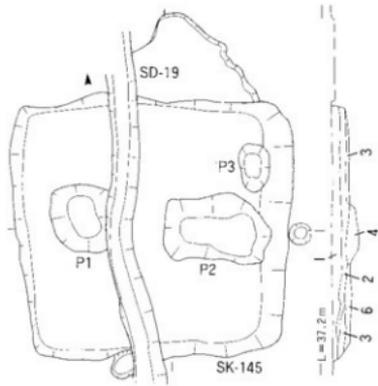
図版31 掘立柱建物 (SB 43, 44, 45) (1 : 100)



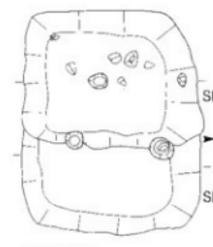
- SK-18  
 1. 黒褐色砂質土 (黄褐色土流)  
 2. 褐色砂質土 (やや赤色化した壁の内)



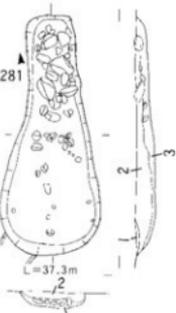
- SK-85  
 1. 黒褐色粘土質シルト (SD-33埋土)  
 2. 黒褐色シルト  
 3. 増黄褐色シルト (とても堅くしまっている)



- SK-145  
 1. 増褐色砂質土  
 2. 褐色砂質土 (炭化物多)  
 3. 増黄褐色シルト (とても堅くしまった面)  
 4. 黒褐色砂質土 (炭化物、破砕塊レキ多い)  
 5. 赤褐色シルト (焼土)  
 6. 褐色砂質土

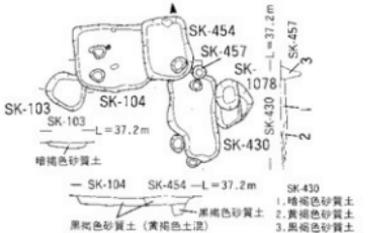


- SK-247, 247-b  
 1. 増褐色砂質土  
 2. 黒褐色砂質土  
 3. 黒褐色砂質土  
 4. 黄褐色砂質土  
 5. 黒褐色砂質土 (砂混)  
 6. 増褐色砂質土  
 7. 黒褐色粘土質シルト

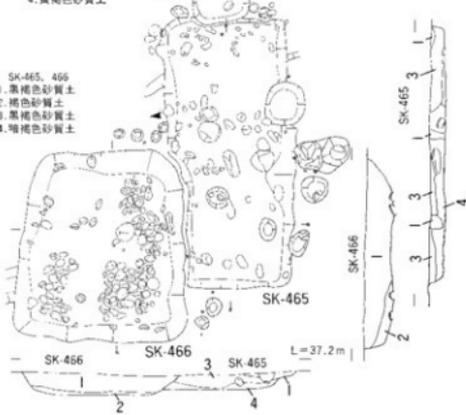


- SK-281  
 1. 黒褐色砂質土  
 2. 褐色砂質土  
 3. 黒褐色シルト

- SK-147 (SB-01 P36)  
 7. 増褐色砂質土  
 8. 反褐色砂質シルト



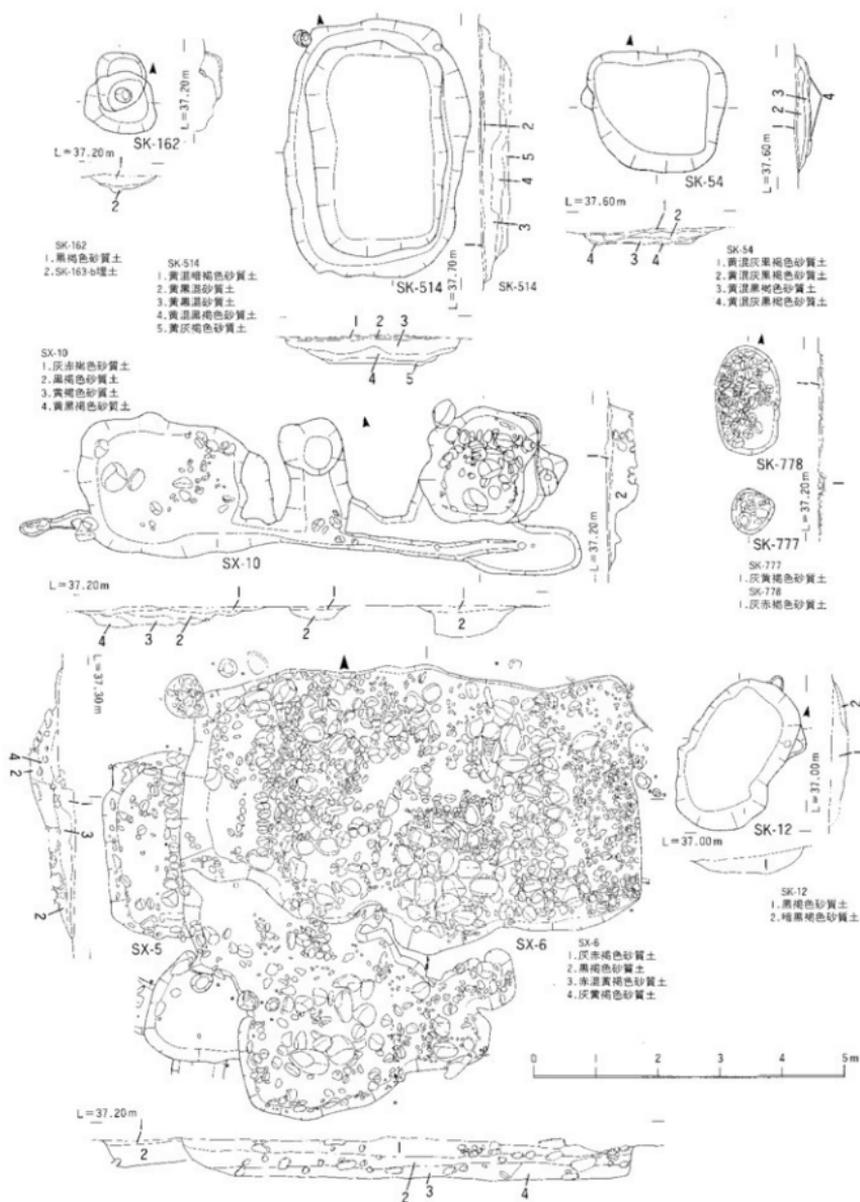
- SK-104 SK-454 -L=37.2m SK-430  
 1. 増褐色砂質土  
 2. 黒褐色砂質土 (黄褐色土流)  
 3. 黒褐色砂質土  
 4. 黄褐色砂質土



- SK-465, 466  
 1. 黒褐色砂質土  
 2. 褐色砂質土  
 3. 黒褐色砂質土  
 4. 増褐色砂質土



図版32 土坑(1) (1:80)



- SK-162  
1. 黑褐色砂質土  
2. SK-163-b埋土

- SK-514  
1. 黃泥褐色砂質土  
2. 黃泥砂質土  
3. 黃泥砂質土  
4. 黃泥褐色砂質土  
5. 黃泥褐色砂質土

- SK-54  
1. 黃泥灰黑褐色砂質土  
2. 黃泥灰黑褐色砂質土  
3. 黃泥灰褐色砂質土  
4. 黃泥灰黑褐色砂質土

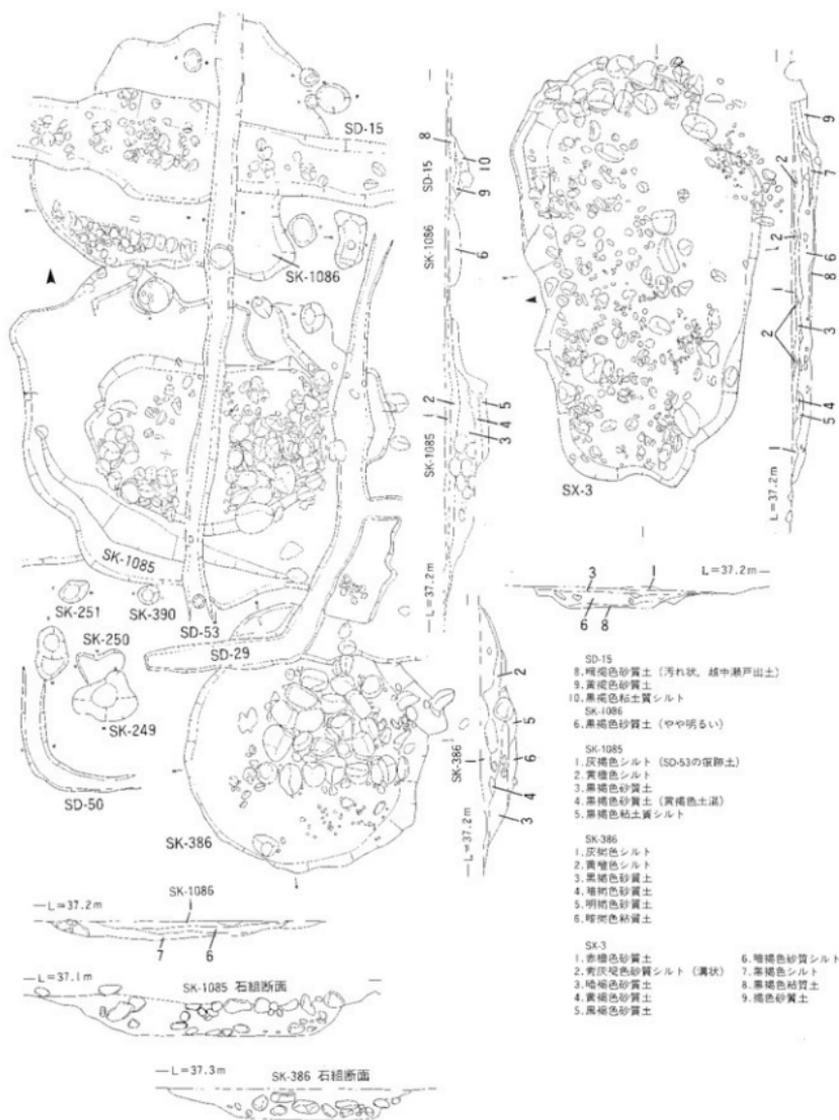
- SK-10  
1. 灰赤褐色砂質土  
2. 黑褐色砂質土  
3. 黃褐色砂質土  
4. 黃泥褐色砂質土

- SK-778  
SK-777  
1. 灰赤褐色砂質土  
SK-778  
1. 灰赤褐色砂質土

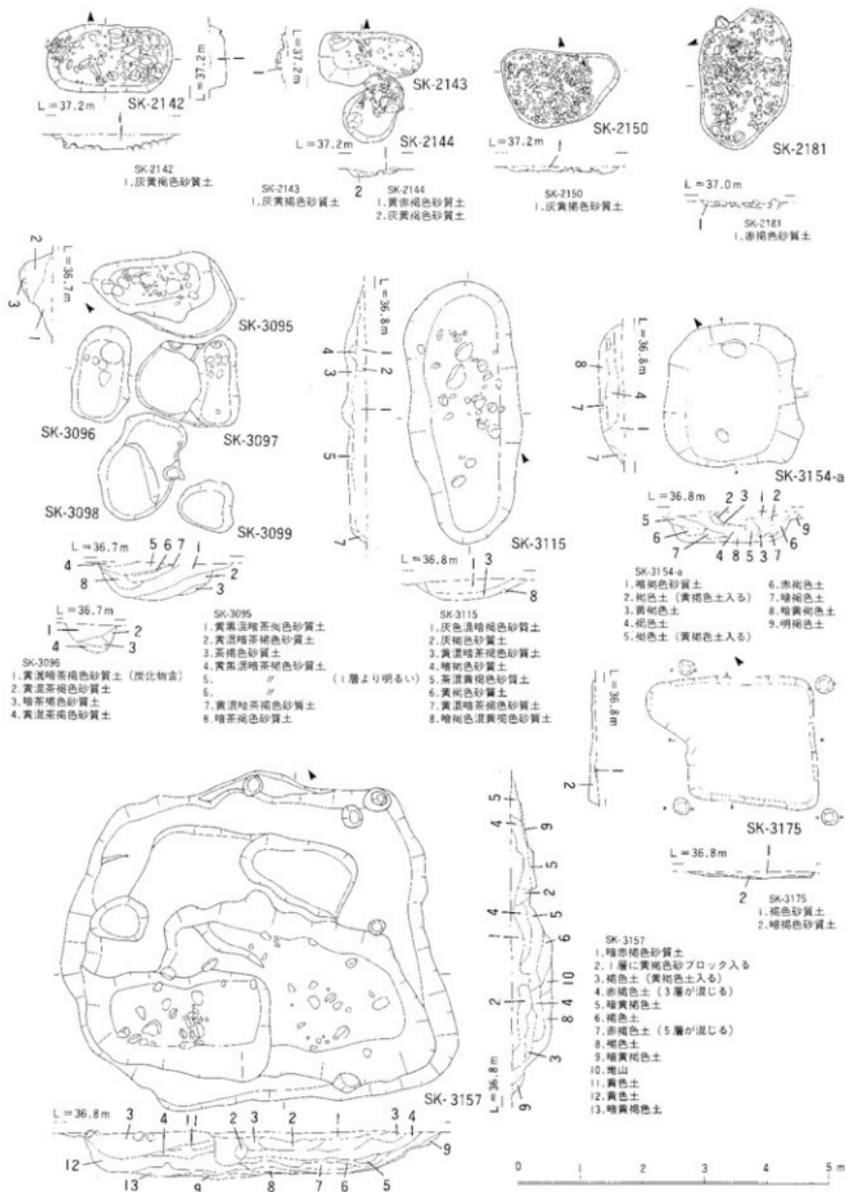
- SK-12  
1. 黑褐色砂質土  
2. 暗黑褐色砂質土

- SX-6  
1. 灰赤褐色砂質土  
2. 黑褐色砂質土  
3. 赤泥黃褐色砂質土  
4. 灰赤褐色砂質土

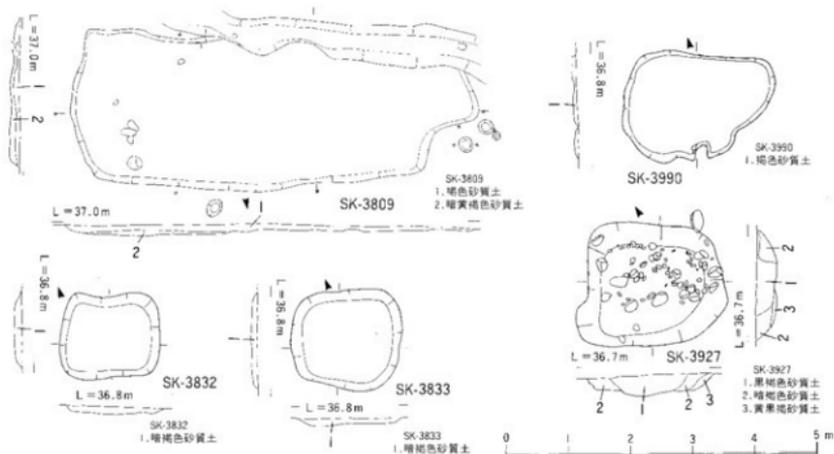
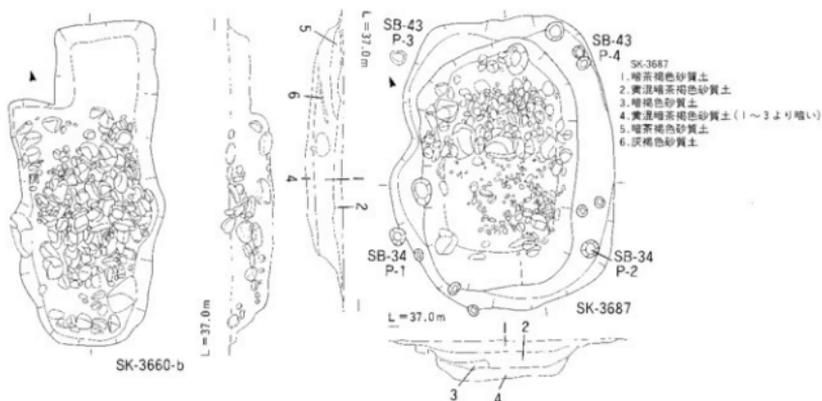
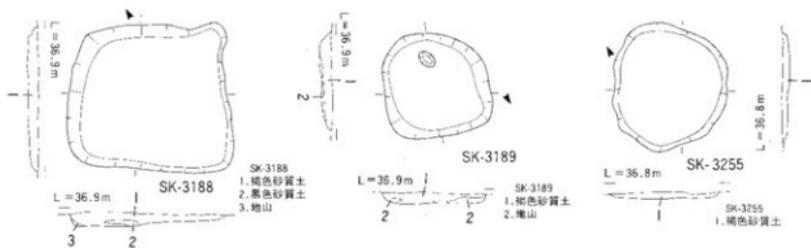
圖版33 土城(2) (1:80)



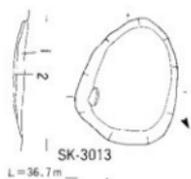
図版34 土坑(3) (1:80)



図版35 土坑(4) (1:80)



図版36 土坑(5) (1:80)



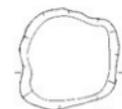
L=36.7m

- SK-3013  
 1. 暗褐色砂質土 (まだらに入る)  
 2. 赤褐色砂質土 (鉄分多い)  
 3. 褐色砂質土



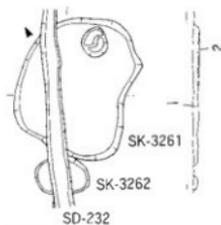
L=36.7m

- SK-3042  
 1. 暗褐色砂質土  
 2. 黄褐色砂質土



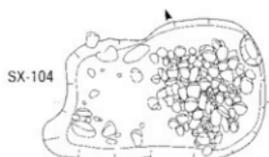
L=36.8m

- SK-3253  
 1. 暗赤褐色シルト  
 2. 褐色砂質土



L=36.9m

- SK-3261  
 1. 褐色砂質土  
 2. 黄褐色砂質土



SX-104



L=37.0m

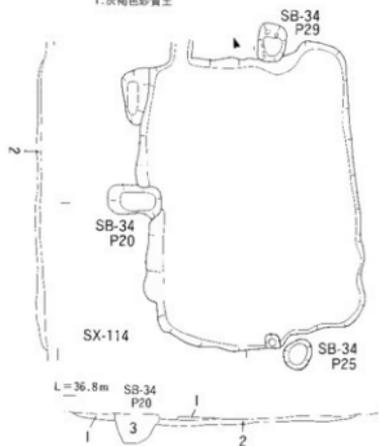
- SX-106  
 1. 灰褐色砂質土



SX-105

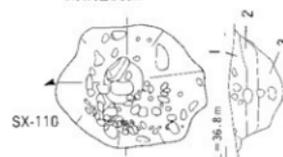
L=36.9m

1. 灰褐色砂質土



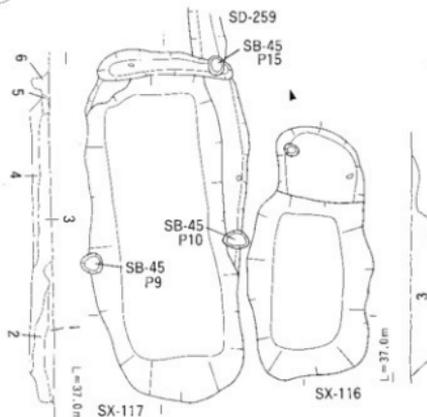
L=36.8m

- SB-34  
 1. 灰褐色砂質土  
 2. 灰褐色砂質土 (下部よりレキが多く現れる)  
 3. 黒褐色シルト (SB-34-P20埋土)



SX-110

1. 暗褐色砂質土  
 2. 暗褐色砂質土 (1より明るい)  
 3. 暗褐色粘土シルト



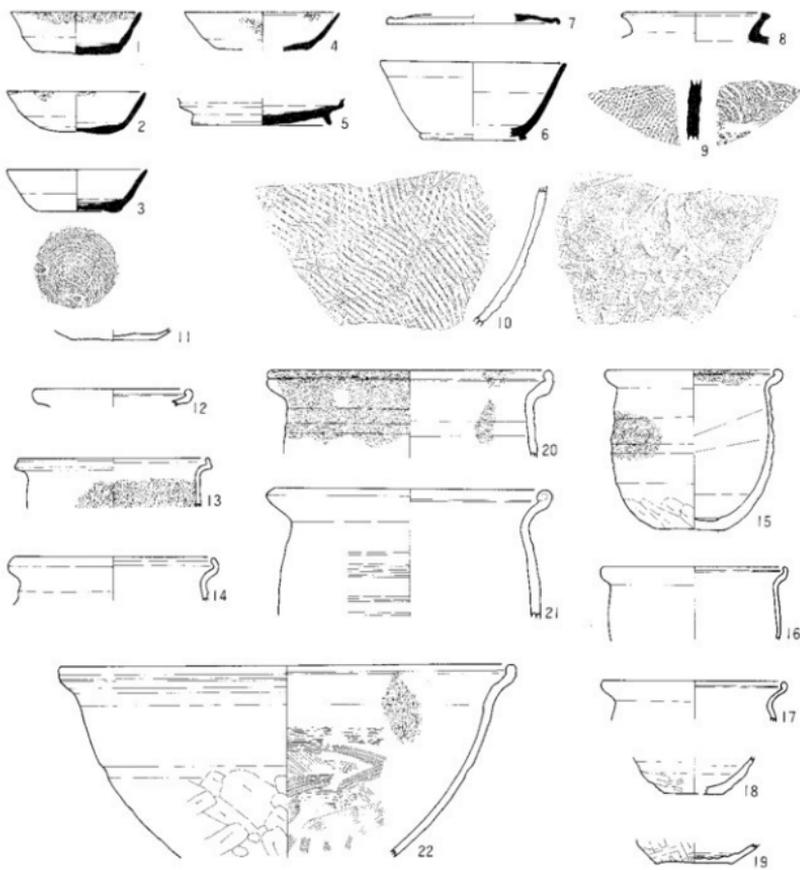
L=31.0m

L=37.0m

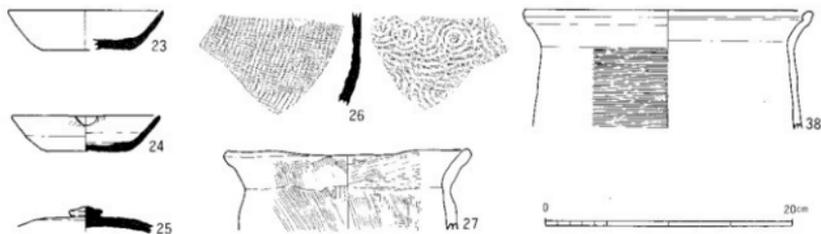
- SB-45 P15  
 SB-45 P10  
 SB-45 P9  
 SX-117  
 SX-116  
 SX-116, 117  
 1. 黄褐色砂質土 (レキ多い)  
 2. 暗褐色砂質土 (黄褐色土混)  
 3. 赤褐色砂質土  
 4. 黒褐色シルト  
 5. 黄褐色砂質土  
 6. 黒褐色砂質土 (黄褐色土混)

0 1 2 3 4 5 m

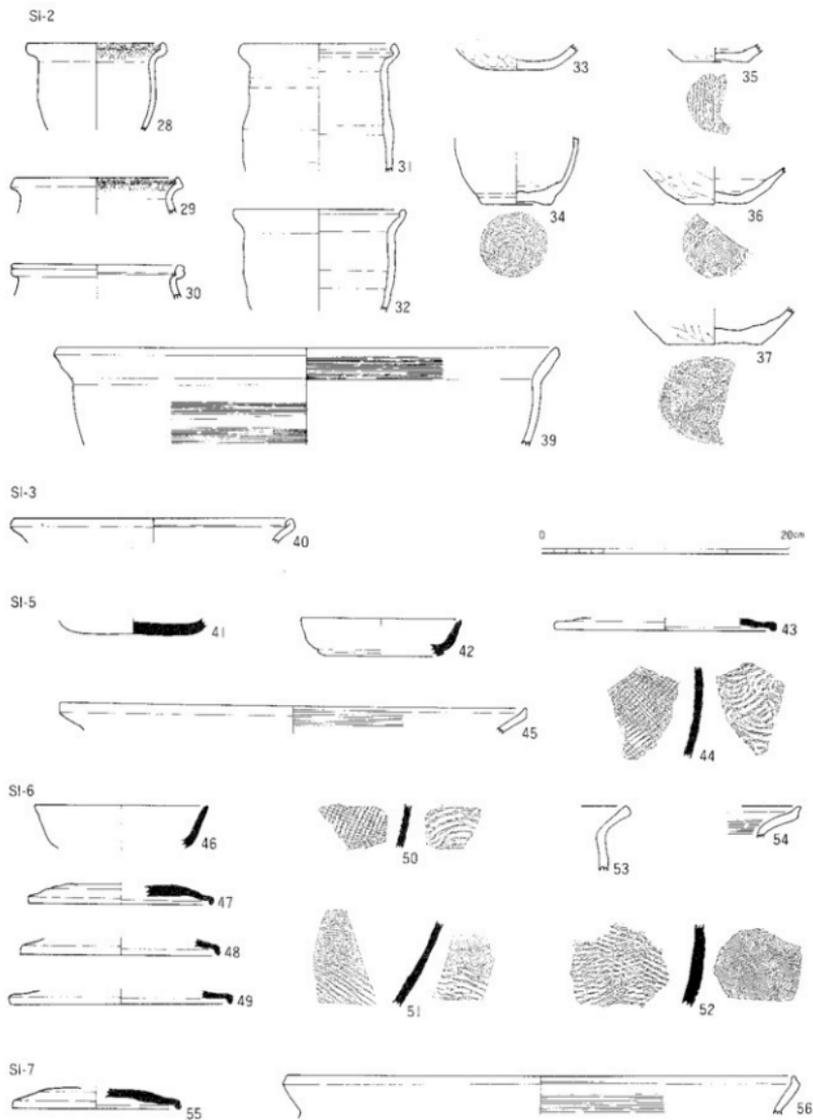
SI-1



SI-2



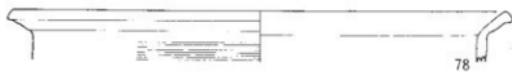
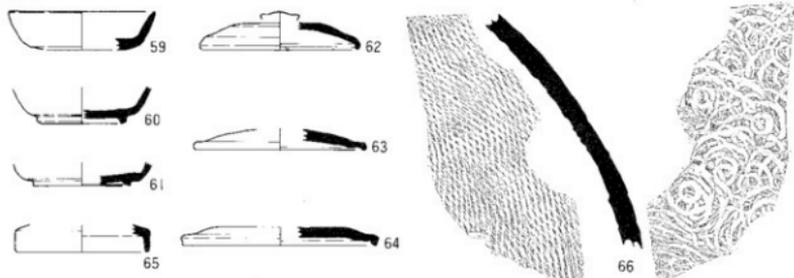
図版38 古代の土器(1)



SI-9

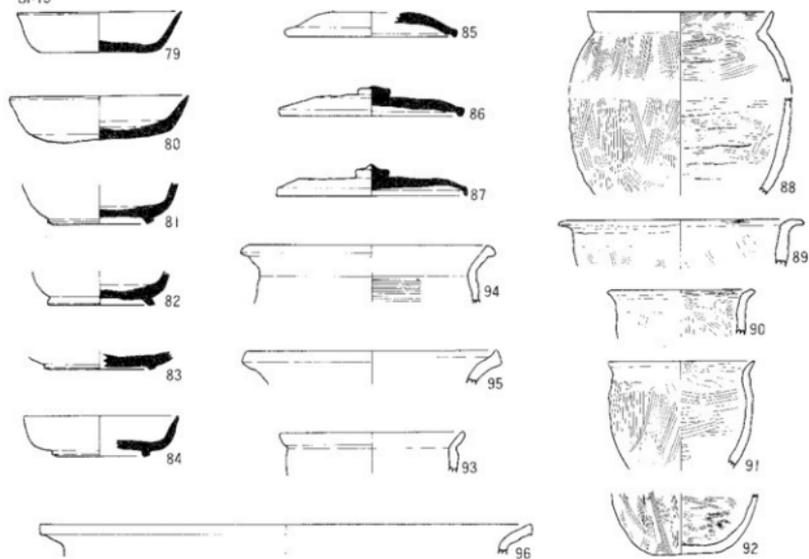


SI-12



図版40 古代の土器(3)

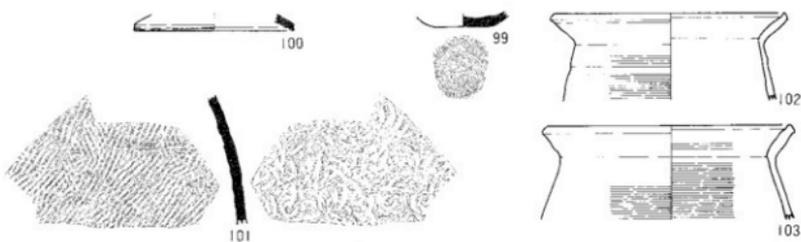
SI-13



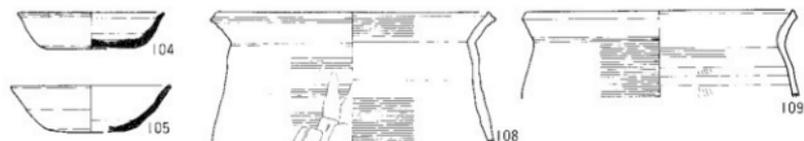
SI-14



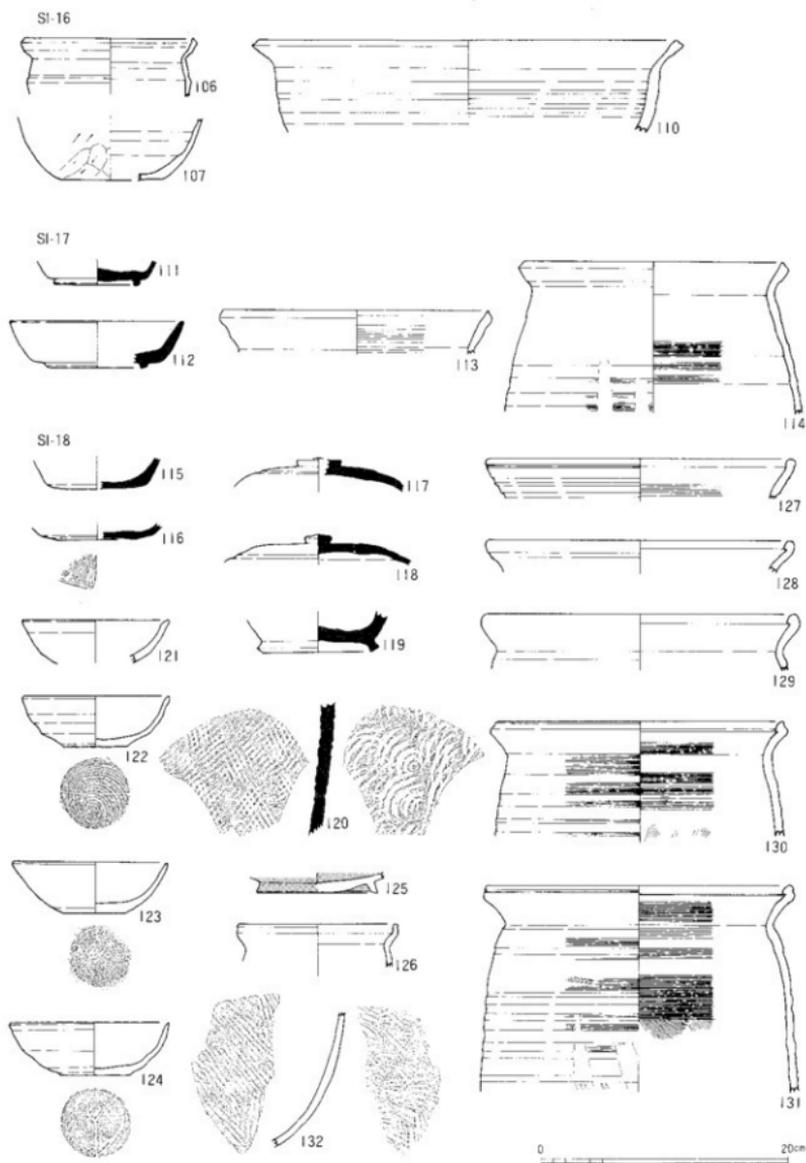
SI-15



SI-16

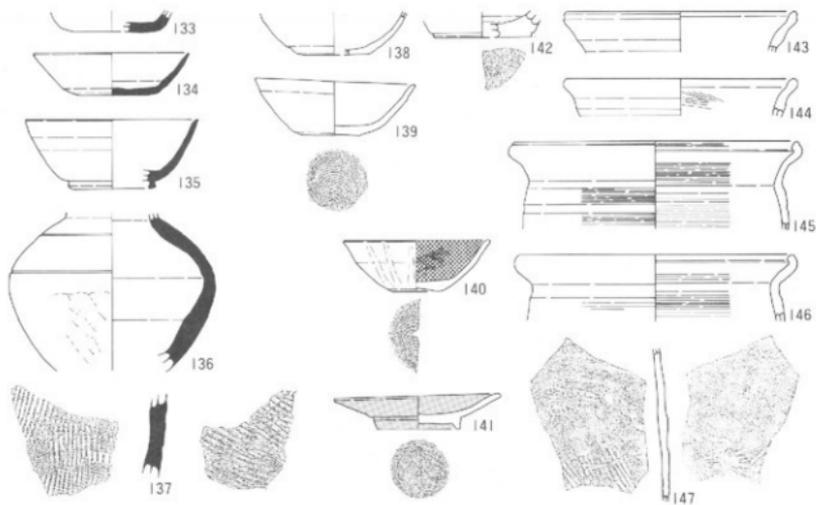


図版41 古代の土器(4)

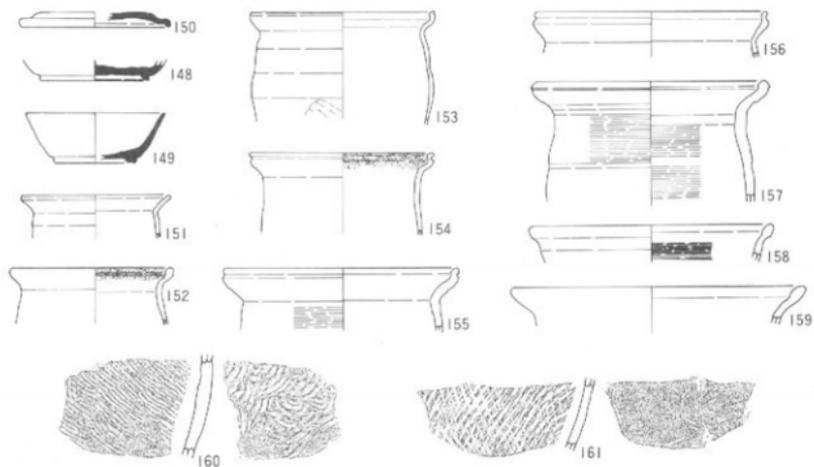


図版42 古代の土器(5)

SI-19



SI-20

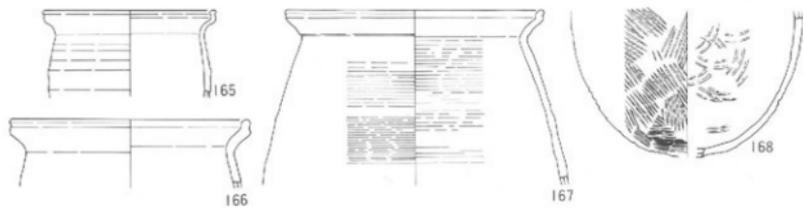


SI-21



図版43 古代の土器(6)

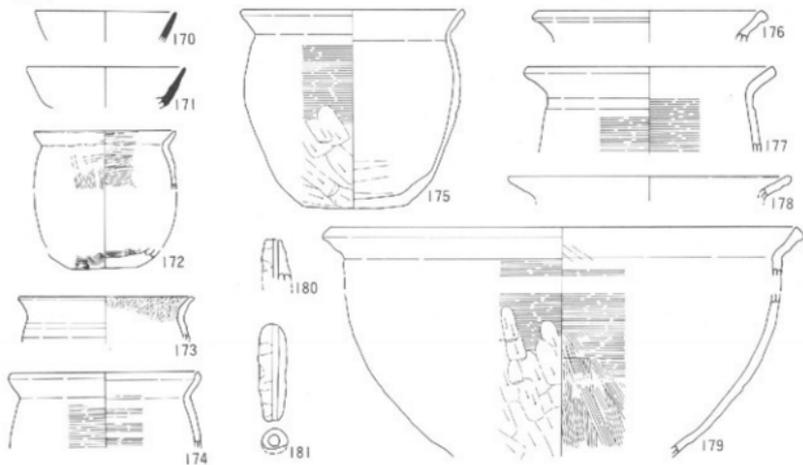
SI-21



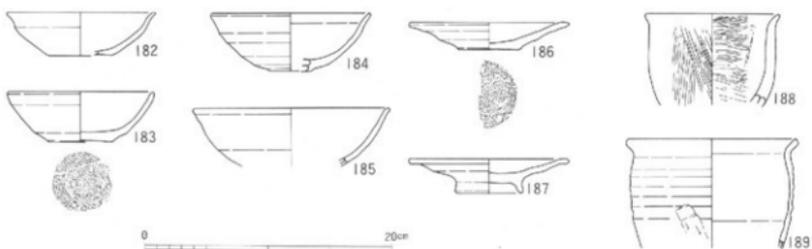
SI-22



SI-23



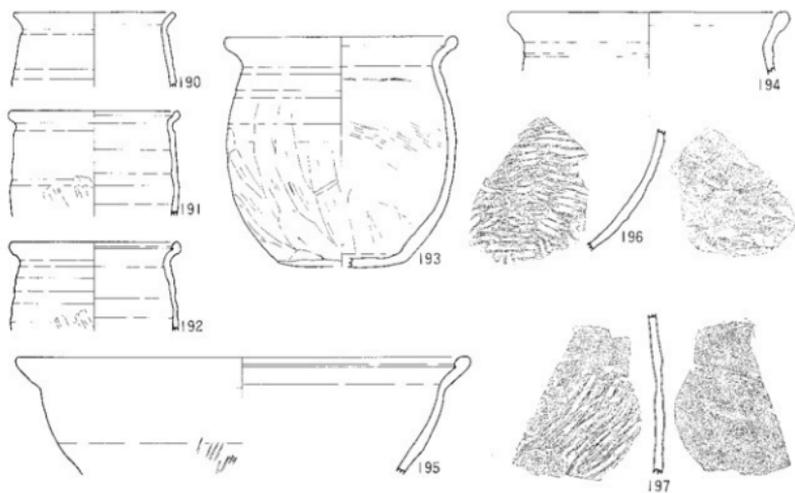
SI-24



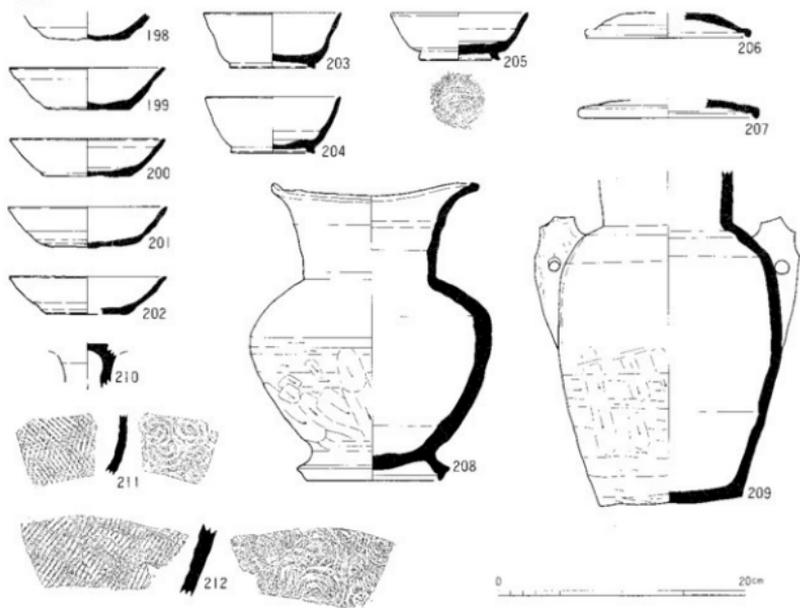
0 20cm

図版44 古代の土器(7)

SI-24

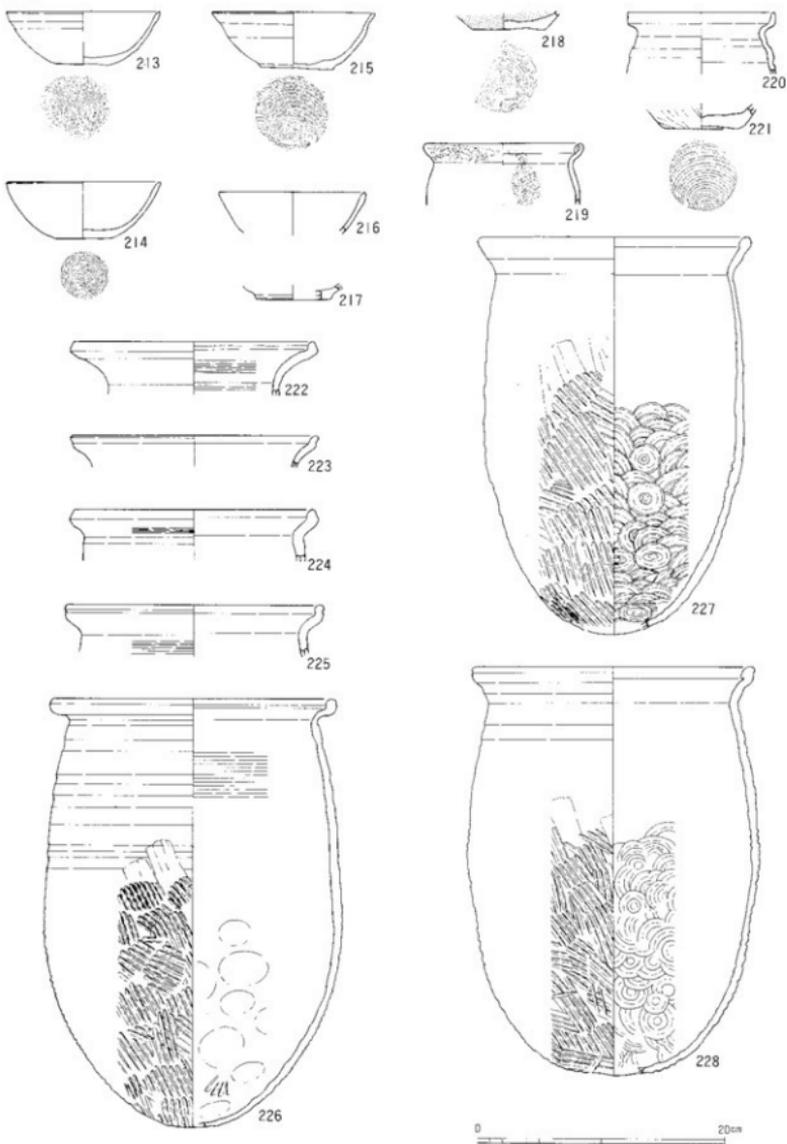


SI-25



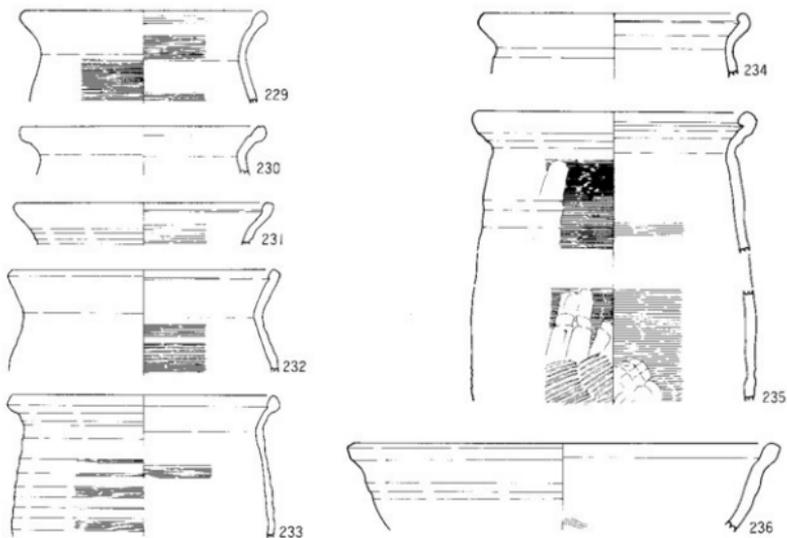
0 20cm

SI-25

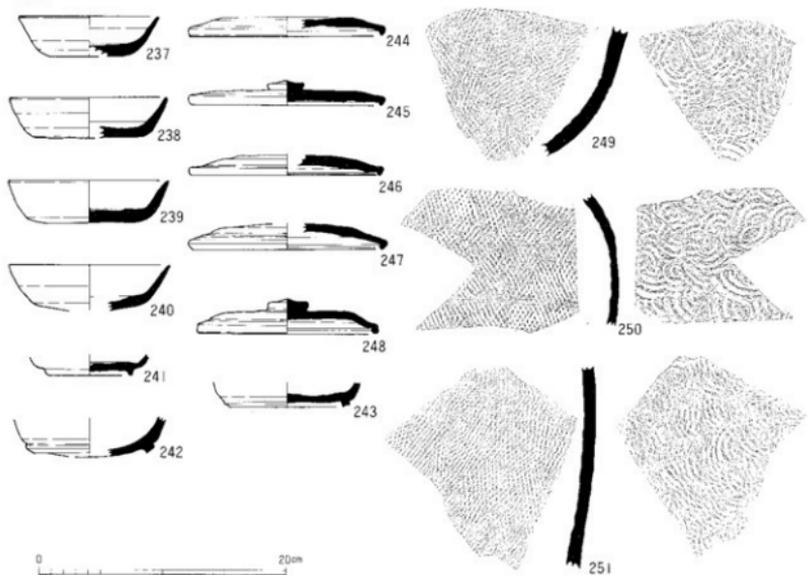


図版46 古代の土器(9)

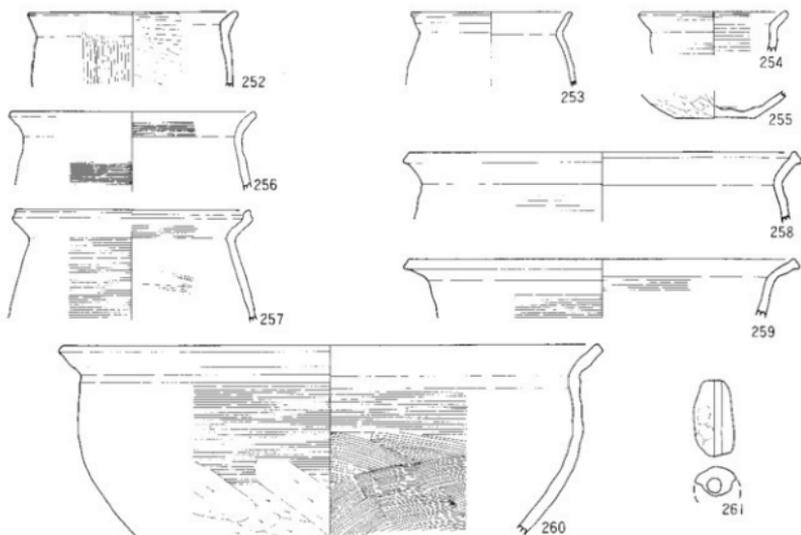
SI-25



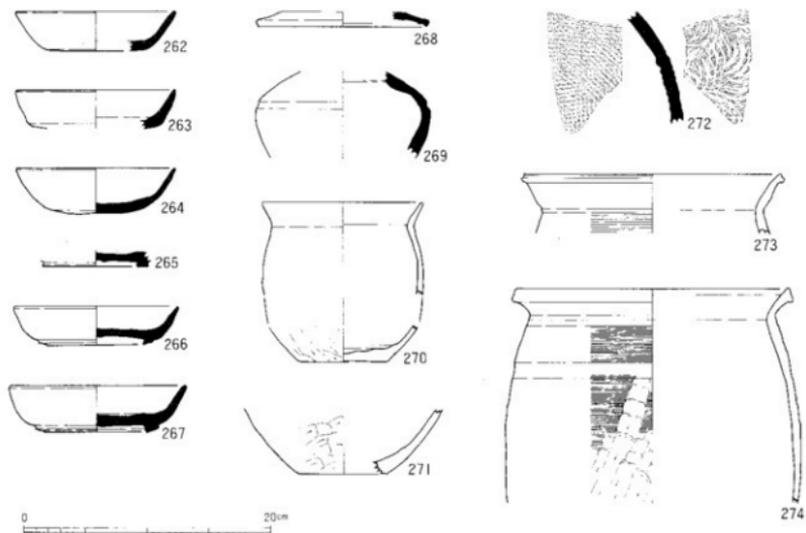
SI-40



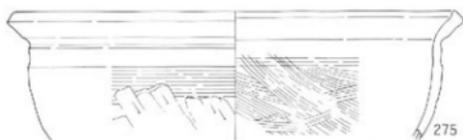
SI-40



SI-41



SI-41

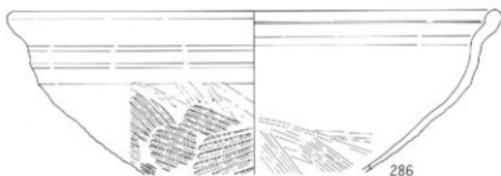
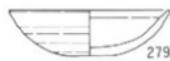
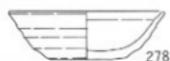


緑色

褐色

277のみ 1 : 2

SI-42

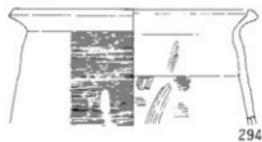


SI-50

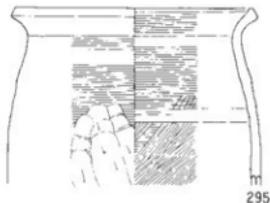


図版49 古代の土器⑫

SI-50



294



295

SI-58



296



302



308



297



303



298



304



309



311



299



305



300



306



312



301



307

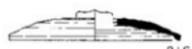


310

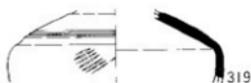
SI-59



313



316



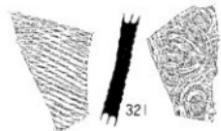
319



314



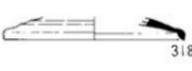
317



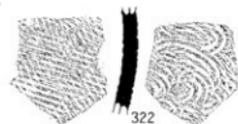
321



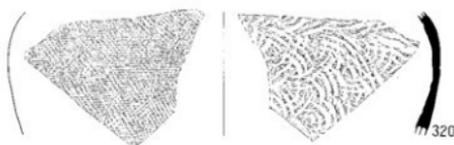
315



318



322

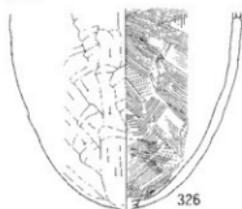


320



図版50 古代の土器(13)

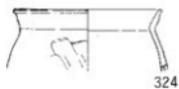
SI-59



326



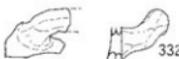
323



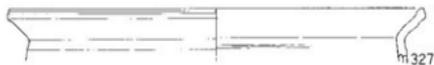
324



325



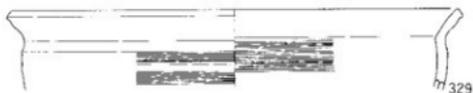
332



327



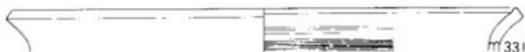
328



329



330

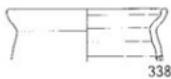


331

SI-61



333



338



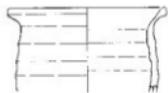
334



340



335



339



336



341



337



342



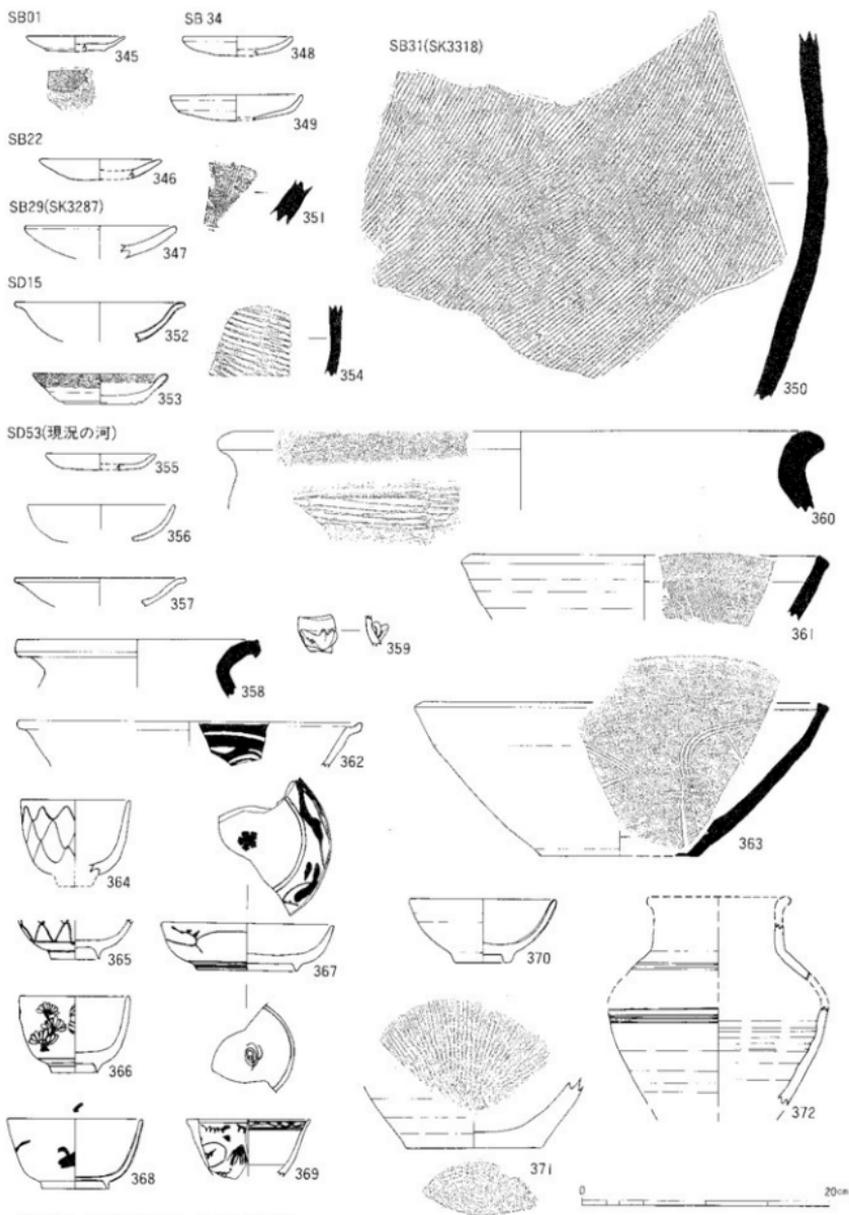
343



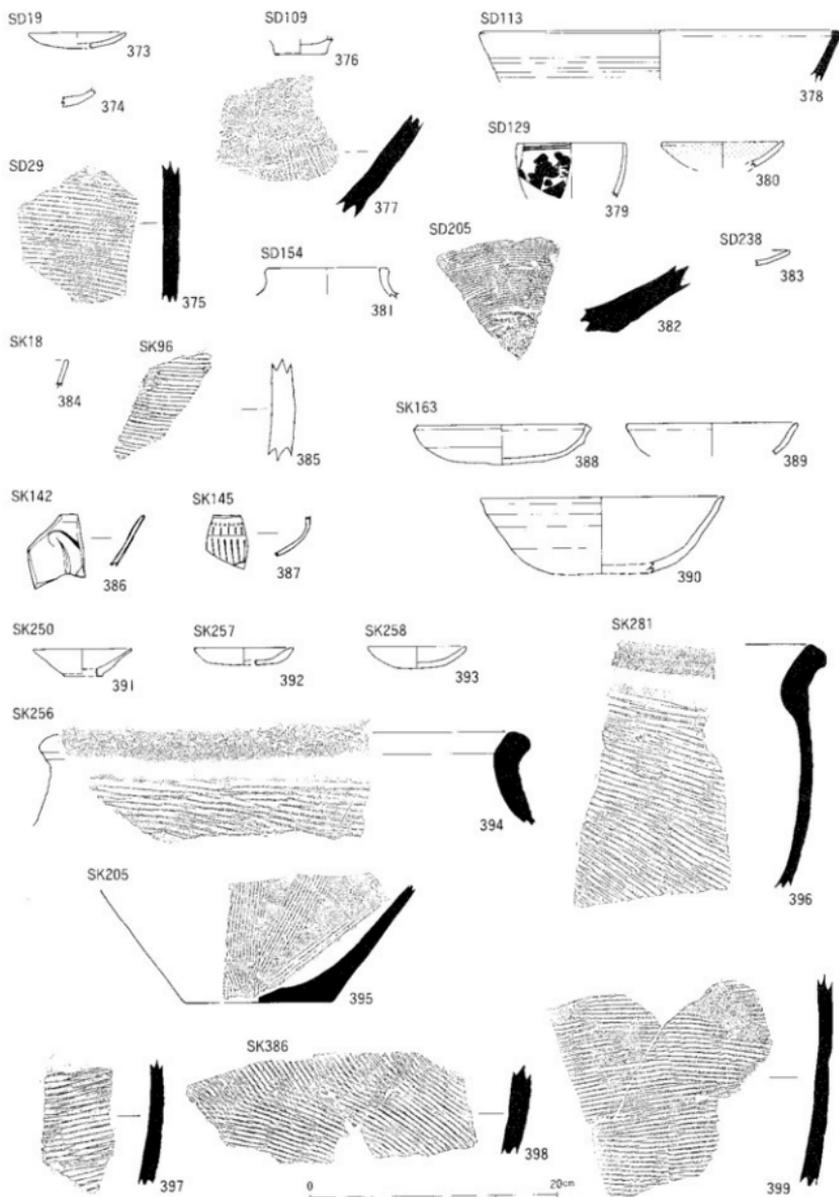
344



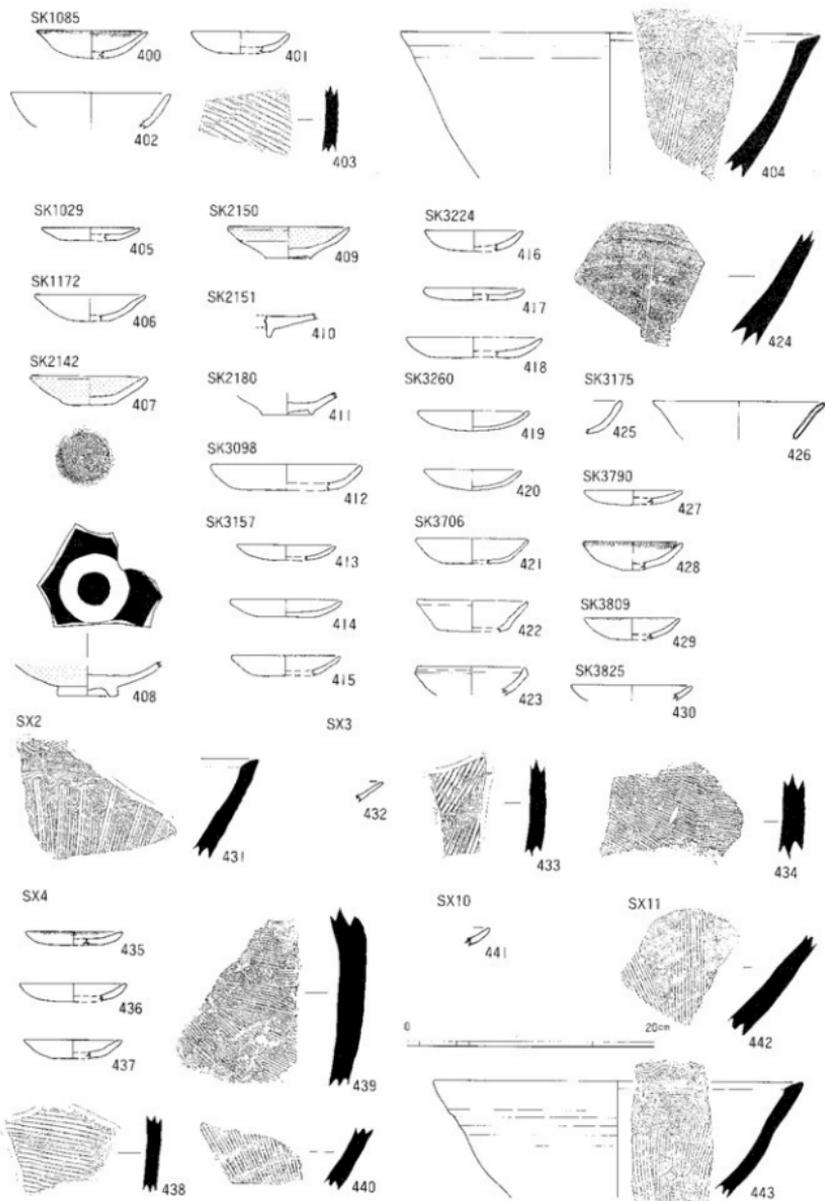
図版51 古代の土器⑩



図版52 中・近世の出土土器・陶磁器(1)

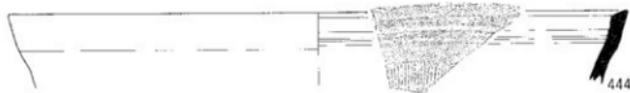


図版53 中・近世の出土土器・陶磁器(2)



図版54 中・近世の出土土器・陶磁器(3)

SX6



444

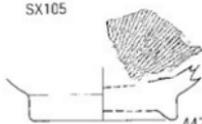


445



446

SX105



447

SX114



448



449

SX116



450



454



457



458

SX117



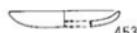
451



452



455



453



456

SX204



包含層出土



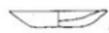
459



464



470



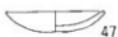
477



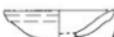
460



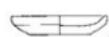
465



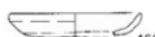
471



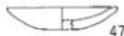
478



461



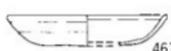
466



472



479



467



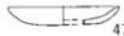
473



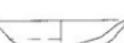
480



468



474



481



462



475



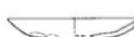
482



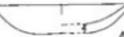
463



469

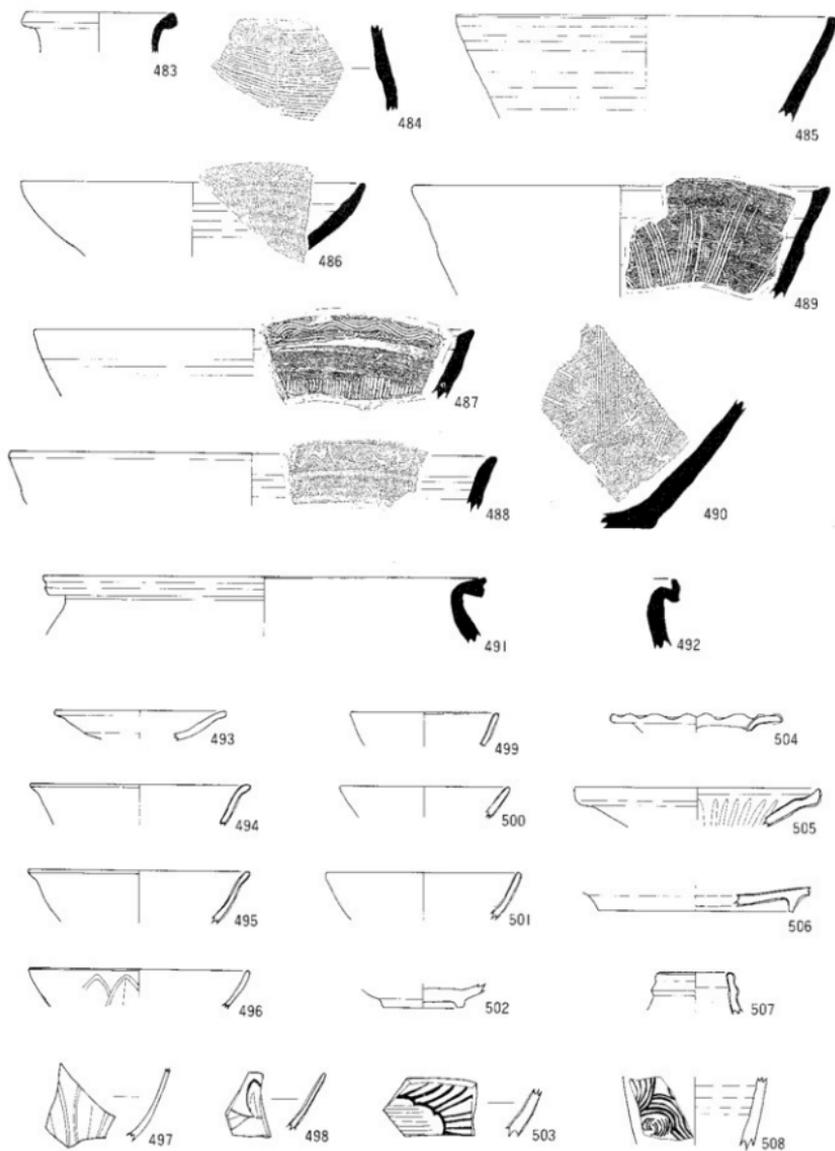


476



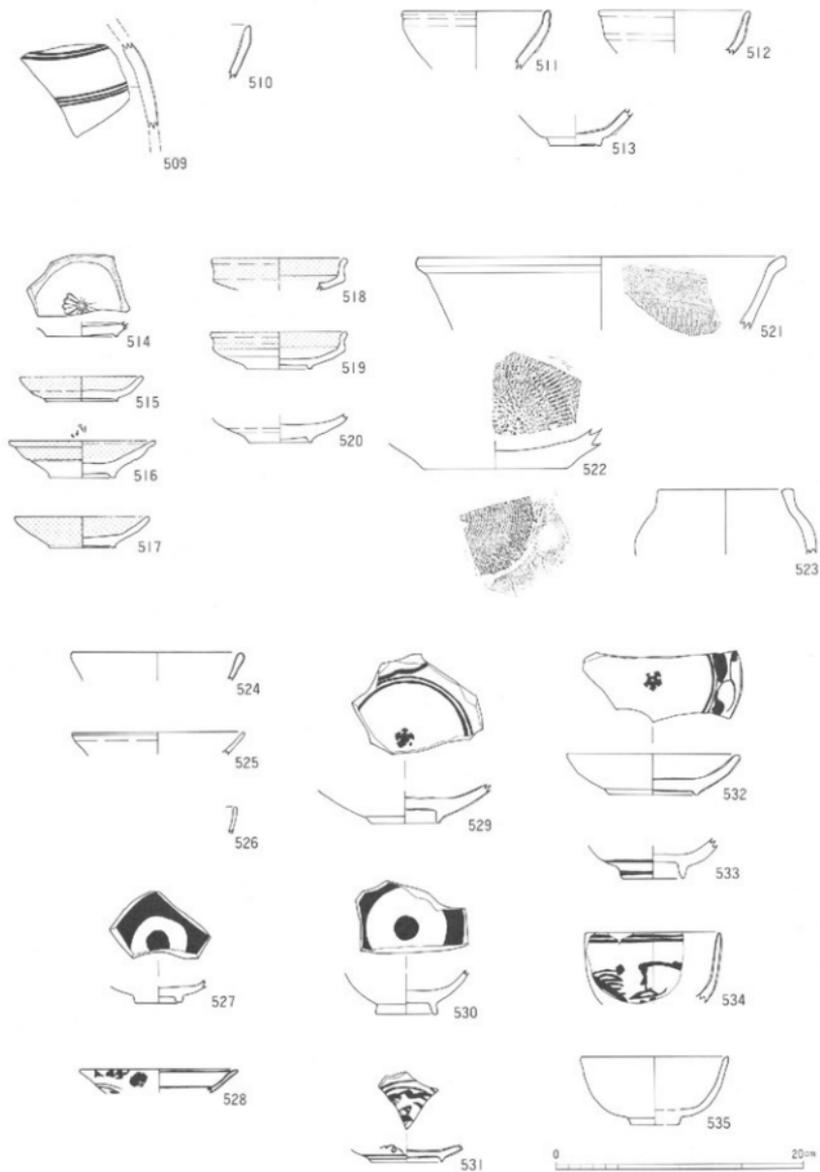
482

包含層出土

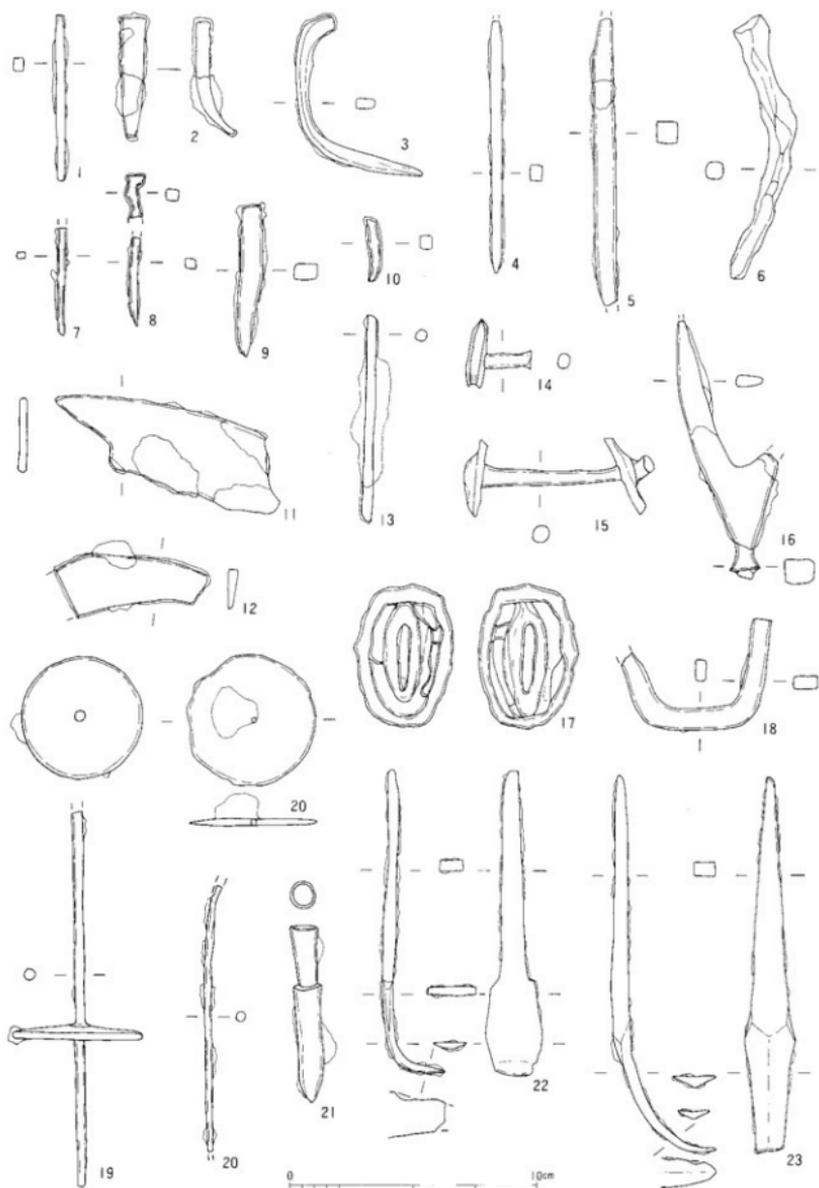


図版56 中・近世の出土土器・陶磁器(5)

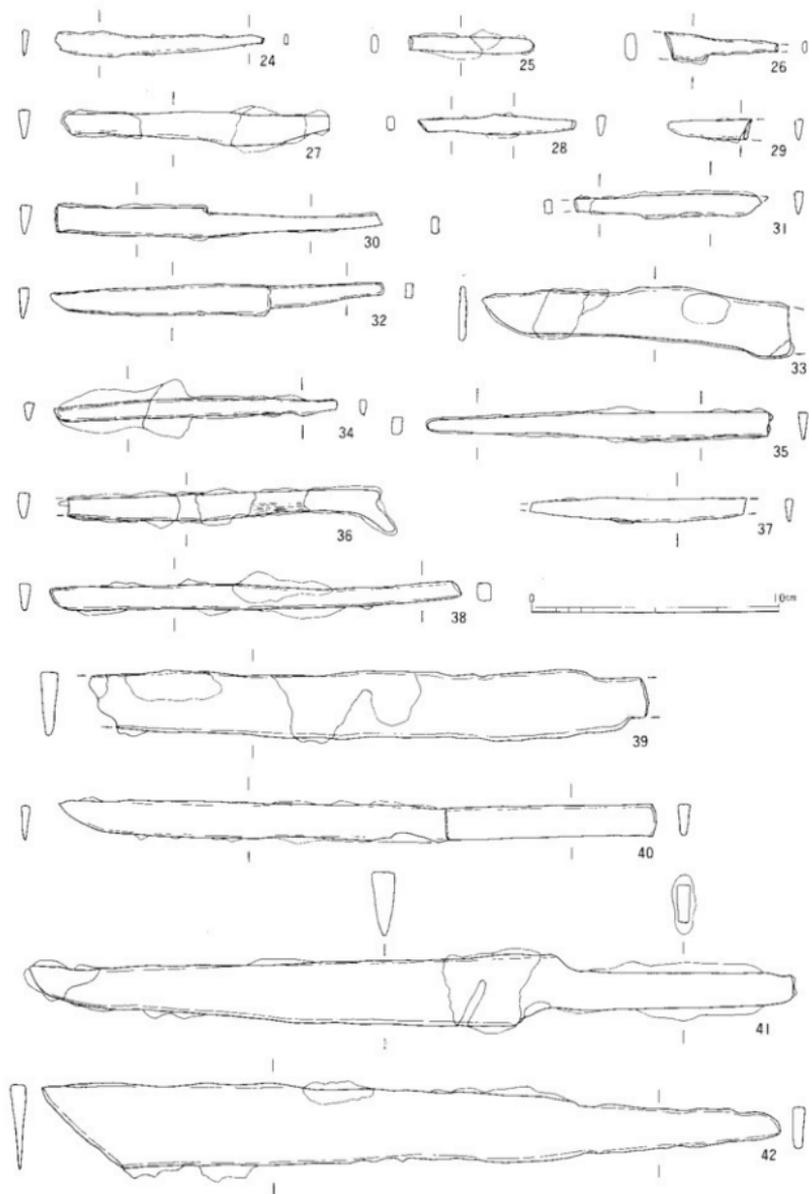
包含層出土



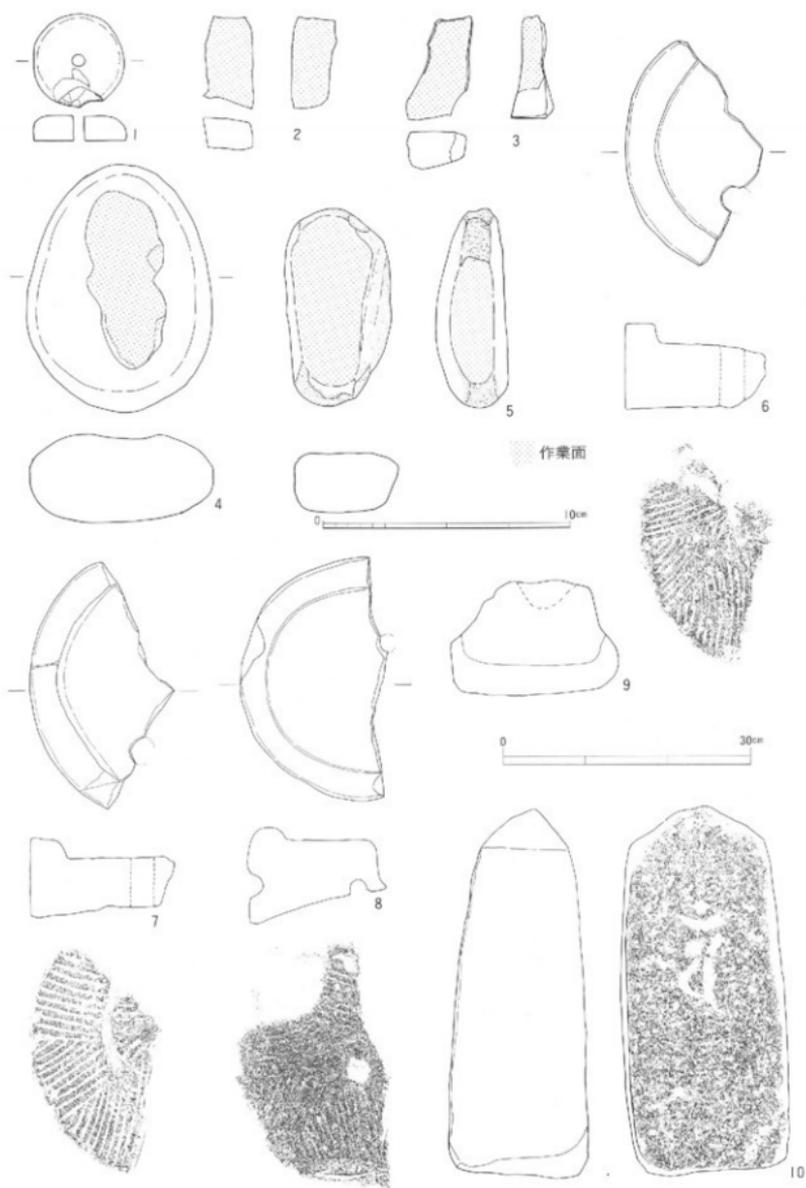
図版57 中・近世の出土陶磁器(6)



圖版58 金屬製品 (1)



图版59 金属製品 (2)



図版60 石製品と石造物



吉倉A遺跡

南中田D遺跡

吉倉B遺跡

南中田C遺跡

任海鎌倉遺跡

南中田B遺跡

南中田A遺跡

栗山姥原遺跡

任海遺跡

任海砂田遺跡